

彼岸過迄

夏目漱石

青空文庫

彼岸過迄に就て

事實を讀者の前に告白すると、去年の八月頃すでに自分の小説を紙上に連載すべきはずだったのである。ところが余り暑い盛りに大患後の身体からだをぶっ通しとおに使うのはどんなものだろうという親切な心配をしてくれる人が出て来たので、それを好い機会しおに、なお二箇月の暇を貪ることにとりきめて貰ったのが原で、とうとうその二箇月が過去った十月にも筆を執らず、十一十二もつい紙上へは杳ようたる有様で暮してしまった。自分の当然やるべき仕事とが、こういう風に、崩れた波の崩れながら伝わって行くような具合で、ただだらしなく延びるのはけつして心持の好いものではない。

歳の改まる元旦から、いよいよ事始める緒いとぐち口を開くように事がきまった時は、長い間抑えられたものが伸びる時の樂たのしみよりは、背中に背負しよわされた義務を片づける時機が来たという意味でまず何よりも嬉うれしかった。けれども長い間抛り出しておいたこの義務を、どうしたら例よりも手際よくやってのけられるだろうか考えると、また新しい苦痛を感じずにはいられない。

久しぶりだからなるべく面白いものを書かなければすまないという気がいくらかある。それに自分の健康状態やらその他の事情に対して寛容の精神に充ちた取り扱い方をしてくれた社友の好意だの、また自分の書くものを毎日日課のようにして読んでくれる読者の好意だのに、酬^{むく}いなくてはすまないという心持がだいぶつけ加わって来る。で、どうかして旨^{うま}いものができるようにと念じている。けれどもただ念力だけでは作物^{さくぶつ}のできればを左右する訳にはどうしたって行きつこない、いくら佳^いいものをもっと思っても、思うようになるかならないか自分にさえ予言のできかねるのが述作の常であるから、今度こそは長い間休んだ埋^{うめ}合せ^{あわせ}をするつもりであると公言する勇気が出ない。そこに一種の苦痛が潜^{ひそ}んでいるのである。

この作^{おおよけ}を公にするにあたって、自分はただ以上の事だけを言っておきたい気がする。作の性質だの、作物に対する自己の見識だの主張だのは今述べる必要を認めていない。実をいうと自分は自然派の作家でもなければ象徴派の作家でもない。近頃しばしば耳にするネオ浪漫派^{ローマンは}の作家ではなおさらない。自分はこれらの主義を高く標^{ひょうぼう}榜^{ぼう}して路傍^{ろぼう}の人の注意を惹^ひくほどに、自分の作物が固定した色に染つけられているという自信を持ち得ぬものである。またそんな自信を不必要とするものである。ただ自分は自分であるという信念

を持つている。そうして自分が自分である以上は、自然派でなからうが、象徴派でなからうが、ないしネオのつく浪漫派でなからうが全く構わないつもりである。

自分はまた自分の作物を新しい新しいと吹聴する事も好まない。今の世にむやみに新しがっているものは三越呉服店とヤンキーとそれから文壇における一部の作家と評家だろうと自分はとうから考えている。

自分はすべて文壇に濫用される空疎な流行語を藉りて自分の作物の商標としたくない。ただ自分らしいものを書きたいだけである。手腕が足りなくて自分以下のものができたり、銜氣があつて自分以上を装うようなものができたりして、読者にすまない結果を齎すのを恐れるだけである。

東京大阪を通じて計算すると、吾朝日新聞の購読者は実に何十万という多数に上つてゐる。その内で自分の作物を読んでくれる人は何人あるか知らないが、その何人かの大部分はおそらく文壇の裏通りも露路も覗いた経験はあるまい。全くただの人間として大自然の空気を真率に呼吸しつつ穏当に生息しているだけだろうと思う。自分はこれらの教育あるかつ尋常なる士人の前にわが作物を公にし得る自分を幸福と信じている。

「彼岸過迄」というのは元日から始めて、彼岸過まで書く予定だから単にそう名づけた

までに過ぎない実は空しい標題である。かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、その個々の短篇が相合して一長篇を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだろうかという意見を持していた。が、ついそれを試みる機会もなくて今日まで過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すならばこの「彼岸過迄」をかねての思わく通りに作り上げたいと考えている。けれども小説は建築家の図面と違って、いくら下手でも活動と発展を含まない訳に行かないので、たとい自分が作るとは云いながら、自分の計画通りに進行しかねる場合がよく起つて来るのは、普通の実世間において吾々の企てが意外の障害を受けて予期のごとくに纏まらないのと一般である。したがってこれはずつと書進んで見ないとちよつと分らない全く未来に属する問題かも知れない。けれどもよし旨く行かなくつても、離れるともつくとも片のつかない短篇が続くだけの事だろうとは予想できる。自分はそれでも差支えなかうと思つてゐる。

（明治四十五年一月此作を朝日新聞に公けにしたる時の緒言）

風呂の後

一

敬太郎けいたろうはそれほど験げんの見えないこの間からの運動と奔走に少し厭気いやきが注さして来た。元々がんじょう頑丈がんじょうにできた身体からだだから単に馳かけ歩くといい労力だけなら大して苦にもなるまいとは自分でも承知しているが、思う事が引ひつ懸かつたなり居据いすわつて動かなかつたり、または引つ懸ろうとして手を出す途端とたんにすぽりと外はずれたりする反間へまが度たび重かさなるに連れて、身体よりも頭の方がだんだん云う事を聞かなくなつて来た。で、今夜は少し癩しやくも手伝つて、飲みたくもない麦酒ビールをわざとポンポン抜いて、できるだけ快豁かいかつな気分を自分と誘いざなつて見た。けれどもいつまで経たつても、ことさらに借着かちやくをして陽気やうきがろうとする自覚じかくが退のかないので、しまいに下女を呼んで、そこいらを片づけさせた。下女は敬太郎の顔を見て、「まあ田川さん」と云つたが、その後あとからまた「本当にまあ」とつけ足した。敬太郎は自分の顔を撫なでながら、「赤いだろう。こんな好い色をいつまでも電灯に照らしておくのはもったいないから、もう寝るんだ。ついでに床を取ってくれ」と云つて、下女がまだ何かやり返そうとするのをわざと外はずして廊下へ出た。そうして便所から帰つて夜具の中に潜もぐり込む時、ま

あ当分休養する事にするんだと口の内で呟いた。

敬太郎は夜中に二返眼へんげんを覺さました。一度は咽喉のどが渴いたため、一度は夢を見たためであつた。三度目に眼が開いた時は、もう明るくなつていた。世の中が動き出しているなと氣がつくや否や敬太郎は、休養休養と云つてまた眼を眠ねむつてしまつた。その次には氣の利きかないボンボン時計の大きな音が無遠慮に耳に響いた。それから後あとはいくら苦心しても寝つかれなかつた。やむを得ず横になつたまま巻煙草まきたばこを一本吸つていると、半分ほどに燃えて來た敷島しきしまの先が崩れて、白い枕が灰だらけになつた。それでも彼はじつとしてゐるつもりであつたが、しまいに東窓から射し込む強い日脚ひあしに打たれた氣味で、少し頭痛がし出したので、ようやく我がを折つて起き上つたなり、楊枝ようじを銜くわえたまま、手拭てぬぐいをぶら下げて湯に行つた。

湯屋の時計はもう十時少し廻つていたが、流しの方はからりと片づいて、小桶一つ出ていない。ただ浴槽ゆづねの中に一人横向になつて、硝子越ガラスこしに射し込んでくる日光を眺めながら、呑氣のんきそうにじやぶじやぶやつてるものがある。それが敬太郎と同じ下宿にいる森本もりもとという男だつたので、敬太郎はやあ御早うと声を掛けた。すると、向うでも、やあ御早うと挨拶あいさつをしたが、

「何です今頃楊枝なぞを銜え込んで、冗談じゃない。そう云やあ昨夕あなたの部屋に電気が点いていないようでしたね」と云った。

「電気は宵の口から煌々と点いていたさ。僕はあなたと違って品行方正だから、夜遊びなんか滅多にした事はありませんよ」

「全くだ。あなたは堅いからね。羨ましいくらい堅いんだから」

敬太郎は少し羞痒たいような気がした。相手を見ると依然として横隔膜から下を湯に浸けたまま、まだ飽きずにじやぶじやぶやっている。そうして比較的眞面目な顔をしている。敬太郎はこの気楽そうな男の口髭がだらしなく濡れて一本一本下向に垂れたところを眺めながら、

「僕の事はどうでも好いが、あなたはどうしたんです。役所は」と聞いた。すると森本は倦怠そうに浴槽の側に両脇を置いてその上に額を載せながら俯伏になったまま、

「役所は御休みです」と頭痛でもする人のように答えた。

「何で」

「何でもないが、僕の方で御休みです」

敬太郎は思わず自分の同類を一人発見したような気がした。それでつい、「やっぱり休

養ですか」と云うと、相手も「ええ休養です」と答えたなり元のとおり湯槽ゆづねの側に突伏つつぶしていた。

二

敬太郎けいたろうが留桶とめおけの前へ腰をおろして、三助さんすけに垢擦あかすりを掛けさせている時分になって、森本はやつと煙けむの出るような赤い身体からだを全く湯の中から露出した。そうして、ああ好い心持だという顔つきで、流しの上へべたりと胡坐あぐらをかいたと思うと、

「あなたは好い体格だね」と云つて敬太郎の肉付にくづきを賞ほめ出した。

「これで近頃はだいぶ悪くなった方です」

「どうしてどうしてそれで悪かった日にや僕なんざあ」

森本は自分で自分の腹をポンポン叩たたいて見せた。その腹は凹へこんで背中の方へ引ひっつけられてるようであつた。

「何しろ商売が商売だから身体は毀こわす一方ですよ。もつとも不養生もだいぶやりましたがね」と云つた後で、急に思い出したようにアハハハと笑つた。敬太郎はそれに調子を合せ

る気味で、

「今日は僕も閑だから、久しぶりでまたあなたの昔話でも伺いましょうか」と云った。すると森本は、

「ええ話しましょう」とすぐ乗気な返事をしたが、活潑なのはただ返事だけで、挙動の方は緩慢かんまんというよりも、すべての筋肉が湯に燂うでられた結果、当分作用を中止している姿であつた。

敬太郎が石鹼シャボンを塗つけた頭をごしごしいわしたり、堅い足の裏や指の股を擦こすつたりする間、森本は依然として胡座をかいたまま、どこ一つ洗う気色けしきは見えなかった。最後に瘡やせた一塊ひとかたまりの肉団をどぶりと湯の中に抛ほうり込むように浸つかけて、敬太郎とほぼ同時に身体を拭きながら上つて来た。そうして、

「たまに朝湯へ来ると綺麗きれいで好い心持ですな」と云った。

「ええ。あなたのは洗うんでなくつて、本当に湯に這入はいるんだからことにそうだろう。実用のための入湯にゆうとうでなくつて、快感を貪むさぼるための入浴なんだから」

「そうむずかしい這入り方でもないんでしようが、どうもこんな時に身体なんか洗うな億劫おくくわうでね。ついぼんやり浸つかつてぼんやり出ちまいますよ。そこへ行くと、あなたは三層倍

も勤勉だ。頭から足からどこからどこまで実によく手落なく洗いますね。御負に楊枝まで使つて。あの綿密な事には僕もほとんど感心しちゃった」

二人は連立つて湯屋の門口を出た。森本がちよつと通りまで行つて巻紙を買うからというので、敬太郎もつき合う氣になつて、横丁を東へ切れると、道が急に悪くなった。昨夕の雨が土を潤かし抜いたところへ、今朝からの馬や車や人通りで、踏み返したり蹴上げたりした泥の痕を、二人は厭うような輕蔑するような様子で歩いた。日は高く上つてゐるが、地面から吸い上げられる水蒸氣はいまだに微かな波動を地平線の上に描いてゐるらしい感じがした。

「今朝の景色は寢坊のあなたに見せたいようだった。何しろ日がかんかん当つてゐる癖に霽がいつぱいなんでしょう。電車をこつちから透かして見ると、乗客がまるで障子に映る影画のように、はつきり一人一人見分けられるんです。それでいて御天道様が向う側にゐるんだからその一人一人がどれもこれもみんな灰色の化物に見えるんで、すこぶる奇観でしたよ」

森本はこんな話をしながら、紙屋へ這入つて巻紙と状袋で膨らました懷をちよつと抑えながら出て来た。表に待つていた敬太郎はすぐ今来た道の方へ足を向け直した。二人はそ

のままいつしよに下宿へ帰った。上靴スリッパの踵かかとを鳴らして階段はしごだんを二つ上り切った時、

敬太郎は自分の部屋の障子を手早く開けて、

「さあどうぞ」と森本を誘いざなった。森本は、

「もう直午飯じきひるでしょう」と云ったが、躊躇ちゆうちよ躊躇すると思いの外、あたかも自分の部屋へでも這入むぞうさるような無雑作な態度で、敬太郎の後に跟ついて来た。そうして、

「あなたの室へやから見た景色はいつ見ても好いね」と自分で窓の障子を開けながら、手摺てすり付きの縁板の上へ濡手拭ぬれてぬぐいを置いた。

三

敬太郎けいたろうはこの瘡やせながら大した病氣にも罹かからないで、毎日新橋の停車場ステーションへ行く男について、平生ずまいから一種の好奇心を有もっていた。彼はもう三十以上である。それでいまだに一人で下宿住居すまいをして停車場へ通勤している。しかし停車場で何の係りをして、どんな事務を取扱とくっているのか、ついぞ当人に聞いた事もなければ、また向うから話した試ためしもないので、敬太郎には一切がXエックスである。たまたま人を送って停車場へ行く場合もあるが、そん

な時にはつい混雑に取り紛れて、停車場と森本とをいつしよに考えるほどの余裕も出ず、そうかと云つて、森本の方から自己の存在を思い起させるように、敬太郎の眼につくべき所へ顔を出す機会も起らなかつた。ただ長い間同じ下宿に立籠たてこもっているという縁故だか同情だかが本で、いつの間にか挨拶あいさつをしたり世間話をする仲になつたまでである。

だから敬太郎の森本に対する好奇心というのは、現在の彼にあると云うよりも、むしろ過去の彼にあると云つた方が適當かも知れない。敬太郎はいつか森本の口から、彼が歴れつ乎とした一家の主人公であつた時分の話を聞いた。彼の女房の話も聞いた。二人の間にできた子供の死んだ話も聞いた。「餓鬼がきが死んでくれたんで、まあ助かつたようなものでさあ。山神さんじんの祟たたりには實際恐れを作していたんですからね」と云つた彼の言葉を、敬太郎はいまだに覚えてゐる。その時しかも山神が分らなくつて、何だと聞き返したら、山の神の漢語じゃありませんかと教えられたおかしさまでまだ記憶に残っている。それらを思い出して、敬太郎から見ると、すべて森本の過去には一種口マンスの臭においが、箒ほうき星ぼしの尻尾しつぽのようにはうつとおつかぶさつて怪しい光を放っている。

女についてできたとか切れたとかいう逸話以外に、彼はまたさまざまな冒險譚ぼうけんだんの主人公であつた。まだ海豹島かいひょうとうへ行つて膾炙おつとせ膾は打っていないようであるが、北海道のど

こかで鮭さけを漁とつて儲もうけた事はたしかであるらしい。それから四国辺のある山から安質莫尼アンチモニが出るとと触れて歩いて、けつして出なかつた事も、当人がそう自白するくらいだから事実に違ちがない。しかし最も奇抜なのは呑のみ口ぐち会社がいしやの計画で、これは酒樽さかだるの呑口を作る職人が東京にごく少ないというところから思いついたのだそうだが、せっかく大阪から呼び寄せた職人と衝突したために成立しなかつたと云つて彼はいまだに残念がつている。

儲もうけ口ぐちを離れた普通の浮世話になると、彼はまた非常に豊富な材料の所有者であるという事を容易に証拠立てる。筑摩川ちくまがわの上流の何とかいう所から河を隔てて向うの山を見ると、巖いわの上に熊がごろごろ昼寝をしているなどはまだ尋常の方なので、それが一層色づいて来ると、信州戸隠山とかくしやまの奥の院というのは普通の人の登れっこない難所なのに、それを盲目めくらが天辺てつぺんまで登つたから驚ろいたなどという。そこへ御参おまいりをするには、どんなに脚あしの達者なものでも途中で一晩明かさなければならぬので、森本も仕方なしに五合目あたりで焚火たきびをして夜の寒さを凌しのいでいると、下から鈴れいの響が聞えて来たから、不思議に思っているうちに、その鈴の音がだんだん近くなつて、しまいに座頭ざとうが上のぼつて来たんだと云う。しかもその座頭が森本に今晚はと挨拶あいさつをしてまたすたすた上つて行つたと云うんだから、余り妙だと思つてなおよく聞いて見ると、実は案内者が一人ついていたのだそうで

ある。その案内者の腰に鈴を着けて、後から来る盲者がその鈴の音を頼りに上る事ができるようにしてあつたのだと説明されて、やや納得もできたが、それにしても敬太郎には随分意外な話である。が、それがもう少し高じると、ほとんど妖怪談に近い妙なものとなつて、だらしない彼の口髭の下から最も慇懃に発表される。彼が耶馬溪を通つたついでに、羅漢寺へ上つて、日暮に一本道を急いで、杉並木の間を下りて来ると、突然一人の女と擦れ違つた。その女は臍脂を塗つて白粉をつけて、婚礼に行く時の髪を結つて、裾模様の振袖に厚い帯を締めて、草履穿のまま上つた一人すたすた羅漢寺の方へ上つて行つた。寺に用のあるはずはなし、また寺の門はもう締まつてゐるのに、女は盛装したまま暗い所をたつた一人で上つて行つたんだそうである。——敬太郎はこんな話を聞くたびにへえーと云つて、信じられ得ない意味の微笑を洩らすにかわらず、やつぱり相当の興味と緊張とをもつて森本の弁口を迎えるのが例であつた。

四

この日も例によつて例のような話が出るだろうという下心から、わざと廻り路までして

いっしょに風呂から帰ったのである。年こそそれほど取っていないが、森本のように、大抵な世間の関門を潜くぐつて来たと思われぬ男の経歴談は、この夏学校を出たばかりの敬太郎けいたろうに取つては、多大の興味があるのみではない、聞きようしだい随分利益も受けられた。

その上敬太郎は遺傳的に平凡を忌む浪漫趣味の青年であつた。かつて東京の朝日新聞にこだまおとまつ児玉音松とかいう人の冒険談が連載された時、彼はまるで丁年未満の中学生のような熱心をもつて毎日それを迎え読んでいた。その中でも音松君が洞穴の中から躍り出す大蛇こと戦つた記事を大変面白がつて、同じ科の学生に、君、蛇の大頭を目掛けて短銃ピストルをポンポン打つんだが、つるつる滑すべつて少しも手応てごたえがないというじゃないか。そのうち大将の後からぞろぞろ出て来た小蛇こだこがぐるりと環わを作つて彼を取り巻いたから何をするのかと思うと、どっちが勝つか熱心に見物しているんだからねと大いに乗気で話した事がある。するとその友達が調戲からかい半分に、君のような剽軽ひょうきんものはとうてい文官試験などを受けて地道じみちに世の中を渡つて行く気になるまい、卒業したら、いっその事思い切つて南洋へでも出かけて、好きな蛇狩たこがりでもしたらどうだと云つたので、それ以来「田川たがわの蛇狩」という言葉が友達間にだいぶ流行はやり出した。この間卒業して以来足を掘木すりこぎのように

して世の中への出口を探して歩いてゐる敬太郎に会つた際に、彼らはどうだね蛸狩は成功したかいと聞くのが常になつていたくらいである。

南洋の蛸狩はいかな敬太郎にもちと奇抜過ぎるので、真面目に思い立つ勇氣も出なかつたが、新嘉坡シンガポールの護謨林栽培などは学生のうちすでに目論もくろんで見た事がある。当時敬太郎は、果しはてのない広野ひろのを埋め尽す勢いきおいで何百万本という護謨の樹が茂つてゐる真中に、一階建のバンガローを拵こしらへて、その中に栽培監督者としての自分が朝夕起臥あきゆうきがする様を想像してやまなかつた。彼はバンガローの床ゆかをわざと裸にして、その上に大きな虎の皮を敷くつもりであつた。壁には水牛の角を塗り込んで、それに鉄砲をかけ、なおその下に錦の袋に入れたままの日本刀を置くはずにした。そうして自分は真白なターバンをぐるぐる頭へ巻きつけて、広いヴェランダに据すえつけてある籐椅子といすの上に寝そべりながら、強い香かおりのハヴァナをぷかりぷかりと鷹揚おうように吹かす氣でいた。そのみか、彼の足の下には、スマタラ産の黒猫、——天鷲絨びろうどのような毛並と黄金こがねそのままの眼と、それから身の丈たけよりもよほど長い尻尾しっぽを持つた怪しい猫が、背中を山のごとく高くして蹲踞うずくまつてゐる訳になつていた。彼はあらゆる想像の光景をかく自分に満足の行くようにあらかじめ整えた後で、いよいよ実際の算盤そろばんに取りかかったのである。ところが案外なもので、まず護謨ゴムを植えるための

地面を借り受けるのにだいぶんな手数^{てすう}と暇^いが要る。それから借りた地面を切り開くのが容易の事でない。次に地ならし植えつけに費やすべき金^{かなだか}高が以外に多い。その上絶えず人夫を使つて草取をした上で、六年間苗木^{なえぎ}の生長するのを馬鹿見たようにじつと指を銜^{くわ}えて見ていなければならない段になつて、敬太郎はすでに充分退却に価すると思ひ出したところへ、彼にいろいろの事情を教えてくれた護謨^{つう}通は、今しばらくすると、あの辺でできる護謨の供給が、世界の需用以上に超過して、栽培者は非常の恐慌を起すに違ないと威嚇^{いかく}したので、彼はその後護謨の護の字も口にしなくなつてしまつたのである。

五

けれども彼の異常に対する嗜欲^{しよく}はなかなかこれくらいのも事で冷却しそうには見えなかつた。彼は都の真中にいて、遠くの人や国を想像の夢^{のぼ}に上して楽しんでゐるばかりでなく、毎日電車の中で乗り合せる普通の女だの、または散歩の道すがら行き逢う實際の男だのを見てさえ、ことごとく尋常以上に奇^きなあるものを、マントの裏かコート^{そで}の袖に忍ばしてはいしないだろうかと考える。そうしてどうかこのマントやコートを引^ひつくり返してその奇

なところをただ一目で好いからちらりと見た上、後は知らん顔をして済ましていたいような気になる。

敬太郎けいたろう

この傾向は、彼がまだ高等学校にいた時分、英語の教師が教科書としてスチーヴンソンの新亜刺比亜物語しんあらか比亚ものがたりという書物を読ました頃からだんだん頭を持ち上げ出したように思われる。それまで彼は太の英語嫌だいいえいごきらひであつたのに、この書物を読むようになって、一回も下読を怠らずに、あてられさえすれば、必ず起立して訳を付けたのでも、彼がいかにそれを面白がつていたかが分る。ある時彼は興奮の余り小説と事実の区別を忘れて、十九世紀の倫敦ロンドンに実際こんな事があつたんでしようかと真面目な顔をして教師に質問を掛けた。その教師はついこの間英国から帰つたばかりの男であつたが、黒いメルトンのモーニングの尻から麻の手帛ハンケチを出して鼻の下を拭いながら、十九世紀どころか今でもあるでしょう。倫敦という所は実際不思議な都ですと答えた。敬太郎の眼はその時驚嘆の光を放った。すると教師は椅子いすを離れてこんな事を云った。

「もつとも書き手が書き手だから観察も奇抜だし、事件の解釈も自おのから普通の人間とは違うんで、こんなものができ上つたのかも知れません。実際スチーヴンソンという人は辻つじ待の馬車を見てさえ、そこに一種のロマンスを見出すという人ですから」

辻馬車とロマンスに至って敬太郎は少し分らなくなったが、思い切ってその説明を聞いて見て、始めてなるほどと悟った。それから以後は、この平凡極まる東京のどこにでもごろごろして、最も平凡を極めている辻待の人力車を見るたんびに、この車だつて昨夕人殺しをするための客を出刃ぐるみ乗せていっさんに馳けたのかも知れないと考えたり、またはおつては追手の思わくとは反対の方角へ走る汽車の時間に間に合うように、美しい女を幌の中に隠して、どこかの停車場へ飛ばしたのかも分らないと思つたりして、一人で怖がるやら、面白がるやらしきりに喜こんでいた。

そんな想像を重ねるにつけ、これほど込み入った世の中だから、たとい自分の推測通りとまで行かなくつても、どこか尋常と変つた新しい調子を、彼の神経にはつと響かせ得るような事件に、一度ぐらゐは出会つて然るべきはずだという考えが自然と起つてきた。ところが彼の生活は学校を出て以来ただ電車に乗るのと、紹介状を貰つて知らない人を訪問するくらいのもので、その他に何といつて取り立てて云うべきほどの小説は一つもなかった。彼は毎日見る下宿の下女の顔に飽き果てた。毎日食う下宿の菜にも飽き果てた。せめてこの単調を破るために、満鉄の方ができるとか、朝鮮の方が纏まるとかすれば、まだ衣食の途以外に、幾分かの刺激が得られるのだけれども、両方共二三日前に当分望がない

と判然して見ると、ますます眼前の平凡が自分の無能力と密切な関係でもあるかのように思われて、ひどくぼんやりしてしまった。それで糊口ここうのための奔走はもちろんの事、往來に落ちたばらせん錢さがを探して歩くような長閑のどかな気分で、電車に乗って、漫然と人事上の探検を試みる勇氣もなくなつて、昨夕はさほど好きでもない麦酒ビールを大いに飲んで寝たのである。

こんな時に、非凡の経験に富んだ平凡人とても評しなければ評しようのない森本の顔を見るのは、敬太郎にとつてすでに一種の興奮であつた。巻紙をかう御供おともまでして彼を自分の室へやへ連れ込んだのはこれがためである。

六

森本は窓際まじぎわへ坐つてしばらく下の方を眺ながめていた。

「あなたの室へやから見た景色けしきは相変らず好うがすね、ことに今日は好い。あの洗い落したよ
うな空の裾すそに、色づいた樹が、所々暖あつたかく塊かたまつている間から赤い煉瓦れんがが見える様子は、
たしかに画えになりそうですな

「そうですな」

敬太郎^{けいたろう}はやむを得ずこういう答をした。すると森本は自分が肱^{ひじ}を乗せている窓から一尺ばかり出張った縁板を見て、

「ここはどうしても盆栽^{ぼんさい}の一つや二つ載せておかないと納まらない所ですよ」と云った。敬太郎はなるほどそんなものかと思ったけれども、もう「そうですね」を繰り返す勇気も出なかったので、

「あなたは画や盆栽まで解るんですか」と聞いた。

「解るんですかは少し恐れ入りましたね。全く柄^{がら}にないんだから、そう聞かれても仕方がないが、——しかし田川さんの前だが、こう見えて盆栽も弄^{いじ}くるし、金魚も飼うし、一時は画も好きでよく描^かいたもんですよ」

「何でもやるんですね」

「何でも屋に碌^{ろく}なものなしで、とうとうこんなもんなつちやった」

森本はそう云い切つて、自分の過去を悔ゆるでもなし、またその現在を悲観するでもなし、ほとんど鋭い表情のどこにも出ていない不断の顔をして敬太郎を見た。

「しかし僕はあなた見たように変化の多い経験を、少しでも好いから嘗^なめて見たいといつてもそう思っているんです」と敬太郎が真面目^{まじめ}に云いかけると、森本はあたかも酔つ払の

ように、右の手を自分の顔の前へ出して、大袈裟に右左に振って見せた。

「それがごく悪い。若い内——と云ったところで、あなたと僕はそう年も違っていないよ
うだが、——とにかく若い内は何でも変った事がしてみたいもんでね。ところがその変つ
た事を仕尽した上で、考えて見ると、何だ馬鹿らしい、こんな事ならしない方がよつぽど
増しだと思っただけでさあ。あなたなんざ、これからの身体からだだ。おとなしくさえしていりや
どんな発展でもできようつてもんだから、肝かんじん心なところで山氣やまぎだの謀叛むほんぎ氣だのって低氣
圧を起しちや親不孝に当らあね。——時にどうです、この間から伺めがおう伺めがおうと思つ
て、つい忙がしくつて、伺めがわずにいたんだが、何か好い口は見付めかりましたか」
正直な敬太郎は慚然ぶぜんとしてありのままを答えた。そうして、とうてい当分これという期あ
待てもないから、奔走をやめて少し休養するつもりであるとつけ加えた。森本はちよつと驚
ろいたような顔をした。

「へえー、近頃は大学を卒業しても、ちよつくらちよいと口が見付めからないもんですかね
え。よつぽど不景氣なんだね。もつとも明治も四十何年というんだから、そのはずには違
ないが」

森本はここまで来て少し首を傾かしげて、自分の哲理を自分で噛かみしめるような素振そぶりをした。

敬太郎は相手の様子を見て、それほど滑稽とも思わなかったが、心の内で、この男は心得があつてわざとこんな言葉遣をするのだろうか、または無学の結果こうよりほか言い現わす手段を知らないのだろうかと考えた。すると森本が傾げた首を急に豎に直した。

「どうです、御厭でなきや、鉄道の方へでも御出なすつちや。何なら話して見ましょうか」

いかな浪漫的な敬太郎もこの男に頼んだら好い地位が得られるとは想像し得なかった。

けれどもさも軽々と云つて退ける彼の愛嬌を、翻弄と解釈するほどの僻ももたなかった。抛処なく苦笑しながら、下女を呼んで、

「森本さんの御膳もここへ持つて来るんだ」と云いつけて、酒を命じた。

七

森本は近頃身体のために酒を慎んでいると断わりながら、注いでやりさえすれば、すぐ猪口を空にした。しまいにはもう止ましようという口の下から、自分で徳利の尻を持ち上げた。彼は平生から閑静なうちにどこか気楽な風を帯びている男であつたが、猪口を重ねるにつれて、その閑静が熱ってくる、気楽はしだいしだいに膨脹するよう見え

た。自分でも「こうなりや併呑へいどん自若じじやくたるもんだ。明日免職あしたになつたつて驚ろくんじやない」と威張り出した。敬太郎が飲めない口なので、時々思い出すように、盃さかずきに唇ちびるを付けて、付合つきあっているのを見て、彼は、

「田川さん、あなた本当に飲けないんですか、不思議ですね。酒を飲まない癖くせに冒険を愛するなんて。あらゆる冒険は酒に始まるんです。そうして女に終るんです」と云つた。彼はつい今まで自分の過去を碌ろくでなしのように蹴けなしていたのに、酔つたら急に模様が變つて、後光ごこうが逆に射すとても評すべき態度で、氣きえんを吐はき始めた。そうしてそれが大抵は失敗の氣であつた。しかも敬太郎を前に置いて、

「あなたなんざあ、失礼ながら、まだ学校を出たばかりで本当の世の中は御存じないんだからね。いくら学士でございの、博士で候そうろうのつて、肩書ばかり振り廻したつて、僕は慥おびえないつもりだ。こつちやちゃんと実地を踏んで来ているんだもの」と、さつきまで教育に對して多大の尊敬を払つていた事はまるで忘れたような風で、無遠慮なきめつけ方をした。そうかと思ふと噫げつぐのような溜息ためいきを洩もらして自分の無学をさも情なさけなさそうに恨うらんだ。

「まあ手つ取り早く云やあ、この世の中を猿同然どうぜん渡つて来たんでさあ。こう申しちやおかしいが、あなたより十層倍の経験はたしかに積んでるつもりです。それでいて、いまだ

にこの通り解脱げだつができないのは、全く無学すなわち学がないからです。もっとも教育があつちや、こうむやみやたらと変化する訳にも行かないようなもんかも知れませんが」

敬太郎はさつきから気の毒なる先覚者とても云つたように相手を考えて、その云う事に相応の注意を払つて聞いていたが、なまじい酒を飲ましたためか、今日はいつもより氣だの愚痴ぐちだのが多くつて、例のように純粹の興味が湧わかないのを残念に思った。好い加減に酒を切り上げて見たが、やっぱり物足らなかつた。それで新らしく入れた茶を勧めすすめながら、

「あなたの経歴談はいつ聞いても面白い。そればかりでなく、僕のような世間見ずは、御話を伺うたんびに利益を得ると思つて感謝しているんだが、あなたが今までやつて来た生活のうちで、最も愉快だったのは何ですか」と聞いて見た。森本は熱い茶を吹き吹き、少し充血した眼を二三度ばちつかせて黙つていた。やがて深い湯呑ゆのみを干してしまふところ云つた。

「そうですね。やつた後あとで考えると、みんな面白いし、またみんなつまらないし、自分じやちよつと見分がつかないんだが。——全体愉快つてえのは、その、女おんな氣なつげのある方を指すんですか」

「そう云う訳でもないんですが、あつたつて差支さしかえありません」

「なんて、実はそっちの方が聞きたいんですよ。——しかし 雑談じょうだん抜きでね、田川さん。面白い面白くないはさておいて、あれほど呑気のんきな生活は世界にまたとなかうという奴をやった覚おぼえがあるんですよ。そいつを一つ話しましょうか、御茶受の代りに」

敬太郎は一も二もなく所望した。森本は「じゃあちよつと小便をして来る」と云つて立ちかけたが、「その代り断わつておくが女気はありませんよ。女気どころか、第一人間の気けがないんだもの」と念を押して廊下の外へ出て行つた。敬太郎は一種の好奇心いだけを抱いて、彼の帰るのを待ち受けた。

八

ところが五分待つても十分待つても冒険家は容易に顔を現わさなかった。敬太郎けいたろうはとうとうじつと我慢しきれなくなつて、自分で下へ降りて用場を探して見ると、森本の影も形も見えない。念のためまた階段はしごだんを上あがつて、彼の部屋の前まで来ると、障子しょうじを五六寸明け放したまま、真中に手枕をしてごろりと向うむきに転ころがつているものがすなわち彼

であつた。「森本さん、森本さん」と二三度呼んで見たが、なかなか動きそうにないので、さすがの敬太郎もむつとして、いきなり室に這入り込むや否や、森本の首筋を攫んで強く揺振つた。森本は不意に蜂にでも螫されたように、あつと云つて半ば跳ね起きた。けれども振り返つて敬太郎の顔を見ると同時に、またすぐ夢現のたるい眼つきに戻つて、

「やああなたですか。あんまりちようだいしたせい、少し気分が変になつたもんだから、ここへ来てちよつと休んだらつい眠くなつて」と弁解する様子に、これといって他を愚弄する体もないので、敬太郎もつい怒れなくなつた。しかし彼の待ち設けた冒険談はこれで一頓挫を来したも同然なので、一人自分の室に引取ろうとすると、森本は「どうもすみません、御苦労様でした」と云いながら、また後から敬太郎について来た。そうして先刻まで自分の坐つていた座蒲団の上に、きちんと膝を折つて、

「じやいよいよ世界に類のない呑気生活の御話でも始めますかな」と云つた。

森本の呑気生活というのは、今から十五六年前彼が技手に雇われて、北海道の内地を測量して歩いた時の話であつた。固より人間のいない所に天幕を張つて寝起をして、用が片づきしだい、また天幕を担いで、先へ進むのだから、当人の断つた通り、とうてい女つ気のありようはずはなかつた。

「何しろ高さ二丈もある熊笹くまざさを切り開いて途みちをつけるんですからね」と彼は右手を額より高く上げて、いかに熊笹が高く茂つていたかを形容した。その切り開いた途の両側に、朝起きて見ると、蝮蛇まむしがとぐろを巻いて日光うろこの上に受けている。それを遠くから棒で抑えておいて、傍そばへ寄つて打ち殺して肉を焼いて食うのだと彼は話した。敬太郎がどんな味がすると聞くと、森本はよく思い出せないが、何でも魚肉さかなと獣肉にくの間ぐらいだろうと答えた。

テント
天幕の中へは熊笹の葉と小枝を山のように積んで、その上に疲れた身体からだを埋めぬばかりに投げかけるのが例であるが、時には外へ出て焚火たきびをして、大きな熊を眼の前に見る事もあつた。虫が多いので蚊帳かやは始終釣つていた。ある時その蚊帳を担いで谷川へ下りて、何とかいう川魚を掬すくつて帰つたら、その晩から蚊帳が急に腥なまぐさくなつて困つた。――すべてこれらは森本のいわゆる呑気生活の一部分であつた。

彼はまた山であらゆる茸たけを採とつて食つたそうである。ます茸だけというのは広蓋ひろぶたほどの大きさで、切つて味噌汁みそじるの中へ入れて煮るとまるで蒲鉾かまぼこのようだから、月見茸つきみだけというのは一抱ひとかかえもあるけれども、これは残念だが食えないとか、鼠茸ねずみだけというのは三つ葉の根のようで可愛らしいとか、なかなか精くわしい説明をした。大きな笠かさの中へ、野葡萄のぶどうをいっ

ばい採つて来て、そればかり食^{むさ}ぼっていたものだから、しまい^{した}に舌^{した}が荒れて、飯が食えなくなつて困つたという話もついでにつけ加えた。

食う話ばかりかと思うと、また一週間絶食をしたという悲酸^{ひさん}な物語もあった。それはみんなの糧^{かて}が尽きたので、人足が村まで米を取りに行った留守中に大変な豪雨があつた時の事である。元々村へ出るには、沢^{さわ}辺^へまで降りて、沢^{さわ}伝^{でん}いに里へ下るのだから、俄^{にわか}雨^{あめ}で谷が急にいっぱいになったが最後、米など背^{しよ}負^ふつて帰れる訳のものでない。森本は腹が減つて仕方がないから、じつと仰^{あおむけ}向^むに寝て、ただ空を眺^{なが}めていたところが、しまいにはぼんやりし出して、夜も昼もめちやくちやに分らなくなつたそうである。

「そう長い間飲まず食わずじや、両^{りょうべん}便^{べん}とも留^とまるでしょう」と敬太郎が聞くと、「いえ何、やつぱりありますよ」と森本はすこぶる気楽そうに答えた。

九

敬^{けいたろう}太郎は微笑せざるを得なかつた。しかしそれよりもおかしく感じたのは、森本の形容した大風の勢であつた。彼らの一行が測量の途次茫^{ぼうぼう}々たる芒^{すすきはら}原^{はら}の中で、突然面^{おもて}も

向けられないほどの風に出会った時、彼らは四つ這^{よばい}になって、つい近所の密林の中へ逃げ込んだところが、一抱^{ひとかかえ}も二抱^{ふたかかえ}もある大木の枝も幹も凄まじい音を立てて、一度に風から痛振^{いたぶ}られるので、その動揺が根に伝わって、彼らの踏んでいる地面が、地震の時のようにぐらぐらしたと云うのである。

「それじやたとい林の中へ逃げ込んだところで、立っている訳に行かないでしょう」と敬太郎が聞くと、「無論突伏していました」という答であつたが、いくら非道い風だつて、土の中に張つた大木の根が動いて、地震を起すほどの勢^{いきおい}があろうとは思えなかつたので、敬太郎は覺えず吹き出してしまった。すると森本もまるで他事^{ひとこと}のように同じく大きな声を出して笑い始めたが、それがすむと、急に真面目^{まじめ}になつて、敬太郎の口を抑えるような手つきをした。

「おかしいが本当です。どうせ常識以下に飛び離れた経験をするくらいの僕だから、不中^{やく}用にやあ違^{ちが}ないが本当です。——もつともあなた見たいに学のあるものが聞きやあ全く嘘^{うそ}のような話さね。だが田川さん、世の中には大風に限らず随分面白い事がたくさんあるし、またあなたなんざあその面白い事にぶつかろうぶつかろうと苦勞^{くろう}して御出^{おいで}ななさる御様子だが、大学を卒業しちやもう駄目ですよ。いざとなると大抵は自分の身分を思いますからね。

よしんば自分でいくら身を落すつもりでかかって、まさか親の敵討じやなしね、そう真剣に自分の位地を棄てて漂流浪するほどの物数奇も今の世にはありませんからね。第一傍がそうさせないから大丈夫です」

敬太郎は森本のこの言葉を、失意のようにもまた得意のようにも聞いた。そうして腹の中で、なるほど常調以上の変った生活は、普通の学士などには送れないかも知れないと考えた。ところがそれを自分にさえ抑えたい気がするので、わざと抵抗するような語気で、

「だって、僕は学校を出たには出たが、いまだに位置などには無いんですぜ。あなたは位置位置ってしきりに云うが。——實際位置の奔走にも厭々してしまった」と投げ出すように云った。すると森本は比較的厳肅な顔をして、

「あなたのは位置がなくなつてある。僕のは位置があつて無い。それだけが違うんです」と若いものに教える態度で答えた。けれども敬太郎にはこの御籤めいた言葉がさほどの意義を齎さなかつた。二人は少しの間煙草を吹かして黙っていた。

「僕もね」とやがて森本が口を開いた。「僕もね、こうやって三年越、鉄道の方へ出ているが、もう厭になつたから近々罷めようと思うんです。もつとも僕の方で罷めなけりや

向うで罷めるだけなんだからね。三年越と云やあ僕にしちや長い方でさあ」

敬太郎は罷めるが好かろうとも罷めないが好かろうとも云わなかった。自分が罷めた経験も罷められた閱歴もないので、他の進退などはどうでも構わないような気がした。ただ話が理に落ちて面白くないという自覚だけあった。森本はそれと察したか、急に調子を易かえて、世間話を快活に十分ほどした後で、「いやどうも御馳走ごちそうでした。——とにかく田川さん若いうちの事ですよ、何をやるのも」と、あたかも自分が五十ぐらいの老人のようなことを云つて歸つて行つた。

それから一週間ばかりの間、田川は落ちついて森本と話す機会を有もたなかったが、二人共同じ下宿にいるのだから、朝か晩に彼の姿を認めない事はほとんど稀まれであつた。顔を洗う所などで落ち合う時、敬太郎は彼の着ている黒襟くろえりの掛つたドテラが常に目についた。彼はまた襟えり開あきの広い新調の背広せびろを着て、妙な洋杖ステッキを突いて、役所から帰るとよく出て行つた。その洋杖が土間の瀬戸物製の傘かさ入いれに入れてあると、ははあ先生今日は宅うちにいるなと思ひながら敬太郎は常に下宿の門かどを出入でいりした。するとその洋杖ステッキがちやんと例の所に立ててあるのに、森本の姿が不意に見えなくなつた。

十

一日二日はつい気がつかずに過ぎたが、五日目ぐらいになっても、まだ森本の影が見えないので、敬太郎けいたろうはようやく不審の念を起し出した。給仕に来る下女に聞いて見ると、彼は役所の用でどこかへ出張したのだそうである。固もとより役人である以上、いつ出張しないとも限らないが、敬太郎は平生からこの男を相そうして、何でも停車場ステーションの構内で、貨物の発送係ぐらいを勤めているに違ないと判じていたものだから、出張と聞いて少し案外な心持がした。けれども立つ時すでに五六日と断つて行つたのだから、今日か翌日あしたは帰るはずだと下女に云われて見ると、なるほどそうかとも思った。ところが予定の時日が過ぎて、森本の変な洋杖が依然として傘入の中にあるのみで、当人のドテラ姿はいつこう洗面所へ現われなかった。

しまいに宿の神かみさんが来て、森本さんから何か御音信おたよりがございましたかと聞いた。敬太郎は自分の方で下へ聞きに行こうと思つていたところだと答えた。神さんは多少心元ない色ふくろを梟ふくろのような丸い眼の中に漂ただよわせて出て行つた。それから一週間ほど経たつても森本はまだ帰らなかつた。敬太郎も再び不審を抱いだき始めた。帳場の前を通る時に、まだですかと

わざと立ち留つて聞く事さえあつた。けれどもその頃は自分がまた思い返して、位置の運動を始め出した出花^{でばな}なので、自然その方にばかり頭を専領される日が多いため、これより以上立ち入つて何物をも探る事をあえてしなかつた。実を云うと、彼は森本の予言通り、衣食^{はかりごと}の計のために、好奇家の権利を放棄したのである。

すると或晩主人がちよつと御邪魔をしても好いかと断わりながら障子^{しょうじ}を開けて這入^{はい}つて来た。彼は腰から古めかしい煙草^{たばこ}入を取り出して、その筒^{つつ}を抜く時ぽんという音をさせた。それから銀の煙管^{きせる}に刻草^{きくさ}を詰めて、濃い煙を巧者に鼻の穴から迸^{ほとば}しらせた。こうゆつくり構える彼の本意を、敬太郎は判然^{はつきり}向うからそうと切り出されるまで覺^{さと}らずに、どうも変だとばかり考えていた。

「実は少し御願があつて上つたんですが」と云つた主人はやや小声になつて、「森本さんのいらつしやる所をどうか教えて頂く訳に参りますまいか、けつしてあなたに御迷惑のかかるような事は致しませんから」と藪^{やぶ}から棒につけ加えた。

敬太郎はこの意外の質問を受けて、しばらくは何という挨拶^{あいさつ}も口へ出なかつたが、ようやく、「いったいどう云う訳なんです」と主人の顔を覗^{のぞ}き込んだ。そうして彼の意味を読もうとしたが、主人は煙管が詰つたと見えて、敬太郎の火箸^{ひばし}で雁首^{がんくび}を掘っていた。そ

れが済んでから羅宇らうの疎通をぶつぶつ試した上、そろそろと説明に取りかかった。

主人の云うところによると、森本は下宿代が此家ここに六カ月ばかり滞とどつているのだそうである。が、三年越している客ではあるし、遊んでいる人じやなし、此年ことしの末にはどうかするからという当人の言訳を信用して、別段催促もしなかったところへ、今度の旅行になった。家のものは固もとより出張とばかり信じていたが、その日限にちげんが過ぎていくら待っても帰らないのみか、どこからも何の音信たよりも来ないので、しまいにととう不審を起した。それで一方に本人の室へやを調べると共に、一方に新橋へ行つて出張先を聞き合せた。ところが室の方は荷物もそのまま、彼のおつた時分と何の変りもなかったが、新橋の答はまた案外であった。出張したとばかり思っていた森本は、先月限り罷やめられていたそうである。

「それであなたは平生森本さんと御懇意の間柄でいらっしゃるんだから、あなたに伺つたら多分どこに御出おいでか分るだろうと思つて上つたような訳で。けっしてあなたに森本さんの分をどうのこうのと申し上げるつもりではないのですから、どうか居所だけ知らして頂けますまいか」

敬太郎はこの失踪者しつそうしやの友人として、彼の香かばしからぬ行為に立ち入った関係でもあるかのごとく主人から取扱われるのをはなはだ迷惑に思った。なるほど事実をいえば、つい

この間まである意味の嘆賞たんしょうを懷ふところにして森本に近づいていたには違ないが、こんな實際問題にまで秘密の打ち合せがあるように見做みなされては、未来を有もつ青年として大いなる不面目だと感じた。

十一

正直な彼は主人の疝かんちがい違いを腹の中で怒おこった。けれども怒る前にまず冷たい青大將あおだいしょうでも握にぎらせられたような不気味さを覚えた。この妙に落ちつき払はらって古風な煙草入たばこいれから刻きざみを撮つまみ出しては雁首がんくびへ詰める男の誤解は、正解と同じような不安を敬太郎けいたろうに与えたのである。彼は談判に伴なう一種の芸術のごとく巧みに煙管きせるを扱さかう人であつた。敬太郎は彼の様子をしばらく眺ながめていた。そうしてただ知らないというよりほかに、向うの疑惑を晴らす方法がないのを残念に思った。はたして主人は容易に煙草入を腰へ納めなかつた。煙管を筒へ入れて見たり出して見たりした。そのたびに例の通りぽんぽんという音がした。敬太郎はしまいにもどうしてもこの音を退治たいじてやりたいような気がし出した。

「僕はね、御承知の通り学校を出たばかりでまだ一定の職業もなにもない貧書生だが、こ

れでも少しは教育を受けた事のある男だ。森本のような浮浪の徒といっしよに見られちや、少し体面にかかわる。いわんや後うしろぐら暗い関係でもあるように邪推して、いくら知らないと言つても執濃しつこく疑つてゐるのは怪けしからんじやないか。君がそういう態度で、二年もいる客に対する気ならそれで好い。こつちにも料簡りようけんがある。僕は過去二年の間君のうちに厄介になつてゐるが、一カ月でも宿料しゆくりようを滞とどおらした事があるかい」

主人は無論敬太郎の人格に対して失礼に当るような疑を毛頭抱いだいていないつもりであるという事を繰り返して述べた。そうして万一森本から音信でもあつて、彼の居所が分つたらどうぞ忘れずに教えて貰もらいたいと頼んだ末、もしさつき聞いた事が敬太郎の氣に障さわつたら、いくらでも詫あやまるから勘弁してくれと云つた。敬太郎は主人の煙草入たばこいれを早く腰に差させようと思つて、単に宜よろしいと答えた。主人はようやく談判の道具を角帶かくおびの後へしまひ込んだ。室へやを出る時の彼の様子に、別段敬太郎を疑ぐる氣色けしきも見えなかつたので、敬太郎は怒つてやつて好い事をしたと考えた。

それからしばらく経つと、森本の室に、いつの間にか新らしい客が這入はいつた。敬太郎は彼の荷物を主人がどう片づけたかについて不審いだを抱いた。けれども主人がかの煙草入を差して談判に来て以来、森本の事はもう聞くまいと決心したので、腹の中はともかく、上部うわべ

は知らん顔をしていた。そうして依然としてできるようなまたできないような地位を、元
ほど焦燥あせらない程度ながらも、まず自分のやるべき第一の義務として、根氣に狩り歩あり
ていた。

或る晩もその用で内幸町まで行つて留守を食つたのでやむを得ずまた電車で引き返すと、
偶然向う側に黄八丈きはちじょうの裨天はんてんで赤ん坊を負つた婦人が乗り合せているのに気がついた。
その女は眉毛まゆげの細くて濃い、首筋の美しくできた、どっちかと云えば粹いきな部類に属する
型だったが、どうしても裨天負おんぶをするという柄がらではなかった。と云つて、背中の子はたし
かに自分の子に違ないと敬太郎は考えた。なおよく見ると前垂まえだれの下から格子縞こうしじまか何か
の御召おめしが出ているので、敬太郎はますます変に思つた。外面そとは雨なので、五六人の乗客は
皆傘かさをつぼめて杖つえにしていた。女のは黒蛇目くろじやのめであつたが、冷たいものを手に持つのが厭いや
だと見えて、彼女はそれを自分の側わきに立て掛けておいた。その畳んだ蛇の目の先に赤い漆
で加留多かるたと書いてあるのが敬太郎の眼に留つた。

この黒人くろうとだか素人しろうとだか分らない女と、私生児だか普通の子だか怪しい赤ん坊と、濃
い眉まゆを心持八の字に寄せて俯目勝ふしめがちな白い顔と、御召おめしの着物と、黒蛇の目に鮮あざやかな加留多
という文字とが互違たがいちがいに敬太郎の神経を刺戟しげきした時、彼はふと森本といつしよになつて

子まで生んだという女の事を思い出した。森本自身の口から出た、「こういうと未練があるようでおかしいが、顔質かおだちは悪い方じやありませんでした。眉毛まみえの濃い、時々八の字を寄せて人に物を云う癖のある」といったような言葉をぽつぽつ頭の中で憶おもい起しながら、加留多と書いた傘の所有主もちぬしを注意した。すると女はやがて電車を下りて雨の中に消えて行つた。後に残つた敬太郎は一人森本の顔や様子を心に描きつつ、運命が今彼をどこに連れ去つたろうかと考え考え下宿へ歸つた。そうして自分の机の上に差出人の名前の書いてない一封の手紙を見出した。

十二

好奇心に駆かられた敬太郎けいたろうは破るようにこの無名氏の書信ひらを披いて見た。すると西洋せいよう罫紙けいしの第一行目に、親愛なる田川君として下に森本よりとあるのが何より先に眼に入つた。敬太郎はすぐまた封筒を取り上げた。彼は視線の角度を幾通りにも変えて、そこに消印の文字を読もうと力つとめたが、肉が薄いのでどうしても判断がつかなかった。やむを得ず再び本文に立ち歸つて、まずそれから片づける事にした。本文にはこうあつた。

「突然消えたんで定めて驚ろいたでしょう。あなたは驚ろかないにしても、雷獣らいじゆうとそうしてズク（森本は平生下宿の主人夫婦を、雷獣とそうしてズクと呼んでいた。ズクは耳ズクの略である）彼ら兩人は驚ろいたに違ない。打ち明けた御話をすると、実は少し下宿代を滞とどおらしていたので、話をしたら雷獣とそうしてズクが面倒をいうだろうと思つて、わざと断らずに、自由行動を取りました。僕の室へやに置いてある荷物を始末したら——行李こりの中には衣類その他がすっかり這入はいっていますから、相当の金になるだろうと思うんです。だから兩人にあなたから右を売るなり着るなりしろとおっしゃっていただきたい。もつとも彼雷獣は御承知のごとき曲者くせもの故僕ゆゑの許諾を待たずして、とつくの昔にそう取計つているかも知れない。のみならず、こつちからそう穩便おんべんに出ると、まだ残っている僕の尻を、あなたに拭つて貰いたいなどと、とんでもない難題を持ちかけるかも知れませんが、それにはけつして取り合つちやいけません。あなたのように高等教育を受けて世の中へ出たての人はとかく雷獣輩はいが食物くいものにしたがるものですから、その辺へんはよく御注意なさらないといいません。僕だつて教育こそないが、借金を踏んじや善よくないくらいのはまさに心得ています。来年になればきつと返してやるつもりです。僕に意外な経歴が数々あるからと云つて、あなたにこの点まで疑われては、せつかくの親友を一人失くしたも同様、はな

はだ遺憾いかんの至いただから、どうか雷獸らいじゆごときもののために僕を誤解ごかいしないように願ねがいます」

森本は次に自分が今大連で電気公園の娯樂ごらくがかりを勤めてゐる由よしを書いて、来年の春には活動写真買入の用向を帯びて、是非共出京するはずだから、その節は御地で久しぶりに御目にかかるのを今から樂たのしみにして待つてゐるとつけ加えていた。そうしてその後あとへ自分が旅行した満洲まんしゆう地方の景況をさも面白そうに一口ぐらいつ吹聴ふいちようしていた。中でも敬太郎を驚ろかしたのは、長春ちやうしゆんとかにある博打場ばくちばの光景で、これはかつて馬賊の大將をしたというさる日本人の経営に係るものだが、そこへ行つて見ると、何百人と集まる汚ない支那人が、折詰のようにぎつしり詰つて、血眼ちまなこになりながら、一種の臭氣しゆうきを吐き合つてゐるのだそうである。しかも長春の富豪が、慰み半分わざと垢あかだらけな着物を着て、こつそりここへ出入しゆつにゆうするといふんだから、森本だつてどんな真似まねをしたか分らないと敬太郎は考へた。

手紙の末段には盆栽ぼんさいの事が書いてあつた。「あの梅の鉢は動坂どうざかの植木屋で買ったので、幹はそれほど古くないが、下宿の窓などに載のせておいて朝夕眺めるにはちやうど手頃てなのものです。あれを獻上けんじやうするからあなたの室へやへ持つていらつしやい。もつとも雷獸らいじゆとそうしてズクは兩人共極めて不風流故ゆゑ、床の間の上へ据すえたなり放つておいて、も

う枯らしてしまつたかも知れません。それから上り口の土間の傘入に、僕の洋杖が差さっているはずです。あれも価格ねだんから云えばけつして高く踏めるものではありませんが、僕の愛用したもののだから、記念のため是非あなたに進上したいと思います。いかな雷獣とそうしてズクもあの洋杖をあなたが取つたつて、まさか故障は申し立てますまい。だからけつして御遠慮なさらずと好い。取つて御使いなさい。――満洲ことに大連ははなは好い所です。あなたのような有為の青年が發展すべき所は当分ほかに無いでしょう。思い切つて是非いらつしやいませんか。僕はこつちへ来て以来満鉄の方にもだいぶ知人ができたから、もしあなたが本当に来る気なら、相当の御世話はできるつもりです。ただしその節は前もつてちよつと御通知を願います。さよなら」

敬太郎は手紙を畳んで机の抽出ひきだしへ入れたなり、主人夫婦へは森本 の消息について、何事も語らなかつた。洋杖は依然として、傘入の中に差さつていた。敬太郎は出入でいりの都度つど、それを見るたびに一種妙な感に打たれた。

停留所

一

敬太郎けいたろうに須永すながという友達があつた。これは軍人の子でありながら軍人が大嫌だいきらひで、

法律を修めながら役人にも会社員にもなる氣のない、至つて退嬰主義たいえいしゆぎの男であつた。少

くとも敬太郎にはそう見えた。もつとも父はよほど以前に死んだとかで、今では母とたつ

た二人ぎり、淋しいさみような、また床ゆかしいような生活を送っている。父は主計官としてだい

ぶ好い地位にまで昇のぼつた上、元來が貨殖かしよくの道に明らかな人であつただけ、今では母子おやこと

共衣食もの上に不安の憂うれいを知らない好い身分である。彼の退嬰主義も半なかばはこの安泰な境

遇に慣なれて、奮闘の刺戟しげきを失つた結果とも見られる。というものは、父が比較的立派な地

位にいたせい、彼には世間体せけんていの好いばかりでなく、實際たけになる親類があつて、い

くらでも出世の世話をしてやろうというのに、彼は何だかだと手前勝手ばかり並べて、今

もつてぐずぐずしているのを見ても分る。

「そう贅ぜいたく沢ばかり云つてちやもつたない。厭いやなら僕に譲るがいい」と敬太郎は冗じようだ

談半分に須永を強請せびることもあつた。すると須永は淋さびしそうなまた氣の毒そうな微笑を

洩^もらして、「だって君じやいけないんだから仕方がないよ」と断るのが常であつた。断られる敬太郎は冗談にせよ好い心持はしなかつた。おれはおれでどうかするという氣概も起して見た。けれども根が執^{しゅう}念^{ねん}深^{ふか}くない性質^{たち}だから、これしきの事で須永に対する反抗心などが永く続きようはずがなかつた。その上身分が定まらないので、氣の落ちつく背景を有^もたない彼は、朝から晩まで下宿の^ひと間^まにじつと坐っている苦痛に堪^たえなかつた。用がなくつても半日は是非出^あて歩^あるいた。そうしてよく須永の家^{うち}を訪^{おとず}問^ずれた。一つはいつ行つても大抵留守の事がないので、行く敬太郎の方でも張合があつたのかも知れない。

「糊^く口^ちも糊^く口^ちだが、糊^く口^ちより先に、何か驚嘆^{あたい}に価^{あたい}する事件に会いたいと思つてゐるが、いくら電車に乗つて方々歩いてても全く駄目だね。攫^{すり}徒^{あたい}にさえ会^あわな^いい」などと云うかと思つと、「君、教育は一種の權利かと思つていたら全く一種の束縛^{そくばく}だね。いくら学校を卒業したつて食うに困るようじや何の權利かこれあらんやだ。それじや位地^{いち}はどうでもいいから思^いう存分勝手な真似^{まね}をして構^{かま}わな^いかという^いと、やつぱり構^{かま}うからね。厭^{いや}に人を束縛するよ^い教育^いが」と忌^い々^まし^まそうに嘆息する事がある。須永は敬太郎のいづれの不平に対しても余り同情がないらしかつた。第一彼の態度からしてが本当に真面目^{まじめ}なの^いだか、またはただ空^か焦燥^{しやうさう}に焦燥^{しやうさう}いでいるのか見分がつか^いなかつたの^いだろう。ある時須永はあまり敬太郎がこ

ういふような浮ずつた事ばかり言い募るので、「それじゃ君はどんな事がして見たいのだ。衣食問題は別として」と聞いた。敬太郎は警視庁の探偵見たような事がして見たいと答えた。

「じゃするが好いじゃないか、訳ないこつた」

「ところがそうは行かない」

敬太郎は本気になぜ自分に探偵ができないかという理由を述べた。元来探偵なるものは世間の表面から底へ潜る社会の潜水夫のようなものだから、これほど人間の不思議を攫んだ職業はたとあるまい。それに彼らの立場は、ただ他の暗黒面を觀察するだけで、自分と墮落してかかる危険性を帯びる必要がないから、なおの事都合がいいには相違ないが、いかんせんその目的がすでに罪惡の暴露にあるのだから、あらかじめ人を陥れようとする成心の上に打ち立てられた職業である。そんな人の悪い事は自分にはできない。自分はただ人間の研究者否人間の異常なる機関が暗い闇夜に運轉する有様を、驚嘆の念をもつて眺めていたい。——こういうのが敬太郎の主意であつた。須永は逆わずに聞いていたが、これという批判の言葉も放たなかつた。それが敬太郎には老成と見えながらその実平凡なのだとしか受取れなかつた。しかも自分を相手にしないような落ちつき払つた風のあるの

を悪く思つて別れた。けれども五日と経たないうちにまた須永の宅へ行きたくなつて、表へ出ると直神田行の電車に乗つた。

二

須永はもとの小川亭即ち今の天下堂という高い建物を目標に、須田町の方から右へ小さな横町を爪先上りに折れて、二三度不規則に曲つた極めて分り悪い所にいた。家並の立て込んだ裏通りだから、山の手と違つて無論屋敷を広く取る余地はなかつたが、それでも門から玄関まで二間ほど御影の上を渡らなければ、格子先の電鈴に手が届かないくらいの一構であつた。もともと自分の持家だつたのを、一時親類の某に貸したなり久しく過ぎたところへ、父が死んだので、無人の活計には場所も広さも恰好だろうという母の意見から、駿河台の本宅を売却つてここへ引移つたのである。もっともそれからだいぶ手を入れた。ほとんど新築したも同然さとかつて須永が説明して聞かせた時に、敬太郎はなるほどそうかと思つて、二階の床柱や天井板を見廻した事がある。この二階は須永の書斎にするため、後から継ぎ足したので、風が強く吹く日には少し揺れる気味

はあるが、ほかにこれと云つて非の打ちようのない綺麗きれいに明かな四疊六疊二間ふたまたつづきの室へやであつた。その室に坐すわっていると、庭に植えた松の枝と、手斧ちようなめ目の付いた板塀いたべいの上の方と、それから忍び返しが見えた。縁に出て手摺てすりから見下した時、敬太郎は松の根に一面と咲いた鷺草さぎそを眺めて、あの白いものは何だと須永に聞いた事もあつた。

彼は須永を訪問してこの座敷に案内されるたびに、書生と若旦那の区別を判然と心に呼び起さざるを得なかつた。そうしてこう小ぢんまり片づいて暮している須永を軽蔑けいべつすると同時に、閑静ながら余裕よゆうのあるこの友の生活を羨うらやみもした。青年があんなでは駄目だと考えたり、またあんなにもなつて見たいと思つたりして、今日も二つの矛盾からでき上つた斑まだらな興味を懷ふところに、彼は須永を訪問したのである。

例の小路こうじを二三度曲折して、須永の住居すまつてある通りの角まで来ると、彼より先に一人の女が須永の門を潜くぐつた。敬太郎はただ一目その後姿を見ただけだったが、青年に共通の好奇心と彼に固有の浪漫趣味ロマンしゆみとが力を合せて、引き摺ずるように彼を同じ門前に急がせた。ちよつと覗のぞいて見ると、もう女の影は消えていた。例の通り紅葉もみじを引手ひきてに張り込んだ障しょう子じが、閑静しまに閉しまっているだけなのを、敬太郎は少し案外なにかつ物足らず眺ながめていたが、やがて沓脱くつぬぎの上に脱ぎ捨てた下駄げたに氣をつけた。その下駄はもちろん女ものであつたが、

行儀よく向うむきに揃そろっているだけで、下女が手をかけて直した迹あとが少しも見えない。敬太郎は下駄むきの向と、思つたより早く上あつてしまった女の所作しよさとを継つぎ合あわして、これは取次を乞ひわずに、独ひとりで勝手に障子を開けて這入はいつた極きわめて懇意の客だろうと推察した。でなければ家うちのものだが、それでは少し変である。須永の家いえは彼と彼の母と仲なか働はたらきと下女よつたりの四人暮しである事を敬太郎はよく知つていたのである。

敬太郎は須永の門前にしばらく立つていた。今這入つた女の動静をそつと塀の外から窺うかがうというよりも、むしろ須永とこの女がどんな文あやに二人の浪漫ロマンを織をつているのだろうと想像するつもりであつたが、やはり聞き耳きみみは立てていた。けれども内はいつもの通りしんとしていた。艶なまめいた女の声どころか、咳嗽せき一つ聞えなかつた。

「許いいなすけ嫁なかな」

敬太郎はまず第一にこう考えたが、彼の想像はそのくらいで落ちつくほど、訓練を受け
ていなかつた。——母は仲働を連れて親類へ行つたから今日は留守である。飯めしたき焚は下女
部屋に引き下がっている。須永と女とは今差向いで何か私語ささやいている。——はたしてそう
だとするといつものように格子戸こうしどをがらりと開けて頼むと大きな声を出すのも変なもので
ある。あるいは須永も母も仲働もいっしょに出たかも知れない。おさんはきつと昼寝ひるねをし

ている。女はそこへ這入ったのである。とすれば泥棒である。このまま引返してはすまない。——敬太郎は狐憑のようになどと立っていた。

三

すると二階の障子がすうと開いて、青い色の硝子瓶を提げた須永の姿が不意に縁側へ現われたので敬太郎はちよつと吃驚した。

「何をしているんだ。落し物でもしたのかい」と上から不思議そうに聞きかける須永を見ると、彼は咽喉の周囲に白いフラネルを捲いていた。手に提げたのは含嗽剤らしい。敬太郎は上を向いて、風邪を引いたのかとか何とか二三言葉を換わしたが、依然として表に立ったまま、動こうともしなかった。須永はしまいに這入れと云った。敬太郎はわざと這入っていいかと念を入れて聞き返した。須永はほとんどその意味を覺らない人のごとく、軽く首肯した。

階段を上る時、敬太郎は奥の部屋で微かに衣摺の音がするような気がした。二階には今まで須永の羽織っていたらしい黒八丈の襟の掛ったどてらが脱ぎ捨ててあるだ

けで、ほかに平生と變つたところはどこにも認められなかった。敬太郎の性質から云つても、彼の須永に対する交情から云つても、これほど氣にかかる女の事を、率直に切り出して聞けないはずはなかったのだが、今までにどこか罪な想像を逞ましくしたという疚ましさもあり、また面と向つてすぐとは云い悪い皮肉な覷を付けた自覺もあるので、今しがた君の家へ這入った女は全体何者だと無邪氣に尋ねる勇氣も出なかった。かえつて自分の先へ先へと走りたがる心を押し隠すような風に、

「空想はもう当分やめだ。それよりか口の方が大事だからね」と云つて、兼て須永から聞いている内幸町の叔父さんという人に、一応そういう方の用向で会つておきたいから紹介してくれと真面目に頼んだ。叔父というのは須永の母の妹の連合で、官吏から実業界へ這入つて、今では四つか五つの会社に関係を有っている相当な位地の人であつたが、須永はその叔父の力を藉りてどうしようという料簡もないと見えて、「叔父がいろいろ云つてくれるけれども、僕は余進まないから」と、かつて敬太郎に話した事があつたのを、敬太郎は覚えていたのである。

須永は今朝すでにその叔父に会うはずであつたが、咽喉を痛めたため、外出を見合せたのだそうで、四五日内には大抵行けるだろうから、その時には是非話して見ようと答えた

あとで、「叔父も忙がしい身体だしね、それに方々から頼まれるようだから、きつとは受合られないが、まあ会つて見たまえ」と念のためか何だかつけ加えた。余り望を置き過ぎられては困るというのだろうと敬太郎は解釈したが、それでも会わないよりは増しだぐらゐに考えて、例に似ず宜しく頼む氣になった。が、口で頼むほど腹の中では心配も苦勞もしていなかった。

元來彼が卒業後相当の地位を求めるために、腐心し運動し奔走し、今もなおしつづつあるのは、当人の公言することく伴りなき事實ではあるが、いまだに成效の曙光を拝まないと云つて、さも苦しそうな声を出して見せるうちには、少なくとも五割方の懸値が籠っていた。彼は須永のような一人息子ではなかったが、（妹が片づいて、）母一人残つてゐるところは両方共同じであつた。彼は須永のように地面家作の所有主でない代りに、国に少し田地を有つていた。固より大した穀高になるといふほどのものでもないが、俵がいくらというきまつた金に毎年替えられるので、二十や三十の下宿代に窮する身分ではなかった。その上女親の甘いにつけ込んで、自分で自分の身を喰うような臨時費を請求した事も今までに一度や二度ではなかった。だから位地位地と云つて騒ぐのが、全くの空騒でないにしても、郷党だの朋友だのまたは自分だのに対する虚栄心に煽られている

事はたしかであつた。そんなら学校にいるうちもつと勉強して好い成績でも取っておきそうなものなのに、そこが浪漫家^{ロマンか}だけあつて、学課はなるべく怠けよう怠けようと心がけて通して来た結果、すこぶる鮮^{あざ}やかならぬ及第をしてしまったのである。

四

それで約一時間ほど須永^{すなが}と話す間にも、敬太郎^{けいたろう}は位地とか衣食とかいう苦しい問題を自分と進んで持ち出しておきながら、やつぱり先刻^{さつぎ}見た後^{うしろすがた}姿^しの女の事が氣に掛つて、肝心^{かんじん}の世渡りの方には口先ほど真面目^{まじめ}になれなかつた。一度下座敷^{したざしき}で若々しい女の笑い声が聞えた時などは、誰か御客が来ているようだねと尋ねて見ようかしらんと考えたくらいである。ところがその考えている時間が、すでに自然をぶち壊^{こわ}す道具になつて、せつかくの間が間外^{まはす}れになろうとしたので、とうとう口へ出さずにやめてしまった。

それでも須永の方ではなるべく敬太郎の好奇心に媚^こびるような話題を持ち出した氣でいた。彼は自分の住んでいる電車の裏通りが、いかに小さな家と細い小路^{こうじ}のために、賽^{さい}の目^めのように区切られて、名も知らない都会人士の巢を形づくっているうちに、社会の上層に

浮き上らない戯曲がほとんど戸ごとに演ぜられていると云うような事実を敬太郎に告げた。まず須永の五六軒先には日本橋辺の金物屋の隠居の妾がいる。その妾が宮戸座とかへ出る役者を情夫にしている。それを隠居が承知で黙っている。その向う横町に代言だか周旋屋だか分らない小綺麗な格子戸作りの家があつて、時々表へ女記者一名、女コック一名至急入用などという広告を黒板へ書いて出す。そこへある時二十七八の美しい女が、襷を取った紺綾の長いマントをすぼりと被つて、まるで西洋の看護婦という服装をして来て職業の周旋を頼んだ。それが其家の主人の昔し書生をしていた家の御嬢さんなので、主人はもちろん妻君も驚ろいたという話がある。次に背中合せの裏通りへ出ると、白髪頭で甘ぐらいの妻君を持った高利貸がいる。人の評判では借金に取った女房だそうである。その隣りの博奕打が、大勢同類を寄せて、互に血眼を擦り合っている最中に、ねんね子で赤ん坊を負ったかみさんが、勝負で夢中になつてゐる亭主を迎へに来る事がある。かみさんが泣きながらどうかいっしょに帰つてくれというと、亭主は帰るには帰るが、もう一時間ほどして負けたものを取り返してから帰るといふ。するとかみさんはそんな意地を張れば張るほど負けるだけだから、是非今帰つてくれと縋りつくように頼む。いや帰らない、いや帰れといつて、往來の氷る夜中でも四隣の眠を驚ろかせる。……

須永の話をだんだん聞いているうちに、敬太郎はこういう実地小説のはびこる中に年来住み慣れて来た須永もまた人の見ないような芝居をこつそりやって、口を拭^{ぬぐ}つてすましているのかも知れないという気が強くなつて来た。固^{もと}よりその推察の裏には先刻^{さつき}見た後姿の女が薄い影を投げていた。「ついでに君の分も聞こうじゃないか」と切り込んで見たが、須永はふんと云つて薄笑いをしただけであつた。その後で簡単に「今日は咽喉^{のど}が痛いから」と云つた。さも小説は有^もつているが、君には話さないのだと云わんばかりの挨拶^{あいさつ}に聞えた。

敬太郎が二階から玄関へ下りた時は、例の女下駄がもう見えなかつた。歸つたのか、下駄箱へしまわしたのか、または氣を利^きかして隠したのか、彼にはまるで見^{けん}当^{とう}がつかなかつた。表へ出るや否や、どういう料^{りよう}簡^{けん}か彼はすぐ一軒の煙草屋^{たばこや}へ飛び込んだ。そうしてそこから一本の葉巻を銜^{くわ}えて出て来た。それを吹かしながら須田町まで来て電車に乗りうとする途端^{とたん}に、喫煙御断りという社則を思い出したので、また万世橋の方へ歩いて行つた。彼は本郷の下宿へ歸るまでこの葉巻を持たすつもりで、ゆっくりゆっくり足を運ばせながらなお須永の事を考えた。その須永はけつしていつものように単独には頭の中へ這^は入^いつて来なかつた。考えるたびにきつと後姿の女がちらちら跟^ついて来た。しまいに「本郷

台町の三階から遠眼鏡とおめがねで世の中を覗のぞいていて、浪漫的探險ロマンてきなんて気の利いた真似まねができるものか」と須永から冷笑ひやかされたような心持がし出した。

五

彼は今日こんにちまで、俗にいう下町生活なじみに昵懇なじみも趣味も有もち得ない男であつた。時たま日本橋の裏通りなどを通つて、身を横にしなければ潜くぐれない格子戸こうしどだの、三和土たたきの上から訳わけもなくぶら下がっている鉄灯籠かなどうろうだの、上り框あががまちの下を張り詰めた綺麗きれいに光る竹だの、杉だか何だか日光ひが透とおつて赤く見えるほど薄つぺらな障子しょうじの腰だのを眼にするたびに、いかにもせせこましそうな心持になる。こう万事がきちりと小さく整のつてかつ光つていられては窮屈きうくつでたまらないと思う。これほど小ぢんまりと几帳面きちようめんに暮らして行く彼らは、おそらく食後に使う楊枝ようじの削り方けずかたまで気にかけているのではなからうかと考える。そうしてそれがことごとく伝説的の法則に支配かさされて、ちょうど彼らの用いる煙草盆たばこぼんのように、先祖代々順々に拭ふき込まれた習慣を笠かさに、恐るべく光っているのだらうと推察する。須永すながの家うちへ行つて、用もない松へ大事だいじそうな雪除ゆきよけをした所や、狭い庭を馬鹿丁寧ばかていねいに枯松葉で敷

きつめた景色などを見る時ですら、彼は繊細な江戸式の開花の懷に、ぽうと育った若旦那を聯想しない訳に行かなかつた。第一須永が角帯をきゆうと締めてきちりと坐る事からが彼には変であつた。そこへ長唄の好きだとかいう御母さんが時々出て来て、滑つこい癖にアクセントの強い言葉で、舌触の好み愛嬌を振りかけてくれる折などは、昔から重詰にして蔵の二階へしまつておいたものを、今取り出して来たという風に、出来合以上の旨さがあるので、紋切形とは無論思わないけれども、幾代もかつて辞令の練習を積んだ巧みが、その底に潜んでいるとしか受取れなかつた。

要するに敬太郎はもう少し調子外れの自由なものが欲しかつたのである。けれども今日の彼は少くとも想像の上において平生の彼とは違つていた。彼は徳川時代の湿っぽい空氣がいまだに漂よつてゐる黒い蔵造の立ち並ぶ裏通に、親譲りの家を構えて、敬ちやん御遊びなどという友達を相手に、泥棒ごっこや大将ごっこをして成長したかつた。月に一遍ずつ蠣殻町の水天宮様と深川の不動様へ御参りをして、護摩でも上げたかつた。(現に須永は母の御供をしてこういう旧弊な真似を当り前のごとくやつてゐる。)それから鉄無地の羽織でも着ながら、歌舞伎を当世に崩して往来へ流した匂のする町内を恍惚と歩きたかつた。そうして習慣に縛られた、かつ習慣を飛び超えた艶めかしい葛

藤^{つとう}でもそこに見出したかった。

彼はこの時たちまち森本の二字を思い浮かべた。するとその二字の周囲にある空想が妙に色を変えた。彼は物^{もの}好^{ずき}にも自ら進^みんでこの後^{うし}ろ暗^{ぐら}い奇人に握手を求めた結果として、もう少しでとんだ迷惑を蒙^{こう}むるところであつた。幸いに下宿の主人が自分の人格を信じたからいいようなものの、疑^うぐろうとすればどこまでも疑^うぐられ得る場合なのだから、主人の態度いかに依^よつては警察ぐらいへ行かなければならなかつたのかも知れない。と、こう考えると、彼の空中に編み上げる勝手な浪漫^{ロマン}が急に温^{あた}味^{たかみ}を失つて、醜^{みに}くい想像からでき上つた雲の峰同様に、意味もなく崩れてしまつた。けれどもその奥に口^{くち}髭^{ひげ}をだらしなく垂らした二重^{ふたえまぶち}瞼^{やせ}の瘡^{やせ}ぎすの森本の顔だけは粘^{ねば}り強く残つていた。彼はその顔を愛したいような、侮^{あな}りたいような、また憐^{あわれ}みたいような心持になつた。そうしてこの凡^{ぼん}庸^{よう}な顔^{うしろ}の後に解^とすべからざる怪しい物がぼんやり立っているように思った。そうして彼が記念^{かたみ}にくれると云つた妙な洋^{ステッキ}杖^きを聯^{れん}想^{そう}した。

この洋杖は竹の根の方を曲げて柄^えにした極^{きわ}めて単^{たん}簡^{かん}のものだが、ただ蛇^{へび}を彫^うつてあるところが普通の杖^{つえ}と違つていた。もつとも輸出向によく見るように蛇の身をぐるぐる竹に巻きつけた毒々しいものではなく、彫^うつてあるのはただ頭だけで、その頭が口を開けて何

か呑みかけているところを握にぎりにしたものであった。けれどもその呑みかけているのが何であるかは、握りの先が丸く滑すべつこく削けずられているので、蛙かえるだか鶏卵たまごだか誰にも見当けんとうがつかなかった。森本は自分で竹を伐きつて、自分でこの蛇を彫つたのだと云っていた。

六

敬太郎けいたろうは下宿の門かどぐち口を潜くぐるとき何より先にまずこの洋杖に眼をつけた。というよりも途みちすがらの聯想が、硝子戸ガラスドを開けるや否や、彼の眼を瀬戸物の傘せともの かさいれ入の方へ引きつけたのである。実をいうと、彼は森本の手紙を受取つた当座、この洋杖を見るたびに、自分にも説明のできない妙な感じがしたので、なるべく眼を触れないように、出入でいりの際視線を逸そらしたくらいである。ところがそうすると今度はわざと見ないふりをして傘入そばの傍を通るのが苦になってきて、極きわめて軽微な程度ではあるけれどもこの変な洋杖におのずと崇たたられたと云う風になって、しまった。彼自身もついには自分の神経を不思議に思い出した。彼是一種の利害關係から、過去に溯さかのぼる嫌疑けんぎを恐れて、森本の居所もまたその言伝ことづても主人夫婦に告げられないという弱味を有もつているには違ないが、それは良心の上にどれほどの

曇^{くもり}もかけなかった。記念^{かたみ}として上げるとわざわざ云つて来たものを、快よく貰い受ける勇氣の出ないのは、他^{ひと}の好意^{むなし}を空^{むなし}くする点において、面白くないにきまつているが、これとても苦になるほどではない。ただ森本の浮世の風にあたる運命が近いうちに終りを告げるとする。（おそらくはのたれ死^{じに}という終りを告げるのだらう。）その憐^{あわ}れな最期^{さいご}を今から予想して、この洋杖が傘入の中に立つているとする。そうして多能な彼の手によつて刻^{きざ}まれた、胴から下のない蛇の首が、何物かを吞もうとして吞まず、吐こうとして吐かず、いつまでも竹の棒の先に、口を開^あいたまま喰^{くつ}付いているとする。——こういう風に森本の運命とその運命を黙つて代表している蛇の頭とを結びつけて考えた上に、その代表者たる蛇の頭を毎日握つて歩くべく、近い内にのたれ死をする人から頼まれたとすると、敬太郎はその時に始めて妙な感じが起るのである。彼は自分でこの洋杖を傘入の中から抜き取る事もできず、また下宿の主人に命じて、自分の目の届かない所へ片づけさせる訳にも行かないのを大袈裟^{おおげさ}ではあるが一種の因果^{いんが}のように考えた。けれども詩で染めた色彩と、散文で行く活計^{かつけい}とはだいぶ一致しないところもあつて、實際を云うと、これがために下宿を変えて落ちついた方が楽だと思ふほど彼は洋杖に災^{わざわい}されていなかったのである。

今日も洋杖^{ステッキ}は依然として傘入の中に立つていた。鎌首^{げたばこ}は下駄箱の方を向いていた。敬

太郎はそれを横に見たなり自分の室に上ったが、やがて机の前に坐つて、森本にやる手紙を書き始めた。まずこの間向うから来た音信の礼を述べた上、なぜ早く返事を出さなかつたかという弁解を二三行でもいいからつけ加えたいと思つたが、それを明らさまに打ち開けては、君のような漂流者ヴァガボンドを知己に有つ僕の不名誉を考えると、書信の往復などはする気になれなかつたからだとても書くよりほかに仕方がないので、そこは例の奔走に取り紛れと簡単な一句でごまかしておいた。次に彼が大連で好都合な職業にありついた祝いの言葉をちよつと入れて、その後へだんだん東京も寒くなる時節柄、満洲の霜や風はさぞ凌しのぎ悪いだろう。ことにあなたの身体ではひどく応こたえるに違ちがいから、是非用心して病氣に罹かからないようになさいと優しい文句を数行綴ずぎつた。敬太郎から云うと、実にここが手紙を出す主意なのだから、なるべく自分の同情が先方へ徹するように旨くかつ長く、そうして誰が見ても実意の籠こもつてるように書きたかつたのだけれども、読み直して見ると、やつぱり普通の人が普通時候の挨拶に述べる用語以外に、何の新らしいところもないので、彼は少し失望した。と云つて、固々恋人に送る艶書ほど熱烈な真心を籠めたものでないのは覚悟の前である。それで自分は文章が下手だから、いくら書き直したつて駄目だくらいの口実の下に、そこはそのままにして前へ進んだ。

七

森本が下宿へ置き去りにして行つた荷物の始末については義理にも何とか書き添えなければすまなかつた。しかしその処置のつけ方を亭主に聞くのは厭^{いや}だし、聞かなければ委細の報道はできるはずはなし、敬太郎^{けいたろう}は筆の先を宙に浮かしたまま考えていたが、とうとう「あなたの荷物は、僕から主人に話して、どうしても彼の都合の宜^いいように取り計らわせろとの御依頼でしたが、あなたの千里眼の通り、僕が何にも云わない先に、雷^{らいじゆう}獣^うの方で勝手に取計つてしまつたようですからさよう御承知を願います。梅の盆^{ぼん}栽^{さい}を下さるという事です、これは影も形も見えないようですから、頂きません。ただ御礼だけ申し述べておきます。それから」とつづけておいて、また筆を休めた。

敬太郎はいよいよ洋杖^{ステッキ}のところへ来たのである。根が正直な男だから、あの洋杖はせっつかくの御覚^{おぼしめし}召だから、ちようだいして毎日散歩の時突いて出ますなどと空々しい嘘^{うそ}は吐^つけず、と言つて御親切はありがたいが僕は貰いませんとはなおさら書けず。仕方がないから、「あの洋杖はいまだに傘^{かさ}入^{いれ}の中に立っています。持主の帰るのを毎日毎夜待ち暮

しているごとく立っています。雷獣もあの蛇の頭へは手を触れる事をあえてしません。僕はあの首を見るたびに、彫刻家としてのあなたの手腕に敬服せざるを得ないです」と好^{いい}加減^{げん}な御世辞^{おせじ}を並べて、事実^{じつ}を暈^{ぼか}す手段とした。

状袋へ名宛を書くときに、森本の名前を思い出そうとしたが、どうしても胸に浮ばないので、やむを得ず大連電気公園内娯楽掛り森本様とした。今までの関係上主人夫婦の眼^{はば}を憚^{はば}からなければならぬ手紙なので、下女を呼んでポストへ入れさせる訳にも行かなかったから、敬太郎はすぐそれを自分の袂^{たもと}の中に藏^{かく}した。彼はそれを持って夕食後散歩かたがた外へ出かける気で寒い梯子段^{はしごだん}を下まで降り切ると、須永^{すなが}から電話が掛った。

今日内幸町から従妹^{いとこ}が来ての話に、叔父は四五日内に用事で大阪へ行くかも知れないそうだから、余り遅くなつてはと思つて、立つ前に会つて貰^{もら}えまいかと電話で聞いて見たら、宜^{よろ}しいという返事だから、行く気ならなるべく早く行つた方がよからう。もつとも電話の上^のに咽喉^{のど}が痛いので、詳しい話はできなかったから、そのつもりでいてくれというのが彼の用向であつた。敬太郎は「どうもありがとう。じやなるべく早く行くようにするから」と礼を述べて電話を切つたが、どうせ行くなら今夜にでも行つて見ようという気が起つたので、再び三階へ取つて返してこの間^{こし}拵^{こしら}へたセルの袴^{はかま}を穿^はいた上、いよいよ表へ出た。

曲り角へ来てポストへ手紙を入れる事は忘れなかったけれども、肝心の森本の安否はこの時すでに敬太郎の胸に、ただ微かな火氣を残すのみであつた。それでも状袋が郵便函の口を滑つて、すくと底へ落ちた時は、受取人の一週間以内に封を披く様を想見して、満更悪い心持もしまいと思つた。

それから電車へ乗るまではただ一直線にすたすた歩いた。考も一直線に内幸町の方を向いていたが、電車が明神下へ出る時分、何気なく今しがた電話口で須永から聞いた言葉を、頭の内で繰り返して見ると、覚えはつと思うところが出て来た。須永は「今日内幸町からイトコが来て」とたしかに云つたが、そのイトコが彼の叔父さんの子である事は疑うまでもない。しかしその子が男であるか女であるかは不完全な日本語のまるで關係しないところである。

「どつちだろう」

敬太郎は突然氣にし始めた。もしそれが男だとすれば、あの後姿の女についての手がかりにはならない。したがって女は彼の好奇心を徒らに刺戟しただけで、ちつとも動いて来ない。しかしもし女だとすると、日といい時刻といい、須永の玄関から上り具合といい、どうも自分より一足先へ這入つたあの女らしい。想像と事実を継ぎ合わせる事に巧みな彼

は、そうと確かめないうちに、てつきりそうときめてしまった。こう解釈した時彼は、今まで泡立^{あわだ}っていた自分の好奇心に幾分の冷水を注^さしたような満足を覚えると共に、予期したよりも平凡な方角に、手がかりが一つできたと云うつまらなさをも感じた。

八

彼は小川町まで来た時、ちよつと電車を下りても須永^{すなが}の門^{かどぐち}口まで行つて、友の口から事実を確かめて見たいくらいに思つたが、単純な好奇心以外にそんな立ち入った詮議^{せんぎ}をすべき理由をどこにも見出し得ないので、我慢してすぐ三田線に移った。けれども真直^{まっすぐ}に神田橋を抜けて丸の内を疾駆する際にも、自分は今須永の従妹^{いとこ}の家に向つて走りつつあるのだという心持は忘れなかつた。彼は勧業銀行の辺^{あたり}で下りるはずのところを、つい桜田本郷町まで乗り越して驚ろいてまた暗い方へ引き返した。淋^{さび}しい夜であつたが尋ねる目的の家はすぐ知れた。丸い瓦斯^{ガス}に田口^{たぐち}と書いた門の中を覗^{のぞ}いて見ると、思つたより奥深^{おくふか}ような構^{かまえ}であつた。けれども實際は砂利を敷いた路^{みち}が往来から筋違^{すじかい}に玄関を隠しているのと、正面を遮^{さえ}ぎる植込がこんもり黒ずんで立っているのとで、幾分か厳^いめしい景氣を夜陰に添

えたまでで、門内に這入ったところでは見付ほど手広な住居でもなかった。

玄関には西洋擬いの硝子戸が二枚閉てあつたが、頼むといつても、電鈴を押しても、取次がなかなか出て来ないので、敬太郎はやむを得ずしばらくその傍に立つて内の様子を窺がつていた。すると、どこからかようやく足音が聞こえ出して、眼の前の擦硝子がぱつと明るくなった。それから庭下駄で三和土を踏む音が二足三足したと思うと、玄関の扉が片方開いた。敬太郎はこの際取次の風采を想望するほどの物数奇もなく、全く漫然と立っていただけであるが、それでも緋の羽織を着た書生か、双子の綿入を着た下女が、一応御辞儀をして彼の名刺を受取る事とのみ期待していたのに、今戸を半分開けて彼の前に立ったのは、思いも寄らぬ立派な服装をした老紳士であつた。電氣の光を背中に受けているので、顔は判然しなかつたが、白縮緬の帯だけはすぐ彼の眼に映じた。その瞬間にすぐこれが田口という須永の叔父さんだろうという感じが敬太郎の頭に働いた。けれども事が余り意外なので、すぐ挨拶をする余裕も出ず少しはあつけに取られた気味で、ぼんやりしていた。その上自分をはなだ若く考えている敬太郎には、四十代だろうが五十代だろうが乃至六十代だろうがほとんど区別のない一様の爺さんに見えるくらい、彼は老人に対して親しみのない男であつた。彼は四十五と五十五を見分けてやるほどの同情心

を年長者に對して有^もたなかつたと同時に、そのいずれに向つても慣れないうちは異人種のような無^ぶ氣^き味^みを覚えるのが常なので、なおさら迷^ま兎^ごついたのである。しかし相手は何も氣にかからない様子で、「何か用ですか」と聞いた。丁寧^{ていねい}でもなければ輕^{けい}蔑^{べつ}でもない至^むつて無^む難^{ぞう}作^さなその言葉つきが、少し敬太郎の度胸を回復させたので、彼はようやく自分の姓名を名乗ると共に手短かく來意を告げる機会を得た。すると年^{とし}嵩^{かさ}な男は思い出したように、「そうそう先刻^{さつきいちどく}市藏^{いちぞう}（須永の名）から電話で話がありました。しかし今夜御出^{おいで}になるとは思いませんでしたよ」と云つた。そうして君そう早く來たつていけないという様子がその裏に見えたので、敬太郎は精^{せい}一^{いつ}杯^{ぱい}言訳をする必要を感じた。老人はそれを聞くでもなし聞かぬでもなしといった風に黙つて立つていたが、「そんならまたいらつしやい。四五日うちにちよつと旅行しますが、その前に御目にかかれる暇さえあれば、御目にかかっても宜^ようござんす」と云つた。敬太郎は篤^{あつ}く札^{ふだ}を述べてまた門を出たが、暗い夜^よの中で、札の述べ方がちと馬鹿丁寧過ぎたと思つた。

これはずつと後^{あと}になつて、須永の口から敬太郎に知れた話であるが、ここの主人は、この時玄関に近い応接間で、たつた一人碁盤^{ごばん}に向つて、白石と黒石を互^{たが}違^{ちが}いに並べながら考え込んでいたのだそうである。それは客と一^{いっ}石^{せき}やつた後の引続きとして、是非共ある

問題を解決しなければ気がすまなかったからであるが、肝心のところで敬太郎がさも田舎者らしく玄関を騒がせるものだから、まずこの邪魔を追っ払った後でというつもりになつて、じれったさの余り自分と取次に出たのだという。須永にこの顛末を聞かされた時に、敬太郎はますます自分の挨拶が丁寧過ぎたような気がした。

九

中一日置いて、敬太郎は堂々と田口へ電話をかけて、これからすぐ行つても差支ないかと聞き合わせた。向うの電話口へ出たものは、敬太郎の言葉つきや話しぶりの比較的横風なところからだいぶ位地の高い人とも思つたらしく、「どうぞ少々御待ち下さいまし、ただいま主人の都合をちよつと尋ねますから」と丁寧な挨拶をして引き込んだが、今度返事を伝えるときは、「ああ、もしもし今ね、来客中で少し差支えるそうです。午後の一時頃来るなら来ていただきたいという事です」と前よりは言葉がよほど粗末になつていた。敬太郎は、「そうですか、それでは一時頃上りますから、どうぞ御主人に宜しく」と答えて電話を切つたが、内心は一種厭な心持がした。

十二時かつきりに午飯ひるめしを食うつもりで、あらかじめ下女に云いつけておいた膳ぜんが、時間通り出て来ないので、敬太郎は騒々しく鳴る大学の鐘に急せぎ立てられでもするように催促をして、できるだけ早く食事を済ました。電車の中では一昨日おとといの晩会ばんかいった田口の態度を思い浮べて、今日もまたああいふ風に無難むざうさ作な取扱を受けるのか知らん、それとも向うで会うというくらいだから、もう少しは愛あい嬌きょうのある挨拶でもしてくれるか知らんと考えなどした。彼はこの紳士の好意で、相当の地位さえ得られるならば、多少腰を曲かがめて窮屈な思をするぐらいは我慢するつもりであつた。けれども先刻さつき電話の取次に出たもののよう、五分と経たたないうちに、言葉使いを悪い方に改められたりすると、もう不愉快になつて、どうかそいつがまた取次に出なければいいがと思う。その癖くせ自分のかけ方の自分としては少し横風過ぎた事にはまるで気がつかない性質たちであつた。

小川町の角で、斜はすに須永すながの家へ曲まがる横町を見た時、彼ははつと例の後姿の事を思い出して、急に日蔭ひかげから日向ひなたへ想像を移した。今日も美しい須永の従妹いとこのいる所へ訪問に出かけるのだと自分で自分に教える方が、億劫おつくうな手数てかずをかけて、好い顔もしない爺じいさんに、衣食みちの途を授けて下さいと泣なつきに行くのだと意識するよりも、敬太郎に取つては遙はるかに麗うらちかであつたからである。彼は須永の従妹いとこと田口の爺さんを自分勝手に親子ときめておき

ながらもどこまでも二人を引き離して考えていた。この間の晩田口と向き合つて玄関先に立つた時も、光線の具合で先方の人品は判然分らなかつたけれども、眼鼻だちの輪廓だけで評したところが、あまり立派な方でなかつた事は、この爺さんの第一印象として、敬太郎の胸に夜目にも疑なく描かれたのである。それでいて彼はこの男の娘なら、須永との関係はどうあろうとも、器量はあまりいい方じやあるまいという気がどこにも起らなかつた。そこで離れていて合ひ、合つていて離れるような日向日蔭の裏表を一枚にした頭を彼は田口家に対して抱いていたのである。それを互違にくり返した後、彼は田口の門前に立つた。するとそこに大きな自働車が御者を乗せたまま待つていたので、少し安からぬ感じがした。

玄関へ掛つて名刺を出すと、小倉の袴を穿いた若い書生がそれを受取つて、「ちよつと」と云つたまま奥へ這入つて行つた。その声が確かに先刻電話口で聞いたのに違ないので、敬太郎は彼の後姿を見送りながら厭な奴だと思つた。すると彼は名刺を持ったまままた現われた。そうして「御気の毒ですが、ただいま来客中ですからまたどうぞ」と云つて、敬太郎の前に突立つていた。敬太郎も少しむつとした。

「先程電話で御都合を伺つたら、今客があるから午後一時頃来いという御返事でしたが」

「実はさつきの御客がまだ御帰りにならないで、御膳おぜんなどが出て混雑ごたごたしているんです」
落ちついて聞きさえすれば満更まんざら無理もない言訳なのだが、電話以後この取次しやくさわが癪しゃくに障さわっている敬太郎には彼の云い草がいかにも氣に喰くわなかった。それで自分の方から先せんを越すつもりか何かで、「そうですか、たびたび御足労でした。どうぞ御主人へよろしく」と平仄ひようそくの合わない捨台詞すてざいふのような事を云った上、何だこんな自働車じどうしゃがと云わぬばかりにその傍そばを擦すり抜けて表へ出た。

十

彼はこの日必要な会見を都合よく済あました後、新らしく築地に世帯を持った友人の所へ廻まわつて、須永すながと彼の従妹いとことそれから彼の叔父に当る田口とを想像の糸で巧みに継つぎ合せつつある一部始終いちぶしじゆうを御馳走ごちそうに、晩まで話し込む氣でいたのである。けれども田口の門を出て日比谷公園の傍わきに立った彼の頭には、そんな余裕よゆうはさらになかった。後姿を見ただけではあるが、在所ありかをすでに突き留めて、今その人の家を尋ねたのだという陽気な心持は固もりなかった。位置を求めにここまで来たという自覚はなおなかった。彼はただ屈辱を感じ

た結果として、腹を立てていただけである。そうして自分を田口のような男に紹介した須永こそこの取扱に対して当然責任を負わなくてはならないと感じていた。彼は帰りがけに須永の所へ寄つて、逐ちくいち一顛末てんまつを話した上、存分文句を並べてやろうと考えた。それでまた電車に乗つて一直線に小川町まで引返して来た。時計を見ると、二時にはまだ二十分ほど間まがあつた。須永の家の前うちへ来て、わざと往来から須永須永と二声ばかり呼んで見たが、いるのかいないのか二階の障子しょうじは立て切つたままついに開あかなかつた。もつとも彼は体裁家ていさいやで、平生からこういう呼び出し方を田舎者いなかものらしいといつて厭いやがつていたのだから、聞こえても知らん顔をしているのではなからうかと思つて、敬太郎けいたろうは正式に玄関の格子口こうしぐちへかかつた。けれども取次に出た仲働なかばたらきの口から「午少し過ひるに御出ましになりました」という言葉を聞いた時は、ちよつと張合が抜けて少しの間黙つて立っていた。

「風邪かぜを引いていたようでしたが」

「はい、御風邪を召していらつしやいましたが、今日はだいぶ好いからとおしやつて、御出かけになりました」

敬太郎は帰ろうとした。仲働は「ちよつと御隠居さまに申し上げますから」といって、敬太郎を格子のうちに待たしたまま奥へ這入はいつた。と思うと襖ふすまの陰から須永の母の姿が現

われた。背の高い面長の下町風に品のある婦人であつた。

「さあどうぞ。もうそのうち帰りましょうから」

須永の母にこう云い出されたが最後、江戸慣れない敬太郎はどうそれを断つて外へ出ていか、いまだにその心得がなかった。第一どこで断る隙間もないように、調子の好い文句がそれからそれへとずるずる彼の耳へ響いて来るのである。それが世間体の好い御世辞と違つて、引き留められているうちに、上つては迷惑だろうという遠慮がいつの間にか失くなつて、つい気の毒だから少し話して行こうという気になるのである。敬太郎は云われるままにとうとう例の書齋へ腰をおろした。須永の母が御寒いでしょうと云つて、仕切りの唐紙を締めてくれたり、さあ御手をお出しなさいと云つて、佐倉を埋けた火鉢を勧めてくれたりするうちに、一時昂奮した彼の気分はしだいに落ちついて来た。彼はシキとかいう白い絹へ秋田路を一面に大きく摺つた襖の模様だの、唐桑らしくてらした黄色い手焙だのを眺めて、このしとやかで能弁な、人を外す事を知らないと言つた風の母と話をした。

彼女の語るところによると、須永は今日矢来の叔父の家へ行つたのだそうである。

「じやついでだから帰りに小日向へ廻つて御寺参りをして来ておくれつて申しましたら、

御母さんは近頃無精ぶしようになったようですね、この間も他に代理ひとをさせたじやありませんか、年を取ったせいかしらなんて悪口を云い云い出て参りましたが、あれもねあなた、せんだつて中じゆうから風邪を引いて咽喉のどを痛めておりますので、今日も何なら止した方がいじやないかととめて見ましたが、やつぱり若いものは用心深いようでもどこか我無がむしやらで、年寄の云う事などにはいつさい無頓着むとんじやくでございますから……」

須永の留守へ行くと、彼の母は唯一の楽みのようにこういう調子で倅せがれの話をするのが常であつた。敬太郎の方で須永の評判でも持ち出そうものなら、いつまでもその問題あとの後へ喰付くっいて来て、容易に話頭を改めないのが例になつていた。敬太郎もそれにはだいぶ慣れてゐるから、この際も向うのいう通りをただふんふんとおとなしく聞いて、一段落の来るのを待つていた。

十一

そのうち話がいつか肝心かんじんの須永すながを逸それて、矢来の叔父という人の方へ移つて行つた。これは内幸町と違つて、この御母おつかさんの実の弟に当る男だそうで、一種の贅沢屋ぜいたくやのよう

に敬太郎は須永から聞いていた。外套の裏は繻子でなくては見つともなくて着られないと云つたり、要りもしないのに古渡りの更紗玉とか号して、石だか珊瑚だか分らないものを愛玩したりする話はいまだに覚えていた。

「何にもしないで贅沢に遊んでいられるくらい好い事はないんだから、結構な御身分ですな」と敬太郎が云うのを引き取るように母は、「どうしてあなた、打ち明けた御話が、まあどうにかこうにかやつて行けるといふまで、樂だの贅沢だのという段にはまだなかなかなのでございますからいけません」と打ち消した。

須永の親戚に当る人の財力が、さほど敬太郎に関係のある訳でもないのに、彼はそれなり黙つてしまった。すると母は少しでも談話の途切れるのを自分の過失でもあるように、すぐ言葉を継いだ。

「それでも妹婿の方は御蔭さまで、何だかだつて方々の会社へ首を突っ込んでおりますから、この方はまあ不自由なく暮しておる模様でございますが、手前共や矢来の弟などになりますと、云わば、浪人同様で、昔に比べたら、尾羽うち枯らさないばかりの体たらくだつて、よく弟ともそう申しては笑うこつてございますよ」

敬太郎は何となく自分の身の上を顧みて気恥かしい思をした。幸にさきがすらすら喋舌

つてくれるので、こつちに受け答をする文句を考える必要がないのをせめてもの得として聞き続けた。

「それにね、御承知の通り市蔵がああいう引つ込思案の男だもんでござんすから、私もただ学校を卒業させただけでは、全く心配が抜けませんので、まことに困り切ります。早く気に入った嫁でも貰つて、年寄に安心でもさせてくれるようにおしなと申しますと、そう御母さんの都合のいいようにばかり世の中は行きやしませんて、てんで相手にしないんでございますよ。そんなら世話をしてくれる人に頼んで、どこへでもいいから、務にでも出る気になればまだしも、そんな事にはまたまるで無頓着であなた……」

敬太郎はこの点において實際須永が横着過ると平生から思っていた。「余計な事です、少し目上の人から意見でもして上げるようにしたらどうでしょう。今御話の矢来の叔父さんからでも」と全く年寄に同情する気で云った。

「ところがこれがまた大の交際嫌の変人でございまして、忠告どころか、何だ銀行へ這入つて算盤なんかパチパチ云わすなんて馬鹿があるもんかと、こうでございますから頭から相談にも何にもなりません。それをまた市蔵が嬉しがりまです。矢来の叔父の方が好きだとか気が合うとか申しちやよく出かけます。今日なども日曜じゃあるし御天気は好し

するから、内幸町の叔父が大阪へ立つ前にちよつとあちらへ顔でも出せばいいのでござい
ますけれども、やっぱり矢来へ行くんだつて、とうとう自分の好きな方へ参りました」

敬太郎はこの時自分が今日何のために馳^かけ込むようにこの家を襲^{おそ}ったかの原因について、
また新らしく考え出した。彼は須永の顔を見たら随分過激な言葉を使つてもその不都合を
責めた上、僕はもう二度とあすこの門は潜^くらないつもりだから、そう思つてくれたまえぐ
らいの台詞^{せりふ}を云つて帰る氣でいたのに、肝^{かん}心^{しん}の須永は留守^{るす}で、事情も何も知らない彼の
母から、逆^{さか}さにいろいろな話をしかけられたので、怒^{おこ}つてやろうという氣は無論抜けてし
まったのである。が、それでも行きがかり上、田口と会見を遂^とげ得なかつた顛^{てん}末^{まつ}だけは、
一応この母の耳へでも構わないから入れておく必要があるだろう。それには話の中に内幸
町へ行くとか行かないとかが問題になつてゐる今が一番よからう。——こう敬太郎は思つ
た。

十二

「実はその内幸町の方へ今日私も出たんですが」と云い出すと、自分の息子の事ばかり考

えていた母は、「おやそうでございましたか」とやつと気がついてすまないという顔つきをした。この間から敬太郎けいたろうが躍起やつきになつて口を探さがしている事や、探しあぐんで須永すながに紹介を頼んだ事や、須永がそれを引き受けて内幸町の叔父に会えるように周旋した事は、須永の傍そばにいる母として彼女かのおんなのことごとく見たり聞いたりしたところであるから、行き届いた人なら先方さきで何も云い出さない前に、こつちからどんな模様ですぐらいは聞いてやるべきだとも思つたのだらう。こう觀察した敬太郎は、この一句を前置に、今までの成行を残らず話そうと力めにかかつたが、時々相手から「そうでございしますと」とか、「本当にまあ、間の悪い時にはね」とか、どっちにも同情したような間投詞が出るので、自分がむかつ腹ばらを立てて悪体あくたいを吐いた事などは話のうちから綺麗きれいに抜いてしまった。須永の母は氣の毒という言葉は何遍もくり返した後で、田口を弁護するようにこんな事を云つた。――

「そりやあ実のところ忙しい男なので。妹いもなどもああして一つ家に住んでおりますようなものの、――何でござんしょう。――落々おちおち話のできるのはおそらく一週間に一日もございますまい。私が見かねて要作ようさくさんいくら御金が儲もつかるたつて、そう働はたらいて身体からだを壊しちや何にもならないから、たまには骨休めをなさいよ、身体が資本もとでじゃありませんかと

申しますと、おいらもそう思ってるんだが、それからそれへと用が湧いてくるんで、傍から掬くい出さないと、用が腐つちまうから仕方がないなんて笑って取り合いませんので。そうかと思うとまた妹や娘に今日はこれから鎌倉へ伴れて行く、さあすぐ支度をしろって、まるで足元から鳥が立つように急ぎ立てる事もございますが……」

「御嬢さんがありますのか」

「ええ二人おります。いずれも年頃でございますから、もうそろそろどこかへ片づけるとか婿を取るとかしなければなりませんまいが」

「そのうちの一人の方が、須永君のところへ御出になる訳でもないんですか」

母はちよつと口籠った。敬太郎もただ自分の好奇心を満足させるためにあまり立ち入った質問をかけ過ぎたと気がついた。何とかして話題を転じようと考えているうちに、相手の方で、

「まあどうなりますか。親達の考もございましょうし。当人達の存じ寄りもしかと聞
糾だして見ないと分りませんし。私ばかりでこうもしたい、ああもしたいといくら熱急
思つてもこればかりは致し方がございません」と何だか意味のありそうな事を云つた。一度退きかけた敬太郎の好奇心はこの答でまた打ち返して来そうにしたが、善よくないという

克己心こつきしんにすぐ抑えられた。

母はなお田口の弁護をした。そんな忙がしい身体からだだから、時によると心にもない約束違
いなどをする事もあるが、いったん引き受けた以上は忘れる男ではないから、まあ旅行か
ら帰るまで待つて、緩ゆっくり会つたら宜よかろうという注意とも慰藉いしやともつかない助言じよごんも与
えた。

「矢来のはおつても会わん方で、これは仕方がございませんが、内幸町のはいなくても都
合さえつけば馳かけて帰つて来て会うといった風の性質たちでございますから、今度旅行から帰
つて来さえすれば、こつちから何とも云つてやらないでも、向うできつと市蔵のところへ
何とか申して参りますよ。きつと」

こう云われて見ると、なるほどそういう人らしいが、それはこつちがおとなしくしてい
ればこそで、先刻さつきのようにぶんぶん怒つてはとうてい物にならないにきまり切っている。
しかし今更いまさらそれを打ち明ける訳には行かないので、敬太郎はただ黙つていた。須永の母
はなお「あんな顔はしておりますが、見かけによらない実意のある剽軽ひょうきんもの者でございま
すから」と云つて一人で笑つた。

十三

剽軽者という言葉は田口の風采^{ふうさい}なり態度なりに照り合わせて見て、どうも敬太郎^{けいたろう}の腑^ふに落ちない形容であつた。しかし實際を聞いて見ると、なるほど当つているところもあるように思われた。田口は昔^{むか}しある御茶屋へ行つて、姉さんこの電気灯は熱^{ほて}り過ぎるね、もう少し暗くしておくれと頼んだ事があるそうだ。下女が怪訝^{けげん}な顔をして小さい球と取り換えましようかと聞くと、いいえさ、そこをちよいと捻^{ねじ}つて暗くするんだと真面目^{まじめ}に云いつけるので、下女はこれは電気灯のない田舎^{いなか}から出て来た人に違ないと見て取つたものか、くすくす笑いながら、旦那電気はランプと違つて捻^{ひね}つたつて暗くはなりませんよ、消えちまうだけですから。ほらねとばちツと音をさせて座敷を真暗にした上、またぱつと元通りに明るくするかと思うと、大きな声でばあと云つた。田口は少しも悄然^{しよげ}ずに、おやおやまだ旧式を使つてゐるね。見つともないじゃないか、ここの家^{うち}にも似合わないこつた。早く会社の方へ改良を申し込んでおくといい。順番に直してくれるから。ときももつともらしい忠告を与えたので、下女もとうとう真^まに受け出して、本当にこれじゃ不便ね、だいち点^{つつ}けつ放^{はな}しで寝る時なんか明る過ぎて、困る人が多いでしょうからときも感心したらしく、改

良に賛成したそうである。ある時用事が出来て門司とか馬関とかまで行った時の話はこれよりもよほど念が入っている。いつしよに行くべきはずのAという男に差支が起つて、二日ばかり彼は宿屋で待ち合わしていた。その間の退屈紛れに、彼はAを一つ担いでやろうと巧らんだ。これは町を歩いている時、一軒の写真屋の店先でふと思いついた悪戯で、彼はその店から地方の芸者の写真を一枚買ったのである。その裏へA様と書いて、手紙を添えた贈物のように拵えた。その手紙は女を一人雇つて、充分の時間を与えた上、できるだけAの心を動かすように艶めかしく曲らしたもので、誰が貰つても嬉しい顔をするに足るばかりか、今日の新聞を見たら、明日ここへ御着のはずだと出ていたので、久しぶりにこの手紙を上げるんだから、どうか読みしだい、どこそこまで来ていただきたいと書いたなかなか安くはないものであった。彼はその晩自分でこの手紙をポストへ入れて、翌日配達の時またそれを自分で受取つたなり、Aの来るのを待ち受けた。Aが着いても彼はこの手紙をなかなか出さなかった。力めて真面目な用談についての打合せなどを大事らしくし續けて、やつと同じ食卓で晚餐の膳に向つた時、突然思い出したように袂の中からそれを取り出してAに与えた。Aは表に至急親展とあるので、ちよつと箸を下に置くと、すぐ封を開いたが、少し読み下すと同時に包んである写真を抜いて裏を見るや否や、急に丸める

ように懷ふところへ入れてしまった。何か急いそぎの用でもできたのかと聞くと、いや何というばかりで、不得ふとくようりよう要領にまた箸を取ったが、どことなくそわそわした様子で、まだ段落のつかない用談をそのままに、少し失礼する腹が痛いからと云つて自分の部屋に帰った。田口は下女を呼んで、今から十五分以内にAが外出するだろうから、出るときは車が待つてでもいたように、Aが何にも云わない先に彼を乗せて馳かけ出して、その思わく通りどこの何といううちうちの門かどへおろすようにしろと云いつけた。そうして自分はAより早く同じ家へ行つて、主婦みさんを呼ぶや否や、今おれの宿の提ちようちん灯ていを点けた車に乗つて、これこれの男が来るから、来たらすぐ綺麗きれいな座敷へ通して、叮ていねい嚀ねいに取扱つて、向うで何にも云わない先に、御連おつれさ様はどうかから御待兼おまちかねでございますと云つたなり引き退がつて、すぐおれのところへ知らせてくれと頼んだ。そうして一人で煙草たばこを吹かして腕組をしながら、事件の経過を待つていた。すると万事が旨い具合に予定の通り進行して、いよいよ自分の出る順が来た。そこでAの部屋の傍そばへ行つて間の襖ふすまを開けながら、やあ早かつたねと挨拶あいさつすると、Aは顔の色を変えて驚ろいた。田口はその前へ坐り込んで、実はこれこれだと残らず自分の悪いたず戯ちを話した上、「担かついだ代りに今夜は僕が奢おごるよ」と笑いながら云つたんだという。「こういう飄氣ひようけた真似まねをする男なんでございますから」と須永の母も話した後あとでおかし

そうに笑った。敬太郎はあの自動車はまさか悪戯いたずらじゃなかったろうと考えながら下宿へ帰った。

十四

自動車事件以後敬太郎けいたろうはもう田口の世話になる見込はないものと諦あきらめた。それと同時に須永すながの従弟いとこと仮定された例の後姿うしろすがたの正体も、ほぼ発端はつたんの入口に当たる浅いところであったり行きとまったのだと思うと、その底にはがゆいようなまた煮切にえきらないような不愉快があつた。彼は今日こんにちまで何一つ自分の力で、先へ突き抜けたという自覚を有もつていなかった。勉強だろうが、運動だろうが、その他何事に限らず本氣にやりかけて、貫徹つらぬき終おほせた試ためしがなかった。生れてからたつた一つ行けるところまで行つたのは、大学を卒業したくらいなものである。それすら精を出さずにとぐろばかり巻きたがっているのを、向むこで引き摺ずり出してくれたのだから、中途で動けなくなった間怠まだるさのない代りには、やつと思いで井戸を掘り抜いた時の晴々せいせいした心持も知らなかった。

彼はぼんやりして四五日過ぎた。ふと学生時代に学校へ招待したある宗教家の談話を思

い出した。その宗教家は家庭にも社会にも何の不满もない身分なのに、自^{みず}から進んで坊主になった人で、その当時の事情を述べる時に、どうしても不思議でたまらないからこの道に入^いって見たと云った。この人はどんな朗らかに透^すき徹^{とお}るような空の下に立つても、四方から閉じ込められているような気がして苦しかったのだそうである。樹を見ても家を見ても往来を歩く人間を見ても鮮^{あざや}かに見えながら、自分だけ硝^{ガラス}子張^{はり}の箱の中に入れられて、外の物と直^{じか}に続^ついていない心持が絶えずして、しまいには窒^{ちっ}息^{そく}するほど苦しくなつて来るんだという。敬太郎はこの話を聞いて、それは一種の神経病に罹^{かか}つていたのではなからうかと疑^うつたなり、今^{こんにち}日まで気にもかけずにいた。しかしこの四五日ぼんやり屈^{くつ}託^{たく}しているうちによくよく考えて見ると、彼自身が今までに、何一つ突き抜いて痛快だという感じを得た事のないのは、坊主にならない前のこの宗教家の心にどこか似た点があるようである。もちろん自分のは比較にならないほど微弱で、しかも性質がまるで違っているから、この坊さんのようにえらい勇断をする必要はない。もう少し奮^{きん}発^{ぱつ}して気張^{きば}る事さえ覚えれば、当^{あた}つても外^{はず}れても、今よりはまだ痛快に生きて行かれるのに、今^{こんにち}日までついでそこに心を用いる事をしなかつたのである。

敬太郎は一人でこう考えて、どこへでも進んで行こうと思つたが、また一方では、もう

すつぽ抜けの後の祭の^{あと}ような気がして、何という^{あて}当もなくまた三四日^{さんよつか}ぶらぶらと暮した。その間に有楽座へ行ったり、落語を聞いたり、友達と話したり、往來を歩いたり、いろいろやったが、いずれも^{やかんあたま}藥缶頭を^{つか}攫むと同じ事で、世の中は少しも手に握れなかった。彼は碁^ごを打ちたいのに、碁を見せられるという感じがした。そうして同じ見せられるなら、もう少し^{はらんきよくせつ}面白い波瀾曲折のある碁が見たいと思った。

すると^{すく}直須永と後姿の女との関係が想像された。もともと頭の中でむやみに^{つや}色沢を着けて^{おくゆき}奥行のあるように組み立てるほどの関係でもあるまいし、あつたところが^{ひと}他の事を余計なおせつかいだと、自分で自分を^{あざ}嘲けりながら、ああ馬鹿らしいと思う^{あと}後から、やつぱり何かあるだろうという好奇心が今のうちにちよいちよいと^{ひら}閃めいて来るのである。そうしてこの道をもう少し辛抱強く先へ押して行ったら、自分が今まで経験した事のない^{ロマン}浪漫的な或物にぶつかるかも知れないと考え出す。すると田口の玄関で^{おこ}怒ったなり、あの女の研究まで投げてしまった自分の短気を、自分の好奇心に釣り合わない弱味だと思い始める。

職業についても、あんな些^{ささい}細な行^{ゆきちがい}違^{ちが}いのために^{あいそ}愛想づかしをたとい一句でも口にして、自分と田口の敷居を高くするはずではなかったと思う。あれでできるともできないとも、

まだ方^{かた}のつかない未来を中途半端に仕切ってしまった。そうして好んで煮^にきらない思いに悩んでいる姿になってしまった。須永の母の保証するところでは、田口という老人は見かけに寄らない親切気のある人だそうだから、あるいは旅行から帰って来た上で、また改めて会ってくれないとも限らない。が、こつちからもう一遍会見の都合を問い合せたりなどして、常識のない馬鹿だと輕蔑^{さげす}まれてもつまらない。けれどもどの道突き抜けた心持をしつかり捕^{つか}まえるためには馬鹿と云われるまでも、そこまで突っかけて行く必要があるだろう。——敬太郎は屈託しながらもいろいろ考えた。

十五

けれども身の一大事を即座に決定するという非常な場合と違って、敬太郎^{けいたろう}の思案には屈託^{くつとく}の裏^{うち}に、どこか呑気^{のんき}なものがふわふわしていた。この道をどのつまりまで進んで見ようか、またはこれぎりやめにして、さらに新らしいものに移る支度をしようか。問題は煎^{せん}じつめるまでもなく当初から至極^{しごく}簡単にでき上つていたのである。それに迷うのは、一度籤^{くじ}を引き損^{そく}なつたが最後、もう浮ぶ瀬はないという非道^{ひど}い目に会うからではなくって、

どつちに転んでも大した影響が起らないため、どうでも好いという怠けた心持がいつしらず働らくからである。彼は眠い時に本を読む人が、眠氣に抵抗する努力を厭いながら、文字の意味を判明頭に入れようと試みるごとく、香氣の懷で決断の卵を温めている癖に、ただ旨く孵化らない事ばかり苦にしていた。この不決断を逃れなければという口実の下に、彼は暗に自分の物数奇に媚びようとした。そうして自分の未来を売卜者の八卦に訴えて判断して見る氣になった。彼は加持、祈祷、御封、虫封じ、降巫の類に、全然信仰を有つほど、非科学的に教育されてはいなかったが、それ相当の興味は、いずれに対しても昔から今日まで失わずに成長した男である。彼の父は方位九星に詳しい神経家であった。彼が小学校へ行く時分の事であったが、ある日曜日に、彼の父は尻を端折つて、鋏を担ついだまま庭へ飛び下りるから、何をするのかと思つて、後から跟いて行こうとすると、父は敬太郎に向つて、御前はそこにいて、時計を見ていろ、そうして十二時が鳴り出したら、大きな声を出して合図をしてくれ、すると御父さんがあの乾に当る梅の根っこを掘り始めるからと云いつけた。敬太郎は子供心にまた例の家相だと思つて、時計がちんと鳴り出すや否や命令通り、十二時ですようと大きな声で叫んだ。それで、その場は無事に済んだが、あれほど正確に鋏を下ろすつもりなら、肝心の時計が狂っていないようにあらか

じめ直しておかなくてはならないはずだのにと敬太郎は父の迂闊^{うかつ}をおかしく思った。学校の時計と自分の家のとはその時二十分近く違っていたからである。ところがその後摘草^{ごつみくさ}に行つた帰りに、馬に蹴^けられて土堤^{どて}から下へ転がり落ちた事がある。不思議に怪我^{けが}も何もなかったのを、御祖母^{おばあ}さんが大層喜んで、全く御地蔵様が御前の身代りに立つて下さつた御蔭^{おかげ}だこれ御覧^{ごらん}と云つて、馬の繋^{つな}いであつた傍^{そば}にある石地藏の前に連れて行くと、石の首がぼくりと欠けて、涎^{よだれ}掛^{かけ}だけが残つていた。敬太郎の頭にはその時から怪しい色をした雲が少し流れ込んだ。その雲が身体^{からだ}の具合や四辺^{あたり}の事情で、濃くなったり薄くなつたりする変化はあるが、成長した今日^{こんにち}に至るまで、いまだに抜け切らずにいた事だけはたしかである。

こういう訳^{わけ}で、彼は明治の世に伝わる面白い職業の一つとして、いつでも大道^{だいどう}占^{うらな}いの弓張^{ゆみはり}提灯^{ちとうちん}を眺^{なが}めていた。もつとも金を払つて笹竹^{ぜいちく}の音を聞くほどの熱心はなかったが、散歩のついでに、寒い顔を提灯の光に映した女などが、悄然^{しよんぼり}そこに立つているのを見かけると、この暗い影を未来に投げて、思案に沈んでいる憐れ^{あわ}な人に、易者^{えきしや}がどんな希望と不安と畏怖^{いふ}と自信とを与えるだろうという好奇心に惹^ひかされて、面白半分、そつと傍へ寄つて、陰の方から立聞^{たちぎき}をする事がしばしばあつた。彼の友の某^{なにがし}が、自分の脳力に

悲観して、試験を受けようか学校をやめようかと思ひ煩わづらっている頃、ある人が旅行のついでに、善光寺如来ぜんこうじにょらいの御神籤おみくじをいただいて第五十五の吉というのを郵便で送ってくれたら、その中に雲散くもさんじて月重ねて明らかなり、という句と、花発ひらいて再び重ちやうえい栄えいという句があったので、物は試しだからまあ受けて見ようと云つて、受けたら綺麗きれいに及第した時、彼は興に乗つて、方々の神社で手当りしだい御神籤をいただき廻つた事さえある。しかもそれは別にこれという目的なしにいただいたのだから彼は平生でも、優うらないしやに売卜者の顧客とくぐいになる資格を充分具えていたに違ない。その代り今度のような場合にも、どこか慰さみがてらに、まあやつて見ようという浮氣がだいぶ交つていた。

十六

敬太郎けいたろうはどこの占うらない者しやに行つたものかと考えて見たが、あいにくどこという当あてもなかった。白山はくさんの裏とか、芝公園の中とか、銀座何丁目とか今までに名前を聞いたのは二三軒あるが、むやみに流行はやるのは山師やましらしくつて行く氣にならず、と云つて、自分で嘘うそと知りつつ出鱈目でたらめを強しいてもつともらしく述べる奴やつはなお不都合であるし、できるならば余

り人の込み合わない家で、閑静な髻を生やした爺さんが奇警な言葉で、簡潔にすばしど道い破ってくれるのがどこかにいれればいいがと思った。そう思いながら、彼は自分の父がよく相談に出かけた、郷里の一本寺の隠居の顔を頭の中に描き出した。それからふと気がついて、考えるんだかただ坐っているんだか分らない自分の様子が馬鹿馬鹿しくなったので、とにかく出てそこいらを歩いてるうちに、運命が自分を誘い込むような占ない者の看板にぶつかるだろうという漠然たる頭に帽子を載せた。

彼は久しぶりに下谷の車坂へ出て、あれから東へ真直に、寺の門だの、仏師屋だの、古臭い生薬屋だの、徳川時代のがらくたを埃といっしよに並べた道具屋だのを左右に見ながら、わざと門跡の中を抜けて、奴鰻の角へ出た。

彼は小供の時分よく江戸時代の浅草を知っている彼の祖父さんから、しばしば観音様の繁華を耳にした。仲見世だの、奥山だの、並木だの、駒形だの、いろいろ云つて聞かされる中には、今の人があまり口にしない名前さえあった。広小路に菜飯と田楽を食わせるすみ屋という洒落た家があるとか、駒形の御堂の前の綺麗な縄暖簾を下げた鱈屋は昔しから名代なものだとか、食物の話もだいぶ聞かされたが、すべての中で最も敬太郎の頭を刺戟したものは、長井兵助の居合拔と、脇差をぐいぐい呑んで見せ

る豆蔵と、江州伊吹山の麓にいる前足が四つで後足が六つある大蟻の干し固めたのであった。それらには蔵の二階の長持の中にある草双紙の画解が、子供の想像に都合の好いような説明をいくらでも与えてくれた。一本歯の下駄を穿いたまま、小さい三宝の上に曲がんだ男が、襷がけで身体よりも高く反り返った刀を抜こうとするところや、大きな蝦蟆の上に胡坐をかいて、児雷也が魔法か何か使っているところや、顔より大きな天眼鏡を持った白い髯の爺さんが、唐机の前に坐つて、平突ばつたちよん髯を上から見下すところや、大抵の不思議なものはみんな絵本から抜け出して、想像の浅草に並んでいた。こういう訳で敬太郎の頭に映る観音の境内には、歴史的に妖嬌陸離たる色彩が、十八間の本堂を包んで、小供の時から常に陽炎つていたのである。東京へ来てから、この怪しい夢は固より手痛く打ち崩されてしまったが、それでも時々は今でも観音様の屋根に鵠の鳥が巢を食っているだろうぐらいの考にふらふらとなる事がある。今日も浅草へ行つたらどうかなるだろうという料簡が暗に働いて、足が自ずとこつちに向いたのである。しかしルナパークの後から活動写真の前へ出た時は、こりや占ない者などのいる所ではないと今更のようにその雑沓に驚ろいた。せめて御寶頭顧でも撫でて行こうかと思つたが、どこにあるか忘れてしまったので、本堂へ上つて、魚河岸の大

提灯おちようちんと頼政よりまさの鶴ねえを退治たいじしている額かみなりもんだけ見てすぐ雷門かみなりもんを出た。敬太郎の考えではこれから浅草橋へ出る間には、一軒や二軒の易者はあるだろう。もし在あつたら何でも構わないから入る事にしよう。あるいは高等工業の先を曲つて柳橋の方へ抜けて見ても好いなどと、まるで時分どきに恰好かつこうな飯屋めしやでも探す気で歩いていた。ところがいざ探すと生憎あいにくなもので、平生ふだんは散歩さえすればいたるところに神易しんえきの看板がぶら下つている癖に、あの広い表通りに門戸を張つている卜者うらないはまるで見当らなかつた。敬太郎はこの企く図わだてもまた例によつて例のごとく、突き抜けずに中途でおしまいになるのかも知れないと思つて少し失望しながら蔵前くらまえまで来た。するとやつとの事で尋ねる商売の家うちが一軒あつた。細長い堅木の厚板に、身の上判断と割書わりがきをした下に、文銭ぶんせん占うらないと白い字で彫つて、そのまた下に、漆うるしで塗つた真赤まっかな唐辛子とうがらしが描かいてある。この奇体な看板がまず敬太郎の眼を惹ひいた。

十七

よく見るとこれは一軒の生薬屋きぐすりやの店を仕切つて、その狭い方へこぎつぱりした差掛さしかけ

様のものを作ったので、中に七色唐辛子なないろとうがらしの袋を並べてあるから、看板の通りそれを売る傍らかたわ、占ないを見る趣向に違ない。敬太郎けいたろうはこう観察して、そつと餡転餅屋あんころもちやに似た差掛の奥を覗いて見ると、小作りな婆さんがたつた一人裁縫しこをしていた。狭い室へや一つの住居すまいとしか思われないのに、肝心かんじんの易者の影も形も見えないから、主人は他行たぎようちゆう中で、細君が留守番をしているところかとも思ったが、店先の構造から推すと、奥は生薬屋の方と続いているかも知れないので、一概に留守と見切みきりをつける訳にも行かなかった。それで二歩先へ出て、薬種店の方を覗くと、八ツ目鰻めうなぎの干したのも釣るしてなければ、大きな亀の甲も飾ってないし、人形の腹をがらん胴にして、五色の五臓を外から見えるように、腹の中の棚たなに載せた古風の装飾もなかった。一本寺いっぽんじの隠居に似た髯ひげのある爺さんは固もり坐つていなかった。彼は再び立ち戻つて、身の上判断文銭ぶんせんうら占ないという看板のかかった入口から暖簾のれんを潜くぐつて内へ入った。裁縫しこをしていた婆さんは、針の手をやめて、大きな眼鏡めがねの上から睨にらむように敬太郎を見たが、ただ一口、占ないですかと聞いた。敬太郎は「ええちよつと見て貰もらいたいんだが、御留守おるすのようですね」と云った。すると婆さんは、膝ひざの上のやわらか物を隅すみの方へ片づけながら、御上りなさいと答えた。敬太郎は云われる通り素直に上つて見ると、狭いけれども居心地の悪いほど汚れた室へやではなかった。現に畳

などは取り替え立てでまだ新らしい香かがした。婆さんは煮立った鉄瓶てつびんの湯を湯呑ゆのみに注いで、香煎こうせんを敬太郎の前に出した。そうして昔は薬箱でも載せた棚らしい所に片づけてあった小机を取りおろしにかかった。その机には無地の羅紗らしゃがかけてあったが、婆さんはそれをそのまま敬太郎の正面に据すえて、そうして再び故もとの座に帰った。

「占うらないは私がするのです」

敬太郎は意外の感に打たれた。この小さい丸髷まるまげに結ゆった。黒繻子の襟えりのかかった着物の上に、地味な縞しまの羽織を着た、一心に縫物をしている、純然家庭的の女が、自分の未来に横たわる運命の予言者であろうとは全く想像のほかにあつたのである。その上彼はこの婦人の机の上に、筮ぜいちく竹も算木さんぎも天眼鏡てんがんきようもないのを不思議に眺ながめた。婆さんは机の上に乗っている細長い袋の中からちやらちやらと音をさせて、穴の開いた銭ぜにを九つ出した。敬太郎は始めてこれが看板に「文銭占ない」とある文銭なるものだろうと推察したが、さてこの九枚の文銭が、暗い中で自分を操あやつっている運命の糸と、どんな関係を有もっているか、固より想像し得るはずがないので、ただそこに鑄出いだされた模様と、それがしまつてあった袋とを見比べるだけで、何事も云わずにいた。袋は能装束のうしようぞくの切れ端か、懸物かけものの表具の余りで拵こしらえたらしく、金の糸が所々に光っているけれども、だいぶ古いものと見

えて、手擦てすれと時代のため、派手な色を全く失っていた。

婆さんは年寄に似合わない白い纖麗きやしやな指で、九枚の文銭を三枚ずつ三列みけたに並べたが、ひよつと顔を上げて、「身の上を御覧ですか」と聞いた。

「さあ一生いつしやうがい涯の事を一度に聞いておいても損はないが、それよりか今ここでどうしたらいいか、その方をきめてかかる方が僕には大切なから、まあそれを一つ願おう」

婆さんはそうですかと答えたが、それで御年はとまた敬太郎の年齢を尋ねた。それから生れた月と日を確認した。その後で胸算用あしむなざんようでもする案排あんぱいしきで、指を折って見たり、ただ考かんがえたりしていたが、やがてまた綺麗きれいな指で例の文銭を新らしく並べ更かえた。敬太郎は表に波が出たり、あるいは文字が現われたりして、三枚が三列に続く順序と排列を、深い意味でもあるような眼つきをして見守っていた。

十八

婆さんはしばらく手を膝ひざの上に載せて、何事も云わずに古い銭ぜにの面をじっと注意していたが、やがて考えの中心点が明快はつきりまと纏まったという様子をして、「あなたは今迷っていら

つしやる」と云い切つたなり敬太郎けいたろうの顔を見た。敬太郎はわざと何も答えなかった。

「進もうかよそうかと思つて迷つていらつしやるが、これは御損おでですよ。先へ御出おでになつた方が、たとい一時は思わしくないようでも、未始終御為すえしじゆうおためですから」

婆さんは一區限ひとくぎりつけると、また口を閉じて敬太郎の様子を窺うかがつた。敬太郎は始めから

ただ先方のいう事をふんふん聞くだけにして、こちらでは喋舌しゃべらないつもりに、腹の中できめてかかつたのであるが、婆さんのこの一言いちげんに、ぼんやりした自分の頭が、相手の声に映つてちらりと姿を現わしたような気がしたので、ついその刺戟しげきに應じて見たくなった。

「進んでも失敗しくじるような事はないでしょうか」

「ええ。だからなるべくおとなしくして。短気を起さないようにね」

これは予言ではない、常識があらゆる人に教える忠告に過ぎないと思つたけれども婆さんの態度に、これという故意わざとらしい点も見えないので、彼はなお質問を続けた。

「進むつてどっちへ進んだものでしょう」

「それはあなたの方がよく分つていらつしやるはずですがね。私はただ最少もっし先まで御出おでなさい、そのほうが御為だからと申し上げるまでです」

こうなると敬太郎も行きがかり上そうですかと云つて引込ひっこむ訳に行かなくなつた。

「だけれども道が二つ有るんだから、その内でどっちを進んだらよかろうと聞くんです」

婆さんはまた黙って文銭ぶんせんの上を眺ながめていたが、前よりは重苦しい口調で、「まあ同おんな

じですね」と答えた。そうして先刻裁縫さつきしうとをしていた時に散らばした糸屑いとくずを拾ひろって、その

中ちゆうから紺こんと赤の絹糸のかなり長いのを折り出して、敬太郎の見ている前で、それを綺麗きれいに

繕より始めた。敬太郎はただ手持無沙汰てもちぶさたの徒事いたずらとばかり思おもって、別段意にも留とどめなかつた

が、婆さんは丹念にそれを五六寸の長さに繕より上げて、文銭の上に載のせた。

「これを御覧なさい。こう繕り合あわせると、一本の糸が二筋の糸で、二筋の糸が一本の糸

になるじやありませんか。そら派手はでな赤と地味な紺こんが。若い時にはとかく派手の方へ派手

の方へと駆け出してやり損そこない勝かちのものですが、あなたのは今のところこの繕より糸いとみたよ

うに丁度ちやうど好い具合に、いっしよに絡からまり合あっているようですから御仕合せです」

絹糸たとえの喩たとえは何とも知らず面白おもしろかつたが、御仕合せですと云われて見ると、嬉しいよりも

かえつておかしい心持の方が敬太郎を動かした。

「じやこの紺糸で地道じみちを踏ふんで行けば、その間にちらちら派手な赤い色が出て来ると云う

んですね」と敬太郎は向うの言葉を呑のみ込んだような尋ね方をした。

「そうですそうなるはずです」と婆さんは答えた。始めから敬太郎は占いないの一言いちごんで、是

非共右か左へ片づけなければならぬとまで切に思いつめていた訳でもなかったけれども、これだけで帰るのも少し物足りなかつた。婆さんの云う事が、まるで自分の胸とかけ隔たつた別世界の消息なら、固より論はないが、意味の取り方ではだいぶ自分の今の身の上に、応用の利く点もあるので、敬太郎はそこに微かな未練を残した。

「もう何にも伺がう事はありませんか」

「そうですね。近い内にちよつとした事ができるかも知れません」

「災難ですか」

「災難でもないでしょうが、氣をつけないとやり損ないます。そうしてやり損なえばそれつきり取り返しがつかない事です」

十九

敬太郎の好奇心は少し鋭敏になつた。

「全体どんな性質の事ですか」

「それは起つて見なければ分りません。けれども盗難だの水難だのではないようです」

「じやどうして失敗しくじらない工夫をして好いか、それも分らないでしようね」

「分らない事ありませんが、もし御望みなら、もう一遍占うらないを立て直して見て上げても宜ようござんす」

敬太郎は、では御頼み申しますと云わない訳に行かなかつた。婆さんはまた纖細きやしやな指先を小器用に動かして、例の文錢を並べ更かえた。敬太郎から云えば先せんの並べ方も今度の並べ方も大抵似たものであるが、婆さんにはそこに何か重大の差別があるものと見えて、その一枚を引つくり返すにも軽率に手は下さなかつた。ようやく九枚をそれぞれ念入に片づけた後あとで、婆さんは敬太郎に向つて「大体分りました」と云つた。

「どうすれば好いんですか」

「どうすればつて、占ないには陰陽いんようの理で大きな形が現われるだけだから、實地めいめは各自がその場に臨んだ時、その大きな形に合あわして考えるほかありませんが、まあこうです。あなたは自分のようなまた他人ひとのような、長いようなまた短かいような、出るようなまた這入はいるようなものを待つていらつしやるから、今度事件が起つたら、第一にそれを忘れないようになさい。そうすれば旨うまく行きます」

敬太郎は煙けむに巻かれざるを得なかつた。いくら大きな形が陰陽の理で現われたにしたと

ころで、これじや方角さえ立たない霧きりのようなものだから、たとい嘘うそでも本当でも、もう少し切りつめた応用の利くところを是非云わせようと思つて、二三押問答をして見たが、いつこう埒らちが明かなかつた。敬太郎はとうとうこの禅坊主の寢言ねごに似たものを、手拭てぬぐいにくる包んだ懷炉かいろうのごとく懷中させられて表へ出た。おまけに出がけに七色唐辛子なないろとうがらしを二袋買つて袂たもとへ入れた。

翌日彼は朝飯あさはんの膳ぜんに向つて、煙の出る味噌汁みそじる碗わんの蓋ふたを取つたとき、たちまち昨日きのうの唐辛子からしを思い出して、袂たもとから例の袋を取り出した。それを十二分に汁しるの上に振りかけて、ひりひりするのを我慢しながら食事を済ましたが、婆さんの云わゆる「陰陽の理によつて現われた大きな形」と頭の中に呼び起して見ると、まだ漠然ばくぜんと瓦斯ガスのごとく残つていた。しかし手のつけようのない謎なぞに氣を揉もむほど熱心な占うらない信者でもないのです、彼はどうかそれを解釈して見たいと焦心あせする苦悶くもんを知らなかつた。ただその分らないところおもしろに妙趣みせきがあるので、忘れないうちに、婆さんの云つた通りを紙片かみぎれに書いて机ひきだしの抽出ひきだしへ入れた。もう一遍田口に会う手段を講じて見る事の可否は、昨日きのうすでに婆さんの助言じよごんで断定されたものと敬太郎は解釈した。けれども彼は占うらないを信じて動くのではない、動こうとする矢先へ婆さんが動く縁をつけてくれたに過ぎないのだと思つた。彼は須永すながへ行つて彼の

叔父がすでに大阪から帰ったかどうか尋ねて見ようかと考えたが、自動車事件の記憶がまだ新たに彼の胸を圧迫しているの、足を運ぶ勇気がちよつと出なかった。電話もこの際利用しにくかった。彼はやむを得ず、手紙で用を弁ずる事にした。彼はせんだつて須永の母に話したとほぼ同様の顛末^{てんまつ}を簡略に書いた後で、田口がもう旅行から帰ったかどうかを聞き合わせて、もし帰ったなら御多忙中とはなはだ恐れ入るけれども、都合して会ってくれる訳には行くまいか、こつちはどうせ閑な身体^{ひま からだ}だから、いつでも指定されて時日に出られるつもりだがと、この間の権幕^{けんまく}は、綺麗^{きれい}に忘れたような口ぶりを見せた。敬太郎はこの手紙を出すと同時に、須永の返事を明日にも予想した。ところが二日立つても三日立つても何の挨拶^{あいさつ}もないので、少し不安の念に悩まされ出した。なまじい売卜者^{うらないしや}の言葉などに動かされて、恥を搔^かいてはつまらないという後悔も交^{まじ}った。すると四日目の午前になつて、突然田口から電話口へ呼び出された。

二十

電話口へ出て見ると案外にも主人の声で、今直来^{すぐ}る事ができるかという簡単な問い合わ

せであつた。敬太郎けいたろうはすぐ出ますと答えたが、それだけで電話を切るのは何となくぶつきらばう過ぎて愛嬌あいきようが足りない気がするので、少し色を着けるために、須永君すながから何か御話でもございましたかと聞いて見た。すると相手は、ええ市蔵から御希望を通知して来たのですが、手数てかずだから直接に私の方で御都合を伺がいました。じや御待ち申しますから、直どうぞ。と云つてそれなり引込ひっこんでしまった。敬太郎はまた例の袴はかまを穿きながら、今度こそ様子が好きそうだと思つた。それからこの間買つたばかりの中折なかおれを帽子掛から取ると、未来に富んだ顔に生氣を漲みなぎらして快豁かいかつに表へ出た。外には白い霜しもを一度に摧くだいた日が、木枯こからしにも吹き捲まくられずに、穏おだやかな往来をおっとり的一面に照らしていた。敬太郎はその中を突切つつきる電車の上で、光を割さいて進むような感じがした。

田口の玄関はこの間と違つて蕭条ひっそりしていた。取次とりつきに袴を着けた例の書生が現われた時は、少しきまりが悪かつたが、まさかそんなつては失礼しましたとも云えないので、素知らぬ顔をして叮嚀ていねいに來意を告げた。書生は敬太郎を覚えていたのか、いないのか、ただはあと云つたなり名刺を受取つて奥へ這入はいつたが、やがて出て来て、どうぞこちらへと応接間へ案内した。敬太郎は取次の揃そろえてくれた上靴スリッパを穿はいて、御客らしく通るには通つたが、四五脚ある椅子のどれへ腰をかけていいかちよつと迷つた。一番小さいのにさ

えきめておけば間違はあるまいという謙遜けんそんから、彼は腰の高い肱懸ひじかけも裝飾もつかない最も軽そうなのを択よつて、わざと位置の悪い所へ席を占めた。

やがて主人が出て来た。敬太郎は使い慣れない切口上を使って、初対面の挨拶あいさつやら会見の礼やらを述べると、主人は軽くそれを聞き流すだけで、ただはあはあと挨拶あいさつした。そうしていくら区切が来ても、いつこう何とも云つてくれなかった。彼は主人の態度に失望するほどでもなかったが、自分の言葉がそう思う通り長く続かないのに弱つた。一応頭の中にある挨拶を出し切つてしまうと、後はそれぎりで、手持無沙汰てもちぶさたと知りながら黙らなければならなかった。主人は巻まきた蓆たばこいれ入しきしまから敷島を一本取つて、あとを心持敬太郎のいる方へ押しやつた。

「市蔵からあなたの御話しは少し聞いた事もありますが、いったいどういう方を御希望なんでしょうか」

実を云うと、敬太郎には何という特別の希望はなかった。ただ相当の位置さえ得られればとばかり考えていたのだから、こう聞かれるとぼんやりした答よりほかにできなかった。「すべての方面に希望を有もっています」

田口は笑い出した。そうして機嫌きげんの好い顔つきをして、学士かすの数のこんなに殖ふえて来た

今日、いくら世話をする人があろうとも、そう最初から好い地位が得られる訳のものでないという事情を懇^{ねん}ごろに説いて聞かせた。しかしそれは田口から改めて教わるまでもなく、敬太郎のとうから痛切に承知しているところであつた。

「何でもやります」

「何でもやりますつたつて、まさか鉄道の切符切もできないでしょう」

「いえできます。遊んでるよりはましですから。将来の見込のあるものなら本当に何でもやります。第一遊んでいる苦痛を逃^{のが}れるだけでも結構です」

「そう云う御考ならまた私の方でもよく氣をつけておきましょう。直^{すぐ}という訳にも行きま
すまいが」

「どうぞ。——まあ試しに使つて見て下さい。あなたの御家^{おうち}の——と云つちや余り変ですが、あなたの私^{わたくし}事にでもいいから、ちよつと使つて見て下さい」

「そんな事でもして見る氣がありますか」

「あります」

「それじゃ、ことに依ると何か願つて見るかも知れません。いつでも構いませんか」

「ええなるべく早い方が結構です」

敬太郎はこれで会見を切り上げて、朗らかな顔をして表へ出た。

二十一

穏やかな冬の日がまた二三日続いた。敬太郎は三階の室から、窓に入る空と樹と屋根瓦を眺めて、自然を橙色に暖ためるおとなしいこの日光が、あたかも自分のために世の中を照らしているような愉快を覚えた。彼はこの間の会見で、自分に都合の好い結果が、近い内にわが頭の上に落ちて来るものと固く信ずるようになった。そうしてその結果がどんな異様の形を装って、彼の前に現われるかを、彼は最も楽しんで待ち暮らした。彼が田口に依頼した仕事のうちには、普通の依頼者の申し出以上のものまで含んでいた。彼は一定の職業から生ずる義務を希望したばかりでなく、刺戟に充ちた一時性の用事をも田口から期待した。彼の性質として、もし成効の影が彼を掠めて閃めくならば、おそらく尋常の雑務とは切り離された特別の精彩を帯びたものが、卒然彼の前に投げ出されるのだろうぐらいに考えた。そんな望を抱いて、彼は毎日美しい日光に浴していたのである。すると四日ばかりして、また田口から電話がかかった。少し頼みたい事ができたが、わ

わざわざ呼び寄せるのも気の毒だし、電話では手間が要^いつてかえつて面倒になるし、仕方がないから、速達便で手紙を出す事にしたから、委細^{いさい}はそれを見て承知してくれ。もし分らない事があつたら、また電話で聞き合^あわしてもいいという通知であつた。敬太郎はぼんやり見えていた遠眼鏡^{とおめがね}の度がぴたりと合つた時のように愉快な心持がした。

彼は机の前を一寸^{いっすん}も離れずに、速達便の届くのを待つていた。そうしてその間絶えず例の想像を逞^{たく}ましくしながら、田口のいわゆる用事なるものを胸の中で組み立てて見た。そこにはいつか須永^{すなが}の門前で見た後姿の女が、ややともすると断わりなしに入り込んで来た。ふと気がついて、もつと実際^{じつざい}のものであるべきはずだと思ふと、その時だけは自分で自分の空想を叱^{こが}るようにしては、彼はもどかしい時を過^くごした。

やがて待ち焦^{こが}れた状袋^{じやうふく}が彼の手に落ちた。彼はすつと音をさせて、封を裂いた。息も繼^つがずに巻紙^{まきし}の端から端までを一気に読み通して、思わずあつという微^{かす}かな声を揚げた。与えられた彼の用事は待ち設けた空想よりもなお浪漫^{ロマンチック}的であつたからである。手紙の文句は固^{もと}より簡単に用事以外の言葉はいっさい書いてなかつた。今日四時と五時の間に、三田方面^{なかつこう}から電車に乗つて、小川町の停留所^{なかつこう}で下りる四十恰^か好^{こう}の男がある。それは黒の中^{なか}折^れに霜降^{しもふり}の外^が套^{とう}を着て、顔の面^{おもな}長^{なが}い背の高い、瘠^やせぎすの紳士で、眉^{まゆ}と眉^{まゆ}の間に

大きな黒子があるからその特徴を目標に、彼が電車を降りてから二時間以内の行動を探偵して報知しろというだけであつた。敬太郎は始めて自分が危険なる探偵小説中に主要の役割を演ずる一個の主人公のような心持がし出した。同時に田口が自己の社会的利害を護るために、こんな暗がりの所作をあえてして、他日の用に、他の弱点を握っておくのではなからうかと云う疑を起した。そう思った時、彼は人の狗に使われる不名誉と不徳義を感じて、一種苦悶の膏汗を腋の下に流した。彼は手紙を手にしたまま、じつと眸を据えたり固くなつた。しかし須永の母から聞いた田口の性格と、自分が直に彼に会つた時の印象とを纏めて考えて見ると、けつしてそんな人の悪そうな男とも思われないので、たと他人の内行に探りを入れるにしたところで、必ずしもそれほど下品な料簡から出るとは限らないという推断もついて見ると、いったん硬直になつた筋肉の底に、また温たかい血が通い始めて、徳義に逆らう吐気なしに、ただ興味という一点からこの問題を面白く眺める余裕もできてきた。それで世の中に接触する経験の第一着手として、ともかくも田口から依頼された通りにこの仕事をやり終せて見ようという気になつた。彼はもう一度とくと田口の手紙を読み直した。そうしてそこに書いてある特徴と条件だけで、はたして満足な結果が実際に得られるかどうかどうかを確かめた。

二十二

田口から知らせて来た特徴のうちで、本当にその人の身を離れないものは、眉まゆと眉の間まゆの黒子ほくろだけであるが、この日の短かい昨今の、四時とか五時とかいう薄暗い光線もとの下で、乗降のりおりに忙がしい多数の客の中から、指定された局部の一点を目標めじるしに、これだと言う男あやまを過ちなく見つけ出そうとするのは容易の事ではない。ことに四時と五時の間と云えば、ちやうど役所の退ひける刻限なので、丸の内からただ一筋の電車を利用して、神田橋を出る役人の数かずだけでも大したものである。それにほかと違つて停留所が小川町だから、年の暮に間もない左右の見世先みせさきに、幕だの楽隊だの、蓄音機だのを飾るやら具そなえるやらして、電灯以外の景氣を点つけて、不時の客を呼び寄せる混雜も勘かん定じように入れなければなるまい。それを想像して事の成否を考えて見ると、とうてい一人の手際てぎわではという覚束おぼつかない心持が起つて来る。けれどもまた尋ね出そうとするその人が、霜降しもふりの外套がいとうに黒の中折なかおれという服装いでたちで電車を降りるときまっで見れば、そこにまだ一縷いちるの望があるようにも思われる。無論霜降の外套だけでは、どんな恰好かっこうにしろ手がかりになり様ようはずがないが、黒の中折

を被^{かぶ}っているなら、色変りよりほかに用いる人のない今^{こんにち}日だから、すぐ眼につくだろう。それを目宛^{めあて}に注意したらあるいは成功しないとも限るまい。

こう考えた敬太郎は、ともかくも停留所まで行つて見る事だという氣になった。時計を眺^{なが}めると、まだ一時を打ったばかりである。四時より三十分前に向^むへ着くとしたところで、三時頃から宅^{うち}を出ればたくさんなのだから、まだ二時間の猶^{ゆう}予^よがある。彼はこの二時間を最も有益に利用するつもりで、じつとしたまま坐つていた。けれどもただ眼の前に、美^{みとし}土代町^{ろちよう}と小川町^{ていじ}が、丁字^{ていじ}になつて交叉している三角^{さんかく}の雑^{ざつ}沓^{とく}が入り乱れて映るだけで、これと云つて成功を誘^{いざな}うに足る上^{じようふんべつ}分別^{ぶんべつ}は浮^うばなかつた。彼の頭は考えれば考えるほど、同じ場所に吸いついたなりまるで動くことを知らなかつた。そこへ、どうしても目指す人には会えまいという掛^け念^{ねん}が、不安を伴つて胸の中をざわつかせた。敬太郎はいつその事時間が来るまで外を歩きつづけに歩いて見ようかと思つた。そう決心をして、両手を机^{ふち}の縁^{ふち}に掛けて、勢よく立ち上がるうとする途^と端^{たん}に、この間浅草^{うさ}で占^うないの婆^おさんから聞いた、「近い内に何か事があるから、その時にはこうこういうものを忘れないようにしろ」という注意を思い出した。彼は婆さんのその時の言葉を、解すべからざる謎^{なぞ}として、ほとんど頭の外へ落してしまつたにもかかわらず、参考のためわざわざ書きつけにして机^{ひきだし}の抽^{ひき}出^{だし}

に入れておいた。でまたその紙片かみぎれを取り出して、自分のように他人ひとのような、長いように短かいような、出るように這入はいるようなという句を飽かず眺めながめた。初めのうちは今まで通りとうてい意味のあるはずがないとしか見えなかったが、だんだん繰り返して読むうちに、辛抱強く考えさえすれば、こういう妙な特性を有もつたものがあるいは出て来るかも知れないという気になった。その上敬太郎は婆さんに、自分が持っているんだから、いざという場合に忘れないようになさいと注意されたのを覚えていたので、何でも好い、ただ身の周囲まわりの物から、自分のように他人ひとのような、長いように短かいような、出るように這入はいるようなものを探さがしあてさえすれば、比較的狭い範囲内で、この問題を解決する事ができる訳になって、存外早く片がつくかも知れないと思ひ出した。そこでわが自由になるこれから先の二時間を、全くこの謎なぞを解くための二時間として大切に利用しようと思ひ出した。ところがまず眼の前の机、書物、手拭てぬぐい、座蒲団ざぶとんから順々に進行して行李鞆靴こうふばんぐつした下までいったが、いつこうそれらしい物に出合わないうちに、とうとう一時間経ってしまった。彼の頭は焦燥いらだつと共に乱れて来た。彼の觀念は彼の室へやの中を駆け廻めぐるつて落ちつけないので、制するのも聞かずに、戸外へ出て縦横に走った。やがて彼の前に、霜降しもふりの外套がいとうを着た黒の中折を被かぶつた背の高い瘡やせぎすの紳士が、彼のこれから探そうというその人の權威を具そなへ

えて、ありありと現われた。するとその顔がたちまち大連にいる森本の顔になった。彼はだらしない髭ひげを生はやした森本の容貌ようぼうを想像の眼で眺ながめた時、突然電流に感じた人のようにあつと云つた。

二十三

森本の二字はとうから敬太郎けいたろうの耳に変な響を伝える媒なかだち介となつていたが、この頃ではそれが一層高じて全然一種の符徴ふちように変化してしまつた。元からこの男の名前さえ出ると、必ず例の洋杖ステッキを聯想れんそうしたものだ、洋杖が二人を繋つなぐ縁に立つてしていると解釈しても、あるいは二人の中を割きく邪魔に挟はさまつていると見做みなしても、とにかく森本とこの竹の棒の間にはある距離へだたりがあつて、そう一足飛いっそくとびに片方から片方へ移る訳に行かなかつたのに、今ではそれが一つになつて、森本と云えば洋杖、洋杖と云えば森本というくらい劇はげしく敬太郎の頭を刺戟しげきするのである。その刺戟を受けた彼の頭に、自分の所有のようなまた森本の所有のような、持主のどつちとも片づかないという觀念が、熱ほてった血に流されながら偶然浮び上つた時、彼はああこれだと叫んで、乱れ逃げる黒い影の内から、その洋杖だ

けをうんと捕まえたのである。

「自分のような他人ひとのような」と云った婆さんの謎なぞはこれで解けたものと信じて、敬太郎は一人嬉しがった。けれどもまだ「長いような短かいような、出るような這入るはいような」というところまでは考えて見ないので、彼はあまる二カ条の特性をも等しくこの洋杖うちの中から探さがし出そうという料簡りようけんで、さらに新たな努力を鼓舞こぶしてかかった。

始めは見方一つで長くもなり短かくもなるくらいの意味かも知れないと思つて、先へ進んで見たが、それでは余り平凡過ぎて、解釈がついたもつかないも同じ事のような心持がした。そこでまた後戻りをして、「長いような短かいような」という言葉を幾度いくたびか口の内でくり返しながら思索した。が、容易に解決のできる見込は立たなかつた。時計を見ると、自由に使つていい二時間のうちで、もう三十分しか残つていない。彼は抜裏ぬけうらと間違えて袋の口へ這入はいり込んだ結果、好んで行き悩みの状態に悶もたえているのでは無かろうかと、自分で自分の判断を危ぶみ出した。出端ではのない行きどまりに立つくらいなら、もう一遍引き返して、新しい途みちを探す方がましだとも考えた。しかしこう時間が逼せまつてゐるのに、初手しよてから出直しては、とても間に合うはずがない、すでにここまで来られたという一部分の成功を縁喜えんぎにして、是非先へ突き抜ける方が順当だとも考えた。これがよかろうあれが

よかろうと右左に思い乱れている中に、彼の想像はふと全体としての杖を離れて、握りに刻まれた蛇の頭に移った。その瞬間に、鱗のぎらぎらした細長い胴と、匙の先に似た短かい頭とを我知らず比較して、胴のない鎌首だから、長くなければならないはずだのに短かく切られている、そこがすなわち長いような短かいような物であると悟った。彼はこの答案を稲妻のごとく頭の奥に閃めかして、得意の余り踴躍した。あとに残った「出るような這入るような」ものは、大した苦労もなく約五分の間に解けた。彼は鶏卵とも蛙とも何とも名状しがたい或物が、半ば蛇の口に隠れ、半ば蛇の口から現われて、呑み尽されもせず、逃れ切りもせず、出るとも這入るとも片のつかない状態を思い浮かべて、すぐこれだと判断したのである。

これで万事が綺麗に解決されたものと考えた敬太郎は、躍り上るように机の前を離れて、時計の鎖を帯に絡んだ。帽子は手に持ったまま、袴も穿かずに室を出ようとしたが、あの洋杖をどうして持つて出たものだろうかという問題がちよつと彼を躊躇させた。あれに手を触れるのは無論、たとい傘入から引き出したところで、森本が置き去りにして行つてからすでに久しい今日となつて見れば、主人に断わらないにしろ、咎められたり怪しまれたりする氣遣はないにきまつているが、さて彼らが傍にいない時、またおるに

しても見ないうちに、それを提^さげて出ようとするには相当の思慮が準備が必要になる。迷信のはびこる家庭に成長した敬太郎は、呪^{まじない}禁に使う品物を（これからその目的に使うんだという料^{りょうけん}簡があつて）手に入れる時には、きつと人の見ていない機会を偷^{ぬす}んでやらなければ利^きかないという言い伝えを、郷里^{くに}にいた頃、よく母から聞かされていたのである。敬太郎は宿の上り口の正面にかけてある時計を見るふりをして、二階の梯子段^{はしごだん}の中途まで降りて下の様子を窺^{うか}がった。

二十四

主人は六畳の居間に、例の通り大きな瀬戸物の丸火鉢^{まるひばち}を抱^{かか}え込んでいた。細君の姿はどこにも見えなかった。敬太郎^{けいたろう}が梯子段の途中で、及び腰をして、硝子^{ガラス}越^{ごし}に障子^{しょうじ}の中を覗^{のぞ}いていると、主人の頭の上で忽然^{こつぜん}呼鈴^{ベル}が烈^{はげ}しく鳴り出した。主人は仰向^{あおむ}いて番号を見ながら、おい誰かいなかねと次の間^{つぎま}へ声をかけた。敬太郎はまたそろそろ三階の自分の室^{へや}へ帰^{かへ}つて来た。

彼はわざわざ戸棚^{とだな}を開けて、行李^{こり}の上に投げ出してあるセルの袴^{はかま}を取り出した。彼はそ

れを穿くとき、腰板こした うしろを後に引き摺ずつて、室へやの中を歩き廻めぐつた。それから足袋たびを脱ぬいで、靴下かに更えた。これだけ身装みなりを改めた上、彼はまた三階を下りた。居間のぞを覗くと細君の姿は依然として見えなかった。下女もそこにはいなかった。呼鈴ベルも今度は鳴らなかった。家中ひっそり閑かんとしていた。ただ主人だけは前の通り大きな丸火鉢もたに靠もたれて、上り口の方を向いたなりじつと坐まっていた。敬太郎は段々を下まで降り切らない先に、高い所から斜はすに主人の丸くなった背中を見て、これはまだ都合が悪いと考えたが、ついに思い切つて上り口へ出た。主人は案あんの上じょう、「御出かけで」と挨拶あいさつした。そうして例いふの通り下女を呼んで下駄箱げたばこにしまつてある履物はきものを出させようとした。敬太郎は主人一人の眼を掠かすめるのにさえ苦心していたところだから、この上下女に出られては敵かなわないと思つて、いや宜よろしいと云いながら、自分で下駄箱の垂たれを上げて、早速靴を取りおろした。旨うまい具合に下女は彼が土間へ降り立つまで出て来なかった。けれども、亭主は依然としてこつちを向いていた。

「ちよつと御願ですがね。室の机の上に今月の法学協会雑誌があるはずだが、ちよつと取つて来てくれませんか。靴はを穿はいてしまつたんで、また上あがるのが面倒だから」

敬太郎はこの主人に多少法律の心得があるのを知つて、わざとこう頼んだのである。主

人は自分よりほかのものでは到底^{とても}弁じない用事なので、「はあようがす」と云つて気さくに立つて梯子^{はしご}段^{だん}を上^{のぼ}つて行つた。敬太郎はそのひまに例の洋杖^{ステツキ}を傘^{かさ}入^{いれ}から抽^ぬき取つたなり、抱^だき込むように羽織の下へ入れて、主人の座に帰らないうちにそつと表へ出た。彼は洋杖の頭の曲つた角^{かど}を、右の腋^{わき}の下に感じつつ急ぎ足に本郷の通まで来た。そこでいつたん羽織の下から杖^{つえ}を出して蛇^{へび}の首をじつと眺^{なが}めた。そうして袂^{たもと}の手帛^{ハンケチ}で上から下まで綺麗^{きれい}に埃^{ほこり}を拭いた。それから後は普通の杖のように右の手に持つて、力任せに振り振り歩いた。電車の上では、蛇の頭へ両手を重ねて、その上に顛^{あじ}を載^のせた。そうしてやつと今一段落つた自分の努力^{かえり}を顧^{かえり}みて、ほつと一息吐^ついた。同時にこれから先指定された停留所へ行つてからの成否がまた気にかかり出した。考えて見ると、これほど骨を折つて、儉^{ぬす}むように持ち出した洋杖が、どうすれば眉^{まゆ}と眉^{まゆ}の間の黒子^{ほくろ}を見分ける必要品になるのか、全く彼の思量のほかにあつた。彼はただ婆さんに云われた通り、自分のような他人^{ひと}のような、長いような短かいような、出るような這^{はい}入^いるようなものを、一生懸命に探し当てて、それを忘れないで携^{たず}さえているというまでであつた。この怪しげに見えて平凡な、しかもむやみに軽い竹の棒が、寝かそうと起こそうと、手に持とうと袖^{そで}に隠そうと、未知の人を探す上に、はたして何の役に立つか知らんと疑^まぐつた時、彼はちよつとの間^ま、瘡^{ぎやく}を振り落

した人のようにけろりとして、車内を見廻わした。そうして頭の毛穴から湯気の立つほど業を煮やした先刻の努力を気恥かしくも感じた。彼は自分で自分の所作を紛らすために、わざと洋杖を取り直して、電車の床をとんとんと軽く叩いた。

やがて目的の場所へ来た時、彼はとりあえず青年会館の手前から引き返して、小川町の通へ出たが、四時にはまだ十五分ほど間があるので、彼は人通りと電車の響きを横切つて向う側へ渡つた。そこには交番があつた。彼は派出所の前に立っている巡査と同じ態度で、赤いポストの傍から、真直に南へ走る大通りと、緩い弧線を描いて左右に廻り込む広い往来とを眺めた。これから自分の活躍すべき舞台面を一応こういう風に検分した後で、彼はすぐ停留所の所在を確かめにかかった。

二十五

赤い郵便函から五六間東へ下ると、白いペンキで小川町停留所と書いた鉄の柱がすぐ彼の眼に入った。ここにさえ待つていれば、たとい混雑に取り紛れて注意人物を見失うまでも、刻限に自分の部署に着いたという強味はあると考えた彼は、これだけの安心を胸に握

つた上、また目標めじるしの鉄の柱を離れて、四辺あたりの光景を見廻した。彼のすぐ後には蔵造くらづくりの瀬戸物屋があつた。小さい盃さかずきのたくさん並んだのを箱入にして額のように仕立てたのがその軒下にかかつていた。大きな鉄製かねせいの鳥籠とりかごに、陶器でできた餌壺えつぼをいくつとなく外から括りくくつけたのも、そこにぶら下がっていた。その隣りは皮屋であつた。眼も爪も全く生きた時のままに残した大きな虎の皮に、緋羅紗ひらしゃの縁へりを取ったのがこの店の重なる装飾であつた。敬太郎けいたろうは琥珀こはくに似たその虎の眼を深く見つめて立つた。細長くつて真白な皮でできた襟巻えりまきらしいものの先に、豆狸まめだぬきのような顔が付着しているのも滑稽こつかいに見えた。彼は時計を出して時間を計りながら、また次の店に移った。そうして瑪瑙めのうで刻ほつた透明な兎うさぎだの、紫水晶むらさきずいしでできた角形かくがたの印材だの、翡翠ひすいの根懸ねかけだの孔雀石くじやくせきの緒締おじめだの、金の指輪やリンクスと共に、美しく並んでいる宝石商の硝子窓ガラスまどを覗いた。

敬太郎はこうして店から店を順々に見ながら、つい天下堂の前を通り越して唐木細工からきざいの店先まで来た。その時後うしろから来た電車が、突然自分の歩いている往来の向う側でとまったので、もしやという心から、筋違すじかいに通を横切つて細い横町の角にある唐物屋とうぶつやの傍そばへ近寄ると、そこにも一本の鉄の柱に、先刻さつきのと同じような、小川町停留所という文字が白く書いてあつた。彼は念のためこの角かどに立つて、二三台の電車を待ち合わせた。すると最初

には青山というのが来た。次には九段新宿というのが来た。が、いずれも万世橋まんせいばしの方から真直まつすぐに進んで来るので彼はようやく安心した。これでよもやの懸念けねんもなくなったから、そろそろ元の位地に帰ろうというつもりで、彼は足の向むきを更かえにかかった途端とたんに、南から来た一台がぐると美土代町みとしろちょうの角を回転して、また敬太郎の立っている傍でとまった。彼はその電車の運転手の頭の上に黒く掲げられた巢鴨すがもの二字を読んだ時、始めて自分の不注意に気がついた。三田方面から丸の内を抜けて小川町で降りるには、神田橋の大通りを真直まつすぐに突き当って、左へ曲つても今敬太郎の立っている停留所で降りられるし、また右へ曲つても先刻さつき彼の検分しておいた瀬戸物屋の前で降りられるのである。そうして両方とも同じ小川町停留所と白いペンキで書いてある以上は、自分がこれから後あとを跟つけようという黒い中折の男は、どっちへ降りるのだから、彼にはまるで見当けんとうがつかない事になるのである。眼を走らせて、二本の赤い鉄柱みちのりの距離を目分量で測って見ると、一町には足りないくらいだが、いくら眼と鼻の間だからと云つて、一方だけを専門にしてさえ覚束おぼつかない彼の監視力に対して、両方共手落なく見張り終おせる手際てぎわを要求するのは、どれほど自分の敏腕を高く見積りたい今の敬太郎にも絶対の不可能であつた。彼は自分の住居すまっている地理上の関係から、常に本郷三田間を連絡する電車にばかり乗っていたため、巢鴨方面から水

道橋を通つて同じく三田に続く線路の存在に、今が今まで気がつかずにいた自己の迂闊^{うかつ}を深く後悔した。

彼は困却の余りふと思いついた窮^{きゆう}策^{さく}として、須永^{すなが}の助力でも借りに行こうかと考えた。しかし時計はもう四時七分前に逼^{せま}つていた。ついこの裏通に住んでいる須永だけれども、門前まで駆^つけつける時間と、かい摘^{つま}んで用事を呑^のみ込ます時間を勘定に入ればとても間に合いそうにない。よしそのくらいの間は取れるとしたところで、須永に一方の見張りを頼む以上は、もし例の紳士が彼のいる方へ降りるならば、何かの手段で敬太郎に合図をしなければならぬ。それもこの人込の中だから、手を挙げたり手^{ハンケチ}帛^びを振るぐらいではちよつと通じかねる。紛^{まぎ}れもなく敬太郎に分らせようとするには、往來を驚ろかすほど大きな声で叫ぶに限ると云つてもいいくらいなものだが、そう云う突飛^{とつぴ}なよほどな場合でも体^{てい}裁^{さい}を重んずる須永のような男にできるはずがない。万一我慢してやってくれたところで、こつちから駆^かけて行く間には、肝^{かん}心^{しん}の黒の中折帽^{なかおれぼう}を被^かつた男の姿は見えなくなつてしまわないとも云えない。——こう考えた敬太郎はやむを得ないから運を天に任せどつちか一方の停留所だけ守ろうと決心した。

二十六

決心はしたようなものの、それでは今立っている所を動かないための横着と同じ事になるので、わざと成效せいこうを度外に置いて仕事にかかった不安を感じずにはいられなかった。彼は首を延ばすようにして、また東の停留所を望んだ。位地のせいか、向むきの具合か、それとも自分が始終乗降のりおりに慣れている訳か、どうもそちらの方が陽気に見えた。尋ねる人も何だか向で降りそうな心持がした。彼はもう一度見張るステーションを移そうかと思いがら、なおかつ決しかねてしばらく躊躇ちゆうちよしていた。するとそこへ江戸川行の電車が一台来てずるずるとまった。誰も降者おりてがないのを確かめた車掌は、一分と立たないうちにまた車を出そうとした。敬太郎けいたろうは錦町へ抜ける細い横町を背にして、眼の前の車台にはほとんど気のつかないほど、ここにいかあつちへ行こうかと迷っていた。ところへ後の横町から突然馳かけ出して来た一人の男が、敬太郎を突き除のけるようにして、ハンドルを手をかけた運転手の台へ飛び上った。敬太郎の驚ろきがまだ回復しないうちに、電車はがたりと云う音を出してすでに動き始めた。飛び上がった男は硝子戸ガラスドの内へ半分身体からだを入れながら失敬しましたと云った。敬太郎はその男と顔を見合せた時、彼の最後の視線が、自

分の足の下に落ちたのを注意した。彼は敬太郎に当った拍子に、敬太郎の持っていた洋杖を蹴飛ばして、それを持主の手から地面の上へ振り落さしたのである。敬太郎は直曲すまじくんで洋杖を拾い上げようとした。彼はその時蛇の頭が偶然東向に倒れているのに気がついた。そうしてその頭の恰好かつこうを何となしに、方角を教える指標フインガーポストのように感じた。

「やつぱり東が好かろう」

彼は早足に瀬戸物屋の前まで帰って来た。そこで本郷三丁目と書いた電車から降りる客を、一人残らず物色する気で立った。彼は最初の二三台を親の敵でも覗うように怖い眼つきで吟味ぎんみした後、少し心に余裕よゆうができるに連れて、腹の中がだんだん気丈きじょうになって来た。彼は自分の眼の届く広場を、一面の舞台と見做みなして、その上に自分と同じ態度の男が三人いる事を発見した。その一人は派出所の巡査で、これは自分と同じ方を向いて同じように立っていた。もう一人は天下堂の前にいるポイントマンであつた。最後の一人は広場の真中に青と赤の旗を神聖な象徴シンボルのごとく振り分ける分別盛りの中年者ちゅうねんものであつた。そのうちでいつ出て来るか知れない用事を期待しながら、人目にはさも退屈そうに立っているものは巡査と自分だろうと敬太郎は考えた。

電車は入れ代り立ち代り彼の前にとまった。乗るものは無理にも窮屈な箱の中に押し込もうとする、降りるものは権柄けんべいづくで上から伸しかかつて来る。敬太郎はこの何物とも知れない男女なんによが聚あつまつたり散つたりするために、自分の前で無作法に演じ出す一分いっぶん時の争しを何度となく見た。けれども彼の目的とする黒の中折の男はいくら待っても出て来なかつた。ことに依ると、もうとうに西の停留所から降りてしまったものではなからうかと思うと、こうして役にも立たない人の顔ばかり見つめて、眼のちらちらするほど一所に立つているのは、随分馬鹿氣た所作しよさに見えて来る。敬太郎は下宿の机の前で熱に浮かされた人のように夢中で費やした先刻さつきの二時間を、充分須永すながと打ち合せをして彼の援助を得るために利用した方が、遙はるかに常識に適かなつた遣口やりくちだと考え出した。彼がこの苦い氣分を痛切に嘗なめさせられる頃から空はだんだん光を失なつて、眼に映る物の色が一面に蒼あおく沈んで来た。陰鬱いんうつな冬の夕暮を補なう瓦斯ガスと電氣の光がぼつぼつそこらの店硝子みせガラスを彩りどり始めた。ふと氣がついて見ると、敬太郎から一間ばかりの所に、廂ひさしがみ髪いに結つた一人の若い女が立つていた。電車の乗降のりおりが始まるたびに、彼は注意の余波なごりを自分の左右に払つていたつもりなので、いつどつちから歩き寄つたか分らない婦人を思わぬ近くに見た時は、何より先にまずその存在に驚ろかされた。

二十七

女は年に合わせて地味なコートを引き摺るように長く着ていた。敬太郎は若い人の肉を飾る華麗な色をその裏に想像した。女はまたわざとそれを世間から押し包むようにして立っていた。襦袢の襟さえ羽二重の襟巻で隠していた。その羽二重の白いのが、夕暮の通るに連れて、空気から浮き出して来るほかに、女は身の周囲に何と云つて他の注意を惹くものを着けていなかった。けれども時節柄に頓着なく、当人の好尚を示したこの一色が、敬太郎には何よりも際立つて見えた。彼は光の抜けて行く寒い空の下で、不調和な異な物に出逢つた感じよりも、煤けた往来に冴々しい一点を認めた気分になつて女の頸の辺を注意した。女は敬太郎の視線を正面に受けた時、心持身体の向を変えた。それでもなお落ちつかない様子をして、右の手を耳の所まで上げて、鬢から洩れた毛を後へ掻きやる風をした。固より女の髪は綺麗に揃つていたのだから、敬太郎にはこの挙動が実のない科としてのみ映つたのだが、その手を見た時彼はまた新たな注意を女から強いられた。

女は普通の日本の女性のように絹の手袋を穿めていなかった。きちりと合う山羊の革製ので、華奢な指をつつましやかに包んでいた。それが色の着いた蠟を薄く手の甲に流したと見えるほど、肉と革がしっくりくつついたなり、一筋の皺も一分の弛みも余していなかった。敬太郎は女の手を上げた時、この手袋が女の白い手頸を三寸も深く隠しているのに気がついた。彼はそれぎり眼を転じてまた電車に向った。けれども乗降の一混雑が済んで、思う人が出て来ないと、また心に二三分の余裕ができるので、それを利用しようとして待ち構えるほどの執着はなかったにせよ、電車の通り越した相間相間には覺られないくらいの視力を使って常に女の方を注意していた。

始め彼はこの女を「本郷行」か「亀沢町行」に乗るのだろうと考えていた。ところが両方の電車が一順廻つて来て、自分の前に留つても、いっこう乗る様子がないので、彼は少々変に思った。あるいは無理に込み合っている車台に乗って、押し潰されそうな窮屈を我慢するよりも、少し時間の浪費を泳えた方が差引得になるという主義の人かとも考えて見たが、満員という札もかけず、一つや二つの空席は充分ありそうなのが廻つて来ても、女は少しも乗る素振を見せないの、敬太郎はいよいよ変に思った。女は敬太郎から普通以上の注意を受けていると覺つたらしく、彼が少しでも手足の態度を改ためると、雨の降ら

ないうちに傘^{かさ}を広げる人のように、わざと彼の觀察を避^よける準備をした。そうして故意に反対の方を見たり、あるいは向うへ二三歩あるき出したりした。それがため、妙に遠慮深いところのできた敬太郎はなるべく露^{むきだし}骨に女の方を見るのを慎^{つつ}しんでいた。がしまいにふと気がついて、この女は不案内のため、自分の勝手に好い加減にきめた停留所の前に来て、乗れもしない電車をいつまでも待つているのではなからうかと思った。それなら親切に教えてやるべきだという勇氣が急に起つたので、彼は逡^{しゅん}巡^{じゆん}する気色^{けしき}もなく、真正面に女の方を向いた。すると女はふいと歩き出して、二三間先の宝石商の窓際^{まどガラス}まで行つたなり、あたかも敬太郎の存在を認めぬもののごとくに、そこで額^{なまか}を窓硝子^{まどガラス}に着けるように、中に並べた指環^{えださんご}だの、帶留^{おびどめ}だの枝珊瑚^{えださんご}の置物^{なまか}だのを眺^{なが}め始めた。敬太郎は見ず知らずの他人に入らざる好意^{こうい}立^{だて}をして、かえつて自分と自分の品位を落したのを馬鹿らしく感じた。

女の容貌^{ようぼう}は始めから大したものではなかった。真向^{まむき}に見るとそれほどでもないが、横から眺めた鼻つきは誰の目にも少し低過ぎた。その代り色が白くて、晴々^{はれはれ}しい心持のする眸^{ひとみ}を有^もっていた。宝石商の電灯は今硝子^{ガラスごし}越^こに彼^{かの}女^{おんな}の鼻と、豊^{ふっ}くらした頬の一部分と額^{はす}とを照らして、斜^{はす}かけに立つてゐる敬太郎の眼に、光と陰とから成る一種妙な輪廓^{りんかく}を

与えた。彼はその輪廓と、長いコートに包まれた恰好かつこうのいい彼女の姿とを胸に収めて、また電車の方に向った。

二十八

電車がまた二三台来た。そうして二三台共また敬太郎けいたろうの失望をくり返さして東へ去った。彼は成功を思い切った人のごとくに帶の下から時計を出して眺めた。五時はもうとうに過ぎていた。彼は今更いまさら気がついたように、頭の上に被かぶさる黒い空を仰いで、苦にが々しく舌打したうちをした。これほど骨を折って網を張った中へかからない鳥は、西の停留所から平気で逃げたんだと思うと、他を騙ひとすためにわざわざ拵こしえらした婆さんの予言も、大事そうに持つて出た竹の洋杖ステッキも、その洋杖が与えてくれた方角の暗示も、ことごとく忌々いまいましさの種になった。彼は暗い夜を欺あやむいて眼先にちらちらする電灯の光を見廻して、自分をその中心に見出した時、この明るい輝きも必ひっきよう竟自分の見残した夢の影なんだろうと考えた。彼はそのくらい興を覚さましながらまだそのくらい寝惚ねぼけた心持を失わずに立っていたが、やがて早く下宿へ帰って正氣の人間になろうという覚悟をした。洋杖は自分の馬鹿を

嘲ける記念だから、帰りがけに人の見ていない所で二つに折つて、蛇の頭も鉄の輪の突がねもめちやめちやに、万世橋から御茶の水へ放り込んでやろうと決心した。

彼はすでに動こうとして一步足を移しかけた時、また先刻の若い女の存在に気がついた。女はいつの間にか宝石商の窓を離れて、元の通り彼から一間ばかりの所に立っていた。背が高いので、手足も人尋常より恰好よく伸びたところを、彼は快よく始めから眺めたのだが、今度はことにその右の手が彼の心を惹いた。女は自然のままにそれをすらりと垂れたなり、まるで他の注意を予期しないのである。彼は素直に調子の揃つた五本の指と、しなやかな革で堅く括られた手頸と、手頸の袖口の間から微かに現われる肉の色を夜の光で認めた。風の少ない晩であつたが、動かないで長く一所に立ち尽すものに、寒さは辛く当つた。女は心持ち頸を襟巻の中に埋めて、俯目勝にじつとしていた。敬太郎は自分の存在をわざと眼中に置かないようなこの眼遣の底に、かえつて自分が氣にかかつているらしい反証を得たと信じた。彼が先刻から蚤取眼で、黒の中折帽を被つた紳士を探している間、この女は彼と同じ鋭どい注意を集めて、觀察の矢を絶えずこつちに射がけていたのではなからうか。彼はある男を探偵しつつ、またある女に探偵されつつ、一時間余をここに過ごしたのではなからうか。けれどもどこの何物とも知れない男の、何

をするか分らない行動を、何のために探るのだから、彼には何らの考^{かんがえ}がなかったごとく、どこの何物とも知れない女から何を仕出^{しで}かすか分らない人として何のために自分が覗^{ねら}われるのだから、そこへ行くとやはりまるで要領を得なかった。敬太郎はこっちで少し歩き出して見せたら向うの様子がもつと鮮明に分るだろうという氣になって、そろりそろりと派出所^{うしろ}の後を西の方へ動いて行つた。もちろん女に勘づかれないために、彼は振向いて後を見る動作を固く憚^{はば}かつた。けれどもいつまでも前ばかり見て先へ行つては、肝^{かん}心^{じん}の目的を達する機会がないので、彼は十間ほど来たと思う時分に、わざと見たくもない硝子^{ガラス}窓^{まど}を覗^{のぞ}いて、そこに飾つてある天鷲^{びろうど}絨^{えり}の襟^{えり}の着いた女の子のマントを眺^{なが}める風をしながら、そつと後を振り向いた。すると女は自分の背後にいるどころではなかった。延び上つてもいろいろな人が自分を追越すように後から後から来る陰になつて、白い襟^{えり}巻^{まき}も長いコートもさらに彼の眼に入らなかつた。彼はそのまま前へ進む勇氣があるかを自分に疑ぐつた。黒い中折の帽子を被つた人の事なら、定刻の五時を過ぎた今だから、断念してもそれほどの遺憾はないが、女の方はどんなつまらない結果に終ろうとも、最少^{もうちうすこ}し觀察していたかつた。彼は女から自分が探偵されていると云う疑念を逆に投げ返して、こっちから女の行動を今しばらく注意して見ようという物数奇^{ものずき}を起した。彼は落し物を拾いに帰る人の急ぎ足

で、また元の派出所近く来た。その暗い陰に身を寄せるようにして窺うと、女は依然としてじつと通りの方を向いて立っていた。敬太郎の戻った事にはまるで気がついていない風に見えた。

二十九

その時敬太郎の頭に、この女は処女だろうか細君だろうかという疑が起った。女は現代多数の日本婦人にあまねく行われるふぶんみよう 廂髪ひさしがみに結っているもので、その辺の区別は始めから不分明だったのである。が、いよいよ物陰に来て、半後なかばしろになったその姿を眺めた時は、第一番にどっちの階級に属する人だろうという問題が、新たに彼を襲おそつて来た。

見かけからいうとあるいは人に嫁とついだ経験がありそうにも思われる。しかし身体からだの發育が尋常より遙はるかに好いからことによれば年は存外取っていないのかも知れない。それならなぜあんな地味な服装つくりをしているのだろう。敬太郎は婦人の着る着物の色や縞柄しまがらについて、何をいう権利も有もたない男だが、若い女ならこの陰鬱いんうつな師走しわすの空氣を跳ね返すように、派出はでな色を肉の上に重ねるものだらうの漠ばつとした觀察はあつたのである。彼はこの

女が若々しい自分の血に高い熱を与える 刺戟性しげきせいの文をどこにも見せていないのを不思議に思った。女の身に着けたものの内で、わずかに人の注意を惹くひのは頸の周囲くびまわりを包む羽二重たえの襟巻だけであるが、それはただ清いと云う感じを起す寒い色に過ぎなかった。あとは冬枯の空と似合つた長いコートですぽりと隠していた。

敬太郎は年に合わして余りに媚こびる氣分を失い過ぎたこの衣服なりを再び後うしろから見てもすでに男を知つた結果だと判じた。その上この女の態度にはどこか大人おとなびた落ちつきがあつた。彼はその落ちつきを品性と教育からのみ來た所得みとは見倣し得なかつた。家庭以外の空氣に触れたため、初々ういういしい羞恥はにかみが、手帛ハンケチに振りかけた香水の香かのように自然と抜けてしまつたのではなからうかと疑うつた。そればかりではない、この女の落ちつきの中には、落ちつかない筋肉の作用が、身体全体からだの運動となつたり、眉まゆや口の運動となつて、ちよいちよい出て來るのを彼は先刻さつき目撃した。最も鋭敏に動くものはその眼であらうと彼は疾とくに認めていた。けれどもその鋭敏に動こうとする眼を、強しいて動かすまいと力める女の態度もまた同時に認めない訳に行かなかつた。だからこの女の落ちつきは、自分で自分の神經を殺しているという自覺ともに伴なつたものだとは彼は勘定かんていしていた。

ところが今後うしろから見た女は身体といい氣分といい比較的沈靜して兩方の間うまに旨く調子が

取れているように思われた。彼女^{かのおんな}は先刻と違つて、別段姿勢を改ためるでもなく、そろそろ歩き出すでもなく、宝石商の窓へ寄り添うでもなく、寒さを凌^{しの}ぎかねる風情^{ふぜい}もなく、ほとんど閑雅^{かんが}とでも形容したい様子をして、一段高くなつた人道の端^{はし}に立っていた。傍^{そば}には次の電車を待ち合わせる人が二三散らばっていた。彼らは皆向うから来る車台を見つめて、早く自分の傍^{そば}へ招き寄せたい風に見えた。敬太郎が立ち退^のいたので大いに安心したらしい彼女は、その中^{うち}で最も熱心に何かを待ち受ける一人となつて、筋向うの曲り角をじつと注意し始めた。敬太郎は派出所の陰^{かげ}を上へ廻つて車道へ降りた。そうしてペンキ塗の交番を楯^{たて}に、巡査の立っている横から女の顔を覗^{ねら}うように見た。そうしてその表情の変化にまた驚ろかされた。今まで後^{うしろすがた}姿を眺^{なが}めて物陰にいた時は、彼女を包む一^{ひと}色^{いろ}の目立たないコートと、その背の高さと、大きな廂^{ひさしがみ}髪とを材料に、想像の国でむしろ自由過ぎる結論^{もて}を弄^{もて}あそんだのだが、こうして彼女の知らない間に、その顔を遠慮なく眺めて見ると、全く新しい人に始めて出逢つたような気がしない訳に行かなかつた。要するに女は先刻より大變若く見えたのである。切に何物かを待ち受けているその眼もその口も、ただ生^{いきい}々^きした一種華^{はな}やかな気色^{きしよく}に充ちて、それよりほかの表情は毫^{ごう}も見当らなかつた。敬太郎はそのうちに処女の無邪気ささえ認めた。

やがて女の見つめている方角から一台の電車が弓なりに曲った線路を、ぐるりと緩く廻転して来た。それが女のいる前で滑るやうにとまった時、中から二人の男が出た。一人は紙で包んだボール箱のようなものを提げて、すたすた巡査の前を通り越して人道へ飛び上がったが、一人は降りると直に女の前に行つて、そこに立ちどまった。

三十

敬太郎は女の笑い顔をこの時始めて見た。唇の薄い割に口の大きいのをその特徴の一つとして彼は最初から眺めていたが、美くしい歯を露き出しに現わして、潤沢の饒かな黒い大きな眼を、上下の睫の触れ合うほど、共に寄せた時は、この女から夢にも予期しなかつた印象が新たに彼の頭に刻まれた。敬太郎は女の笑い顔に見惚れると云うよりもむしろ驚ろいて相手の男に視線を移した。するとその男の頭の上に黒い中折が乗っているのに気がついた。外套は判切霜降とは見分けられなかつたが、帽子と同じ暗い光を敬太郎の眸に投げた。その上背は高かつた。瘡きすでもあつた。ただ年齢の点に至ると、敬太郎にはとかくの判断を下しかねた。けれどもその人が寿命の度盛の上において、自分

とは遙か隔たつた向うにいる事だけはたしかなので、彼はこの男を躊躇なく四十恰好と認めた。これだけの特点を前後なくほとんど同時に胸に入れ得た時、彼は自分が先刻から馬鹿を尽してつけ廻つた本人がやつと今電車を降りたのだと断定しない訳に行なかつた。彼は例刻の五時がとうの昔に過ぎたのに、妙な酔興を起して、やはり同じ所にぶらついていた自分を仕合せだと思つた。その酔興を起させるため、自分の好奇心を釣りに若い女が偶然出て来てくれたのをありがたく思つた。さらにその若い女が自分の探す人を、自分よりも倍以上の自信と忍耐をもつて、待ち終せたのを幸運の一つに数えた。彼はこのXという男について、田口のために、ある知識を供給する事ができると共に、同じ知識がYという女に関する自分の好奇心を幾分か満足させ得るだろうと信じたからである。

男と女はまるで敬太郎の存在に気がつかなかつたと見えて、前後左右に遠慮する気色もなく、なお立ちながら話していた。女は始終微笑を洩らす事をやめなかつた。男も時々声を出して笑つた。二人が始めて顔を合わせた時の挨拶の様子から見ても彼らはけつして疎遠な間柄ではなかつた。異性を繋ぎ合わせるようで、その実両方の仲を堰く、慇懃な男女間の礼義は彼らのどちらにも見出す事ができなかった。男は帽子の縁に手をかける

面倒さえあえてしなかった。敬太郎はその鍔つばの下にあるべきはずの大きな黒子ほくろを面と向つて是非突き留めたかった。もし女がいなかったならば肉の上に取り残されたこの異様な一点を確かめるために、彼はつかつかと男の前へ進んで行つて、何でも好いから、ただ口から出任せでまかの質問をかけたかも知れない。それでなくても、直ちに彼の傍へ近寄つて、満足そばの行くまでその顔を覗のぞき込んだらう。この際そう云う大胆な行動を妨たげるものは、男の前に立つている例の女であつた。女が敬太郎の態度を悪く疑ぐつたかどうかは問題として、彼の挙動に不審を抱いだいた様子は、同じ場所に長く立ち並んだ彼の目に親しく映じたところである。それを承知しながら、再びその視線の内に、自分の顔を無遠慮に突き出すのは、多少紳士的でない上に、嫌疑けんぎの火の手をわざと強くして、自分の目的を自分で打ち毀こわすと同じ結果になる。

こう考えた敬太郎は、自然の順序として相応の機会が廻めぐつて来るまでは、黒子の有る無しを見届けるだけは差し控えた方が得策だろうと判断した。その代り見え隠れに二人の後あとを跟つけて、でき得るならば断片的でもいいから、彼らの談話を小耳に挟はさもうと覚悟した。彼は先方の許諾を待たないで、彼らの言動を、ひそかに我胸に畳み込む事の徳義的価値について、別に良心の相談を受ける必要を認めなかった。そうして自分の骨折から出る結果

は、世故に通じた田口によつて、必ず善意に利用されるものとただ淡泊に信じていた。やがて男は女を誘う風をした。女は笑いながらそれを拒むように見えた。しまいには半ば向き合つていた二人が、肩と肩を揃えて瀬戸物屋の軒端近く歩き寄つた。そこから手を組み合わせないばかりに並んで東の方へ歩き出した。敬太郎は二三間早足に進んで、すぐ彼らの背後まで来た。そうして自分の歩調を彼らと同じ速度に改めた。万一女に振り向かれても、疑惑を免かれるために、彼はけつして彼らの後姿には眼を注がなかつた。偶然前後して天下の往来を同じ方角に行くものごとくに、故意とあらぬ方を見て歩いた。

三十一

「だつて余まりだわ。こんなに人を待たしておいて」

敬太郎の耳に入つた第一の言葉は、女の口から出たこういう意味の句であつたが、これに対する男の答は全く聞き取れなかつた。それから五六間行つたと思う頃、二人の足が急に今までの歩調を失つて、並んだ影法師がほとんど敬太郎の前に立ち塞がりそうにした。敬太郎の方でも、後から向うに突き当らない限りは先へ通り抜けなければ跋が悪くなつた。

彼は二人の後戻りを恐れて、急に傍そばにあつた菓子屋の店先へ寄り添うように自分を片づけた。そうしてそこに並んでいる大きな硝子壺ガラスつぼの中のビスケットを見つめる風をしながら、二人の動くのを待った。男は外套がいとうの中へ手を入れるように見えたが、それが済むと少しからだを横にして、下向きに右手で持ったものを店の灯ひに映した。男の顔の下に光るものが金時計である事が、その時敬太郎に分った。

「まだ六時だよ。そんなに遅かあない」

「遅いわあなた、六時なら。妾あたしもう少しで帰かえるところよ」

「どうも御氣の毒さま」

二人はまた歩き出した。敬太郎も壺つぼ入のビスケットを見棄ててその後あとに従がつた。二人は淡路町あわじちようまで来てそこから駿河台下するがだいしたへ抜ける細い横町を曲つた。敬太郎も続いて曲ろうとすると、二人はその角にある西洋料理屋へ入った。その時彼はその門口かどぐちから射す強い光を浴びた男と女の顔を横から一眼見た。彼らが停留所を離れる時、二人連れ立つてどこへ行くだろうか、敬太郎にはまるで想像もつかなかったのだが、突然こんな家うちへ入はいられて見ると、何でもない所だけに、かえつて案外の感に打たれざるを得なかつた。それは宝亭たからていと云つて、敬太郎の元から知つている料理屋で、古くから大学へ出入でいりをする家うち

であつた。近頃普請ふしんをしてから新らしいペンキの色を半分電車通りに曝さらして、斜はすかけに立ち切られたような棟むねを南向に見せているのを、彼は通り掛りに時々注意した事がある。彼はその薄青いペンキの光る内側で、額に仕立てたミュンヘン麦酒ビールの広告写真を仰ぎながら、ナイフナイフと肉フオーク叉すさを凄まじく闘たたかかわした数度すどの記憶さえ有もつていた。

二人の行先については、これという明らかな希望も予期も無かつたが、少しは紫むらさきがかつた空氣の匂う迷路メイズの中に引き入れられるかも知れないくらいの感じが暗あんに働はたらいてこれまで後を跟つけて来た敬太郎には、馬鈴薯じゃがいもや牛肉を揚げ揚げる油の臭においが、台所からぶんぶん往来あふへ溢あふれる西洋料理屋は余りに平凡らしく見えた。けれども自分のとても近寄れない幽玄な所へ姿を隠して、それぎり出て来ないよりは、遙はるかに都合が好いと考え直した彼は、二人の身体が、誰にでも近寄る事のできる、普通の洋食店のペンキの奥に囲われているのをむしろ心丈夫だと覺さとつた。幸い彼はこのくらいな程度の家で、冬空の外氣に刺戟しげきされた食欲を充みたすに足るほどの財布を懐中さしていた。彼はすぐ二人の後あとを追つてその二階へ上のぼろうとしたが、電灯の強く往来へ射さす門かどぐち口まで来た時、ふと氣がついた。すでに女から顔を覺えられた以上、ほとんど同時に一つ二階へ押し上つては不味まずい。ひよつとするとこの人は自分を跟つけて来たのだという疑惑を故意こじやう先方に与える訳になる。

敬太郎は何気ない振をして、往来へ射す光を横切ったまま、黒い小路を一丁ばかり先へ歩いた。そうしてその小路の尽きる坂下からまた黒い人となつて、自分の影法師を自分のからだの中へ畳み込んだようにひっそりと明るい門口まで歸つて来た。それからその門を潜つた。時々来た事があるので、彼はこの家の勝手をほぼ承知していた。下には客を通す部屋がなくなつて、二階と三階だけで用を弁じているが、よほど込み合わなければ三階へは案内しない、大抵は二階で済むのだから、上つて右の奥か、左の横にある広間を覗けば、大抵二人の席が見えるに違ない、もしそこにいなかったら表の方の細長い室まで開けてやろうぐらいの考で、階段を上りかけると、白服の給仕が彼を案内すべく上り口に立っているのに気がついた。

三十二

敬太郎は手に持った洋杖をそのままに段々を上り切つたので、給仕は彼の席を定める前に、まずその洋杖を受取つた。同時にこちらへと云いながら背中を向けて、右手の広間へ彼を案内した。彼は給仕の後から自分の洋杖がどこに落ちつくかを一目見届けた。す

るとそこに先刻注意した黒の中折帽が掛つていた。霜降らしい外套も、女の着ていた色合のコートも釣るしてあつた。給仕がその裾を動かして、竹の洋杖を突込んだ時、大きな模様を抜いた羽二重の裏が敬太郎の眼にちらついた。彼は蛇の頭がコートの裏に隠れるのを待つて、さらにその持主の方に眼を転じた。幸いに女は男と向き合つて、入口の方に背中ばかりを見せていた。新しい客の来た物音に、振り返りたい気があつても、ぐるりと廻るのが、いったん席に落ちついた品位を崩す恐があるので、必要のない限り、普通の婦人はそういう動作を避けたがるだろうと考えた敬太郎は、女の後姿を眺めながら、ひとまず安堵の思いをした。女は彼の推察通りはたして後を向かなかつた。彼はその間に女の坐っているすぐ傍まで行つて背中合せに第二列の食卓につこうとした。その時男は顔を上げて、まだ腰もかけず向も改ためない敬太郎を見た。彼の食卓の上には支那めいた鉢に植えた松と梅の盆栽が飾りつけてあつた。彼の前にはスプの皿があつた。彼はその中に大きな匙を落したなり敬太郎と顔を見合せたのである。二人の間に横わる六尺に足りない距離は明らかな電灯が隈なく照らしていた。卓上に掛けた白い布がまたこの明るさを助けるように、潔ぎいい光を四方の食卓から反射していた。敬太郎はこういう都合のいい条件の具備した室で、男の顔を満足するまで見た。そうしてその顔の眉と眉の間に、田口

から通知のあつた通り、大きな黒子ほくろを認めた。

この黒子ほくろを別にして、男の容貌ようぼうにこれと云つた特異な点はなかつた。眼も鼻も口も全く人並であつた。けれども離れ離れに見ると凡庸ぼんような道具そうぐうが揃そろつて、面長おもながな顔の表にそれぞれの位地を占めた時、彼は尋常以上に品格のある紳士としか誰の目にも映らなかつた。敬太郎と顔を合せた時、スープの中に匙さしを入れたまま、啜すする手をしばらくやめた態度などは、どこかにむしろ気高い風を帯びていた。敬太郎はそれなり背中を彼の方に向けて自分の席に着いたが、探偵という文字に普通付着している意味を心のうちで考え出して、この男の風采ふうさい態度と探偵とはとても釣り合わない性質のものだという気がした。敬太郎から見ると、この人は探偵してしかるべき何物をも彼の人相の上に有もつていなかったのである。彼の顔の表に並んでいる眼鼻口のいずれを取つても、その奥に秘密を隠そうとするには、余りにできが尋常過ぎたのである。彼は自分の席へ着いた時、田口から引き受けたこの宵よいの仕事に対する自分の興味が、すでに三分の一ばかり蒸発したような失望を感じた。第一こんな性質たちの仕事は田口から引き受けた徳義上の可否さえ疑がわしくなつた。

彼は自分の注文を通したなり、ポカンとして麵麩パンに手も触ふれずにいた。男と女は彼らの傍そばに坐つた新らしい客に幾分か遠慮の気味で、ちよつとの間話まなを途切らした。けれども敬

太郎の前に暖められた白い皿が現われる頃から、また少し調子づいたと見えて、二人の聲が互^{たがいちがい}違^{ちが}いに敬太郎の耳に入^いった。――

「今夜はいけないよ。少し用があるから」

「どんな用？」

「どんな用って、大事な用さ。なかなかそう安くは話せない用だ」

「あら好くつてよ。妾^{あたし}ちゃん^あと知^ちつてゐるわ。――さんざ^あっぱ^あら他^{ひと}を待^{まち}たした癖^{くせ}に」

女は少し拗^すねたような物の云い方をした。男は四^あ辺^{たり}に遠慮する風で、低く笑った。二人の会話はそれぎり静かになった。やがて思い出したように男の声^{こゑ}がした。

「何しろ今夜は少し遅いから止そうよ」

「ちつとも遅かないわ。電車に乗^のつて行^いきやあ直^じじやありませんか」

女が勧^{すす}めている事も男が躊^{ちゆう}躇^{うちよ}している事も敬太郎にはよく解^とった。けれども彼^{かれ}らが

どこへ行くつもりなのだか、その肝^{かん}心^{じん}な目的地になると、彼^{かれ}には何^{なん}らの観^{かん}念^{ねん}もなかつた。

もう少し聞いている内にはあるいはあたりがつくかも知れないと思って、敬太郎は自分の前に残された皿の上の肉刀ナイフと、その傍に転がった赤い仁参にんじんの一切ひときれを眺めていた。女はなお男を強しいる事をやめない様子であつた。男はそのたびに何とかかとか云つて逃のがれていた。しかし相手を怒おこらせまいとする優しい態度はいつも変らなかつた。敬太郎の前に新しい肉と青豌豆あおえんどうが運ばれる時分には、女もとうとう我がを折り始めた。敬太郎は心の内で、女がどこまでも剛情を張るか、でなければ男が好加減いかげんに降参するか、どつちかなればいいかと、ひそかに祈つていたのだから、思ったほど女の強くないのを発見した時は少なからず残念な気がした。せめて二人の間に名を出す必要のないものとして略されつつあつた目的地だけでも、何かの機会はすみに小耳に挟はさんでおきたかつたが、いよいよ話が纏まとまらないとなると、男女なんによの問答は自然ほかへ移らなければならぬので、当分その望みも絶えてしまった。

「じゃ行かなくつてもいいから、あれをちようだい」と、やがて女が云い出した。

「あれつて、ただあれじゃ分らない」

「ほらあれよ。こないだの。ね、分つたでしょう」

「ちつとも分らない」

「失敬ね、あなたは。ちゃんと分つてる癖に」

敬太郎はちよつと振り向いて後が見たくなつた。その時階段を踏む大きな音が聞こえて、三人ばかりの客がどやどやと一度に上つて来た。そのうちの一人はカーキ色の服に長靴を穿いた軍人であつた。そうして床の上を歩く音と共に、腰に釣るした剣をがちやがちや鳴らした。三人は上つて左側の室へ案内された。この物音が例の男と女の会話を攪き乱したため、敬太郎の好奇心もちらつく剣の光が落ちつくまで中途に停止していた。

「この間見せていただいたものよ。分つて」

男は分つたとも分らないとも云わなかつた。敬太郎には無論想像さえつかなかつた。彼は女がなぜ淡泊に自分の欲しいというものの名を判切云つてくれないかを恨んだ。彼は何とはなしにそれが知りたかつたのである。すると、

「あんなもの今ここに持つてるもんかね」と男が云つた。

「誰もここに持つてるって云やしないわ。ただちようदैって云うのよ。今度でいいから」

「そんなに欲しけりややつてもいい。が……」

「あッ嬉しい」

敬太郎はまた振り返つて女の顔が見たくなつた。男の顔もついでに見ておきたかつた。

けれども女と一直線になって、背中合せに坐っている自分の位置を考えると、この際そんな盲動は慎つつしманなければならぬので、眼のやりどころに困るという風で、ただ正面をぽかんと見廻した。すると勝手の上り口あがぐちの方から、給仕ボーイが白い皿を二つ持つて入つて来て、それを古いのと引き更かえに、二人の前へ置いて行つた。

「小鳥だよ。食べないか」と男が云つた。

「ああたし
妾めかけもうたくさん」

女は焼いた小鳥に手を触れない様子であつた。その代り暇のできた口を男よりは余計動かした。二人の間答から察すると、女の男にくれと逼せまつたのは珊瑚樹さんごじゆの珠たまか何からしい。男はこういう事に精通しているという口調くちようで、いろいろな説明を女に与えていた。が、それは敬太郎には興味もなければ、解りもしない好事家こうずかの嬉うれしがる知識に過ぎなかつた。練物ねりもので作つたのへ指先の紋もんを押しつけたりして、時々うま旨うまくごまかした贗物がんぶつがあるが、それは手障てざわりがどこかざらざらするから、本当の古渡りこわたとは直区別すぐできるなどと叮嚀ていねいに女に教えていた。敬太郎は前後あとしさきを綜合すべあわして、何でもよほど貴たつとい、また大変珍らしい、今時たやすそう容易たやすくは手に入らない時代のついた珠たまを、女が男から貰もらう約束をしたという事が解つた。

「やるにはやるが、御前あんなものを貰つて何にする気だい」
「あなたこそ何になさるの。あんな物を持つてて、男の癖に」

三十四

しばらくして男は「御前御菓子を食べるかい、菓物くだものにするかい」と女に聞いた。女は「どっちでも好いわ」と答えた。彼らの食事がようやく終りに近づいた合図とも見られるこの簡単な問答が、今までうっかりと二人の話に釣り込まれていた敬太郎けいたろうに、たちまち自分の義務を注意するように響いた。彼はこの料理屋を出た後あとの二人の行動をも観察する必要があるものとして、自分で自分の役割を作っていたのである。彼は二人と同時に二階を下りる事の不得策を初めから承知していた。後おくれて席を立つにしても、巻煙草まきたばこを一本吸わない先に、夜と人と、雑沓ざつとつと暗闇くらやみの中に、彼らの姿を見失なうのはたしかであった。もし間違はなく彼らの影を踏んで後あとから喰付くつついて行こうとするなら、どうしても一足先へ出て、相手に気のつかない物陰か何かで、待ち合せるよりほかに仕方がないと考えた。敬太郎は早く勘定を済ましておくに若くしはないという気になって、早速給仕ボーイを呼んでビル

を請求した。

男と女はまだ落ちついて話していた。しかし二人の間に何というきまった題目も起らないので、それを種に意見や感情の交換とりやりも始まる機会おりはなく、ただだらしない雲のようにそれからそれへと流れて行くだけに過ぎなかった。男の特徴に数えられた眉まゆと眉の間の黒子ほくろなども偶然女の口のぼに上った。

「なぜそんな所に黒子なんぞができたんでしょう」

「何も近頃になつて急にできやまいし、生れた時からあるんだ」

「だけどき。見つともななくなつて、そんな所ところにあつて」

「いくら見つともなくつても仕方がないよ。生れつきだから」

「早く大学へ行つて取つて貰うといいわ」

敬太郎はこの時指フィンガーボール洗ボール碗の水に自分の顔の映るほど下を向いて、両手で自分の米こめ

嚙みを隠すように抑おさえながら、くすくすと笑つた。ところへ給仕が釣銭を盆に乘せて持つ

て来た。敬太郎はそつと立つて目立たないように階段はしごだんの上り口あがぐちまでおとなしく足を運

ぶと、そこに立つていた給仕が大きな声で、「御立あち」と下へ知らせた。同時に敬太郎

は先刻さつき給仕に預けた洋杖ステッキを取つて来るのを忘れた事に気がついた。その洋杖はいまだに

室の隅に置いてある帽子掛の下に突き込まれたまま、女の長いコートの裾に隠されていた。敬太郎は室の中にいる男女を憚るように、抜き足で後戻りをして、静かにそれを取り出した。彼が蛇の頭を握った時、すべすべした羽二重の裏と、柔かい外套の裏が、優しく手の甲に触れるのを彼は感じた。彼はまた爪先で歩かないばかりに気をつけて階段の上まで来ると、そこから急に調子を変えて、とん、とん、とんと刻み足に下へ駆け下りた。表へ出るや否や電車通を直ぐ向うへ横切った。その突き当りに、大きな古着屋のような洋服屋のような店があるので、彼はその店の電灯の光を後にして立つた。こうしてさえいれば料理店から出る二人が大通りを右へ曲ろうが、左へ折れようが、または中川の角に添って連雀町の方へ抜けようが、あるいは門からすぐ小路伝いに駿河台下へ向おうが、どっちへ行こうと見逃す気遣はないと彼は心丈夫に洋杖を突いて、目指す家の門口を見守っていた。

彼は約十分ばかり待った後で、注意の焼点になる光の中に、いつこう人影が射さないので不審に思い始めた。やむを得ず二階を眺めてその窓だけ明るくなった奥を覗くように、彼らの早く席を立つ事を祈った。そうして待ち草臥れた眼を移すごとに、屋根の上に広がる黒い空を仰いだ。今まで地面の上を照らしている人間の光ばかりに欺むかれて、ま

るでその存在を忘れていたこの大きな夜は、暗い頭の上で、先刻から寒そうな雨を醸して
いたらしく、敬太郎の心を侘びしがらせた。ふと考えると、今までは自分に遠慮してただ
けの話をしていた二人が、自分の立つたのを幸いに、自分の役目としては是非聞いておかな
ければならないような肝心の相談でもし始めたのではなからうか。彼はこの疑惑と共に黒
い空を仰ぎながら、そのうちに二人の向き合った姿をありありと認めた。

三十五

彼はあまり注意深く立ち廻って、かえって洋食店の門を早く出過ぎたのを悔んだ。けれ
ども二人が彼に気兼ねをする以上は、たとい同じ席にいつまでも根が生えたように腰を据え
ていたところで、やっぱり普通の世間話よりほかに聞く訳には行かないのだから、よし今
まで坐ったまま動かないものと仮定しても、その結果は早く席を立つたと、ほぼ同じ事
なるのだと思うと、彼は寒いのを我慢しても、同じ所に見張っているより仕方なかった。
すると帽子の廂へ雨が一一雫ほど落ちたような気がするので、彼はまた仰向いて黒い空
を眺めた。闇よりほかに何も眼を遮ぎらない頭の上は、彼の立っている電車通と違って非

常に静であつた。彼は頬ほおの上に一滴いつてきの雨を待ち受けるつもりで、久しく顔を上げたなり、恰かつこう好かさえ分らない大きな暗いものを見つめてゐる間に、今にも降り出すだろうという掛け念ねんをどこかへ失なつて、こんな落ちついた空の下にいる自分が、なぜこんな落ちつかない真似まねを好んでやるのだろうと偶然考えた。同時にすべての責任が自分の今突ついてゐる竹うつつんの洋杖ステッキにあるような気がした。彼は例のごとく蛇へびの頭を握にぎつて、寒さに対する鬱憤うつつんを晴らすごとくに、二三度それを烈はげしく振はつた。その時待ち侘そぞろびた人の影法師が揃そろつて洋食店の門口を出た。敬太郎けいたろうは何より先に女の細長い頸くびを包む白い襟巻えりまきに眼をつけた。二人はすぐと大通りへ出て、敬太郎の向う側を、先刻とは反対の方角に、元来た道へ引き返しにかかつた。敬太郎も猶予ゆうよなく向うへ渡つた。彼らは緩い歩調で、賑にぎやかに飾かつた店先を軒のきごとに覗のぞくように足を運うしろばした。後から跟ついて行く敬太郎は是非共二人に釣り合あつた歩き方をしなければならぬので、その遅過ぎるのがだいぶ苦になつた。男は香かの高い葉巻を銜くわえて、行く行く夜の中へ微かな色を立てる煙を吐いた。それが風の具合で後うしろから従したがう敬太郎の鼻を時々快おろよく侵おした。彼はその香においを嗅かぎ嗅かぎ鈍い足並を我慢して実直のろにその跡を踏んだ。男は背が高いので後うしろから見ると、ちよつと西洋人のように思われた。それには彼の吹かしている強い葉巻が多少錯覚さつかくを助けた。すると聯想れんそうがたちまち伴侶つれの

方に移つて、女が旦那から買つて貰つた革の手袋を穿めている 洋妾のように思われた。敬太郎がふとこういう空想を起して、おかしいと思ひながらも、なお一人で興を催していると、二人は最前待ち合わせた停留所の前まで来てちよつと立ちどまつたが、やがてまた線路を横切つて向側へ越した。敬太郎も二人のする通りを真似た。すると二人はまた美土代町の角をこちらから反対の側へ渡つた。敬太郎もつづいて同じ側へ渡つた。二人はまた歩き出して南へ動いた。角から半町ばかり来ると、そこにも赤く塗つた鉄の柱が一本立っていた。二人はその柱の傍へ寄つて立つた。彼らはまた三田線を利用して南へ、帰るか、行くか、する人だとこの時始めて気がついた敬太郎は、自分も是非同じ電車へ乗らなければなるまいと覚悟した。彼らは申し合せたように敬太郎の方を顧みた。固より彼のいる方から電車が横町を曲つて来るからではあるが、それにしても敬太郎は余り好い心持はしなかつた。彼は帽子の鍔をひっくり返して、ぐつと下へおろして見たり、手で顔を撫でて見たり、なるべく軒下へ身を寄せて見たり、わざと変な見当を眺めて見たりして、電車の現われるのをつらく待ち侘びた。

間もなく一台来た。敬太郎はわざと二人の乗った後から這入つて、嫌疑を避けようと工夫した。それでしばらく後の方にぐずぐずしていると、女は例の長いコートの裾を踏まえ

ないばかりに引き摺^ずつて車掌台の上に足を移した。しかしあとから直続^{すぐ}くと思つた男は、案外^{あが}上る気色^{けしき}もなく、足を揃^{そろ}えたまま、両手を外套^{がいとう}の隠袋^{かくし}に突き差して立っていた。敬太郎は女を見送りに男がわざわざここまで足を運んだのだという事によやく気がついた。実をいうと、彼は男よりも女の方に余計興味を持っていたのである。男と女がここで分れるとすれば、無論男を捨てて女の先途だけを見届けたかった。けれども自分が田口から依^い託^{たく}されたのは女と関係のない黒い中折帽^{なかおれぼう}を被^{かぶ}つた男の行動だけなので、彼は我慢して車台に飛び上がるのを差し控えた。

三十六

女は車台に乗った時、ちよつと男に目礼したが、それぎり中へ這入^{はい}つてしまった。冬の夜の事だから、窓硝子^{まどガラス}はことごとく締め切つてあつた。女はことさらにそれを開けて内から首を出すほどの愛嬌^{あいきよう}も見せなかつた。それでも男はのつそり立つて、車の動くのを待っていた。車は動き出した。二人の間に挨拶^{あいさつ}の交換^{やりとり}がもう必要でないと認めたごとく、電力は急いで光る窓を南の方^{かた}へ運び去つた。男はこの時口に銜^{くわ}えた葉巻を土の上に投

げた。それから足の向を変えてまた三ツ角の交叉点まで出ると、今度は左へ折れて唐物屋の前でとまった。そこは敬太郎が人に突き当られて、竹の洋杖を取り落した記憶の新しい停留所であつた。彼は男の後を見え隠れにここまで跟いて来て、また見たくない唐物屋の店先に飾つてある新柄の襟飾だの、絹帽だの、変り縞の膝掛だのを覗き込みながら、こう遠慮をするようでは、探偵の興も覚めるだけだと考えた。女がすでに離れた以上、自分の仕事に飽が来たと云つてはすまないが、前同様であるべき窮屈の程度が急に著るしく感ぜられてならなかつた。彼の依頼されたのは中折の男が小川町で降りてから二時間内の行動に限られているのだから、もうこれで偵察の役目は済んだものとして、下宿へ歸つて寝ようかと思つた。

そこへ男の待つてゐる電車が来たと見えて、彼は長い手で鉄の棒を握るや否やや瘡せた身体を体よくとまり切らない車台の上に乗せた。今まで躊躇してゐた敬太郎は急にこの瞬間を失なつてはという氣が出たので、すぐ同じ車台に飛び上つた。車内はそれほど込みあつてゐなかつたので、乗客は自由に互の顔を見合う余裕を充分持つてゐた。敬太郎は箱の中に身体を入れると同時に、すでに席を占めた五六人から一度に視線を集められた。そのうちには今坐つたばかりの中折の男の交つていたが、彼の敬太郎を見た眼のうちには、

おやという認識はあつたが、つけ覗^{ねら}われているなという疑惑はさらに現^{あら}われていなかった。敬太郎はようやく伸び伸びした心持になつて、男と同じ側^よを択^よつて腰を掛けた。この電車でどこへ連れて行かれる事かと思つて軒先を見ると、江戸川行と黒く書いてあつた。彼は男が乗り換えさえすれば、自分も早速降りるつもりで、停留所へ来るごとに男の様子を窺^{うか}がつた。男は始終^{しじゅう}隠袋^{かくし}へ手を突き込んだまま、多くは自分の正面かわが膝^{ひざ}の上かを見ていた。その様子を形容すると、何にも考えずに何か考え込んでいると云う風であつた。ところが九段下へかかった頃から、長い首を時々伸ばして、ある物を確かめたいように、窓の外を覗き出した。敬太郎もつい釣り込まれて、見悪い外を透^すかすように眺^{なが}めた。やがて電車の走る響の中に、窓硝子^{まじガラス}にあたつて擡^{くだ}ける雨の音が、ぽつりぽつりと耳元でし始めた。彼は携^{たずさ}えている竹の洋杖^{ステッキ}を眺めて、この代りに雨傘^{あまがさ}を持つて来ればよかつたと思出した。

彼は洋食店以後、中折^{かぶ}を被^かつた男の人柄^{ひとがら}と、世の中にまるで疑^{うたが}いをかけていないその眼つきとを注意した結果、この時ふと、こんな窮屈な思いをして、いらざる材料を集めるよるも、いつそ露骨^{むきだし}にこつちから話しかけて、当人の許諾を得た事実だけを田口に報告した方が、今更遅^{おそまき}時^{とき}のようでも、まだ氣が利^きいていやしないかと考えて、自分で自分を彼

に紹介する便法べんぽうを工夫し始めた。そのうち電車はとうとう終点まで来た。雨はますます烈しくなつたと見えて、車がとまるとぎあという音が急に彼の耳を襲おそつた。中折の男は困つたなど云いながら、外套がいとうの襟えりを立てて洋袴ズボンの裾すそを返した。敬太郎は洋杖を突きながら立ち上つた。男は雨の中へ出ると、直寄すぐつて来る俤くるまひき引つらを捕まえた。敬太郎も後おくれないように一台雇つた。車夫は梶棒かじぼうを上げながら、どちらへと聞いた。敬太郎はあの車の後あとについて行けと命じた。車夫はへいと云つてむやみに馳かけ出した。一筋道を矢来やらいの交番の下まで来ると、車夫は又梶棒をとめて、旦那どっちへ行くんですと聞いた。男の乗つた車はいくら幌ほろの内から延び上つても影さえ見えなかった。敬太郎は車上に洋杖を突つ張つたまま、雨の音のする中で方角に迷つた。

報告

眼が覚めると、自分の住み慣れた六畳に、いつもの通り寝ている自分が、敬太郎には全く変に思われた。昨日の出来事はすべて本当のようでもあった。また纏まりのない夢のようでもあった。もつと綿密に形容すれば、「本当の夢」のようでもあった。酔った気分で町の中に活動したという記憶も伴っていた。それよりか、酔った気分が世の中に充ちていたという感じが一番強かった。停留所も電車も酔った気分にあちていた。宝石商も、革屋も、赤と青の旗振りも、同じ空気に酔っていた。薄青いペンキ塗の洋食店の二階も、そこに席を占めた眉の間に黒子のある紳士も、色の白い女も、ことごとくこの空気に包まれていた。二人の話しに出て来る、どこにあるか分らない所の名も、男が女にやる約束をした珊瑚の珠も、みんな陶然とした一種の気分を帯びていた。最もこの気分にあちて活躍したものは竹の洋杖であった。彼がその洋杖を突いたまま、幌を打つ雨の下で、方角に迷った時の心持は、この気分の高潮に達した幕前の一区切として、ほとんど狐から取り憑かれた人の感じを彼に与えた。彼はその時店の灯で侘びしく照らされたびしよ濡れの往来と、坂の上に小さく見える交番と、その左手にぼんやり黒くうつる木立とを見廻して、はたしてこれが今日の仕事の結末かと疑ぐつた。彼はやむを得ず車夫に梶棒を向け直させて、思いも寄らない本郷へ行けと命じた事を記憶していた。

彼は寝ながら天井を眺めて、自分に最も新らしい昨日の世界を、幾順となく眼の前に循環させた。彼は二日酔いの眼と頭をもって、蚕の糸を吐くようにそれからそれへと出でくるこの記念の画を飽かず見つめていたが、しまいには眼先に漂ようふわふわした夢の蒼蠅さに堪えなくなつた。それでも後から後からと向うで独り勝手に現われて来るので、彼は正気でありながら、何かに魅入られたのではなからうかと云う疑さえ起した。彼はこの浅い疑に関聯して、例の洋杖を胸に思い浮べざるを得なかつた。昨日の男も女も彼の眼には絵を見るほど明らかであつた。容貌は固より服装から歩きつきに至るまでことごとく記憶の鏡に判切りと映つた。それでいて二人とも遠くの国にいるような心持がした。遠くの国にいながら、つい近くにあるものを見るように、鮮やかな色と形を備えて眸を侵して来た。この不思議な影響が洋杖から出たかも知れないという神経を敬太郎はどこかに持っていた。彼は昨夕法外な車賃を食ぼられて、宿の門口を潜つた時、何心なくその洋杖を持ったまま自分の室まで歸つて来て、これは人の目に触れる所に置くべきものでないという顔をして、寝る前に、戸棚の奥の行李の後へ投げ込んでしまったのである。

今朝は蛇の頭にそれほどの意味がないようにも思われた。ことにこれから田口に逢つて、探偵の結果を報告しなければならぬと云う實際問題の方が頭に浮いて来ると、なおさら

そういう感じが深くなった。彼は一日の午後から宵^{よい}へかけて、妙に一種の空氣に酔わされた氣分で活動した自覺はたしかにあるが、いざその活動の結果を、普通の人間が処世上に利用できるように、筋の立つた報告に纏^{まと}める段になると、自分の引き受けた仕事は成^{せい}効^{こう}しているのか失敗しているのかほとんど分らなかつた。したがって洋^{ステッキ}杖^{じょう}の御蔭^{おかげ}を蒙^{こうむ}っているのか、いないのかも判然しなかつた。床の中で前後をくり返した敬太郎には、まさしくその御蔭を蒙^{まか}っているらしくも見えた。またけつしてその御蔭を蒙^{まか}っていないようにも思われた。

彼はともかくも二日酔の魔を払い落してからの事だと決心して、急に夜着^{よぎ}を剥^はぐつて跳^はね起きた。それから洗面所へ下りて氷るほど冷めたい水で頭をざあざあ洗った。これで昨^{きのう}日の夢を髪の毛の根本から振り落して、普通の人間に立ち還つたような氣になれたので、彼は景氣よく三階の室^{へや}に上^{のぼ}った。その窓を潔^{いさ}ぎよく明け放した彼は、東向に直立して、上野の森の上から高く射す太陽の光を全身に浴びながら、十遍ばかり深呼吸をした。こう精神作用を人間並に刺戟^{しげき}した後で、彼は一服しながら、田口へ報告すべき事柄の順序や条項^{ていこう}について力^{つと}めて實際的に思慮^{めく}を回らした。

二

突きとめて見ると、田口の役に立ちそうな種はまるで上がっていないようにも思われるので、敬太郎は少し心細くなって来た。けれども先方では今朝にも彼の報告を待ち受けているように気が急ぐので、彼はさつそく田口家へ電話を掛けた。これから直行^{すぐ}っていかと聞くと、だいぶ待たした後^{あと}で、差支^{さしつかえ}ないという答が、例の書生の口を通して来たので、彼は猶^{ゆうよ}予なく内幸町へ出かけた。

田口の門前には車が二台待つていた。玄関にも靴と下駄^{げた}が一足ずつあった。彼はこの間と違つて日本間の方へ案内された。そこは十畳ほどの広い座敷で、長い床に大きな懸^{かけもの}物が二幅掛かつていた。湯呑^{ゆのみ}のような深い茶碗^{ちやわん}に、書生が番茶を一杯汲^くんで出した。桐^{きり}を削^くった手焙^{てあぶり}も同じ書生の手で運ばれた。柔^{やわ}かい座蒲団^{ざぶとん}も同じ男が勧めてくれただけで、女はいつさい出て来なかった。敬太郎は広い室の真中に畏^{かしこ}まって、主人の足音の近づくのを窮屈に待つた。ところがその主人は用談が果てないと見えて、いつまで待つてもなかなか現われなかった。敬太郎はやむを得ず茶色になった古そうな懸^{かけもの}物の価額^{ねだん}を想像したり、手焙^{ふち}の縁^{ふち}を撫^なで廻したり、あるいは袴^{はかま}の膝^{ひざ}へきちりと両手を乗せて一人改たまつて見たり

した。すべて自分の周囲まわりがあまり綺麗きれいに調ととのっているだけに、居心地が新らし過ぎて彼は容易に落ちつけなかったのである。しまいに違ちがいいだな柵なの上にある画帖がじょうらしい物を取りおろしてみようかと思つたが、その立派な表紙が、これは装飾だから手を触れちゃいけないと断ことわるように光るので、彼はついに手を出しかねた。

こう敬太郎の神経を悩ました主人は、彼をやや小一時間も待たした後あとで、ようやく応接間から出て来た。

「どうも長い間御待たせ申して。——客がなかなか帰らないものだから」

敬太郎はこの言訳に対して適当と思うような挨拶あいさつを一口と、それに添えた叮嚀ていねいな御辞儀おじぎを一つした。それからすぐ昨日きのうの事を云い出そうとしたが、何をどう先に述べたら都合がいいか、この場に臨んで急にまた迷い始めたうちに、切り出す機を逸してしまった。主人はまた冒頭からさも忙がしそうに声も身体からだも取り扱あつてゐる癖に、どこか腹の中うちに余裕よゆうの貯蔵庫でもあるように、けつして周章あわてて探偵の結果を聞きたがらなかった。本郷では氷が張るかとか、三階では風が強く当るだろうとか、下宿にも電話があるのかとか、調子は至極面白しごくそうだけれども、その実つまらない事ばかり話の種にした。敬太郎は向うの間に従つて主人の満足する程度にわが答えを運んでいたが、相手はこんな無意味な話を進

めて行くうちに、暗に彼の様子を注意しているらしかった。そこまでは彼もぼんやり気がついた。しかし主人がなぜそんな注意を自分に払うのか、その訳はまるで解らなかった。すると、

「どうです昨日は。旨く行きましたか」と主人が突然聞き出した。こう聞かれるだろうぐらいの腹は始めから敬太郎にもあつたのだが、正直に答えれば、「どうですか」という他に馬鹿にした生返事になるので、彼はちよつと口籠った後、

「そうです御通知のあつた人だけはやつと探し当てました」と答えた。

「眉間に黒子がありましたか」

敬太郎は少し隆起した黒い肉の一点を局部に認めたと答えた。

「衣服もこつちから云つて上げた通りでしたか。黒の中折に、霜降の外套を着て」

「そうです」

「それじゃ大抵間違はないでしょう。四時と五時の間に小川町で降りたんですね」

「時間は少し後れたようです」

「何分ぐらい」

「何分か知りませんが、何でも五時よつほど過のようでした」

「よつぽど過^{すぎ}。よつぽど過ならそんな人を待っていなくても好いじゃありませんか。四時から五時までの間と、わざわざ時間を切つて通知して上げたくらいだから、五時を過ぎればもうあなたの義務はすんだも同然じゃないですか。なぜそのまま帰つて、その通り報知しないんです」

今まで穏^{おだ}やかに機嫌^{きげん}よく話していた長者^{ちやうしゃ}から突然こう手厳^{てきび}しくやりつけられようとは、敬太郎は夢にも思わなかった。

三

敬太郎^{けいたろう}は今まで下町^{したまち}出の旦那を眼の前に描いていた。それが突然規律ずくめの軍人として彼を威圧して来た時、彼はたちまち心の中心を狂わした。友達に対してなら云い得る「君のためだから」という言葉も挨拶^{あいさつ}も有^もつていたのだが、この場合にはそれがまるで役に立たなかった。

「ただ私の勝手で、時間が来てもそこを動かなかったのです」

敬太郎がこう答えるか答えないうちに、田口は今のきつとした態度をすぐ崩^{くず}して、

「そりや私^{わたし}のために大變都合が好かつた」と機嫌^{きげん}の好い調子で受けたが、「しかしあなたの勝手と云うのは何です」と聞き返した。敬太郎は少し逡巡^{しゆんじゆん}した。

「なにそりや聞かないでも構いません。あなたの事だから。話したくなければ話さないでさしつかえも差支ない」

田口はこう云つて、自分の前に引きつけた手提煙草盆^{てさげたばこぼん}の抽出^{ひきだし}を開けると、その中から角^{つの}でできた細長い耳搔^{みみかき}を捜^{さが}し出した。それを右の耳の中に入れて、さも痒^かゆそうに搔^かき廻した。敬太郎は見ないふりをしてわざと自分を見ているような、また耳だけに氣を取られているような、田口の蹙^{しかめつら}面^{めん}を薄氣味悪く感じた。

「実は停留所に女が一人立っていたのです」と彼はとうとう自白してしまった。

「年寄ですか、若い女ですか」

「若い女です」

「なるほど」

田口はただ一口こう云っただけで、何とも後を繼いでくれなかった。敬太郎も頓挫^{とんざ}したなり言葉を途切^{とぎ}らした。二人はしばらく差向いのまま口を聞かずにいた。

「いや、若かろうが年寄だろうが、その婦人の事を聞くのはよくなかった。それはあなた

だけに関係のある事なんでしょうから、止しにしましょう。私の方じやただ顔に黒子^{ほくろ}のある男について、研究の結果さえ伺がえばいいんだから」

「しかしその女が黒子のある人の行動に始終^{しじゅう}入り込んでくるのです。第一女の方で男を待ち合わせていたのですから」

「はあ」

田口はちよつと思ひも寄らぬという顔つきをしたが、「じゃその婦人はあなたの御知合でも何でもないのでですね」と聞いた。敬太郎は固^{もと}より知合だと答える勇氣を有^もたなかった。きまりの悪い思ひをしても、見た事も口を利^きいた事もない女だと正直に云わなければならなかった。田口はそうですかと、穩^{おだや}かに敬太郎の返事を聞いただけで、少しも追窮する氣^け色^{しき}を見せなかったが、急に挫^{くだ}けた調子になつて、

「どんな女なんです。その若い婦人と云うのは。器量からいうと」と興味に充^みちた顔を提^さげ^げたばこ^{ぼん}煙草盆の上に出した。

「いえ、なに、つまらない女なんです」と敬太郎は前後の行^いきがかり上答えてしまつて、實際頭の中でもつまらないような氣がした。これが相手と場合しだいでは、うん器量はなかなか好い方だぐらいは固より云い兼ねなかったのである。田口は「つまらない女」とい

う敬太郎の判断を聞いて、たちまち大きな声を出して笑った。敬太郎にはその意味がよく解らなかつたけれども、何でも頭の上で大濤^{おおなみ}が崩れたような心持がして、幾分か顔が熱くなつた。

「よござんす、それで。——それからどうしました。女が停留所で待ち合わしているところへ男が来て」

田口はまた普通の調子に戻つて、真面目^{まじめ}に事件の経過を聞こうとした。実をいうと敬太郎は自分がこれから話す顛末^{てんまつ}を、どうして握る事ができたかの苦心談を、まず冒頭に敷^ふ衍^{えん}して、二つある同じ名の停留所の迷つた事から、不思議な謎^{なぞ}の活^いきて働^{はたら}らく洋杖^{ステッキ}を、どう抱^{かか}え出して、どう利用したかに至るまでを、自分の手柄^{てがら}のなるべく重く響くように、詳しく述べたかつたのであるが、会うや否^{いな}や四時と五時とのいきさつでやられた上に、勝手に見張りの時間を延ばした原因になる例の女が、原因にも何にもならない見ず知らずの女だつたりした不味^{まず}いところがあるので、自分を広告する勇氣は全く抜^ひけていた。それで男と女が洋食屋へ入つてから以後の事だけをごく淡泊^{あつさ}り話して見ると、宅^{うち}を出る時自分が心配していた通り、少しも捕^{つか}まえどころのない、あたかも灰色の雲を一握り田口の鼻の先で開いて見せたと同じような貧しい報告になつた。

四

それでも田口は別段厭な顔も見せなかった。落ちついた腕組をしまいまで解かずに、ただふんとか、なるほどとか、それからとか云う繋ぎの言葉を、時々敬太郎のために投げ込んでくれるだけであつた。その代り報告の結末が来ても、まだ何か予期しているように、今までの態度を容易に変えなかつた。敬太郎は仕方なしに、「それだけです。実際つまらない結果で御気の毒です」と言訳をつけ加えた。

「いやだいが参考になりました。どうも御苦勞でした。なかなか骨が折れたでしょう」

田口のこの挨拶の中に、大した感謝の意を含んでいない事は無論であつたが、自分が馬鹿に見えつつある今の敬太郎にはこれだけの愛嬌が充分以上に聞こえた。彼は辛うじて恥を搔かずにすんだという安心をこの時ようやく得た。同時に垂味のできた気分が、すぐ田口に向いて働らきかけた。

「いったいあの人は何なんですか」

「さあ何でしょうか。あなたはどう鑑定しました」

敬太郎の前には黒の中折なかおれを被かぶつて、襟開えりあきの広い霜降しもふりの外套がいとうを着た男の姿がありありと現われた。その人の様子といい言葉遣いことばづかといい歩きつきといい、何から何まで判はつきり切見えたには見ええたが、田口に対する返事は一口も出て来なかった。

「どうも分りません」

「じゃ性質はどんな性質でしょう」

性質なら敬太郎にもほぼ見当けんとうがついていた。「穏おだやかな人らしく思いました」と観察の通りを答えた。

「若い女と話しているところを見て、そう云うんじやありませんか」

こう云った時、田口の唇くちびるの角に薄笑の影がちらついているのを認めた敬太郎は、何か答えようとした口をまた塞ふさいでしまった。

「若い女には誰でも優しいやさいものですよ。あなただって満更まんざら経験のない事でもないでしょう。ことにあの男と来たら、人一倍そうなのかも知れないから」と田口は遠慮なく笑い出した。けれども笑いながらちやんと敬太郎の上に自分の眼を注いでいた。敬太郎は傍はたで自分を見たらさぞ氣の利きかない愚物ぐぶつになつてゐるんだらうと考えながらも、やっぱり苦しい思いをして田口と共に笑わなければならなかった。

「じゃ女は何物なんでしょう」

田口はここで觀察点を急に男から女へ移した。そうして今度は自分の方で敬太郎にこういう質問を掛けた。敬太郎はすぐ正直に「女の方は男よりもなお分り悪いにくです」と答えてしまった。

「素しろ人ろうとだか黒くろ人ろうとだか、大体の区別さえつきませんか」

「さよう」と云いながら、敬太郎はちよつと考がえて見た。革かわの手袋だの、白えり襟まき巻きだの、美しい笑い顔だの、長いコートだの、続々記憶の表面に込み上げて来たが、それを綜すべ括くしたところでどこからもこの間に応ぜられるような要領は得られなかった。

「割合に地味なコートを着て、革の手袋を穿はめていましたが……」

女の身に着けた品物うちの中で、特に敬太郎の注意を惹ひいたこの二点も、田口には何の興味も与えないらしかった。彼はやがて真面目まじめな顔をして、「じゃ男と女の関係について何か御意見はありませんか」と聞き出した。

敬太郎は先刻さつき自分の報告が滞とどりなく済んだ証しやうこ拠こに、御苦労さまと云う謝辞さえ受けた後あとで、こう難問が続発しようとは毫ごうも思いがけなかった。しかも窮きうしているせい、それが順をおってだんだんむずかしい方へ競せり上あつて行くように感ぜられてならなかった。田

口は敬太郎の行きづまった様子を見て、再び同じ問をほかの言葉で説明してくれた。

「例えば夫婦だとか、兄弟きょうだいだとか、またはただの友達だとか、情婦いろだとかですね。いろいろな関係があるうちで何だと思いますか」

「私も女を見た時に、処女だろうか細君だろうかと考えたんですが……しかしどうも夫婦じゃないように思います」

「夫婦でないにしてもですね。肉体上の関係があるものと思いますか」

五

敬太郎けいたろうの胸にもこの疑うたがいは最初から多少萌きざさないでもなかった。改ためて自分の心を解剖あやつして見たら、彼ら二人の間に秘密の関係がすでに成立しているという仮定が遠くから彼を操あやつつて、それがために偵察ていさつの興味が一段と鋭とどく研ぎ澄とまされたのかも知れなかった。肉と肉の間に起るこの関係をほかにして、研究に価する交渉は男女なんによの間に起り得るものでないと主張するほど彼は理論家ではなかったが、暖かい血を有もつた青年の常として、この観察点から男女なんによを眺ながめるときに、始めて男女らしい心持が湧わいて来るとは思ってい

たので、なるべくそこを離れずに世の中を見渡したかったのである。年の若い彼の眼には、人間という大きな世界があまり判^{はつきり}切分らない代りに、男女という小さな宇宙はかく鮮^{あざ}やかに映った。したがって彼は大抵の社会的関係を、できるだけこの一点まで切落して楽しんでいた。停留所で逢った二人の関係も、敬太郎の気のつかない頭の奥では、すでにこういう一^{いつ}対^{たい}の男女として最初から結びつけられていたらしかった。彼はまたその背後に罪惡を想像して要もないのに恐れを抱^{いだ}くほどの道徳家でもなかった。彼は世間並な道義心の所有者としてありふれた人間の一人^{いちにん}であつたけれども、その道義心は彼の空想力と違つて、いざという場合にならなければ働^{はたら}かないのを常とするので、停留所の二人を自分に最も興味のある男女関係に引き直して見ても、別段不愉快にはならずすんだのである。彼はただ年齢^{とし}の上において二人の相違の著るしいのを疑^うつた。が、また一方ではその相違がかえつて彼の眼に映ずる「男女の世界」なるものの特色を濃く示しているようにも見えた。彼の二人に対する心持は知らず知らずの間にこう弛^{ゆる}んでいたのだが、いよいよそうかと正式に田口から質問を掛けられて見ると、断然とした返答は、責任のあるなしにかかわらず、纏^{まと}まった形となつて頭の中には現^にわれ悪^{にく}かつた。それでこう云つた。――

「肉体上の関係はあるかも知れませんが、無いかも分りません」

田口はただ微笑した。そこへ例の袴はかまを穿いた書生が、一枚の名刺を盆に載せて持つて来た。田口はちよつとそれを受取つたまま、「まあ分らないところが本当でしょう」と敬太郎に答えたが、すぐ書生の方を見て、「応接間へ通しておいて……」と命令した。先刻さつきからよほど窮していた矢先だから、敬太郎はこの来客を好い機しおに、もうここで切り上げようと思つて身繕みつくろいにかかる、田口はわざわざ彼の立たない前にそれを遮さへぎつた。そうして敬太郎の辟易へきえきするのに頓とん着じやくなくなお質問を進行させた。そのうちで敬太郎の明瞭めいりょうに答えられるのはほとんど一カ条もなかったもので、彼は大学で受けた口答試験の時よりもまだ辛い思つらいをした。

「じゃこれぎりになりますが、男と女の名前は分りましたらう」

田口の最後と断ことわつたこの問に對しても、敬太郎は固もとより満足な返事を有つていなかった。彼は洋食店で二人の談話に注意を払う間にも何々さんとか何々子とかあるいは御何おなにとかいう言葉がきつとどこかへ交まじつて来るだろうと心待に待つていたのだが、彼らは特にそれを避ける必要でもあるごとくに、御互の名はもちろん、第三者の名もけつして引合にさえ出さなかつたのである。

「名前も全く分りません」

田口はこの答を聞いて、手焙てあぶりの胸に当てた手を動かしながら、拍子ひょうしを取るように、指先で桐の縁きりふちを敲たたき始めた。それをしばらくくり返した後で、あと「どうしたんだか余あんまり要領を得ませんね」と云ったが、直言すく言葉を継ついで、「しかしあなたは正直だ。そこがあなたの美点だろう。分らない事を分ったように報告するよりもよっぽど好いかも知れない。まあ買えばそこをかうんですね」と笑い出した。敬太郎は自分の觀察が、はたして実用に向かなかつたのを発見して、多少わが迂闊うかつに恥じ入る氣も起つたが、しかしわずか二三時間の注意と忍耐と推測では、たとい自分より十層倍行き届いた人間に代理を頼んだところで、田口を満足させるような結果は得られる訳のものでないと固く信じていたから、この評価に対してそれほど苦痛も感じなかった。その代り正直と賞ほめられた事も大した嬉うれしきにはならなかった。このくらいの正直さ加減は全くの世間並に過ぎないと彼には見えたからである。

六

敬太郎けいたろうは先刻さつきから頭の上らない田口の前で、たった一言ひとことで好いから、思い切つた自分

の腹をずばりと云つて見たいと考えていたが、ここで云わなければもう云う機会はあるまいという気がこの時ふと萌した。

「要領を得ない結果ばかりで私もはなはだ御気の毒に思っているんですが、あなたの御聞きになるような立ち入った事が、あれだけの時間で、私のような迂闊なものに見極められる訳はないと思います。こういうと生意氣に聞こえるかも知れませんが、あんな小刀細工をして後なんか跟けるより、直に会つて聞きたい事だけ遠慮なく聞いた方が、まだ手数てかずが省けて、そうして動かない確かなところが分りやしないかと思うのです」

これだけ云つた敬太郎は、定めて世故に長けた相手から笑われるか、冷かされる事だろうと考えて田口の顔を見た。すると田口は案外にもむしろ真面目な態度で「あなたにそれだけの事が解つていましたか。感心だ」と云つた。敬太郎はわざと答を控えていた。

「あなたのいう方法は最も迂闊のようで、最も簡便なまた最も正当な方法ですよ。そこに気がついていれば人間として立派なものです」と田口が再びくり返した時、敬太郎はますます返答に窮した。

「それほどの考がちゃんとあるあなたに、あんなつまらない仕事を御頼申したのは私が悪かつた。人物を見損なつたのも同然なんだから。が、市蔵があなたを紹介する時に、そ

う云いましたよ。あなたは探偵のやるような仕事に興味を有^もつておいでだって。それでね、ついとんでもない事を御願^よいして。止^よしやあよかった……」

「いえ須^{すな}永君にはそう云う意味の事をたしかに話した覚えがあります」と敬太郎は苦しい思^{おも}いをして答えた。

「そうでしたか」

田口は敬太郎の矛盾をこの一句で切り棄^すてたなり、それ以上に追窮^くする愚^ぐをあえてしなかつた。そうして問題をすぐ改めて見せた。

「じゃどうでしょう。黙^もつて後ななどを跟^つけずに、あなたのいう通り尋常^{じんじょう}に玄関^{けん}からかかつて行^いつちや。あなたにそれだけの勇気がありますか」

「無い事ありません」

「あんなに跟^つけ廻^{まわ}した後で」

「あんなに跟^つけ廻^{まわ}したつて、私はあの人達の不名誉になるような觀察^{くわんさつ}はけつしてしてないつもりです」

「ごもつともだ。そんなら一つ行^いつて御覽^{ごらん}なさい。紹介^{しょうかい}するから」

田口はこう云いながら、大きな声を出して笑^{わら}つた。けれども敬太郎にはこの申し出^まが万

更んざらの冗じようだん談だんとも思えなかつたので、彼は紹介状を携たずさえて本当に眉間みけんの黒子ほくろと向き合つて話して見ようかという料簡りようけんを起した。

「会いますから紹介状を書いて下さい。私はあの人と話して見たい気がしますから」

「宜いいでしょう。これも経験の一つだから、まあ会つて直じかに研究して御覧なさい。あなたの事だから田口に頼まれてこの間の晩後あとを跟つけましたぐらいきつと云うでしょう。しかしそれは構かわらない。云いたければ云つても宜ようござんす。私わたしに遠慮えんりょは要いらないから。それからあの女との関係もですね、あなたに勇氣さえあるなら聞いて御覧なさい。どうです、それを聞くだけの度胸どくしやうがありますか」

田口はここでちよつと言葉を切らして敬太郎の顔を見たが、答の出ないうちにまた自分から話を続けた。

「だが両方とも口へ出せるように自然が持ちかけて来るまでは、聞いても話してもいけませんよ。いくら勇氣があつたつて、常識しやうじきのない奴やつだと思われるだけだから。それどころじやない、あの男はただでさえ随分会あい悪い方にくほうなんだから、そんな事をむやみに喋しゃべろうものなら、直歸すぐつてくれぐらい云い兼ねないですよ。紹介をして上げる代りには、そこいらはよく用心しないとね……」

敬太郎は固より畏まりましたと答えた。けれども腹の中では黒の中折の男を田口のよ
うに見る事がどうしてもできなかった。

七

田口は硯箱と巻紙を取り寄せて、さらさらと紹介状を書き始めた。やがて名宛を認
め終ると、「ただ通り一遍の文言だけ並べておいたらそれで好いでしょう」と云いなが
ら、手焙の前に翳した手紙を敬太郎に読んで聞かせた。その中には書いた本人の自白
したごとく、これといつて特別の注意に値する事は少しも出て来なかった。ただこの者は
今年大学を卒業したばかりの法学士で、ことによると自分が世話をしなければならぬ男
だから、どうか会つて話をしてやつてくれとあるだけだった。田口は異存のない敬太郎の
顔を見届けた上で、すぐその巻紙をぐるぐると巻いて封筒へ入れた。それからその表へ松
本恒三様と大きく書いたなり、わざと封をせずに敬太郎に渡した。敬太郎は真面目に
なつて松本恒三様の五字を眺めたが、肥った締りのない書体で、この人がこんな字を書く
かと思うほど拙らしくできていた。

「そう感心していつまでも眺めていちやあいけない」

「番地が書いてないようすが」

「ああそうか。そいつは私の失念だ」

田口は再び手紙を受け取って、名宛の人の住所と番地を書き入れてくれた。

「さあこれなら好いでしょう。不味くって大きなところは土橋の大寿司流とでも云うのかな。まあ役に立ちさえすればよからう、我慢なさい」

「いえ結構です」

「ついでに女の方へも一通書きましようか」

「女も御存じなのですか」

「ことによると知ってるかも知れませんが」と答えた田口は何だか意味のありそうに微笑した。

「御差支さえなければ、おついでに一本書いていただいても宜しゅうございます」と敬太郎も冗談半分に頼んだ。

「まあ止した方が安全でしょうね。あなたのような年の若い男を紹介して、もし間違でもできると責任問題だから。浪漫——何とか云うじやありませんか、あなたのような人の事を。」

私^{わたし}や学問がないから、今頃流行^{はや}るハイカラな言葉を直^す忘れちまって困るが、何とか云いましてつけね、あの、小説家の使う言葉は。……」

敬太郎はまさかそりやこう云う言葉でしようと教える気にもなれなかった。ただエヘへと馬鹿みたように笑っていた。そうして長居をすればするほど、だんだん非道^{ひど}く冷かされそうなので、心の内では、この一段落がついたら、早く切り上げて帰ろうと思った。彼は田口のくれた紹介状を懐^{ふところ}に収めて、「では二三日内^{うち}にこれを持って行つて参りましょう。その模様でまた伺がう事に致しますから」と云いながら、柔^{やわら}かい座蒲団^{ざぶとん}の上を滑^{すべ}り下りた。田口は「どうも御苦労でした」と叮嚀^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}しただけで、ロマンチックもコスメチックもすっかり忘れてしまったという顔つきをして立ち上った。

敬太郎は帰り途に、今会った田口と、これから会おうという松本と、それから松本を待ち合わせた例^{かっこ}の恰好^{かっこう}のいい女とを、合せたり離したりしてしきりにその関係を考えて。そうして考えれば考えるほど一歩ずつ迷宮^{メイズ}の奥に引き込まれるような面白味を感じた。今^きよう日田口での獲物^{えもの}は松本という名前だけであるが、この名前がいろいろに錯綜^{さくそう}した事実を自分のために締め括^{くく}っている妙な囊^{ふくろ}のように彼には思えるので、そこから何が出るかわらないだけそれだけ彼には楽みが多かった。田口の説明によると、近寄悪^{にく}い人のようにも聞

こえるが、彼の見たところでは田口より数倍話しがしやすそうであつた。彼は今日田口から得た印象のうちに、人を取扱う点にかけてなるほど老練だという嘆美たんびの声を見出した上、人物としてもどこか偉そうに思われる点が、時々彼の眼を射るようにちらちら輝やいたにもかかわらず、その前に坐すわつてゐる間、彼は始終しじゅう何物にか縛しばられて自由に動けない窮屈な感じを取り去る事ができなかった。絶えず監視もとの下に置かれたようなこの状態は、一時性のものでなくつて、いくら面会の度数を重ねても、けつして薄らぐ折はなかうとまで彼には見えたくらいである。彼はこういう風に氣のおける田口と反対の側に、何でも遠慮なく聞いて怒られそうにない、話し声その物のうちにすでに懐なつかし味の籠こもつたような松本を想像してやまなかつた。

八

翌朝よくあささつそく支度をして松本に会いに行こうと思つてゐるとあいにく寒い雨が降り出した。窓を細目に開けて高い三階から外を見渡した時分には、もう世の中が一面に濡ぬれてゐた。屋根瓦やねがわらに徹とおるような佗わびしい色をしばらく眺ながめていた敬太郎けいたろうは、田口の紹介状

を机の上に置いて、出ようか止そうかとちよつと思案したが、早く会って見たいという気が強く起るので、とうとう机の前を離れた。そうして豆腐屋の喇叭らっぱが、陰気な空気を割きいて鋭どく往来に響く下の方へ降りて行つた。

松本まつもとの家は矢来やらいなので、敬太郎はこの間の晚狐きつねにつままれたと同じ思いをした交番下の景色けしきを想像しつつ、そこへ来ると、坂下と坂上が両方共二股ふたまたに割れて、勾配こうばいのついた真中だけがいびつに膨ふくれているのを発見した。彼は寒い雨の袴はかまの裾すそに吹きかけるのも厭いとわずに足を留めて、あの晩車夫が梶棒かじぼうを握つたまま立往生をしたのはこのへんだらうと思う所を見廻した。今日も同じように雨がざあ落ちて、彼の踏んでいる土は地下の鉛管まで腐れ込むほど濡れていた。ただ昼だけに周囲は暗いながらも明るいので、立ちどまつた時の心持はこの間とはまるで趣おもむきが違つていた。敬太郎は後うしろの方に高く黒ずんでいる目めじろ白台だいの森と、右手の奥に朦朧もうろうと重なり合つた水稻みずいなり荷こたちの木立を見て坂を上あがつた。それから同じ番地の家の何軒でもある矢来の中をぐるぐる歩いた。始めのうちは小さい横町を右へ折れたり左へ曲つたり、濡れた枳殻からたちの垣を覗のぞいたり、古い椿つばきの生い被かぶさっている墓地らしい構かまえの前を通つたりしたが、松本の家は容易に見当らなかつた。しまいに尋ねあぐんで、ある横町の角にある車屋を見つけて、その若い者に聞いたら、何でもない事の上

うにすぐ教えてくれた。

松本の家はこの車屋の筋向うを這入った突き当りの、竹垣に囲われた綺麗な住居であった。門を潜ると子供が太鼓を鳴らしている音が聞こえた。玄關へかかつて案内を頼んでもその太鼓の音は毫もやまなかった。その代り四辺は森閑として人の住んでいる臭さえしなかった。雨に鎖された家の奥から現われた十六七の下女は、手を突いて紹介状を受取ったなり無言のまま引つ込んだが、しばらくしてからまた出て来て、「はなはだ勝手を申し上げてすみませんでございですが、雨の降らない日においてを願えますまいか」と云った。今まで就職運動のため諸方へ行つて断わられてゐる敬太郎にも、この断り方だけは不思議に聞こえた。彼はなぜ雨が降つては面会に差支えるのか直反問したくなつた。けれども下女に議論を仕かけるのも一種変な場合なので、「じゃ御天氣の日に何がええれば御目にかかれるんですね」と念晴しに聞き直して見た。下女はただ「はい」と答えただけであつた。敬太郎は仕方なしにまた雨の降る中へ出た。ざあと云う音が急に烈しく聞こえる中に、子供の鳴らす太鼓がまだどんとどんと響いていた。彼は矢來の坂を下りながら変な男があつたものだという観念を数度くり返した。田口がただでさえ会い悪いと云つたのは、こんなところを指すのではなからうかとも考えた。その日は家へ帰つても、気分が中止の姿

勢に余儀なく据えつけられたまま、どの方角へも進行できないのが苦痛になった。久しぶりに須永の家へでも行つて、この間からの顛末を茶話に半日を暮らそうかと考えたが、どうせ行くなら、今の仕事に一段落つけて、自分にも見当の立つた筋を吹聴するのではなくては話しばいもしないので、ついに行かずじまいにしてしまった。

翌日は昨日と打って變つて好い天氣になった。起き上る時、あらゆる濁を雨の力で洗ひ落したように綺麗に輝やく蒼空を、眩ゆそうに仰ぎ見た敬太郎は、今日こそ松本に会えると喜こんだ。彼はこの間の晩行李の後に隠しておいた例の洋杖を取り出して、今日は一つこれを持つて行つて見ようと考がえた。彼はそれを突いて、また矢來の坂を上りながら、昨日の下女が今日も出て来て、せっかくですが今日は御天氣過ぎますから、もう少し曇った日においで下さいましと云つたらどんなものだろうと想像した。

九

ところが昨日と違つて、門を潜つても、子供の鳴らす太鼓の音は聞こえなかった。玄關にはこの前目に着かなかつた衝立が立つていた。その衝立には淡彩の鶴がたった一羽

佇^{たた}ずんでいるだけで、姿見のように細長いその格^{かつ}好^{こう}が、普通の寸法と違って意味で敬太郎の注意を促^{うな}がした。取次には例の下女が現われたには相違ないが、その後^{あと}から遠慮のない足音をどんどん立てて二人の小供が衝立の影まで来て、珍らしそうな顔をして敬太郎を眺^{なが}めた。昨日に比べるとこれだけの變化を認めた彼は、最後にどうぞという案内と共に、硝子戸^{ガラスド}の締^しまつている座敷へ通った。その真中にある金魚鉢のように大きな瀬戸物の火鉢^{ひばち}の両側に、下女は座蒲団^{ざぶたん}を一枚ずつ置いて、その一枚を敬太郎の席とした。その座蒲団は更紗^{さらさ}の模様を染めた真丸の形をしたもので、敬太郎は不思議そうにその上^{すわ}へ坐った。床^{とこ}の間^まには刷毛^{はけ}でがしがしと粗末^{ぞんざい}に書いたような山^{さん}水^{すい}の軸^{じく}がかかっていた。敬太郎はどこが樹でどこが巖^{いわ}だか見分のつかない面を、輕蔑^{けいべつ}に値する裝飾品のごとく眺^{なが}めたとその隣りに銅鑼^{どら}が下^{さが}つていて、それを叩^{たた}く棒まで添えてあるので、ますます変った室^{へや}だと思つた。

すると間^{あい}の襖^{ふすま}を開けて隣座敷から黒子^{ほくろ}のある主人が出て来た。「よくおいでです」と云つたなり、すぐ敬太郎の鼻の先に坐つたが、その調子はけつして愛^{あい}嬌^{きよう}^{あいきよう}のある方ではなかつた。ただどこかおっとりしているのが、相手に余り重きを置かないところが、かえつて敬太郎に楽な心持を与えた。それで火鉢一つを境に、顔と顔を突き合わせながら、敬太

郎は別段気がつまる思もせずいられた。その上彼はこの間の晩、たしかに自分の顔をこの主人に覚えられたに違いないと思ひ込んでいたにもかかわらず、今会つて見ると、覚えているのだから、いないのだから、平然としてそんな素振は、口にも色にも出さないで、彼はおさら氣兼きがねの必要を感じなくなつた。最後に主人は昨日雨天のため面会を謝絶した理由も言訳ひとことも一言も述べなかつた。述べたくなかつたのか、述べなくつても構わないと認めていたのか、それすら敬太郎にはまるで判断がつかなかつた。

話は自然の順序として、紹介者になつた田口の事から始まつた。「あなたはこれから田口に使つて貰もらおうというのでしたね」というのを冒頭に、主人は敬太郎の志望だの、卒業の成績だのを一通り聞いた。それから彼のいまだかつて考えた事もない、社会觀とか人生觀とかいうこむずかしい方面の問題を、時々持ち出して彼を苦しめた。彼はその時心のうちで、この松本という男は世に著あらわれない学者の一人なのではなからうかと疑ぐつたくらい、妙な理窟りくつをちらちらと閃ひらめかされた。そればかりでなく、松本は田口を捕つかまえて、役には立つが頭のなつていない男だと罵ののした。

「第一だいちああ忙がしくしていちや、頭の中に組織立つた考かんがえのできる閑ひまがないから駄目です。あいつの脳と来たら、年が年ねん中摺鉢ねんじゅうすりばちの中で、播すりこぎ木に攪かき廻かされてる味噌みそ見たよう

なもんでね。あんまり活動し過ぎて、何の形にもならない」

敬太郎にはなぜこの主人が田口に対してこうまで悪体^{あくたい}を吐くのかさっぱり訳が分らなかった。けれども彼の不思議に感じたのは、これほどの激語を放つ主人の態度なり口調なりに、毫^{ごう}も毒々しいところだの、小悪^{こにく}らしい点だのの见えない事であつた。彼の罵^{のの}る言葉は、人を罵^{のの}した経験^{けんけん}を知らないような落ちつきを具^{そな}えた彼の声を通して、敬太郎の耳に響くので、敬太郎も強く反抗する気になれなかつた。ただ一種變つた人だという感じが新たに刺戟^{しげき}を受けるだけであつた。

「それでいて、碁^ごを打つ、謡^{うたい}を謡^{うた}う。いろいろな事をやる。もつともいずれも下手糞^{へたくそ}なんです」

「それが余裕^{よゆう}のある証^{しょうこ}拠^こじゃないでしょうか」

「余裕^{よゆう}つて君。——僕は昨日^{きのう}雨が降るから天氣の好い日に来てくれて、あなたを断わつたでしょう。その訳は今云う必要もないが、何しろそんなわがままな断わり方が世間にあると思いますか。田口だつたらそう云う断り方はけつしてできない。田口が好んで人に会うのはなぜだと云つて御覽。田口は世の中に求めるところのある人だからです。つまり僕のような高等遊民^{こうとうゆうみん}でないからです。いくら他^{ひと}の感情を害したつて、困りやしないとい

う余裕がないからです」

十

「実は田口さんからは何にも伺がわずに参ったのですが、今御使いになった高等遊民という言葉は本当の意味で御用いなのですか」

「文字通りの意味で僕は遊民ですよ。なぜ」

松本は大きな火鉢ひばちの縁ふちへ両りょう肱ひじを掛けて、その一方の先にある拳骨げんこつを顎あごの支えにし、ながら敬太郎けいたろうを見た。敬太郎は初対面の客を客と感じていないらしいこの松本の様子に、なるほど高等遊民の本ほん色しよくがあるらしくも思った。彼は煙草たばこ道楽と見えて、今日は大きな丸い雁首がんくびのついた木製の西洋パイプを口から離さずに、時々思い出したような濃い煙を、まだ火の消えていない証拠として、狼煙のろしのごとくぱっぱと揚げた。その煙が彼の顔の傍そばでいつの間にか消えて行く具合が、どこにも締めしまる必要を認めていないらしい彼の眼鼻と相待って、今まで経験した事のない一種静かな心持を敬太郎に与えた。彼は少し薄くなりかかった髪を、頭の真中から左右へ分けているので、平たい頭がなおの事尋常

に落ちついて見えた。彼はまた普通世間の人を着ないような茶色の無地の羽織を着て、同じ色の上足袋を白の上に重ねていた。その色がすぐ坊主の法衣ころもを聯想れんそうさせるところがまた変に特別な男らしく敬太郎の眼に映った。自分で高等遊民だと名乗るものに会ったのはこれが始めてではあるが、松本の風采ふうさいなり態度なりが、いかにもそう云う階級の代表者らしい感じを、少し不意を打たれた気味の敬太郎に投げ込んだのは事実であつた。

「失礼ながら御家族は大勢でいらつしやいますか」

敬太郎は自みづから高等遊民と称する人に対して、どういう訳かまずこういう問がかけて見たかつた。すると松本は「ええ子供がたくさんいます」と答えて、敬太郎の忘れかけていたパイプからぱつと煙を出した。

「奥さんは……」

「妻さいは無論います。なぜですか」

敬太郎は取り返しをつかない愚ぐな問を出して、始末に行かなくなったのを後悔した。相手がそれほど感情を害した様子を見せないしろ、不思議そうに自分の顔を眺めて、解決を予期している以上は、何とか云わなければすまない場合になった。

「あなたのような方が、普通の人間と同じように、家庭的に暮して行く事ができるかと思

つてちよつと伺つたまでです」

「僕が家庭的に……。なぜ。高等遊民だからですか」

「そう云う訳でも無いんですが、何だかそんな心持がしたからちよつと伺がつたのです」

「高等遊民は田口などよりも家庭的なものですよ」

敬太郎はもう何も云う事がなくなつてしまつた。彼の頭脳の中では、返事に行き詰まつた困却と、ここで問題を変えようとする努力と、これを緒口いとくちに、革の手袋かわを穿めた女の關係を確かめたい希望が三ついつしよに働らくので、元からそれほど秩序の立つていない彼の思想になおさら暗い影を投げた。けれども松本はそんな事にまるで注意しない風で、困つた敬太郎の顔を平氣に眺めていた。ながもしこれが田口であつたなら手際よく相手を打ち据える代りに、打ち据えるとすぐ向うから局面を変えてくれて、相手に見苦しい立ち往生などはけつしてさせない鮮やかな腕を有つてゐるのにと敬太郎は思った。氣はおけないが、人を取扱かう点において、全く冴えた熟練を欠いてゐる松本の前で、敬太郎は図らず二人の相違を認めたような氣がしていると、松本は偶然「あなたはそういう問題を考へて見た事がないようですね」と聞いてくれた。

「ええまるで考へていません」

「考える必要はありませんね。一人で下宿している以上は。けれどもいくら一人だって、広い意味での男対女の問題は考えるでしょう」

「考えると云うよりむしろ興味があるといった方が適當かも知れません。興味なら無論あります」

十一

二人は人間として誰しも利害を感じるこの問題についてしばらく話した。けれども年齒^{とし}の違^{ちが}ひだか段の違^{ちが}ひだか、松本の云う事は肝^{かん}心^{じん}の肉を抜いた骨組だけを並べて見せるよう^{けいたろう}で、敬太郎の血の中まで這^{はい}入り込んで来て、共に流れなければやまないほどの切実な勢^{いきおい}をまるで持っていないかった。その代り敬太郎の秩序立たない断片的の言葉も口を出るとすぐ熱を失つて、少しも松本の胸に徹^{とお}らないらしかつた。

こんな縁遠い話をしている中^{うち}で、ただ一つ敬太郎の耳に新らしく響いたのは、露^ロ西^シ亜^ヤの文学者のゴーリキとかいう人が、自分の主張する社会主義とかを実行する上に、資金の必要を感じて、それを調^{ちようたつ}達^{だつ}のため細君同伴で亜^ア米^メ利^リ加^カへ渡つた時の話であつた。その時

ゴーリキは大変な人気を一身に集めて、招待やらかんげい驪迎やらに忙ぼうさつ殺されるほどの景気のうちに、自分の目的を苦もなく着々と進行させつつあった。ところが彼の本国から伴つれて来た細君というのが、本当の細君でなくて単に彼の情婦に過ぎないという事実がどこからか曝露ばくろした。すると今まで狂熱に達していた彼の名声が、たちまちどきりと落ちて、広い新大陸に誰一人として彼と握手するものが無くなってしまったので、ゴーリキはやむを得ずそのまま亜米利加を去った。というのが筋であつた。

「露西亞と亜米利加ではこれだけ男なんによ女関係の解釈が違うんです。ゴーリキのやりくちは露西亞ならほとんど問題にならないくらい些細ささいな事件なんでしょうがね。下らない」と松本は全く下らなそうな顔をした。

「日本はどつちでしょう」と敬太郎は聞いて見た。

「まあ露西亞派でしょうね。僕は露西亞派でたくさんだ」と云つて、松本はまた狼煙のろしのよな濃い煙をぱつと口から吐いた。

ここまで来て見ると、この間の女の事を尋ねるのが敬太郎に取って少しも苦にならないような気がし出した。

「せんだつての晩神田の洋食店で私はあなたに御目にかかったと思うんですが」

「ええ会いましたね。よく覚えています。それから帰りにも電車の中で会ったじゃありませんか。君も江戸川まで乗ったようだが、あすこいらに下宿でもしているんですか。あの晩は雨が降って困ったでしょう」

松本ははたして敬太郎を記憶していた。それを初めから口に出すでもなく、今になつてようやく気がついたふりをするでもなく、話してもよし話さないでもよしと云つた風の態度が、無邪気から出るのか、度胸から出るのか、または鷹揚おうような彼の生れつきから出るのか、敬太郎にはちよつと判断しかねた。

「御伴おつれがおりのようにでしたが」

「ええ別嬪べっぴんを一人伴っていました。あなたはたしか一人でしたね」

「一人です。あなたも御帰りには御一人じやなかったですか」

「そうです」

ちよつとはきはき進んだ問答はここへ来てぴたりとまってしまった。松本がまた女の事を云い出すかと思つて待つていると、「あなたの下宿は牛込ですか、小石川ですか」とまるで無関係の間を敬太郎はかけられた。

「本郷です」

松本は腑に落ちない顔をして敬太郎を見た。本郷に住んでいる彼が、なぜ江戸川の終点まで乗ったのか、その説明を聞きたいと云わぬばかりの松本の眼つきを見た時、敬太郎は面倒だからここで一つ心持よく万事を打ち明けてしまおうと決心した。もし怒られたら、詫まるだけで、詫まって聞かれなければ、御辞儀を叮嚀にして帰れば好かろうと覚悟をきめた。

「実はあなたの後を跟けてわざわざ江戸川まで来たのです」と云って松本の顔を見ると、案外にも予期したほどの変化も起らないので、敬太郎はまず安心した。

「何のために」と松本はほとんどいつものような緩い口調で聞き返した。

「人から頼まれたのです」

「頼まれた？ 誰に」

松本は始めて、少し驚いた声の中に、並より強いアクセントを置いて、こう聞いた。

十二

「実は田口さんに頼まれたのです」

「田口とは。田口要作ようさくですか」

「そうです」

「だって君はわざわざ田口の紹介状を持って僕に会いに来たんじゃありませんか」

こう一句一句問いつめられて行くよりは、自分の方で一と思いに今までの経過を話してしまう方が楽な気がするので、敬太郎けいたろうは田口の速達便を受取って、すぐ小川町の停留所へ見張みはりに出た冒険の第一節目から始めて、電車が江戸川の終点に着いた後の雨の中の立往生に至るまでの顛末てんまつを包まず打ち明けた。固もとよりただ筋の通るだけを目的に、誇張は無論布衍ふえんの煩わしさもできる限り避けたので、時間がそれほどかからなかったせいも、松本は話の進行している間一口も敬太郎を遮さえぎらなかつた。話が済んでからも、直すぐとは声を出す様子は見えなかつた。敬太郎は主人のこの沈黙を、感情を害した結果ではなかうかと推察して、怒り出されないうちに早く詫あやまるに越した事はないと思ひ定めた。すると主人の方から突然口を利きき始めた。

「どうもけしからん奴だね、あの田口という男は。それに使われる君もまた君だ。よつぽどの馬鹿だね」

こういった主人の顔を見ると、呆あきれ返っている風は誰の目にも着くが、怒気を帯びた様

子は比較的どこにも現われていないので、敬太郎はむしろ安心した。この際馬鹿と呼ばれるぐらいの事は、彼に取って何でもなかったのである。

「どうも悪い事をしました」

「詫まつて貰いたくも何ともない。ただ君が御気の毒だから云うのですよ。あんな者に使われて」

「それほど悪い人なんですか」

「いったい何の必要があつて、そんな愚^ぐな事を引き受けたのです」

物数^{ものずき}奇から引き受けたという言葉は、この場合どうしても敬太郎の口へは出て来なかつた。

彼はやむを得ず、衣食問題の必要上どうしても田口に頼らなければならない事情があるので、面白くないとは知りながら、つい承諾したのだという風な答をした。

「衣食に困るなら仕方がないが、もう止した方がいいですよ。余計な事じゃありませんか、寒いのに雨に降られて人の後^{あと}を跟^つけるなんて」

「私も少し懲^こりました。これからはもうやらないつもりです」

この述懐を聞いた松本は何とも云わず、ただ苦笑^{にがわら}いをしていた。それが敬太郎には軽^け蔑^{いべつ}の意味にも憐^{れん}愍^{みん}の意味にも取れるので、彼はいずれにしてもはなはだ肩身の狭い思

をした。

「あなたは僕に対してすまん事をしたような風をしているが、実際そうなのですか」

根本義に溯^{さかの}ぼつたらそれほど感じていない敬太郎もこう聞かれると、行がり上そう
だと思わざるを得なかった。またそう答えざるを得なかった。

「じゃ田口へ行つてね。この間僕の伴^つれていた若い女は高等^{こうとういんばい}淫売だって、僕自身がそ
う保証したと云つてくれたまえ」

「本当にそういう種類の女なんですか」

敬太郎はちよつと驚ろかされた顔をしてこう聞いた。

「まあ何でも好いから、高等淫売だと云つてくれたまえ」

「はあ」

「はあじゃいけない、たしかにそう云わなくっちゃ。云えますか、君」

敬太郎は現代に教育された青年の一人として、こういう意味の言葉を、年長者の前で口
にする無遠慮を憚^{はば}かるほどの男ではなかった。けれども松本が強^しいてこの四字を田口の耳
へ押し込もうとする奥底には、何か不愉快なある物が潜^{ひそ}んでいるらしく思われるので、そ
う軽々しい調子で引き受ける気も起らなかった。彼が挨^{あいさつ}拶に困つてむずかしい顔をして

いると、それを見た松本は、「何、君心配しないでもいいですよ。相手が田口だもの」と云ったが、しばらくしてやつと気がついたように、「君は僕と田口との関係をまだ知らないでしたね」と聞いた。敬太郎は「まだ何にも知りません」と答えた。

十三

「その関係話を話すと、君が田口に向つてあの女の事を高等淫売だと云う勇氣が出悪くなるだけだからつまり僕には損になるんだが、いつまで罪もない君を馬鹿にするのも気の毒だから、聞かして上げよう」

こういう前置を置いた上、松本は田口と自分が社会的にどう交渉しているかを説明してくれた。その説明は最も簡単にすむだけに最も敬太郎を驚ろかした。それを一言でいうと、田口と松本は近い親類の間柄だったのである。松本に二人の姉があつて、一人が須永の母、一人が田口の細君、という互の縁続きを始めて呑み込んだ時、敬太郎は、田口の義弟に当る松本が、叔父という資格で、彼の娘と時間を極めて停留所で待ち合わせた上、あの料理店で会食したという事実を、世間の出来事のうちに最も平凡を極めたものの一つの

ように見た。それを込み入った文でも隠しているように、一生懸命に自分の燃やした陽炎を散らつかせながら、後を追かけて歩いたのが、さもさも馬鹿馬鹿しくなつて来た。

「御嬢さんは何でまたあすまで出張つていたんですか。ただ私を釣るためなんですか」

「何須永へ行つた帰りなんです。僕が田口で話していると、あの子が電話をかけて、四時半頃あすこで待ち合せているから、ちよつと帰りに降りてくれというんです。面倒だから止そうと思つたけれども、是非何とかとかというから、降りたところがね。今朝御父さんから聞いたら、叔父さんが御歳暮に指環を買つてやると云つていたから、停留所で待ち伏せをして、逃さないようにいっしょに行つて買つて貰えと云われたから先刻からここで待つていたんだつて、人の知りもしないのに、一人で勝手な請求を持ち出してなかなか動かない。仕方がないから、まあ西洋料理ぐらいでごまかしておこうと思つて、とうとう宝亭へ連れ込んだんです。——実に田口という男は篋棒だね。わざわざそれほどの手数をかけて、何もそんな下らない真似をするにも当らないじゃないか。騙された君よりもよつぽど田口の方が篋棒ですよ」

敬太郎には騙された自分の方が遙かに愚物に思われた。そうと知つたら、探偵の結果を報告する時にも、もう少しは手加減が出来たものをと、自から赧い顔もしなければならな

かった。

「あなたはまるで御承知ない事なんですネ」

「知るものかね、君。いくら高等遊民だつて、そんな暇の出るはずがないじゃありませんか」

「御嬢さんはどうでしょう。多分御存じなんだろうと思いますか」

「そうさ」と云つて松本はしばらく思索していたが、やがて判切した口調で、「いや知るまい」と断言した。「あの篋棒の田口に、一つ取柄があると云えば云われるのだが、あの男はね、いくら悪戯いたずらをしても、その悪戯をされた当人が、もう少しで恥を掻きそうな際きわどい時になると、ぴたりとめてしまふか、または自分がその場へ出て来て、当人の体面にかかわらない内に綺麗きれいに始末をつける。そこへ行くと篋棒べらぼうには違ないが感心なところがあります。つまりやりかたは悪辣あくらつでも、結末には妙に温かい情の籠なごけつた人間らしい点を見せて来るんです。今度の事でもおそらく自分一人で呑み込んでいるだけでしょう。君が僕の家へ来なかつたら、僕はきつとこの事件を知らずに済むんだつたらう。自分の娘にだつて、君の馬鹿を証明するような策略さくりやくを、始めから吹聴ふいちょうするほど無慈悲な男じゃない。だからついでに悪戯いたずらも止せばいいんだがね、それがどうしても止せないところ

ろが、要するに篋棒です」

田口の性格に対する松本のこういう批評を黙って聞いていた敬太郎は、自分の馬鹿な振舞^{ふるまい}を顧^{かえり}みる後悔よりも、自分を馬鹿にした責任者を怨^{うら}むよりも、むしろ悪戯^{うそ}をした田口を頼もしいと思う心が、わが胸の裏^{うち}で一番勝を制したのを自覚した。が、はたしてそういう人ならば、なぜ彼の前に出て話をしている間に、あんな窮屈な感じが起るのだろうかという不審^{おの}も自ずと萌^{きざ}さない訳に行かなかった。

「あなたの御話でだいぶ田口さんが解^かつて来たようですが、私はあの方^{かた}の前へ出ると、何だか気が落ちつかなくて変に苦しいです」

「そりや向うでも君に気を許さないからさ」

十四

こう云われて見ると、田口が自分に気を許していない眼^{めづ}遣^{かい}やら言葉つきやらがありありと敬太郎^{けいたろう}の胸^{むね}に、疑^{うたが}もない記憶として読まれた。けれども田口ほどの老巧^{らうこう}のものに、何で学校を出たばかりの青臭^{あおくさ}い自分が、それほど苦になるのか、敬太郎は全く合点^{がてん}が行

かなかった。彼は見た通りのままの自分で、誰の前へ出て通用するものと今まで固く己れを信じていたのである。彼はただかような青年として、他に憚ひとはばかられたり気をおかれたりする資格さえないように自分を見縊みくびつていただけに、経験の程度の違う年長者から、自分の思おもわくと違う待遇を受けるのをむしろ不思議に考え出した。

「私はそんな裏表のある人間と見えますかね」

「どうだか、そんな細かい事は初めて会っただけじゃ分らないですよ。しかしあつても無くつても、僕の君に対する待遇にはいっこう関係がないからいいじゃありませんか」

「けれども田口さんからそう思われちゃ……」

「田口は君だからそう思うんじゃない、誰を見てもそう思うんだから仕方がないさ。ああして長い間人を使つてゐるうちには、だいぶ騙だまされなくっちゃならないからね。たまに自然そのままの美しい人間が自分の前に現われて来ても、やっぱり気が許せないんです。それがああ云う人の因果いんがだと思えばそれで好いじゃないか。田口は僕の義兄だから、こう云うと変に聞えるが、本来は美質おともなんです。けつして悪い男じゃない。ただああして何年となく事業の成功という事だけを重おもに眼中に置いて、世の中と闘たたかっているものだから、人間の見方が妙に片寄つて、こいつは役に立つだろうかとか、こいつは安心して使えるだろう

うかとか、まあそんな事ばかり考えているんだね。ああなると女に惚れられても、こりや自分に惚れたんだろうか、自分の持つている金に惚れたんだろうか、すぐそこを疑ぐらなくっちゃいられなくなるんです。美人でさえそうなんだから君見たいな野郎が窮屈な取扱を受けるのは当然だと思わなくっちゃいけない。そこが田口の田口たるところなんだから」

敬太郎はこの批評で田口という男が自分にも判切呑み込めたような気がした。けれどもこういう風に一々彼を肯わせるほどの判断を、彼の頭に鉄椎で叩き込むように入れてくれる松本はそもそも何者だろうか、その点になると敬太郎は依然として茫漠たる雲に對する思があつた。批評に上らない前の田口でさえ、この男よりはかえって活きた人間らしい気がした。

同じ松本について見ても、この間の晩神田の洋食屋で、田口の娘を相手にして珊瑚樹の珠がどうしたとかこうしたとか云つていた時の方が、よっぽど生きて動いていた。今彼の前に坐っているのは、大きなパイプを銜えた木像の霊が、口を利くと同じような感じを敬太郎に与えるだけなので、彼はただその人の本体を髣髴するに苦しむに過ぎなかった。彼が一方では明瞭な松本の批評に心服しながら、一方では松本の何者なるかをこういう風に考えつつ、自分は頭腦の悪い、直覺の鈍い、世間並以下の人物じゃあるまいかと疑

り始めた時、この漠然たる松本がまた口を開いた。

「それでも田口が篋棒をやってくれたため、君はかえって仕合をしたようなものですね」

「なぜですか」

「きつと何か位置を拵らえてくれますよ。これなりで放っておきや田口でも何でもありません。それは責任を持つて受合つて上げても宜い。が、つまらないのは僕だ。全く探偵のされ損だから」

二人は顔を見合せて笑った。敬太郎が丸い更紗の座蒲団の上から立ち上がった時、主人はわざわざ玄関まで送つて出た。そこに飾つてあつた墨絵の鶴の衝立の前に、瘡せた高い身体をしばらく佇ずまして、靴を穿く敬太郎の後姿を眺めていたが、「妙な洋杖を持つていますね。ちよつと拝見」と云つた。そうしてそれを敬太郎の手から受取つて、「へえ、蛇の頭だね。なかなか旨く刻つてある。買ったんですか」と聞いた。「いえ素人が刻つたのを貰つたんです」と答えた敬太郎は、それを振りながらまた矢来の坂を江戸川の方へ下つた。

雨の降る日

一

雨の降る日に面会を謝絶した松本の理由は、ついに当人の口から聞く機会を得ずに久しく過ぎた。敬太郎けいたろうもそのうちに取り紛まぎれて忘れてしまった。ふとそれを耳にしたのは、彼が田口の世話で、ある地位を得たのを縁故に、遠慮なく同家へ出入しゅつにゅうのできる身になってからの事である。その時分の彼の頭には、停留所の経験がすでに新らしい匂いを失いかけていた。彼は時々須永すながからその話を持ち出されては苦笑するに過ぎなかった。須永はよく彼に向つて、なぜその前に僕の所へ来て打ち明けなかったのだと詰問した。内幸町の叔父が人を担かつぐくらいの事は、母から聞いて知っているはずだのにと窘たしなめる事もあった。しまいには、君があんまり色気があり過ぎるからだからと調戯からい出した。敬太郎はそのたびに「馬鹿云え」で通していたが、心の内ではいつも、須永の門前で見た後姿の女を思い出した。その女がとりも直さず停留所の女であつた事も思い出した。そうしてどこか遠くの方

で気恥かしい心持がした。その女の名が千代子^{ちよこ}で、その妹の名が百代子^{ももよこ}である事も、今の敬太郎には珍らしい報知ではなかった。

彼が松本に会って、すべて内幕の消息を聞かされた後^{あと}、田口へ顔を出すのは多少きまりの悪い思をするだけであつたにかかわらず、顔を出さなければ締^しめ括^{くく}りがつかないという行きがかりから、笑われるのを覚悟の前で、また田口の門を潜^{くぐ}った時、田口ははたして大きな声を出して笑った。けれどもその笑の中^{うち}には己^{おの}れの機略に誇る高慢の響よりも、迷った人を本来の路^{みち}に返してやった喜びの勝利が聞こえているのだと敬太郎には解釈された。田口はその時訓戒のためだとか教育の方法だとかいった風の、恩に着せた言葉をいつさい使わなかった。ただ悪意でした訳でないから、怒^{おこ}つてはいけなさと断わって、すぐその場で相当の位置を拵^{こし}らえてくれる約束をした。それから手を鳴らして、停留所に松本を待ち合わせていた方の姉娘を呼んで、これが私^{わたし}の娘だとわざわざ紹介した。そうしてこの方^{かた}は市^{いっ}さんの御友達だよと云って敬太郎を娘に教えていた。娘は何でこういう人に引き合されるのか、ちよつと解^{かい}しかねた風をしながら、極^{きわ}めてよそよそしく叮^{ていねい}嚀^なな挨拶^{あいさつ}をした。敬太郎が千代子という名を覚えたのはその時の事であつた。

これが田口の家庭に接触した始めての機会になつて、敬太郎はその後^ごも用事なり訪問な

りに縁を藉りて、同じ人の門を潜る事が多くなつた。時々は玄関脇の書生部屋へ這入つて、かつて電話で口を利き合つた事のある書生と世間話さえした。奥へも無論通る必要が生じて来た。細君に呼ばれて内向の用を足す場合もあつた。中学校へ行く長男から英語の質問を受けて窮する事も稀ではなかつた。出入の度数がこう重なるにつれて、敬太郎が二人の娘に接近する機会も自然多くなつて来たが、一種間の延びた彼の調子と、比較的引き締つた田口の家風と、差向いで坐る時間の欠乏とが、容易に打ち解けがたい境遇に彼らを置き去りにした。彼らの間に取り換わされた言葉は、無論形式だけを重んずる堅苦しいものではなかつたが、大抵は五分とかからない当用に過ぎないので、親しみはそれほど出る暇がなかつた。彼らが公然と膝を突き合わせて、例になく長い時間を、遠慮の交らない談話に更かしたのは、正月半ばの歌留多会の折であつた。その時敬太郎は千代子から、あなた随分鈍いのねと云われた。百代子からは、あたしあなたと組むのは厭よ、負けるにきまつてゐるからと怒られた。

それからまた一カ月ほど経つて、梅の音信の新聞に出る頃、敬太郎はある日曜の午後を、久しぶりに須永の二階で暮した時、偶然遊びに来ていた千代子に出逢つた。三人してそれからそれへと纏まらない話を続けて行くうちに、ふと松本の評判が千代子の口によつた。

「あの叔父さんも随分變つてゐるのね。雨が降ると一しきりよく御客を断わった事があつてよ。今でもそうかしら」

二

「実は僕も雨の降る日に行つて断られた一人なんだが……」と敬太郎けいたろうが云い出した時、須永すながと千代子は申し合せたように笑い出した。

「君も随分運の悪い男だね。おおかた例の洋杖ステッキを持って行かなかつたんだろう」と須永は調戲からかい始めた。

「だつて無理だわ、雨の降る日に洋杖なんか持つて行けつたつて。ねえ田川さん」

この理攻りぎめの弁護を聞いて、敬太郎も苦笑した。

「いったい田川さんの洋杖つて、どんな洋杖なの。わたしちよつと見たいわ。見せてちよくだい、ね、田川さん。下へ行つて見て来てでも好くつて」

「今日は持つて来ません」

「なぜ持つて来ないの。今日はあなたそれでも好い御天気よ」

「大事な洋杖だから、いくら好い御天気でも、ただの日には持つて出ないんだとき」

「本当？」

「まあそんなものです」

「じゃ旗日はたひにだけ突いて出るの」

敬太郎は一人で二人に当っているのが少し苦しくなった。この次内幸町へ行く時は、きつと持つて行つて見せるという約束をしてようやく千代子の追窮のがを逃れた。その代り千代子からなぜ松本が雨の降る日に面会を謝絶したかの原因を話して貰う事にした。――

それは珍らしく秋の日の曇つた十一月のある午ひるすぎ過であつた。千代子は松本の好きな雲う丹にを母からことづかつて矢来やらいへ持つて来た。久しぶりに遊んで行こうかしらと云つて、わざわざ乗つて来た車まで返して、緩ゆるくり腰を落ちつけた。松本には十三になる女かしらを頭に、男、女、男と互たがいちがい違ちがひに順序よく四人の子が揃そろつていた。これらは皆二つ違いに生れて、いずれも世間並に成長しつつあつた。家庭に華はなやかな匂を着けるこの生き生きした装飾物の外に、松本夫婦は取つて二つになる宵子よいこを、指環に嵌はめた真珠のように大事に抱だいて離さなかつた。彼女は真珠のように透明な青白い皮膚と、漆うるしのように濃い大きな眼を有もつて、前の年の雛ひなの節句の前の宵よいに松本夫婦の手に落ちたのである。千代子は五人のうちで、一

番この子を可愛がつていた。来るたんびにきつと何か玩具を買って来てやった。ある時は余り多量に甘いものをあてがつて叔母から怒られた事さえある。すると千代子は、大事そうに宵子を抱いて縁側へ出て、ねえ宵子さんと云つては、わざと二人の親しい様子を叔母に見せた。叔母は笑いながら、何だね喧嘩でもしやしまいと云った。松本は、御前そんなにその子が好きなら御祝いの代りに上げるから、嫁に行くとき持つておいでと調戲つた。

その日も千代子は坐ると直宵子を相手にして遊び始めた。宵子は生れてからついぞ月代を剃った事がないので、頭の毛が非常に細く柔かに延びていた。そうして皮膚の青白いせいか、その髪の色が日光に照らされると、潤沢の多い紫を含んでぴかぴか縮れ上つていた。「宵子さんかんかん結つて上げましょう」と云つて、千代子は鄭寧にその縮れ毛に櫛を入れた。それから乏しい片鬘を一束割いて、その根元に赤いリボンを括りつけた。宵子の頭は御供のように平らに丸く開いていた。彼女は短かい手をやつとその御供の片隅へ乗せて、リボンの端を抑えながら、母のいる所までよたよた歩いて来て、イボンイボンと云った。母がああ好くかんかんが結えましたねと賞めると、千代子は嬉しそうに笑いながら、子供の後姿を眺めて、今度は御父さんの所へ行つて見せていらつしやいと指

図^{しず}した。宵子はまた足元の危ない歩きつきをして、松本の書齋の入口まで来て、四つ這^{ばい}になった。彼女が父に礼をするときには必ず四つ這になるのが例であつた。彼女はそこで自分の尻をできるだけ高く上げて、御供のような頭を敷居から二三寸の所まで下げて、またイボンイボンと云つた。書見をちよつとやめた松本が、ああ好い頭だね、誰に結つて貰つたのと聞くと、宵子は頸^{くび}を下けたまま、ちいちいと答えた。ちいちいと云うのは、舌の廻らない彼女の千代子と呼ぶ常の符^ふ徴^{ちゆう}であつた。後^{うしろ}に立つて見ていた千代子は小^ちさい唇^{くちびる}から出る自分の名前を聞いて、また嬉しそうに大きな声で笑つた。

三

そのうち子供がみんな学校から歸つて来たので、今まで赤いリボンに占領されていた家庭^{はな}が、急に幾色かの華やかさを加えた。幼稚園へ行く七つになる男の子が、巴^{ともえもん}の紋のついた陣^{じん}太鼓^{だいこ}のようなものを持つて来て、宵子^{よいこ}さん叩^{たた}かして上げるからおいでと連れて行つた。その時千代子は巾^{きん}着^{ちゃく}のような恰^{かつ}好^{こう}をした赤い毛織^{たぎ}の足袋^{たび}が廊下を動いて行く影を見つめていた。その足袋の紐^{ひも}の先には丸い房がついていて、それが小さいな足を運ぶた

びにぱつぱつと飛んだ。

「あの足袋はたしか御前が編あんでやったのだったね」

「ええ可愛かわいらしいわね」

千代子はそのへ坐つて、しばらく叔父と話していた。そのうちに曇つた空から淋しい雨が落ち出したと思うと、それが見る見る音を立てて、空坊主からぼうずになつた梧桐ごとうをしたたか濡ぬらし始めた。松本も千代子も申し合せたように、硝子越ガラスごしの雨の色を眺めて、手焙てあぶりに手を翳かざした。

「芭蕉ばしやうがあるもんだから余計音がするのね」

「芭蕉はよく持つものだよ。この間から今日は枯れるか、今日は枯れるかと思つて、毎日こうして見ているがなかなか枯れない。山茶花さざんかが散つて、青桐あおぎりが裸になつても、まだ青いんだからなあ」

「妙な事に感心するのね。だから恒つね三ぞうは閑ひまじん人だつて云われるのよ」

「その代り御前の叔父さんには芭蕉の研究なんか死ぬまでできっこない」

「したかないわ、そんな研究なんか。だけど叔父さんは内の御父さんよりか全く学者ね。わたし本当に敬服しててよ」

「生意氣云うな」
なまいき

「あら本当よあなた。だって何を聞いても知ってるんですもの」

二人がこんな話をしていると、ただいまこの方が御見えになりましたと云って、下女が一通の紹介状のようなものを持って来て松本に渡した。松本は「千代子待っておいで。今にまた面白い事を教えてやるから」と笑いながら立ち上った。

「厭いやよまたこないだみたい、西洋煙草たばこの名なんかたくさん覚えさせちゃ」

松本は何にも答えずに客間の方へ出て行つた。千代子も茶の間へ取つて返した。そこには雨に降り込められた空の光を補なうため、もう電氣灯が点つていた。台所ではすでに夕飯うめしの支度を始めたと見えて、瓦斯七輪ガスしちりんが二つとも忙がしく青いほのおを吐いていた。やがて小供は大きな食卓に二人ずつ向い合せて坐つた。宵子だけは別に下女がついて食事をするのが例になつていたので、この晩は千代子とその役を引受けた。彼女は小さい朱塗の椀わんと小皿に盛つた魚肉とを盆の上に載せて、横手にある六畳へ宵子を連れ込んだ。そこは家のもの着更きがえをするために多く用いられる室へやなので、箆笥たんすが二つと姿見が一つ、壁から飛び出したように据すえてあつた。千代子はその姿見の前に玩具おもちゃのような椀と茶碗を載せた盆を置いた。

「さあ宵子さん、まんまよ。御待遠さま」

千代子が粥かゆを一匙ひとさじずつ掬すくつて口へ入れてやるたびに、宵子は旨おいしい旨おいしいだの、ちよ
うだいちようだいのいろいろな芸を強しいられた。しまいに自分一人で食べると云つて、
千代子の手から匙を受け取った時、彼女はまた丹念たんねんに匙の持ち方を教えた。宵子は固もとよ
り極きわめて短かい単語よりほかに発音でできなかった。そう持つのではないと叱ちられると、き
つと御供おそなえのような平たい頭を傾かしげて、こう？　こう？　と聞き直した。それを千代子が面
白がつて、何遍もくり返さしているうちに、いつもの通りこう？　と半分言いかけて、心
持横にした大きな眼で千代子を見上げた時、突然右の手に持った匙を放り出して、千代子
の膝ひざの前に俯伏うつぶせになった。

「どうしたの」

千代子は何の気もつかずに宵子を抱だき起した。するとまるで眠った子を抱えたように、
ただ手て応こたえがぐたりとしただけなので、千代子は急に大きな声を出して、宵子さん宵子さ
んと呼んだ。

四

宵子よいこはうとうと寝入ねいった人のように眼を半分閉じて口を半分開あけたまま千代子の膝ひざの上に支えられた。千代子は平手でその背中を二三度叩たたいたが、何の効目ききめもなかった。

「叔母さん、大変だから来て下さい」

母は驚はしろいて箸と茶碗を放り出したなり、足音を立てて這入はいって来た。どうしたのと云いながら、電灯の真下で顔を仰向あおむけにして見ると、唇くちびるにもう薄く紫の色が注さしていた。口へ掌てのひらを当てがっても、呼吸いきの通う音はしなかった。母は呼吸こきゅうの塞つまったような苦しい声を出して、下女に濡手拭ぬれてぬぐいを持つて来させた。それを宵子の額ぬかに載のせた時、「脈みやくはあつて」と千代子に聞いた。千代子はすぐ小さい手頸てくびを握にぎったが脈はどこにあるかまるで分らなかった。

「叔母さんどうしたら好いでしょう」と蒼あおい顔をして泣き出した。母は茫ぼう然ぜんとそこに立つて見ている小供に、「早く御父さんと呼んでいらつしやい」と命じた。小供は四人よつたりとも客間の方へ馳かけ出した。その足音が廊下の端はすれで止まっただと思うと、松本が不思議そうな顔をして出て来た。「どうした」と云いながら、蔽おい被かぶさるように細君と千代子の上から宵子のぞを覗き込んだが、一目見ると急に眉まゆを寄せた。

「医者は……」

医者は時を移さず来た。「少し模様が変です」と云ってすぐ注射をした。しかし何の効^き能もなかった。「駄目でしょうか」という苦しく張りつめた問が、固く結ばれた主人の唇^{くちびる}を洩^もれた。そうして絶望を怖^{おそ}れる怪しい光に充^みちた三人の眼が一度に医者の上に据^すえられた。鏡を出して瞳孔^{どうこう}を眺めていた医者は、この時宵子の裾^{すそ}を捲^{まく}つて肛門^{こうもん}を見た。

「これでは仕方ありません。瞳孔も肛門も開いてしまっていますから。どうも御気の毒です」

医者はこう云ったがまた一筒^{いっとう}の注射を心臓部に試みた。固^{もと}よりそれは何の手段にもならなかった。松本は透^すき徹^{とお}るような娘の肌に針の突き刺される時、自^{おの}から眉間^{みけん}を険^{けわ}しくした。千代子は涙をぼろぼろ膝の上に落した。

「病因は何でしょう」

「どうも不思議です。ただ不思議というよりほかに云いようがないようです。どう考えても……」と医者は首を傾むけた。「辛子湯^{からしゆ}でも使わして見たらどうですか」と松本は素人料簡^{とりようけん}で聞いた。「好いでしょう」と医者はすぐ答えたが、その顔には毫^{ごう}も奨^{しょう}励^{れい}の色が出なかった。

やがて熱い湯を盥^{たら}へ汲^くんで、湯気の濛^{もう}々と立つ真中^{まなちゅう}へ辛子^{からし}を一袋^あ空けた。母と千代子は黙^{もく}つて宵子の着物^{ぎゃくぶつ}を取り除^のけた。医者は熱湯の中へ手を入れて、「もう少し注水^{うめ}ましよう。余り熱いと火傷^{やけど}でもなさるといけませんから」と注意した。

医者の手に抱^だき取られた宵子は、湯の中に五六分浸^ひけられていた。三人は息を殺して柔らかな皮膚の色を見つめていた。「もう好いでしょう。余^{あん}まり長くなると……」と云いながら、医者は宵子を盥^{たら}から出した。母はすぐ受取^{うけと}つてタオルで鄭^{てい}寧^{ねい}に拭^ぬいで元の着物を着せてやったが、ぐたぐたになつた宵子の様子に、ちつとも前と変^へりがないので、「少しの間このまま寝^ねかしておいてやりましょう」と恨^{うら}めしそうに松本の顔を見た。松本はそれがよからうと答えたまま、また座敷の方へ取^とつて返して、来客を玄關に送り出した。

小^ちさい蒲団^{ふとん}と小^ちさい枕^{まくら}がやがて宵子のために戸棚^{とだな}から取り出された。その上に常の夜の安らかな眠に落ちたとしか思えない宵子の姿を眺^{なが}めた千代子は、わつと云つて突伏^{つつぶ}した。

「叔母さんとんだ事をしました……」

「何も千代ちゃんがした訳じやないんだから……」

「でもあたしが御飯^{ごはん}を喫^たべさしていたんですから……叔父さんにも叔母さんにもまことにすみません」

千代子は途切れ途切れの言葉で、先刻自分が夕飯の世話をしていた時の、平生と異ならない元氣な様子を、何遍もくり返して聞かした。松本は腕組をして、「どうもやつぱり不思議だよ」と云ったが、「おい御仙、ここへ寝かしておくのは可哀そうだから、あつちの座敷へ連れて行つてやろう」と細君を促がした。千代子も手を貸した。

五

手頃な屏風がないので、ただ都合の好い位置を択つて、何の囲いもない所へ、そつと北枕に寝かした。今朝方玩弄にしていた風船玉を茶の間から持つて来て、御仙がその枕元に置いてやつた。顔へは白い晒し木綿をかけた。千代子は時々それを取り除けて見ては泣いた。「ちよつとあなた」と御仙が松本を顧みて、「まるで観音様のように可愛い顔をしています」と鼻を詰らせた。松本は「そうか」と云つて、自分の坐っている席から宵子の顔を覗き込んだ。

やがて白木の机の上に、櫛と線香立と白団子が並べられて、蠟燭の灯が弱い光を放つた時、三人は始めて眠から覚めない宵子と自分達が遠く離れてしまったという心細い感じ

に打たれた。彼らは代る代る線香を上げた。その煙の香においが、二時間前とは全く違う世界に誘いざない込まれた彼らの鼻を断えず刺戟しげきした。ほかの子供は平生の通り早く寝かされた後あとに、咲子さきこという十三になる長女だけが起きて線香の側そばを離れなかった。

「御前も御寝おねよ」

「まだ内幸町からも神田からも誰も来ないのね」

「もう来るだろう。好いから早く御寝」

咲子は立つて廊下へ出たが、そこで振り回かえって、千代子を招いた。千代子と同じく立つて廊下へ出ると、小さな声で、怖こわいからいっしょに便所はばかりへ行ってくれろと頼んだ。便所には電灯が点けてなかった。千代子は燐寸マッチを擦すって雪洞ぼんぼりに灯ひを移して、咲子といっしょに廊下を曲った。帰りに下女部屋を覗のぞいて見ると、飯焚めしたきが出入でいりの車夫と火鉢ひばちを挟はさんでひそひそ何か話していた。千代子にはそれが宵子の不幸を細かに語っているらしく思われた。ほかの下女は茶の間で来客の用意に盆を拭いたり茶碗を並べたりしていた。

通知を受けた親類のものがそのうち三人寄った。いずれまた来るからと云って帰ったのもあった。千代子は来る人ごとに宵子の突然な最後をくり返しくり返し語った。十二時過から御仙は通夜つやをする人のために、わざと置火燵おきごたつを拵こしらえて室へやに入れたが、誰もあ

るものはなかった。主人夫婦は無理に勧められて寢室へ退^{しり}ぞいた。その後で千代子は幾度か短かくなつた線香の煙を新らしく継^ついだ。雨はまだ降りやまなかつた。夕方芭蕉^{ばしやう}に落ちた響はもう聞こえない代りに、亜鉛^{トタン}葺^{ぶき}の廂^{ひさし}にあたる音が、非常に淋しくて悲しい点^{てんで}滴^きを彼女の耳に絶えず送つた。彼女はこの雨の中で、時々宵子の顔に当てた晒^{さらし}を取つては噉^{すすり}泣^{なき}をしているうちに夜が明けた。

その日は女がみんなして宵子の経帷子^{きようかたびら}を縫つた。百代子が新たに内幸町から來たのと、ほかに懇意^{こうい}の家の細君^{うち}が二人ほど見えたので、小さい袖^{そで}や裾^{すそ}が、方々の手に渡つた。千代子は半紙と筆と硯^{すずり}とを持って廻つて、南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}という六字を誰にも一枚ずつ書かした。「市^{いっ}さんも書いて上げて下さい」と云つて、須永^{すなが}の前へ來た。「どうするんだい」と聞いた須永は、不思議そうに筆と紙を受取つた。

「細かい字で書けるだけ一面に書いて下さい。後^{あと}から六字ずつを短冊^{たんざく}形に剪^きつて棺^{かん}の中へ散らしにして入れるんですから」

皆^{みんな}な畏^{かし}こまつて六字の名号^{みようごう}を認^{した}めた。咲子は見ちや厭^{いや}よと云いながら袖屏風^{そでびやうぶ}風を写して曲りくねつた字を書いた。十一になる男の子は僕は仮名で書くよと断わつて、ナムアミダブツと電報のようにいくつも並べた。午^{ひる}過^{すぎ}になつていよいよ棺に入れるとき松本は

千代子に「御前着物を着換さしておやりな」と云った。千代子は泣きながら返事もせずに、冷たい宵子を裸にして抱き起した。その背中には紫色の斑点が一面に出ていた。着換が済むと御仙が小さい珠数を手にかけてやった。同じく小さい編笠と藁草履を棺に入れた。昨日の夕方まで穿いていた赤い毛糸の足袋も入れた。その紐の先につけた丸い珠のぶらぶら動く姿がすぐ千代子の眼に浮んだ。みんなのくれた玩具も足や頭の所へ押し込んだ。最後に南無阿弥陀仏の短冊を雪のように振りかけた上へ蓋をして、白綸子の被をした。

六

友引は善くないという御仙の説で、葬式を一日延ばしたため、家の中は陰気な空氣の裡に常よりは賑わった。七つになる嘉吉という男の子が、いつもの陣太鼓を叩いて叱られた後、そつと千代子の傍へ来て、宵子さんはもう帰って来ないのと聞いた。須永が笑いながら、明日は嘉吉さんも焼場へ持つて行つて、宵子さんといっしょに焼いてしまうつもりだと調戲うと、嘉吉はそんなつもりなんか僕厭だぜと云いながら、大きな眼をくるくる

させて須永を見た。咲子は、御母さんわたしも明日御葬式に行きたいわと御仙にせびつた。あたしもねと九つになる重子が頼んだ。御仙はようやく気がついたように、奥で田口夫婦と話をしていた夫を呼んで、「あなた、明日いらしつて」と聞いた。

「行くよ。御前も行つてやるが好い」

「ええ、行く事にきめてます。小供には何を着せたらいいでしょう」

「紋付でいいじゃないか」

「でも余まり模様が派手だから」

「袴はかまを穿はけばいいよ。男の子は海軍服でたくさんだし。御前は黒紋付だろう。黒い帯は持つてるかい」

「持つてます」

「千代子、御前も持つてゐるなら喪服を着て供に立つておやり」

こんな世話を焼いた後で、松本はまた奥へ引返した。千代子もまた線香を上げに立った。棺の上を見ると、いつの間にか綺麗な花環はなわが載せてあった。「いつ来たの」と傍そばにいる妹の百代ももよに聞いた。百代は小さな声で「先刻さつき」と答えたが、「叔母さんが小供のだから、白い花だけでは淋さみしいって、わざと赤いのを交まぜさしたんですって」と説明した。姉と妹は

しばらくそこに並んで坐っていた。十分ばかりすると、千代子は百代の耳に口を付けて、

「百代さんあなた宵子さんの死顔を見て」と聞いた。百代は「ええ」と首肯^{うな}ずいた。

「いつ」

「ほら先刻^{さつき}御棺に入れる時見たんじゃないの。なぜ」

千代子はそれを忘れていた。妹がもし見ないと云つたら、二人で棺の蓋^{ふた}をもう一遍開けようと思つたのである。「御止しなさいよ、怖いから」と云つて百代は首をふつた。

晩には通夜僧^{つやそう}が来て御経を上げた。千代子が傍で聞いていると、松本は坊さんを捕まえて、三部^{さんぶ}経^{きやう}がどうだの、和讃^{わさん}がどうだのという変な話をしていた。その会話の中には親

鸞^{らん}上人^{しやうにん}と蓮如^{れんに}上人^{しやうにん}という名がたびたび出て来た。

十時少し廻つた頃、松本は菓子と御布施^{おふせ}を僧の前に並べて、もう宜^{よろ}しいから御引取下さいと断^{こと}わつた。坊さんの帰^{かへ}つた後

で御仙^{おせん}がその理由^{わけ}を聞くと、「何坊さんも早く寝た方が勝手だあね。宵子だつて御経なんか聴くのは嫌^{きら}だよ」とすましていた。千代子と百代子は顔を見合せて微笑した。

あくる日は風のない明らかな空の下に、小さいな棺が静かに動いた。路端^{みちばた}の人はそれを何か不可思議のものでもあるかのように目送^{もくそう}した。松本は白張^{しらはり}の提灯^{ちやうちん}や白木^{しらき}の輿^{こし}が嫌だと云つて、宵子の棺を喪車に入れたのである。その喪車の周囲^{ぐわい}に垂れた黒い幕が

揺れるたびに、白綸子しろりんずの覆おひをした小さな棺の上に飾った花環がちらちら見えた。そこいらに遊んでいた子供が駆け寄かつて来て、珍らしそうに車を覗のぞき込んだ。車と行き逢った時、脱帽して過ぎた人もあつた。

寺では読経どきよも焼香も形式通り済んだ。千代子は広い本堂に坐っている間、不思議に涙も何も出なかつた。叔父叔母の顔を見てもこれといって憂うれいに鎖とぎされた様子は見えなかつた。焼香の時、重子ちゅうこが香かうをつまんで香炉かうろの裏うちへ燵くべるのを間違えて、灰を一撮ひとつかみ取つて、抹まつこ香かうの中へ打ち込んだ折には、おかしくなつて吹き出したくらいである。式が果ててから松本と須永と別に一二人棺につき添つて火葬場へ廻つたので、千代子はほかのものといつしよにまた矢来やらいへ歸つて来た。車の上で、切なさの少し減つた今よりも、苦しいくらい悲しかった昨日きのう一昨日おとといの気分の方が、清くて美しい物を多量に含んでいたらしく考えて、その時味わつた痛烈な悲哀をかえつて恋しく思つた。

七

骨上こつあげには御仙おせんと須永すながと千代子とそれに平生宵子ふだんよいこの守をしていた清きよという下女がついて

都合四人で行った。柏木の停車場を下りると二丁ぐらいな所を、つい気がつかずに宅から車に乗って出たので時間はかえって長くかかった。火葬場の経験は千代子に取って生れて始めてであつた。久しく見ずにいた郊外の景色も忘れ物を思い出したように嬉しかった。眼に入るものは青い麦畠と青い大根畠と常磐木の中に赤や黄や褐色を雑多に交ぜた森の色であつた。前へ行く須永は時々後を振り返って、穴八幡だの諏訪の森だのを千代子に教えた。車が暗いだらだら坂へ来た時、彼はまた小高い杉の木立の中にある細長い塔を千代子のために指した。それには弘法大師千五十年供養塔と刻んであつた。その下に熊笹の生い茂った吹井戸を控えて、一軒の茶見世が橋の袂をさも田舎路らしく見せていた。折々坊主になりかけた高い樹の枝の上から、色の変った小さい葉が一つずつ落ちて来た。それが空中で非常に早くきり舞う姿が鮮やかに千代子の眼を刺戟した。それが容易に地面の上へ落ちずに、いつまでも途中でひらひらするのも、彼女には眼新しい現象であつた。

火葬場は日当りの好い平地に南を受けて建てられているので、車を門内に引き入れた時、思つたより陽気な影が千代子の胸に射した。御仙が事務所の前で、松本ですがと云うと、郵便局の受付口みたような窓の中に坐っていた男が、鍵は御持ちでしょうねと聞いた。御

仙は変な顔をして急に懷や帶の間を探り出した。

「とんだ事をしたよ。鍵を茶の間の用筆筒の上へ置いたなり……」

「持つて来なかつたの。じゃ困るわね。まだ時間があるから急いで市さんに取つて来て貰うと好いわ」

二人の問答を後の方で冷淡に聞いていた須永は、鍵なら僕が持つて来ているよと云つて、冷たい重いものを袂から出して叔母に渡した。御仙がそれを受付口へ見せている間に、千代子は須永を窘なめた。

「市さん、あなた本当に悪らしい方ね。持つてゐるなら早く出して上げればいいのに。叔母さんは宵子さんの事で、頭がぼんやりしているから忘れるんじゃないやありませんか」

須永はただ微笑して立っていた。

「あなたのような不人情な人はこんな時にはいつそ来ない方がいいわ。宵子さんが死んだつて、涙一つ零すじやなし」

「不人情なんじゃない。まだ子供を持つた事がないから、親子の情愛がよく解らないんだよ」

「まあ。よく叔母さんの前でそんな呑気な事が云えるのね。じゃあたしなんかどうしたの。」

いつ子供持った覚おぼえがあつて」

「あるかどうか僕は知らない。けれども千代ちゃんおぼえは女だから、おおかた男より美しい心を持つてゐるんだろう」

御仙は二人の口論を聞かない人のように、用事を済ますとすぐ待合所の方へ歩いて行つた。そこへ腰をかけてから、立つてゐる千代子を手招きした。千代子はすぐ叔母の傍そばへ来て座に着いた。須永も続いて這はい入つて来た。そうして二人の向むこう側がわにある涼み台みたようなものの上に腰をかけた。清もおかけと云つて自分の席を割さいてやつた。

四人が茶を呑のんで待ち合あわしている間に、骨こつ上あげの連中が二三組見えた。最初のは田舎いな染かしみた御婆さんだけで、これは御仙と千代子の服装に對して遠慮でもしたらしく口数を多く利きかなかつた。次には尻からを絡おやこづげた親子連が来た。活かつ潑ぱつな声で、壺つぼを下ささいと云つて、一番安いのを十六錢で買つて行つた。三番目には散さん髪ぱつに角帶しを締しめた男とも女とも片のつかない盲者めくらが、紫はの袴かまを穿はいた女の子に手を引かれてやつて来た。そうしてまだ時間はあるだろうねと念を押して、袂たもとから出した巻煙草まきたばこを吸い始めた。須永はこの盲者の顔を見ると立ち上つてぷいと表へ出たぎりなかなか返つて来なかつた。ところへ事務所のものが御仙の傍へ来て、用意が出来ましたからどうぞと促うながしたので、千代子は須永を呼びに

裏手へ出た。

八

眞しんちゆう 鍬くわの掛札に何々殿と書いた並等なみとうの竈かまを、薄気味悪く左右に見て裏へ抜けると、広い空地あきち すみの隅に松薪まつまきが山のように積んであった。周囲まわりには綺麗きれいな孟宗もうそうやぶ藪やぶが蒼々と茂っていた。その下が麦むぎ畠はたけで、麦畠の向うがまた岡おか続きに高く蜿蜒うねうねしているの、北側の眺めながめはことに晴々はればれしかった。須永すながはこの空地の端はしに立って広い眼界をぼんやり見渡していた。

「市さんいち、もう用意ができたんですって」

須永は千代子の声を聞いて黙ったまま帰って来たが、「あの竹藪たけやぶは大変みごとだね。何だか死人しびとの膏あぶらが肥料こやしになつて、ああ生々いきいき延びるような気がするじゃないか。ここできる筈たけのこはきつと旨いよ」と云つた。千代子は「おお厭いやだ」と云い放はなにして、さつさとまた並等なみとうを通り抜けた。宵子よいこの竈かまは上等の一号というので、扉の上に紫の幕が張つてあった。その前に昨日きのうの花環しほが少し凋しぼみかけて、台の上に静かに横たわっていた。それが昨夜ゆうべ宵子

の肉を焼いた熱氣ねつきの記念かたみのように思われるので、千代子は急に息苦しくなった。御坊おんぼうが三人出て来た。そのうちの一番年を取ったのが「御封印を……」と云うので、須永は「よし、構わないから開けてくれ」と頼んだ。畏かしこまった御坊は自分の手で封印を切つて、かちやりと響く音をさせながら錠じょうを抜いた。黒い鉄の扉が左右へ開くと、薄暗い奥の方に、灰色の丸いもののだの、黒いもののだの、白いもののだのが、形を成さない一塊ひとかたまりとなつて臃おぼろ氣に見えた。御坊は「今出しましょう」と断つて、レールを二本前の方に継ぎ足して置いて、鉄の環かんに似たものを二つ棺台はしの端にかけたかと思うと、いきなりがらがらという音と共に、かの形を成さない一塊の焼残やけのこりが四人の立つている鼻の下へ出て来た。千代子はそのなかで、例の御供おそなえに似てふつくらと膨ふくらんだ宵子の頭蓋骨ずがいこつが、生きていた時そのままの姿で残つているのを認めて急に手帛ハンケチを口に銜くわえた。御坊はこの頭蓋骨と頬骨と外に二つ三つの大きな骨を残して、「あとは綺麗きれいに篩ふるつて持つて参りましょう」と云つた。よつたり四人は各自木箸めいめいきばしと竹箸を一本ずつ持つて、台の上の白骨はつこつを思い思いに拾つては、白い壺つぼの中へ入れた。そうして誘い合せたように泣いた。ただ須永だけは蒼白あおしろい顔をして口も利きかず鼻も鳴らさなかつた。「齒は別になさいますか」と聞きながら、御坊が小器用に齒を拾い分けてくれた時、顎あごをくしゃくしゃと潰つぶしてその中から二三枚よ折り出したの

を見た須永は、「こうなるとまるで人間のようないな。砂の中から小石を拾い出すと同じ事だ」と独言ひとりごとのように云った。下女が三和土たつきの上にぼたぼたと涙を落した。御仙おせんと千代子は箸はしを置いて手帛ハンケチを顔へ当てた。

車に乗るとき千代子は杉の箱に入れた白い壺を抱だいてそれを膝ひざの上に載のせた。車が馳かけ出すと冷たい風が膝掛と杉箱の間から吹き込んだ。高い櫓けやきが白茶しらちやけた幹を路の左右に並べて、彼らを送り迎えるごとくに細い枝を揺り動かした。その細い枝が遥はるか頭の上で交叉こうさするほど繁しげく両側から出ているのに、自分の通る所は存外明るいのを奇妙に思つて、千代子は折々頭を上げては、遠い空を眺ながめた。宅うちへ着いて遺骨を仏壇の前に置いた時、すぐ寄つて来た小供が、蓋ふたを開けて見せてくれというのを彼女は断然拒絶した。

やがて家内中同じ室へやで昼飯の膳ぜんに向つた。「こうして見ると、まだ子供がたくさんいるようだが、これで一人もう欠けたんだね」と須永が云い出した。

「生きてる内はそれほどにも思わないが、逝ゆかれて見ると一番惜しいようだね。ここにいる連中のうちで誰か代りになればいいと思うくらいだ」と松本が云った。

「非道ひどいわね」と重子が咲子に耳語ささやいた。

「叔母さんまた奮発して、宵子さんと瓜うりふた二つのような子を拵こしらえてちようだい。可愛かわいがつ

て上げるから」

「宵子と同じ子じやいけないでしょう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違って代りができたつて、亡くしたのを忘れる訳にや行かないんだから」

「己は雨の降る日に紹介状を持って会いに来る男が厭になった」

須永の話

一

敬太郎は須永の門前で後姿の女を見て以来、この二人を結びつける縁の糸を常に想像した。その糸には一種夢のような匂があるので、二人を眼の前に、須永としまた千代子として眺める時には、かえつてどこかへ消えてしまう事が多かった。けれども彼らが普通の人間として敬太郎の肉眼に現実の刺戟を与えない折々には、失なわれた糸がまた二人の中を離すべからざる因果のごとくに繋いだ。田口の家へ出入するようになってからも、

須永と千代子の関係については、一口でさえ誰からも聞いた事はなし、また二人の様子を直に観察しても尋常の従兄弟以上に何物も仄めいていなかったには違ないが、こういう当初からの聯想に支配されて、彼の頭のどこかに、二人を常に一對の男女として認める傾きを有つていた。女の連添わなない若い男や、男の手を組まない若い女は、要するに敬太郎から見れば自然を損なつた片輪に過ぎないので、彼が自分の知る彼らを頭のうちでかように組み合わせたのは、まだ片輪の境遇にまごつている二人に、自然が生みつけた通りの資格を早く与えてやりたいという道義心の要求から起つたのかも知れなかった。

それはこむずかしい理窟だから、たといどんな要求から起ろうと敬太郎のために弁ずる必要はないが、この頃になつて偶然千代子の結婚談を耳にした彼が、頭の中の世界と、頭の外にある社会との矛盾に、ちよつと首を捻つたのは事實に相違なかった。彼はその話を書生の佐伯から聞いたのである。もつとも佐伯のようなものが、まだ事の纏まらない先から、奥の委しい話を知ろうはずがなかった。彼はただ漠然とした顔の筋肉をいつもより緊張させて、何でもそんな評判ですと云うだけであつた。千代子を貰う人の名前も無論分らなかったが、身分の実業家である事はたしかに思われた。

「千代子さんは須永君の所へ行くのだとばかり思つていたが、そうじゃないのかね」

「そうも行かないでしょう」

「なぜ」

「なぜって聞かれると、僕にも明瞭な答はでき悪いんですが、ちよつと考えて見てもむずかしそうですね」

「そうかね、僕はまたちようど好い夫婦だと思つてゐるがね。親類じゃあるし、年だつて五つ六つ違ならおかしかなしさ」

「知らない人から見るとちよつとそう見えるでしょうがね。裏面にはいろいろ複雑な事情もあるようですから」

敬太郎は佐伯の云わゆる「複雑な事情」なるものを根掘り葉掘り聞きたくなつたが、何だか自分を門外漢扱いにするような彼の言葉が癪に障るのと、たかが玄関番の書生から家庭の内幕を聞き出したと云われては自分の品格にかかわるのと、最後には、口ほど詳しい事情を佐伯が知つてゐる氣遣がないのとで、それぎりその話はやめにした。そのおりついでながら奥へ行つて細君に挨拶をしてしばらく話したが、別に平生と何の変る様子もないので、おめでとうございますと云う勇氣も出なかつた。

これは敬太郎が須永の宅で矢来の叔父さんの家にあつた不幸を千代子から聞いたつい二

三日前の事であつた。その日彼が久しぶりに須永を訪問したのも、実はその結婚問題について須永の考えを確かめるつもりであつた。須永がどの何人なんびとと結婚しようと、千代子がこの何人に片づこうと、それは敬太郎の關係するところではなかつたが、この二人の運命が、それほど容易たやすく右左へ未練なく離れ離れになり得るものか、または自分の想像した通り幻まぼろしに似た糸のようなものが、二人にも見えない縁となつて、彼らを冥々めいめいのうちに繋つなぎ合せているものか。それともこの夢で織つた帯とでも形容して然るべきぢらぢらするものが、ある時は二人の眼に明らかに見え、ある時は全く切れて、彼らをばらばらに孤立させるものか、——そこいらが敬太郎には知リたかつたのである。固もとよりそれは單なる物数奇ものずきに過ぎなかつた。彼は明らかにそうだと自覺していた。けれども須永に対してなら、この物数奇を満足させても無礼に当らない事も自覺していた。そればかりかこの物数奇を満足させる権利があるとまで信じていた。

二

その日は生憎あいにく千代子に妨たげられた上、しまいには須永すながの母さえ出て來たので、だい

ぶ長く坐っていたにもかかわらず、立ち入った話はいつさい持ち出す機会がなかった。ただ敬太郎けいたろうは偶然にも自分の前に並んだ三人が、ありのままの今の姿で、現に似合わしい夫婦しゅうとめと姑おおになり終せているという事にふと思い及んだ時、彼らを世間並の形式で纏まとめるのは、最も容易い仕事のように考えて帰った。

次の日曜がまた幸いな暖かい日和ひよりをすべての勤め人つとにんに恵んだので、敬太郎は朝早くから須永を尋ねて、郊外に誘いざなおうとした。無精ぶしょうでわがままな彼は玄関先まで出て来ながら、なかなか応じそうになかったのを、母親が無理に勧めてようやく靴はを穿はかした。靴を穿いた以上彼は、敬太郎の意志通りどっちへでも動く人であった。その代りいくら相談をかけても、ある判切はつきりした方角へ是非共足を運ばなければならぬと主張する男ではなかった。彼と矢来の松本といっしょに出ると、二人とも行先を考えずに歩くので、一致してとんでもない所へ到着する事がままあった。敬太郎は現にこの人の母の口からその例を聞かされたのである。

この日彼らは両国から汽車に乗って鴻こうの台だいの下まで行って降りた。それから美しい広い河に沿って土堤どての上をのそのそ歩いた。敬太郎は久しぶりに晴々はれはれした好い気分になって、水だの岡だの帆ほかけ船ぶねだのを見廻した。須永も景色けしきだけは賞ほめたが、まだこんな吹き晴ら

しの土堤などを歩く季節じゃないと云つて、寒いのに伴れ出した敬太郎を恨んだ。早く歩けば暖たかくなると出張した敬太郎はさつさと歩き始めた。須永は呆れたような顔をして跟いて来た。二人は柴又の帝釈天の傍まで来て、川甚という家へ這入って飯を食った。そこで詔らえた鰻の蒲焼が甘たるくて食えないと云つて、須永はまた苦い顔をした。先刻から二人の気分が熟しないので、しみりした話をする余地が出て来ないのを苦しがつていた敬太郎は、この時須永に「江戸っ子は贅沢なものだね。細君を貰うときにもそう贅沢を云うかね」と聞いた。

「云えれば誰だつて云うさ。何も江戸っ子に限りあしない。君みたような田舎ものだつて云うだろう」

須永はこう答えて澄ましていた。敬太郎は仕方なしに「江戸っ子は無愛嬌なものだね」と云つて笑い出した。須永も突然おかしくなつたと見えて笑い出した。それから後は二人の気分と同じように、二人の会話も円満に進行した。敬太郎が須永から「君もこの頃はだいぶ落ちついて来たようだ」と評されても、彼は「少し真面目になつたかね」とおとなしく受けるし、彼が須永に「君はますます偏窟に傾くじゃないか」と調戲つても、須永は「どうも自分ながら厭になる事がある」と快よく己れの弱点を承認するだけであつた。

こういう打ち解けた心持で、二人が差し向いに互の眼の奥を見透して恥ずかしがらない時に、千代子の問題が持ち出されたのは、その真相を聞こうとする敬太郎に取って偶然の仕合せであつた。彼はまず一週間ほど前耳にした彼女が近いうちに結婚するという噂を皮切に須永を襲つた。その時須永は少しも昂奮した様子を見せなかった。むしろいつもより沈んだ調子で、「また何か縁談が起りかけているようだね。今度は旨く纏まればいいが」と答えたが、急に口調を更えて、「なに君は知らない事だが、今までもそう云う話は何度もあつたんだよ」とさも陳腐らしそうに説明して聞かせた。

「君は貰う気はないのかい」

「僕が貰うように見えるかね」

話しはこんな風に、御互で引き摺るようにしてだんだん先へ進んだが、いよいよ際どいところまで打ち明けるか、さもなければ題目を更えるよりほかに仕方がないという点まで押しつめられた時、須永はどうとう敬太郎に「また洋杖を持って来たんだね」と云つて苦笑した。敬太郎も笑いながら縁側へ出た。そこから例の洋杖を取つてまた這入つて来たが、「この通りだ」と蛇の頭を須永に見せた。

三

須永すながの話は敬太郎けいたろうの予期したよりも遙はるかに長かった。――

僕の父は早く死んだ。僕がまだ親子の情愛をよく解しない子供の頃に突然死んでしまった。僕は子がないから、自分の血を分けた温あたたかい肉の塊かたまりに對する情なさけは、今でも比較的薄いかも知れないが、自分を生んでくれた親を懐なつかしいと思う心はその後ごだいぶ発達した。今の心をその時分持っていたならと考える事も稀まれではない。一言いちごんでいうと、当時の僕は父にははなはだ冷淡だったのである。もつとも父もけつして甘い方ではなかった。今の僕の胸に映る彼の顔は、骨の高い血色の勝すぐれない、親しみの薄い、厳格な表情に充みちた肖像に過ぎない。僕は自分の顔を鏡の裏うちに見るたんびに、それが胸の中に収めた父の容貌ようぼうと大変似ているのを思い出しては不愉快になる。自分が父と同じ厭いやな印象を、傍はたの人に与えはしまいかと苦に病んで、そこで氣が引けるばかりではない。こんな陰鬱いんうつな眉まゆや額が代表するよりも、まだましな温たかい情愛を、血の中に流している今の自分から推して、あんなに冷酷に見えた父も、心の底には自分以上に熱い涙を貯たくわえていたのではなからうかと考えると、父の記念かたみとして、彼の悪い上うわかわ皮だけを覚えているのが、子としていかにも情な

い心持がするからである。父は死ぬ二三日前僕を枕元に呼んで、「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄やっかい介にならなくっちゃならないぞ。知ってるか」と云った。僕は生れた時から母の厄介になつていたのだから、今更いまさら改ためて父からそれを聞かされるのを妙に思った。黙つて坐つてしていると、父は骨ばかりになつた顔の筋を無理に動かすようにして、「今のように腕白じや、御母さんも構つてくれないぞ。もう少しおとなしくしないと」と云った。僕は母が今まで構つてくれたんだからこのままの僕でたくさんだという気が充分あつた。それで父の小言こごとをまるで必要のない余計な事のように考へて病室を出た。

父が死んだ時母は非常に泣いた。葬式が出る間際まぎわになつて、僕は着物を着換えさせられたまゝ、手持無沙汰てもちぶさただから、一人縁側えんがわへ出て、蒼い空あおを覗き込むように眺めてみると、白無垢しろむくを着た母が何を思つたか不意にそこへ出て来た。田口や松本を始め、供ともに立つものはみんな向の方むこうで混雑ごんざつしていたので、傍はたには誰も見えなかつた。母は突然いきなり自分の坊主頭ぼうずがしらへ手を載のせて、泣き腫らした眼を自分の上に据すえた。そうして小さい声で、「御父さんが御亡おなくなりになつても、御母さんが今まで通り可愛かわいがつて上げるから安心なさいよ」と云つた。僕は何とも答えなかつた。涙も落さなかつた。その時はそれですんだが、両親ふたおやに対する僕の記憶を、生長のちの後に至つて、遠くの方で曇らすものは、二人のこの時の言葉

であるという感じがその後のちしだいしだいに強く明らかになって来た。何の意味もつける必要のない彼らの言葉に、僕はなぜ厚い疑惑の裏打をしなければならないのか、それは僕自身に聞いて見てもまるで説明がつかなかった。時々母に向つて直じかに問い糺ただして見たい氣も起つたが、母の顔を見ると急に勇氣が摧くじけてしまうのが例つねであつた。そうして心の中うちのどこかで、それを打ち明けたが最後、親しい母子おやこが離れ離れになって、永久今の睦むつまじさに戻る機会はないと僕に耳語ささやくものが出て来た。それでも、母は僕の真面目まじめな顔を見守つて、そんな事があつたつけかねと笑いに紛まぎらしそうなので、そう剥はぐらかされた時の残酷な結果を予想すると、とても口へ出された義理じやないと思ひ直しては黙つていた。僕は母に対してけつして柔順な息子むすこではなかつた。父の死ぬ前に枕元へ呼びつけられて意見されただけあつて、小さいうちからよく母に逆さからつた。大きくなつて、女親だけになおさら優しくしてやりたいという分別ができた後あとでも、やっぱり彼女の云う通りにはならなかつた。この二三年はことに心配ばかりかけていた。が、いくら勝手を云い合つても、母子おやこは生れて以来の母子で、この貴たつとい觀念を傷つけられた覺は、重手おもてにしろ浅手あさでにしろ、まだ経験した試しがないという考えから、もしあの事を云い出して、二人共後悔の癥痕はんこんを遺のこさなければすまない瘡きずを受けたなら、それこそ取返しきりかへしのつかない不幸だと思つていた。

この畏怖^{いふ}の念は神経質に生れた僕の頭で拵^{こし}らえるのかも知れないとも疑^{うたぐ}つて見た。けれども僕にはそれが現在よりも明らかな未来として存在している事が多かった。だから僕はあの時の父と母の言葉を、それなり忘れてしまふ事ができなかったのを、今でも情なく感ずるのである。

四

父と母の間はどれほど円満であつたか、僕には分らない。僕はまだ妻^{さい}を貰つた経験がないから、そう云う事を口にする資格はないかも知れないが、いかな仲の善^いい夫婦でも、時々^{きまぎ}は氣不味^{きまず}い思をしあうのが人間の常だろうから、彼らだって永く添つているうちには面白くない汚点^{しみ}を双方の胸の裏^{うち}に見出しつつ、世間も知らず互も口にしなない不満を、自分一人^{にが}苦く味わつて我慢した場合もあつたのだらうと思う。もつとも父は疳癰^{かんべき}の強い割に陰性な男だつたし、母は長唄^{ながうた}をうたう時よりほかに、大きな声の出せない性^{たち}分なので、僕は二人の言い争う現場を、父の死ぬまでいまだかつて目撃した事がなかった。要するに世間から云えば、僕らの宅^{うち}ほど静かに整^{とと}のつた家庭は滅多^{めった}に見当らなかつたのである。あ

のくらい他の悪口を露骨にいう松本の叔父でさえ、今だにそう認めて間違ないものと信じ切っている。

母は僕に対して死んだ父を語るごとに、世間の夫のうちに最も完全に近いもののように説明してやまない。これは幾分か僕の腹の底に濁ったまま沈んでいる父の記憶を清めたいための弁護とも思われる。または彼女自身の記憶に時間の布巾をかけてだんだん光沢を出すつもりとも見られる。けれども慈愛に充ちた親としての父を僕に紹介する時には、彼女の態度が全く一変する。平生僕が目あたりに見ているあの柔和な母が、どうしてこう真面目になれるだろうと驚ろくくらい、厳肅な氣象で僕を打ち据える事さえあつた。が、それは僕が中学から高等学校へ移る時分の昔である。今はいくら母に強請って同じ話をくり返して貰つても、そんな気高い気分にはとてもなれない。僕的情操はその頃から卒業するまでの間に、近頃の小説に出る主人公のように、まるで荒み果てたのだろう。現代の空氣に中毒した自分を呪いたくなると、僕は時々もう一遍で好いから、母の前でああ云う崇高な感じに触れて見たいという望を起すが、同時にその望みがとても遂げられない過去の夢であるという悲しみも湧いて来る。

母の性格は吾々が昔から用い慣れた慈母という言葉で形容さえすれば、それで尽きて

いる。僕から見ると彼女はこの二字のために生れてこの二字のために死ぬと云つても差^さ支^{かえ}ない。まことに気の毒であるが、それでも母は生活の満足をこの一点にのみ集注しているのだから、僕さえ充分の孝行ができれば、これに越した彼女の喜^{よろこび}はないのである。が、もしその僕が彼女の意に背^{そむ}く事が多かつたら、これほどの不幸はまた彼女に取つてけつしてない訳になる。それを思うと僕は非常に心苦しい事がある。

思い出したからここでちよつと云うが、僕は生れてからの一人息子ではない。子供の時に妙^{たえ}ちゃんという妹^{いもと}と毎日遊んだ事を覚えている。その妹は大きな模様のある被^ひ布^ふを平生着^{だん}て、人形のように髪を切り下げていた。そうして僕の事を常に市蔵ちゃん市蔵ちゃん^{ジフテリ}と云つて、兄さんとはけつして呼ばなかった。この妹は父の亡^なくなる何年前かに実扶^{ジフテリ}的里^ア亜^アで死んでしまった。その頃は血清注射がまだ発明されない時分だったので、治療も大変に困難だったのだろう。僕は固^{もと}より実扶^{もと}的里^ア亜^アと云う名前さえ知らなかった。宅^{うち}へ見舞に來た松本に、御前も実扶^{もと}的里^ア亜^アかと調戲^{からか}われて、うんそうじゃないよ僕軍人だよと答えたのを今だに忘れずにいる。妹が死んでから当分はむずかしい父の顔がだいぶ優しく見えた。母に向つて、まことに御前には気の毒な事をしたといった顔がことに穩^{おだや}かだったので、小供ながら、ついその時の言葉まで小^ちさい胸に刻みつけておいた。しかし母がそれに対して

どう答えたかは全く知らない。いくら思い出そうとしても思い出せないところをもつて見ると、初はじめから覚えなかつたのだろう。これほど鋭敏に父を観察する能力を、小供の時から持つていた僕が、母に対する注意に欠けていたのも不思議である。人間が自分よりも余計に他ひとを知りたがる癖のあるものとすれば、僕の父は母よりもよほど他人らしく僕に見えていたのかも分らない。それを逆に云うと、母は觀察に拙あたいしないほど僕に親しかつたのである。——とにかく妹は死んだ。それからの僕は父に対しても母に対しても一人息子であつた。父が死んで以後の今の僕は母に対しての一人息子である。

五

だから僕は母をできるだけ大事にしなければすまない。が、実際は同じ原因がかえつて僕をわがままにしている。僕は去年学校を卒業してから今こんにち日まで、まだ就職という問題についてただの一日も頭を使つた事がない。出た時の成績はむしろ好い方であつた。席次めやすを目安に人を探とる今の習慣を利用しようと思えば、随分友達を羨うらやましがらせる位置に坐り込む機会もないではなかつた。現に一度はある方面から人選にんせんの依託いたくを受けた某教授に呼

ばれて意向を聞かれた記憶さえ有^もっている。それなのに僕は動かなかつた。固^{もと}より自慢でこう云う話をするのではない。真底を打ち明ければむしろ自慢の反対で、全く信念の欠乏から来た引込み^{ひっこ}思案^{しあん}なのだから不愉快である。が、朝から晩まで氣骨を折つて、世の中に持て囃^{はや}されたところで、どこがどうしたんだという横着は、無論断^つわる時からつけ纏^{まと}つていた。僕は時めくために生れた男ではないと思う。法律などを修^{おさ}めな^いで、植物学か天文学でもやつたらまだ性^{しょう}に合^あつた仕事^{しごと}が天から授かるかも知れないと思う。僕は世間に対してはなはだ氣の弱い癖に、自分に対しては大変辛抱の好い男だからそう思うのである。

こういう僕のわがママをわがママなりに通してくれるものは、云うまでもなく父が遺^{のこ}して行^いつたわづかばかりの財産である。もしこの財産がなかったら、僕はどんな苦しい思^{おも}ひをして、法学士の肩書を利用して、世間と戦^{たたか}かわなければなら^ないのだと考えると、僕は死んだ父に対して改^{あらた}めて感謝の念を捧^{たも}げたくなると同時に、自分のわがママはこの財産のためにやつと存在を許されているのだからよほど腰^{こし}の坐^{すわ}らないあさはかなものに違^{ちが}ないと推断する。そうしてその犠牲にされている母が一層氣の毒になる。

母は昔^{むかし}堅^{かたき}氣^きの教育を受けた婦人の常として、家名を揚げるのが子たるものの第一^{つとめ}の務^{つとめ}だというような考えを、何より先に抱^{いだ}いている。しかし彼女の家名を揚^あげるとい^いうのは、

名譽の意味か、財産の意味か、権力の意味か、または徳望の意味か、そこへ行くと全く何の分別もない。ただ漠然と、一つが頭の上に落ちて来れば、すべてその他が後を追って門前に輻湊するぐらいに思っている。しかし僕はそういう問題について、何事も母に説明してやる勇氣がない。説明して聞かせるには、まず僕の見識でもっともと認めた家名の揚げ方をした上でないと、僕にその資格ができないからである。僕はいかなる意味においても家名を揚げ得る男ではない。ただ汚さないだけの見識を頭に入れておくばかりである。そうしてその見識は母に見せて喜んで貰えるどころか、彼女とはまるでかけ離れた縁のないものなのだから、母も心細いだろう。僕も淋しい。

僕が母にかける心配の数あるうちで、第一に挙げなければならないのは、今話した通りの僕の欠点である。しかしこの欠点を矯めずに母と不足なく暮らして行かれるほど、母は僕を愛してくれているのだから、ただすまないと思う心を失わずに、このままで押せば押せない事もないが、このわがままよりもっと鋭い失望を母に与えそうなので、僕が私かに胸を痛めているのは結婚問題である。結婚問題と云うより僕と千代子を取り巻く周囲の事情と云った方が適当かも知れない。それを説明するには話の順序としてまず千代子の生れない当時に溯る必要がある。その頃の田口はけっして今ほどの幅利でも資産家

でもなかった。ただ将来見込のある男だからと云うので、父が母の妹^{いもと}に当るあの叔母を嫁にやるように周旋したのである。田口は固^{もと}より僕の父を先輩として仰いでいた。なにかにつけて相談もしたり、世話にもなった。両家の間に新らしく成立したこの親しい関係が、月と共に加速度をもつて円満に進行しつつある際に千代子が生れた。その時僕の母はどう思ったものか、大きくなったらこの子を市蔵の嫁にくれまいかと田口夫婦に頼んだのだそうである。母の語るところによると、彼らはその折快^{おり}よく母の頼みを承諾したのだと云う。固より後から百代が生まれる、吾^ご一^{いち}という男の子もできる、千代子もやろうとすればどこへでもやられるのだが、きつと僕にやらなければならぬほど確かに母に受合ったかどうか、そこは僕も知らない。

六

とにかく僕と千代子の間には両方共物心のつかない当時からすでにこういう絆^{きずな}があった。けれどもその絆は僕ら二人を結びつける上においてすこぶる怪しい絆であった。二人は固^{もと}より天に上^{あが}る雲雀^{ひばり}のごとく自由に生長した。絆を縛^なった人でさえ確^{しか}とその端^{はし}を握っている

気ではなかったのだろう。僕は怪しい絆という文字を奇縁という意味でここに使う事のできないのを深く母のために悲しむのである。

母は僕の高等学校に這入った時分それとなく千代子の事を仄めかした。その頃の僕に色気のあったのは無論である。けれども未来の妻という觀念はまるで頭に無かった。そんな話に取り合う落ちつきさえ持っていなかった。ことに子供の時からいっしょに遊んだり喧嘩をしたり、ほとんど同じ家に生長したと違わない親しみのある少女は、余り自分に近過ぎるためかはなはだ平凡に見えて、異性に対する普通の刺戟を与えるに足りなかった。これは僕の方ばかりではあるまい、千代子もおそらく同感だろうと思う。その証拠には長い交際の前後を通じて、僕はいまだかつて男として彼女から取り扱かれた経験を記憶する事ができない。彼女から見た僕は、怒ろうが泣こうが、科をしようが色眼を使おうが、常に変らない従兄に過ぎないのである。もつともこれは幾分か、純粹な氣象を受けて生れた彼女の性情からも出るのです、そこになるとまた僕ほど彼女を知り抜いているものはないのだが、単にそれだけでああ男女の牆壁が取り除けられる訳のものではあるまい。ただ一度……しかしこれは後で話す方が宜かろうと思う。

母は自分のいう事に耳を借さなかった僕を羞恥家と解釈して、再び時期を待つものの

ごとくに、この問題を懐に収めた。羞恥は僕といえども否定する勇気がない。しかし千代子に意があるから羞恥んだのだと取った母は、全くの反対を事実と認めたと同じ事である。要するに母は未来に対する準備という考から、僕ら二人をなるべく仲善く育て上げよう育て上げようと力めた結果、男女としての二人をしだいに遠ざからした。そうして自分では知らずにいた。それを知らなければならぬようにした僕は全く残酷であつた。

その日の事を語るのが僕には実際の苦痛である。母は高等学校時代に匂わした千代子の問題を、僕が大学の二年になるまで、じつと懐に抱いたまま一人で温めていたと見えて、ある晩——春休みの頃の花の咲いたという噂のあつたある日の晩——そつと僕の前に出して見せた。その時は僕もだいたい大人らしくなつていたので、静かにその問題を取り上げて、裏表から鄭寧に吟味する余裕ができていた。母もその時にはただ遠くから匂わせるだけでなくて、自分の希望に正当の形式を与える事を忘れなかった。僕は何心なく従妹は血属だから厭だと答えた。母は千代子の生れた時くれると頼んでおいたのだから貰つたらいいだろうと云つて僕を驚ろかした。なぜそんな事を頼んだのかと聞くと、なぜでも私の好きな子で、御前も嫌うはずがないからだ、赤ん坊には応用の利かないような挨拶をして僕を弱らせた。だんだんそこを押して見ると、しまいに涙ぐんで、実は御前のためではな

い、全く私のために頼むのだと云う。しかもどうしてそれが母のためになるのか、その理由はいくら聞いても語らない。最後に何でもかでも千代子は厭いやかと聞かれた。僕は厭でも何でもないと答えた。しかし当人も僕のところへ来る気はなし、田口の叔父も叔母も僕にくれたくはないのだから、そんな事を申し込むのは止した方が好い、先方で迷惑するだけだからと教えた。母は約束だから迷惑しても構わない、また迷惑するはずがないと主張して、昔むかし田口が父の世話になったり厄やっ介かいになったりした例を数え挙げた。僕はやむを得ないからこの問題は卒業するまで解決を着けずにおこうと云い出した。母は不安の裏うちに縷ちるの望を現わした顔色をして、もう一遍とくと考えて見てくれと頼んだ。

こういう事情で、今まで母一人で懷ふところに抱だいていた問題を、その後は僕のちも抱かなければならなくなった。田口はまた田口流に、同じ問題を解かえしつづつあるのではなからうか。たとい千代子をほかへ縁づけるにしても、いざと云う場合には一応こちらの承諾を得る必要があるとすれば、叔父も気がかりに違いない。

僕は不安になった。母の顔を見るたびに、彼女を欺むあざむいてその日その日を姑息こそくに送っているような気がしてすまなかった。一頃ひところは思い直してでき得るならば母の希望通り千代子を貰もらつてやりたいとも考えた。僕はそのためになんざ用もない田口の家へ遊びに行つてそれとなく叔父や叔母の様子を見た。彼らは僕の母の肉薄に応ずる準備としてまえもつて僕を疎うとんずるような素振そぶりを口にも挙動にもけつして示さなかった。彼らはそれほど浅薄なまた不親切な人間ではなかったのである。けれども彼らの娘の未来の夫として、僕が彼らの眼にいかにも憐れあわむべく映じていたかは、遠き前から僕の見抜いていたところと、ちつとも変化を来さないばかりか、近頃になつてますますその傾かたむきが著るしくなるように思われた。彼らは第一に僕の弱々しい体格と僕の蒼白あおしろい顔色とを婿むことして肯うけがわなないつもりしかつた。もっとも僕は神経の鋭どく動く性質たちだから、物を誇大に考え過したり、要いらぬ僻ひがみを起して見たりする弊へいがよくあるので、自分の胸に収めた委くわしい叔父叔母の觀察を遠慮なくここに述べる非礼は憚はばかりたい。ただ一言いちごんで云うと、彼らはその当時千代子を僕の嫁にしようと言言したのだらう。少なくともやつてもいいぐらいには考えていたのだらう。が、その後彼らの社会に占め得た地位と、彼らとは背中合せに進んで行く僕の性格が、二重に実行の便宜を奪つて、ただ惚ぼけかかつた空むなしい義理の拔殻ぬけがらを、彼らの頭のどこかに

置き去りにして行つたと思えば差支さしつかえないのである。

僕と彼らとはあらゆる人の結婚問題についても多くを語る機会を持たなかった。ただあの時叔母と僕との間にこんな会話が取り換わされた。

「市いっさんももうそろそろ奥さんを探さなくつちやありませんね。姉さんはどうかから心配しているようですよ」

「好いのがあつたら母に知らしてやって下さい」

「市さんにはおとなしくつて優しい、親切な看護婦やせみたような女がいいでしょう」

「看護婦みたような嫁はないかつて探しても、誰も来手きてはあるまいな」

僕が苦笑しながら、自ら嘲あざけるごとくこう云つた時、今まで向うの隅すみで何かしていた千代子が、不意に首を上げた。

「あたし行つて上げましょうか」

僕は彼女の眼を深く見た。彼女も僕の顔を見た。けれども両方共そこに意味のある何物をも認めなかった。叔母は千代子の方を振り向きもしなかった。そうして、「御前のようなむきだしのがらがらした者が、何で市さんの氣に入るものかね」と云つた。僕は低い叔母の声のうちに、窘たしなめるようなまた怖おそれるような一種の響を聞いた。千代子はただから

からと面白そうに笑っただけであつた。その時百代子も傍^{そば}にいた。これは姉の言葉聞いて微笑しながら席を立つた。形式を具^{そな}えない断りを云われたと解釈した僕はしばらくしてまた席を立つた。

この事件後僕は同じ問題に関して母の満足を買うための努力をますます屑^{いさぎ}よしとしなくなつた。自尊心の強い父の子として、僕の神経はこういう点において自分でも驚ろくくらい過敏なのである。もちろん僕はその折の叔母に対してけつして感情を害しはしなかつた。こつちからまだ正式の申し込みを受けていない叔母としては、ああよりほかに意向の洩^もらし方も無かつたのだらうと思う。千代子に至つては何を云おうが笑おうが、いつでも蟠^{わだか}まりのない彼女の胸の中を、そのまま外に表わしたに過ぎないと考えていた。僕はその時の千代子の言葉や様子から察して、彼女が僕のところへ来たがつていない事だけは、従前通りたしかに認めたが、同時に、もし差し向いで僕の母にしんみり話し込まれでもしたら、ええそういう訳^{わけ}なら御嫁に来て上げましよう、その場ですぐ承知しないとも限るまいと思つて、私^{ひそ}かに掛念^{けねん}を抱^{いだ}いたくらいである。彼女はそう云う時に、平気で自分の利害や親の意思を犠牲に供し得る極^{きわ}めて純粹の女だと僕は常から信じていたからである。

八

意地の強い僕は母を嬉し^{うれ}がらせるよりもなるべく自我を傷け^{きず}ないようにと祈った。その結果千代子が僕の知らない間に、母から説き落されてはと掛念して、暗にそれを防ぐ分別をした。母は彼女の生れ落ちた当初すでに僕の嫁ときめただけあって、多くある姪^{めい}や甥^{おい}の中で、取り分け千代子を可愛^{かわい}がった。千代子も子供の時分から僕の家を生家のごとく心得て遠慮なく寝泊^{ねとま}りに来た。その縁故で、田口と僕の家が昔に比べると比較的疎^{うと}くなった今日^{こんにち}でも、千代子だけは叔母さん叔母さんと云って、生の親^{うみ}にでも逢いに來るような朗らかな顔をして、しげしげ出入^{でいり}をしていた。単純な彼女は、自分の身を^{まと}的に時々起る縁談をさえ、隠すところなく母に打ち明けた。人の好い母はまたそれを素直に聞いてやるだけで、恨め^{うら}しい眼つき一つも見せ得なかった。僕の恐れる懇談は、こういう關係の深い二人の間に、いつ起らないとも限らなかったのである。

僕の分別というのはまずこの点に関して、当分母の口を塞^{ふさ}いでおこうとする用心に過ぎなかった。ところがいざ改たまつて母にそれを切り出そうとすると、ただ自分の我^がを通すために、弱い親の自由を奪うのは残酷な子に違ないという心持が、どこにか萌^{きざ}すので、つ

いそれなりにしてやめる事が多かった。もつとも年寄の眉を曇らすのがただ情ないばかりでやめたとも云われない。これほど親しい間柄でさえ今まで思い切ったところを千代子に打ち明け得なかつた母の事だから、たといこのままにしておいても、まあ当分は大丈夫だろうという考が、母に対する僕を多少抑えたのである。

それで僕は千代子に關して何という明瞭な所置も取らずに過ぎた。もつともこういう不安な状態で日を送った時期にも、まるで田口の家と打絶えた訳ではなかつたので、会には単に母の喜ぶ顔を見るだけの目的をもつて内幸町まで電車を利用した覚さえあつたのである。そういうある日の晩、僕は久しぶりに千代子から、習い立ての珍らしい手料理を御馳走するからと引止められて、夕飯の膳についた。いつも留守がちな叔父がその日はちようど内にいて、食事中例の氣作な話をし続けにしたため、若い人の陽気な笑い声が障子に響くくらい家の中が賑わつた。飯が済んだ後で、叔父はどういう考か、突然僕に「市さん久しぶりに一局やろうか」と云い出した。僕はさほど氣が進まなかつたけれどもせつかくだから、やりましようと答えて、叔父と共に別室へ退いた。二人はそこで二三番打った。固より下手と下手の勝負なので、時間のかかるはずもなく、碁石を片づけてもまだそれほど遅くはならなかつた。二人は煙草を呑みながらまた話を始めた。その時僕は適

当な機会を利用してわざと叔父に「千代子さんの縁談はまだ纏まりませんか」と聞いた。

それは固より僕が千代子に対して他意のないという事を示すためであつた。がまた一方では、一日も早くこの問題の解決が着けば、自分も安心だし、千代子も幸福だと考えたからである。すると叔父はさすがに男だけあつて、何の躊躇ちゆうちよもなくこう云つた。――

「いやまだなかなかそう行きそうもない。だんだんそんな話を持って来てくれるものはあるが、何しろむずかしくつて弱る。その上調べれば調べるほど面倒になるだけだし、まあ大抵のところでは纏まるなら纏めてしまおうかと思つてゐる。――縁談なんてものは妙なものでね。今だから御前に話すが、実は千代子の生れたとき、御前の御母さんが、これを市蔵の嫁に欲しいつてね――生れ立ての赤ん坊をだよ」

叔父はこの時笑いながら僕の顔を見た。

「母は本気でそう云つたんだそうです」

「本気さ。姉さんはまた正直な人だからね。実に好人だ。今でも時々真面目まじめになつて叔母さんにその話をするそうだ」

叔父は再び大きな声を出して笑つた。僕ははたして叔父がこう軽くこの事件を解釈しているなら、母のために少し弁じてやろうかと考えた。が、もしこれが世慣れた人の巧妙な

覺らせぶりだとすれば、一口でも云うだけが愚^{おろ}か^かだと思ひ直して黙った。叔父は親切な人でまた世慣^{よな}れた人である。彼のこの時の言葉はどちらの眼で見ているのか、僕には今もって解らない。ただ僕がその時以来千代子を貰わない方へいよいよ傾いたのは事実である。

九

それから二カ月ばかりの間僕は田口の家へ近寄らなかつた。母さえ心配しなければ、それぎり内幸町へは足を向けずにすみましたかも知れなかつた。たとい母が心配するにしても、単に彼女に対する掛念^{けねん}だけが問題なら、あるいは僕の氣随^{きずい}をいざという極点まで押し通したかも知れなかつた。僕はそんな風に生みつけられた男なのである。ところが二カ月の末になつて、僕は突然自分の片意地^{ひる}を翻^{ひる}がえさなければ不利だという事に氣がついた。実を云うと、僕と田口と疎遠になればなるほど、母はあらゆる機会を求めて、ますます千代子と接觸するように力め出したのである。そうしていつなんどき僕の最も恐れる直接の談判を、千代子に向つて開かないとも限らないように、漸^{ぜん}々^{ぜん}形勢を切迫させて來たのである。僕は思ひ切つて、この危機を一帳場^{ひとちやうば}先へ繰り越そうとした。そうしてその決心と共にま

た田口の敷居を跨ぎ出した。

彼らの僕を遇する態度に固より変りはなかった。僕の彼らに対する様子もまた二カ月前の通りであつた。僕と彼らとは故のごとく笑つたり、ふざけたり、揚足の取りつくらをしたりした。要するに僕の田口で費やした時間は、騒がしいくらい陽気であつた。本当のところをいうと、僕には少し陽氣過ぎたのである。したがって腹の中が常に空虚な努力に疲れていた。鋭い眼で注意したら、どこかに偽の影が射して、本来の自分を醜く彩つていたろうと思う。そのうちで自分の気分と自分の言葉が、半紙の裏表のようにぴたりと合つた愉快を感じた覚がただ一遍ある。それは家例として年に一度か二度田口の家族が揃つて遊びに出る日の出来事であつた。僕は知らずに奥へ通つて、千代子一人が閑静に坐つてゐるのを見て驚ろいた。彼女は風邪を引いたと見えて、咽喉に湿布をしていた。常にも似ない蒼い顔色も淋しく思われた。微笑しながら、「今日はあたし御留守居よ」と云つた時、僕は始めて皆出払つた事に気がついた。

その日彼女は病氣のせいかいつもよりしんみり落ちついてゐた。僕の顔さえ見ると、きつと冷かし文句を並べて、どうしても悪口の云い合いを挑まなければやまない彼女が、一人ぼっちで妙に沈んでゐる姿を見たとき、僕はふと可憐な心を起した。それで席に着くや

否や、優しい慰藉いしやの言葉を口から出す気もなく自おのずから出した。すると千代子は一種変な表情をして、「あなたは今日は大変優しいわね。奥さんを貰もらったらそういう風に優しくしてあげなくっちゃいけないわね」と云った。遠慮がなくて親しみだけ持っていた僕は、今まで千代子に対していくら無愛嬌ぶあいぎように振舞つても差支さしつかえないものと暗あんに自みずから許していたのだという事にこの時始めて気がついた。そうして千代子の眼うちの中にどこか嬉しそうな色の微かすながら漂なようのを認めて、自分が悪かったと後悔した。

二人はほとんどいつしよに生長したと同じような自分達の過去を振り返った。昔の記憶を語る言葉が互くちびるの唇から當時を蘇よみがえ生たよりらせる便として洩もれた。僕は千代子の記憶が、僕よりも遙はるかに勝すぐれて、細かいところまで鮮あざやかに行き渡っているのに驚ろいた。彼女は今から四年前、僕が玄関に立つたまま袴はかまの綻ころびを彼女に縫ぬわせた事まで覚えていた。その時彼女の使ったのは木綿糸もめんいとでなくて絹糸であつた事も知っていた。

「あたしあなたの描かいてくれた画えをまだ持つててよ」

なるほどそう云われて見ると、千代子に画を描えいてやった覚おぼえがあつた。けれどもそれは彼女が十二三の時の事で、自分が田口に買つて貰もらった絵具と紙を僕の前へ押しつけて無理矢理に描かかせたものである。僕の画道における嗜好たしなみは、それから以後今日こんにちに至るまで、

ついで画筆えふでを握った試しがないのでも分るのだから、赤や緑の単純な刺戟しげきが、一通り彼女の眼に映ってしまえば、興味はそこに尽きなければならぬはずのものであった。それを保存していると聞いた僕は迷惑そうに苦笑せざるを得なかった。

「見せて上げましょうか」

僕は見ないでもいいと断った。彼女は構わず立ち上がって、自分の室へやから僕の画を納めた手文庫を持って来た。

十

千代子はその中から僕の描いた画を五六枚出して見せた。それは赤い椿つばきだの、紫の東むらさきあずま菊ぎくだの、色変りのダリヤだの、いずれも単純な花卉かきの写生に過ぎなかったが、要いらない所にわざと手を掛けて、時間の浪費を厭いとわずに、細かく綺麗きれいに塗り上げた手際てぎわは、今の僕から見るとほとんど驚ろくべきものであった。僕はこれほど綿密であつた自分の昔に感服した。

「あなたそれを描いて下すつた時分は、今よりよっぽど親切だったわね」

千代子は突然こう云った。僕にはその意味がまるで分らなかった。画から眼を上げて、彼女の顔を見ると、彼女も黒い大きな瞳ひとみを僕の上にじつと据すえていた。僕はという訳でそんな事を云うのかと尋ねた。彼女はそれでも答えずに僕の顔を見つめていた。やがていつもより小さな声で「でも近頃頼んだって、そんなに精出して描いては下さらないでしょう」と云った。僕は描くとも描かないとも答えられなかった。ただ腹の中で、彼女の言葉をもつともだと首肯うけがった。

「それでもよくこんな物を丹念にしまっておくね」

「あたし御嫁に行く時も持つてくつもりよ」

僕はこの言葉を聞いて変に悲しくなった。そうしてその悲しい気分が、すぐ千代子の胸に伝こたえそうなのがお恐ろしかった。僕はその刹那せつなすでに涙の溢あふれそうな黒い大きな眼を自分の前に想像したのである。

「そんな下らないものは持つて行かないがいいよ」

「いいわ、持つて行つたって、あたしのだから」

彼女はこう云いつつ、赤い椿や紫の東菊を重ねて、また文庫の中へしまった。僕は自分の気分を変えるためわざと彼女にいつごろ嫁に行くつもりかと聞いた。彼女はもう直じきに行

くのだと答えた。

「しかしまだきまった訳じゃないんだろう」

「いいえ、もうきまったの」

彼女は明らかに答えた。今まで自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女

の縁談が纏まれば好いかと念じていた僕の心臓は、この答と共にどきんと音のする浪を打

った。そうして毛穴から這い出すような膏汗が、背中と腋の下を不意に襲った。千代

子は文庫を抱いて立ち上った。障子を開けると、上から僕を見下して、「嘘よ」と一

口判切云い切ったまま、自分の室の方へ出て行つた。

僕は動く考もなく故の席に坐っていた。僕の胸には忌々しい何物も宿らなかった。千

代子の嫁に行く行かないが、僕にどう影響するかを、この時始めて実際に自覚する事ので

きた僕は、それを自覚させてくれた彼女の翻弄に対して感謝した。僕は今まで気がつか

ずに彼女を愛していたのかも知れなかった。あるいは彼女が気がつかないうちに僕を愛し

ていたのかも知れなかった。――僕は自分という正体が、それほど解り悪い怖いものなの

だろうかと考えて、しばらく茫然としていた。するとあちらの方で電話がちりんちりん

と鳴った。千代子が縁伝いに急ぎ足でやって来て、僕にいっしょに電話をかけてくれと頼

んだ。僕にはいっしょにかけるといふ意味が呑み込めなかったが、すぐ立って彼女と共に電話口へ行つた。

「もう呼び出してあるのよ。あたし声が噎^かれて、咽喉^{のど}が痛くつて話ができないからあなた代理をしてちようだい。聞く方はあたしが聞くから」

僕は相手の名前も分らない、また向うの話の通じない電話をかけるべく、前^{まえ}屈^{くつ}みになつて用意をした。千代子はすでに受話器を耳にあてていた。それを通して彼女の頭へ送られる言葉は、独り^{ひと}彼女が占有するだけなので、僕はただ彼女の小声でいう挨拶^{あいさつ}を大きくして訳も解^いらず先方へ取次ぐに過ぎなかった。それでも始の内は滑稽^{こっけい}も構^{かま}わず暇^{ひま}がかかるのも厭^{いと}わず平気でやつていたが、しだいに僕の好奇心を挑^{ちゅうはつ}発^{はつ}するような返事や質問が千代子の口から出て来るので、僕は曲^こんだまま、おいちよいとそれを御貸^{おかし}と声をかけて左手を真^ま直^{すす}に千代子の方へ差し伸べた。千代子は笑いながら否^{いやいや}々^々をして見せた。僕はさらに姿勢を正しくして、受話器を彼女の手から奪おうとした。彼女はけつしてそれを離さなかった。取ろうとする取らせまいとする争が二人の間に起つた時、彼女は手早く電話を切つた。そうして大きな声をあげて笑い出した。――

十一

こういう光景がもし今より一年前に起つたならと僕はその後何遍もくり返しくり返し思った。そう思うたびに、もう遅過ぎる、時機はすでに去つたと運命から宣告されるような気がした。今からでもこういう光景を二度三度と重ねる機会はずらえられないではないかと、同じ運命が暗に僕を唆^{そそ}のかす日もあつた。なるほど二人の情愛を互いに反射させ合うためにのみ眼の光を使う手段を憚^{はば}からなかつたなら、千代子と僕とはその日を基点として出立しても、今頃は人間の利害で割^さく事のできない愛に陥^{おち}つていたかも知れない。ただ僕はそれと反対の方針を取つたのである。

田口夫婦の意向や僕の母の希望は、他人の入智慧^{いれぢえ}同様に意味の少ないものとして、単に彼女と僕を裸にした生れつきだけを比較すると、僕らはとてもいっしょになる見込のないものと僕は平生から信じていた。これはなぜと聞かれても満足の行くように答弁ができないかも知れない。僕は人に説明するためにそう信じているのではないから。僕はかつて文学好のある友達からダヌンチオと一少女の話聞いた事がある。ダヌンチオというのは今の以太利^{イタリア}で一番有名な小説家だそうだから、僕の友達の主意は無論彼の勢力を僕に紹介する

つもりだったのだろうが、僕にはそこへ引合に出された少女の方が彼よりも遥かに興味が多かった。その話はこうである。――

ある時ダナンチオが招待を受けてある会合の席へ出た。文学者を国家の装飾のようにもてはやす西洋の事だから、ダナンチオはその席に群がるすべての人から多大の尊敬と愛嬌をもつて偉人のごとく取扱かわれた。彼が満堂の注意を一身に集めて、衆人の間をあちこち徘徊しているうち、どういう機会か自分の手巾を足の下へ落した。混雑の際と見えて、彼は固より、傍のものもいっそうそれに気がつかずにいた。するとまだ年の若い美しい女が一人その手巾を床の上から取り上げて、ダナンチオの前へ持つて来た。彼女はそれをダナンチオに渡すつもりで、これはあなたのものでしようと言った。ダナンチオはありがとうと答えたが、女の美しい器量に対してちよつと愛嬌が必要になったと見えて、「あなたのにして持つていらつしやい、進上しますから」とあたかも少女の喜びを予想したような事を云った。女は一口の答もせず黙つてその手巾を指先でつまんだまま暖炉の傍まで行っていきなりそれを火の中へ投げ込んだ。ダナンチオは別にしてその他の席に居合せたものはことごとく微笑を洩らした。

僕はこの話を聞いた時、年の若い茶褐色の髪毛を有った以太利生れの美人を思い浮べる

よりも、その代りとしてすぐ千代子の眼と眉まゆを想像した。そうしてそれがもし千代子でなくって妹の百代子であつたなら、たとい腹の中はどうあらうとも、その場合は礼を云つて快よく手巾を貰い受けたに違いあるまいと思つた。ただ千代子にはそれができないのである。

口の悪い松本の叔父はこの姉妹きょうだいに渾名あだなをつけて常に大蝦蟇おおがまと小蝦蟇ちいがまと呼んでいる。

二人の口が唇くちびるの薄い割に長過ぎるところが銀貨入れの蟄がまぐち口だと云つては常に二人を笑わせたり怒らせたりする。これは性質に關係のない顔形の話であるが、同じ叔父が口癖のうちにこの姉妹を評して、小蟄ちいがまはおとなしくつて好いが、大蟄おおがまは少し猛烈過ぎると云うのを聞きたびに、僕はあの叔父がどう千代子を觀察しているのだらうと考えて、必ず彼の眼識うたがいしに疑うたがを挟いさみたくなる。千代子の言語なり挙動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野なところを内に蔵かくしているからではなくつて、余り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げかけるからだと僕は固く信じて疑がわないのである。彼女の有もつてゐる善悪是非の分別はほとんど学問や経験と独立している。ただ直覺的に相手を目当に燃え出すだけである。それだから相手は時によると稲妻いなずまに打たれたような思いをする。当りの強く烈はげしく来るのは、彼女の胸から純粹な塊かたまりが一度に多量に飛んで出るという意味で、刺とげだの毒だの腐蝕ふしょく剤だのを吹きかけたり浴びせかけたりするのはまるで訳が

違う。その証拠にはたといどれほど烈しく怒られても、僕は彼女から清いもので自分の腸を洗われたような気持のした場合が今までに何遍もあった。気高いものに出会ったという感じさえ稀には起したくらいである。僕は天下の前になだ一人立って、彼女はあらゆる女のうちでもっとも女らしい女だと弁護したいくらいに思っている。

十二

これほど好く思っている千代子を妻としてどこが不都合なのか。——実は僕も自分で自分の胸にこう聞いた事がある。その時理由も何もまだ考えない先に、僕はまず恐ろしくなった。そうして夫婦としての二人を長く眼前に想像するにたえなかった。こんな事を母に云ったら定めし驚ろくだろう、同年輩の友達に話してもあるいは通じないかも知れない。けれども強いて沈黙のなかに記憶を埋める必要もないから、それを自分だけの感想に止めないでここに自白するが、一口に云うと、千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。そうして僕は恐ろしい事だけ知った男なのである。だからただ釣り合わないばかりでなく、夫婦となればまさに逆にでき上るよりほかに仕方がないのである。

僕は常に考えている。「純粋な感情ほど美しいものはない。美しいもののほど強いものはない」と。強いものが恐れないのは当たり前である。僕がもし千代子を妻にするとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪えられないだろう。その光は必ずしも怒を示すとは限らない。情の光でも、愛の光でも、もしくは渴仰の光でも同じ事である。僕はきつとその光のために射竦められるにきまつている。それと同程度あるいはより以上の輝くものを、返礼として彼女に与えるには、感情家として僕が余りに貧弱だからである。僕は芳烈な一樽の清酒を貰つても、それを味わい尽くす資格を持たない下戸として、今日まで世間から教育されて来たのである。

千代子が僕のところへ嫁に来れば必ず残酷な失望を経験しなければならない。彼女は美しくしい天賦の感情を、あるに任せて惜気もなく夫の上に注ぎ込む代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上的の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から予期するに違いない。年のいかない、学問の乏しい、見識の狭い点から見ると気の毒と評して然るべき彼女は、頭と腕を挙げて実世間に打ち込んで、肉眼で指す事のできる権力か財力を攫まなくつては男子でないと考えている。単純な彼女は、たとい僕のところへ嫁に来て、やはりそう云う働きぶりを僕から要求し、また要求さえすれば僕にできるも

のとのみ思いつめている。二人の間に横たわる根本的の不幸はここに存在すると云つてもさしつかへ差支ないのである。僕は今云つた通り、妻としての彼女の美くしい感情を、そう多量に受け入れる事のできない至つて燻ぶつた性質^{たち}のだが、よし焼石に水を濺^{そそ}いだ時のように、それをことごとく吸い込んだところで、彼女の望み通りに利用する訳にはとても行かない。もし純粹な彼女の影響が僕のどこかに表われるとすれば、それはいくら説明しても彼女には全く分らないところに、思いも寄らぬ形となつて発現するだけである。万一彼女の眼にとまつても、彼女はそれをコスメチックで塗り堅めた僕の頭や羽^{はぶ}二重^{たえ}の足袋^{たび}で包んだ僕の足よりもありがたがらないだろう。要するに彼女から云えば、美くしいものを僕の上に永久浪費して、しだいしだいに結婚の不幸を嘆くに過ぎないのである。

僕は自分と千代子を比較することに、必ず恐れない女と恐れる男という言葉くり返したくなる。しまいにはそれが自分の作つた言葉でなくつて、西洋人の小説にそのまま出ているような気を起す。この間講釈好きの松本の叔父から、詩と哲学の区別を聞かされて以来は、恐れない女と恐れる男というと、たちまち自分に縁の遠い詩と哲学を想^{おも}い出す。叔父は素^{しろうと}人学問ながらこんな方面に興味を有^もっているだけに、面白い事をいろいろ話して聞かしたが、僕を捕^{つか}まえて「御前のような感情家は」と暗^{あん}に詩人らしく僕を評したのは間

違っている。僕に云わせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思い切った事のできずにぐずぐずしているのは、何より先に結果を考えて取越苦勞とりこしぐらうをするからである。千代子が風のごとく自由に振舞うのは、先の見えないほど強い感情が一度に胸に湧き出るからである。彼女は僕の知っている人間のうちで、最も恐れない一人である。だから恐れる僕を輕蔑けいべつするのである。僕はまた感情という自分の重みで、つまずきそうな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐れむのである。否、時によると彼女のために戦慄せんりつするのである。

十三

須永すながの話の末段は少し敬太郎けいたろうの理解力を苦しめた。事実を云えば彼はまた彼なりに詩人とも哲学者とも云い得る男なのかも知れなかった。しかしそれは傍から彼を見た眼の評する言葉で、敬太郎自身はけっしてどっちとも思っていないかった。したがって詩とか哲学とかいう文字も、月の世界でなければ役に立たない夢のようなものとして、ほとんど一顧に値あたしないくらいに見限みかぎっていた。その上彼は理窟りくつが大嫌いであつた。右か左へ自分の身か

体を動かし得ないただの理窟は、いくら旨くできても彼には用のない贗造紙幣と同じ物であった。したがって恐れる男とか恐れない女とかいう辻占に似た文句を、黙って聞いているはずはなかったのだが、しつとりと潤った身の上話の続きとして、感想がそこへ流れ込んで来たものだから、敬太郎もよく解らないながら素直に耳を傾むけなければすまなかったのである。

須永もそこに気がついた。

「話が理窟張ってむずかしくなつて来たね。あんまり一人で調子に乗って饒舌っているものだから」

「いや構わん。大変面白い」

「洋杖の効果がありませんか」

「どうも不思議にあるようだ。ついでにもう少し先まで話す事にしようじゃないか」

「もう無いよ」

須永はそう云い切つて、静かな水の上に眼を移した。敬太郎もしばらく黙っていた。不思議にも今聞かされた須永の詩だか哲学だか分らないものが、形の判然しない雲の峰のように、頭の中に聳えて容易に消えそうにしなかった。何事も語らないで彼の前に坐つて

いる須永自身も、平生の紋切形もんきりがたを離れた怪しい一種の人物として彼の眼に映じた。どうしてもまだ話の続きがあるに違いないと思つた敬太郎は、今の一番しまいの物語はいつごろの事かと須永に尋ねた。それは自分の三年生ぐらいの時の出来事だと須永は答えた。敬太郎は同じ関係が過去一年余りの間にどういふ径路を取つてどう進んで、今はどんな解釈がついてゐるかと聞き返した。須永は苦笑して、まず外へ出てからにしようと言つた。二人は勘定かんじようを済まして外へ出た。須永は先へ立つ敬太郎の得意に振り動かす洋杖の影を見てまた苦笑した。

柴又しばまたの帝釈天たいしゃくてんの境内けいだいに來た時、彼らは平凡な堂宇どううを、義理に拝ませられたような顔をしてすぐ門を出た。そうして二人共汽車を利用してすぐ東京へ帰ろうという氣を起した。停車場ステーションへ來ると、間怠まだるこい田舎汽車いなかの発車時間にはまだだいぶ間まがあつた。二人はすぐそこにある茶店に入つて休息した。次の物語はその時敬太郎が前約たてを楯に須永から聞かして貰つたものである。――

僕が大学の三年から四年に移る夏休みの出来事であつた。宅うちの二階に籠こもつてこの暑中をどう暮らしたら宜よかろうと思案していると、母が下から上あがつて來て、閑ひまになったら鎌倉へちよつと行つて來たらどうだと云つた。鎌倉にはその一週間ほど前から田口のものが避暑

に行つていた。元来叔父は余り海辺うみべを好まない性質たちなので、一家いっけのものは毎年輕井沢の別荘へ行くのを例にしていたのだが、その年は是非海水浴がしたいと云う娘達の希望いを容れて、材木座にある、ある人の邸宅やしきを借り入れたのである。移る前に千代子が暇いとま乞こかたがた報知しらせに来て、まだ行つては見ないけれども、山陰の涼しい崖がけの上に、二段か三段に建てた割合手広な住居すまいだそうだから是非遊びに來いと母に勧めていたのを、僕は傍そばで聞いていた。それで僕は母にあなたこそ行つて遊んで來たら氣保養きぼようになつてよかろうと忠告した。母は懷ふところから千代子の手紙を出して見せた。それには千代子と百代子の連名で、母と僕にいつしよに來るようにと、彼らの女親の命令を伝えるごとく書いてあつた。母が行くとすれば年寄一人を汽車に乗せるのは心配だから、是非共僕がついて行かなければならなかつた。變へんくつ窟くつな僕からいうと、そう混ごたごた雑ざつした所へ二人で押しかけるのは、世話にならないにしても氣の毒で厭いやだつた。けれども母は行きたいような顔をした。そうしてそれが僕のために行きたいような顔に見えるので僕はますます厭いやになつた。が、とどのつまりとうとう行く事にした。こう云つても人には通じないかも知れないが、僕は意地の強い男で、また意地の弱い男なのである。

十四

母は内気な性分なので平生へいぜいから余り旅行を好まなかった。昔風に重きをおかなければ承知しない厳格な父の生きている頃は外へもそうたびたびは出られない様子であつた。現に僕は父と母が娯樂の目的をもつていつしよに家を留守にした例を覚えていない。父が死んで自由が利きくようになってからも、そう勝手な時に好きな所へ行く機会是不幸にして僕之母には与えられなかつた。一人で遠くへ行つたり、長く宅うちを空あけたりする便宜べんぎを有たない彼女は、母子おやこ二人の家庭にこうして幾年を老いたのである。

鎌倉へ行こうと思ひ立つた日、僕は彼女のために一個の鞆かばんを携たずえて直ちよう行の汽車に乗つた。母は車の動き出す時、隣に腰をかけた僕に、汽車も久しぶりだねと笑ひながら云つた。そう云われた僕にも実は余り頻ひん繁な經驗ではなかつた。新らしい氣分に誘われた二人の会話は平生ふだんよりは生いき々いきしていた。何を話したか自分にもいつこゝ覚えのない事を、聞いたり聞かれたりして断続に任せているうちに車は目的地に着いた。あらかじめ通知をしてないので停車場ステーションには誰も迎むかへに来ていなかったが、車を雇うとき某なにがしさんの別荘と注意したら、車夫はすぐ心得て引き出した。僕はしばらく見ないうちに、急に新らしい家の多

くなつた砂道を通りながら、松の間から遠くに見える畠^{はたなか}中の黄色い花を美しく眺^{なが}めた。それはちよつと見るとまるで菜種の花と同じ趣^{おもむき}を具えた目新らしいものであつた。僕は車の上で、このちらちらする色は何だろうと考え抜いた揚句^{あげく}、突然唐茄子^{とうなす}だと気がついたので独^{ひと}りおかしがつた。

車が別荘の門に着いた時、戸障子^{としようじ}を取り外した座敷の中に動く人の影が往来からよく見えた。僕はそのうちに白い浴衣^{ゆかた}を着た男のいるのを見て、多分叔父が昨日^{きのう}あたり東京から来て泊つてゐるのだらうと思つた。ところが奥にいるものがことごとく僕らを迎えるために玄關へ出て来たのに、その男だけは少しも顔を見せなかつた。もちろん叔父ならそのくらしい事はあるべきはずだと思つて、座敷へ通つて見ると、そこにも彼の姿は見えなかつた。僕はきよろきよろしているうちに、叔母と母が汽車の中はさぞ暑かつたろうとか、見晴しの好い所が手に入つて結構だとか、年寄の女だけに口数^{くちかず}の多い挨拶^{あいさつ}のやりとりを始めた。千代子と百代子は母のために浴衣を勧めたり、脱ぎ捨てた着物を晒干^{さほ}してくれたりした。僕は下女に風呂場へ案内して貰つて、水で顔と頭を洗つた。海岸からはだいぶ道^{みち}程^{ちのり}のある山手だけれども水は存外悪かつた。手拭^{てぬぐい}を絞^{しぼ}つて金盥^{かなだら}の底を見てみると、たちまち砂のような滓^{おり}が澱^{おと}んだ。

「これを御使いなさい」という千代子の声が突然後でした。振り返ると、乾いた白いタオルが肩の所に出ていた。僕はタオルを受取つて立ち上った。千代子はまた傍にある鏡台の抽出から櫛を出してくれた。僕が鏡の前に坐つて髪を解かしている間、彼女は風呂場の入口の柱に身体を持たして、僕の濡れた頭を眺めていたが、僕が何も云わないので、向うから「悪い水でしょう」と聞いた。僕は鏡の中を見たなり、どうしてこんな色が着いているのだらうと云つた。水の問答が済んだとき、僕は櫛を鏡台の上に置いて、タオルを肩にかけたまま立ち上った。千代子は僕より先に柱を離れて座敷の方へ行こうとした。僕は藪から棒に後から彼女の名を呼んで、叔父はどこにいるかと尋ねた。彼女は立ち止まつて振り返つた。

「御父さんは四五日前ちよつといらしたけど、一昨日また用が出来たつて東京へ御帰りになつたぎりよ」

「ここにやいないのかい」

「ええ。なぜ。ことによると今日の夕方吾一さんを連れて、またいらつしやるかも知れないけども」

千代子は明日もし天氣が好ければ皆と魚を漁りに行くはずになっているのだから、田口

が都合して今日の夕方までに来てくれなければ困るのだと話した。そうして僕にも是非いつしよに行けと勧めた。僕は魚の事よりも先刻^{さつき}見た浴衣^{ゆかた}がけの男の居所が知りたかった。

十五

「先刻誰だか男の人が一人座敷にいたじゃないか」

「あれ高木さんよ。ほら秋子さんの兄さんよ。知ってるでしょう」

僕は知っているともしないとも答えなかった。しかし腹の中では、この高木と呼ばれる人の何者かをすぐ了解した。百代子の学校朋輩^{ほうばい}に高木秋子という女のある事は前から承知^{しゆせき}していた。その人の顔も、百代子といっしよに撮^とった写真で知っていた。手蹟^{しゆせき}も絵端^{えは}書^{がき}で見た。一人の兄が亜米利加^{アメリカ}へ行っているのだとか、今帰って来たばかりだとかいう話もその頃耳にした。困らない家庭なのだろうから、その人が鎌倉へ遊びに来ているぐらいは怪しむに足らなかった。よしここに別荘を持っていたところで不思議はなかった。が、僕はその高木という男の住んでいる家を千代子から聞きたくなった。

「ついこの下よ」と彼女は云ったぎりであった。

「別荘かい」と僕は重ねて聞いた。

「ええ」

二人はそれ以外を語らずに座敷へ帰った。座敷では母と叔母がまだ海の色がどうだとか、大仏がどつちの見当にあたるのかというさほどでもない事を、問題らしく聞いたり教えたりしていた。百代子は千代子に彼らの父がその日の夕方までに来ると云って、わざわざ知らせて来た事を告げた。二人は明日魚を漁りに行く時の楽しみを、今眼の当りに描き出して、すでに手の内に握った人のごとく語り合った。

「高木さんもいらつしやるんでしょう」

「市さんもいらつしやい」

僕は行かないと答えた。その理由として、少し宅に用があつて、今夜東京へ帰えらなければならぬからという説明を加えた。しかし腹の中ではただでさえこう混雑しているところへ、もし田口が吾一でも連れて来たら、それこそ自分の寝る場所さえ無くなるだろうと心配したのである。その上僕は姉妹の知っている高木という男に会うのが厭だった。彼は先刻まで二人と僕の評判をしていたが、僕の来たのを見て、遠慮して裏から帰ったのだと百代子から聞いた時、僕はまず窮屈な思いを逃れて好かったと喜こんだ。僕はそ

れほど知らない人を怖がる性分なのである。

僕の帰ると云うのを聞いた二人は、驚ろいたような顔をしてとめにかかった。ことに千代子は躍起^{やつき}になった。彼女は僕を捉^{つか}まえて変人だと云った。母を一人残してすぐ帰る法はないと云った。帰ると云つても帰さないと云った。彼女は自分の妹や弟に対してよりも、僕に対しては遙^{はる}かに自由な言葉を使い得る特権を有^もっていた。僕は平生から彼女が僕に対して振舞うごとく大胆に率直に（ある時は善意ではあるが）威圧的に、他人に向つて振舞う事ができたなら、僕のような他に欠点の多いものでも、さぞ愉快に世の中を渡つて行かれるだろうと想像して、大いにこの小さな暴^{タイラント}君^{うらや}を羨ましがっていた。

「えらい権幕^{けんまく}だね」

「あなたは親不孝よ」

「じゃ叔母さんに聞いて来るから、もし叔母さんが泊つて行く方がいいって、おっしゃったら、泊つていらつしやい。ね」

百代子は仲裁を試みるような口調でこう云いながら、すぐ年寄の話している座敷の方へ立つて行つた。僕の母の意向は無論聞くまでもなかった。したがって百代子の年寄二人から齎^{もた}らした返事もここに述べるのは蛇足^{だそく}に過ぎない。要するに僕は千代子の捕虜になった

のである。

僕はやがてちよつと町へ出て来るといふ口^{いいまえ}実^{もと}の下に、午後の暑い日を洋傘^{こうもり}で遮^{さえ}ぎりながら別荘の附近を順序なく徘徊^{はいかい}した。久しく見ない土地の昔を偲^{しの}ぶためと云えば云えない事もないが、僕にそんな寂^さびた心持を嬉^{うれ}しがる風流があつたにいたところで、今はそれに耽^{ふけ}る落ちつきも余裕^{よゆう}も与えられなかつた。僕はただうろろとそこの標札を読んで歩いた。そうして比較的立派な平屋^{ひらやだて}建の門の柱に、高木の二字を認めた時、これだろうと思つて、しばらく門前に佇^{たたず}んだ。それから後は全く何の目的もなしになお緩慢^{かんまん}な歩行を約十五分ばかり続けた。しかしこれは僕が自分の心に、高木の家を見るためにわざわざ表へ出たのではないと申し渡したと同じようなものであつた。僕はさつさと引き返した。

十六

実を云うと、僕はこの高木という男について、ほとんど何も知らなかつた。ただ一遍百代子から彼が適当な配偶を求めつつある由を聞いただけである。その時百代子が、御姉さんにはどうかしらと、ちようど相談でもするように僕の顔色を見たのを覚えている。僕は

いつもの通り冷淡な調子で、好いかも知れない、御父さんか御母さんに話して御覧と云つたと記憶する。それから以後僕の田口うちの家に足を入れた度数は何遍あるか分らないが、高木の名前は少くとも僕のいる席ではついぞ誰の口にも上らなかつたのである。それほど親しみの薄い、顔さえ見た事のない男の住居すまいに何の興味があつて、僕はわざわざ砂の焼ける暑さおかを冒して外出したのだろう。僕は今日こんにちまでその理由を誰にも話さずにいた。自分自身にもその時にはよく説明ができなかつた。ただ遠くの方にある一種の不安が、僕の身体からだを動かして来たという漠ばくたる感じが胸に射さしたばかりであつた。それが鎌倉で暮らした二日の間に、紛まぎれもないある形を取つて発展した結果を見て、僕を散歩に誘い出したのもやはり同じ力に違いないと今から思うのである。

僕が別荘へ歸つて一時間経たつか経たないうちに、僕の注意した門札と同じ名前の男がたちまち僕の前に現われた。田口の叔母は、高木さんですと云つて叮てい嚙ねいにその男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊しまつた血色の好い青年であつた。年から云うと、あるいは僕より上かも知れないと思つたが、そのきびきびした顔つきを形容するには、是非共青年という文字が必要になつたくらい彼は生氣みに充ちていた。僕はこの男を始めて見た時、これは自然が反対を比較するために、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなからうか

と疑ぐつた。無論その不利益な方面を代表するのが僕なのだから、こう改たまつて引き合
わされるのが、僕にはただ悪い洒落しゃれとしか受取られなかった。

二人の容貌ようぼうがすでに意地の好くない対照を与えた。しかし様子とか応対おうたいぶりとかに
なると僕はさらにはなはだしい相違を自覚しない訳に行かなかった。僕の前にいるものは、
母とか叔母とか従妹いとことか、皆親しみの深い血属ばかりであるのに、それらに取り捲まかれて
いる僕が、この高木に比べると、かえつてどこからか客にでも来たように見えたくらい、
彼は自由に遠慮なく、しかもある程度の品格を落す危険なしに己おのれを取扱すべかう術を心得てい
たのである。知らない人を怖おそれる僕に云わせると、この男は生れるや否や交際場裏すに棄す
られて、そのまま今日まで同じ所で人と成つたのだと評したかった。彼は十分と経たない
うちに、すべての会話を僕の手から奪つた。そうしてそれをことごとく一身に集めてしま
つた。その代り僕を除のけ物ものにしないための注意を払つて、時々僕に一句か二句の言葉を与
えた。それがまた生憎あいにく僕には興味の乗らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にす
る事もできず、高木一人を相手にする訳にも行かなかった。彼は田口の叔母を親しげに御
母さん御母さんと呼んだ。千代子に対しては、僕と同じように、千代ちゃんという幼馴おきなな
染しみに用いる名を、自然に命ぜられたかのごとく使つた。そうして僕に、先ほど御着にな

った時は、ちょうど千代ちゃんとおあなたの御噂おうわさをしていたところでしたと云った。

僕は初めて彼の容貌を見た時からすでに羨ましかった。話をするところを聞いて、すぐ及ばないと思った。それだけでもこの場合に僕を不愉快にするには充分だったかも知れない。けれどもだんだん彼を観察しているうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せつけるような態度で、誇り顔に發揮するのではなからうかという疑が起った。その時僕は急に彼を憎み出した。にく。そうして僕の口を利くべき機会が廻って来てもわざと沈黙を守った。落ちついた今の気分でその時の事を回顧して見ると、こう解釈したのはあるいは僕の僻みだつたかも知らない。僕はよく人を疑ぐる代りに、疑ぐる自分も同時に疑がわずにはいられない性質だから、結局他に話をする時にもどつちと判然したところが云い悪くなるが、もしそれが本当に僕の僻み根性だとすれば、その裏面にはまだ凝結した形にならない嫉しつとが潜ひそんでいたのである。

十七

僕は男として嫉の強い方か弱い方か自分にもよく解らない。競争者のない一人息子と

してむしろ大事に育てられた僕は、少なくとも家庭のうちで嫉　を起す機会を有た^もなかつた。小学や中学は自分より成績の好い生徒が幸いにしてそう無かつたためか、至極^{しごく}太平に通り抜けたように思う。高等学校から大学へかけては、席次にさほど重きをおかないのが、一般の習慣であつた上、年ごとに自分を高く見積る見識というものが加わつて来るので、点数の多少は大した苦にならなかつた。これらをほかにして、僕はまだ痛切な恋に落ちた経験がない。一人の女を二人で争つた覚^{おぼえ}はなおさらない。自白すると僕は若い女ことに美しく若い女に対しては、普通以上に精密な注意を払い得る男なのである。往来を歩いて綺麗な顔と綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時のように晴やかな心持になる。会^{たま}にはその所有者になつて見たいと云^{かんがえ}う考も起る。しかしその顔とその着物がどうかなく変化し得るかをすぐ予想して、酔^よいが去つて急にぞつとする人のあさましさを覚え^える。僕をして執^{しゅう}念^ねく美しく美しい人に附^{つけ}纏^{まつ}わらせないものは、まさにこの酒に棄^すてられた淋しみの障害に過ぎない。僕はこの気分に移られるたびに、若い時分が突然^{としより}老人^{としより}か坊主^{おうち}に變つたのではあるまいかと思つて、非常な不愉快に陥^{おち}る。が、あるいはそれがために恋の嫉　というものを知らずにすまず事が出来たかも知れない。

僕は普通の人間でありたいという希望を有^もつてゐるから、嫉　心のないのを自慢にした

くも何ともないけれども、今話したような訳で、眼まの当りにこの高木という男を見るまでは、そういう名のつく感情に強く心を奪ためられた試ためしがなかったのである。僕はその時高木から受けた名状しがたい不快を明らかに覚えてゐる。そうして自分の所有でもない、また所有する気もない千代子が原因で、この嫉 心が燃え出したのだと思った時、僕はどうしても僕の嫉 心を抑おさえつけないければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした。僕は存在の権利を失った嫉 心を抱いだいて、誰にも見えない腹の中で苦悶くもんし始めた。幸い千代子と百代子が日が薄くなつたから海へ行くと云い出したので、高木が必ず彼らに跟ついて行くに違ちがはないと思つた僕は、早く跡に一人残りたいと願つた。彼らははたして高木を誘つた。ところが意外にも彼は何とか言訳こしらを拵こしらえて容易に立とうとしなかつた。僕はそれを僕に對する遠慮だろうと推察して、ますます眉まゆを暗くした。彼らは次に僕を誘つた。僕は固もより応じなかつた。高木の面前から一刻も早く逃のがれる機会きかいは、与えられないでも手を出して奪ういたいくらいに思つていたのだが、今の気分では二人と浜辺まで行く努力がすでに厭いやであつた。母は失望したような顔をして、いっしょに行つておいでなと云つた。僕は黙つて遠くの海の上を眺ながめていた。姉きょうだい妹は笑いながら立ち上つた。

「相変らず偏窟へんくつねあなたは。まるで腕白小僧見たいだわ」

千代子にこう罵のられた僕は、實際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたらう。僕自身も腕白小僧らしい思いをした。調子の好い高木は縁側へ出て、二人のために菅笠のように大きな麦藁帽を取つてやつて、行つていらつしやいと挨拶をした。

二人の後姿が別荘の門を出た後で、高木はなおしばらく年寄を相手に話していた。こうやつて避暑に来ていると氣樂で好いが、どうして日を送るかが大問題になつてかえつて苦痛になるなどと、實際活氣に充ちた身体を暑さと退屈さに持ち扱かっている風に見えた。やがて、これから晩まで何をして暮らそうかしらと独言のように云つて、不意に思ひ出したごとく、玉はどうですと僕に聞いた。幸いにして僕は生れてからまだ玉突という遊戲を試みた事がなかつたのですぐ断つた。高木はちやうど好い相手ができたと思つたのに残念だと云いながら歸つて行つた。僕は活潑に動く彼の後影を見送つて、彼はこれから姉妹きょうだいのいる浜辺の方へ行くに違いないという氣がした。けれども僕は坐すわっている席を動かなかつた。

高木の去った後、母と叔母はしばらく彼の噂をした。初対面の人だけに母の印象はことに深かったように見えた。気のおけない、至って行き届いた人らしいと云って賞めていた。叔母はまた母の批評を一々実例に照らして確かめる風に見えた。この時僕は高木について知り得た極めて乏しい知識のほとんど全部を訂正しなければならぬ事を発見した。僕が百代子から聞いたのでは、アメリカ加帰りという話であつた彼は、叔母の語るところによると、そうではなくて全く英吉利で教育された男であつた。叔母は英国流の紳士という言葉を誰かから聞いたと見えて、二三度それを使って、何の心得もない母を驚ろかしたのみか、だからどことなく品の善いところがあるんですよと母に説明して聞かせたりした。母はただへえと感心するのみであつた。

二人がこんな話をしている内、僕はほとんど一口も口を利かなかつた。ただ上部から見て平生の調子と何の変るところもない母が、この際高木と僕を比較して、腹の中でどう思っているだろうと考えると、僕は母に対して気の毒でもありまた恨めしくもあつた。同じ母が、千代子対僕と云う古い関係を一方に置いて、さらに千代子対高木という新しい関係を一方に想像するなら、はたしてどんな心持になるだろうと思うと、たとい少しの不安でも、避け得られるところをわざと与えるために彼女を連れ出したも同じ事になるので、

僕はただでさえ不愉快な上に、年寄にすまないという苦痛をもう一つ重ねた。

前後の模様から推すだけで、実際には事実となつて現われて来なかつたから何とも云い兼ねるが、叔母はこの場合を利用して、もし縁があつたら千代子を高木にやるつもりでいるぐらいの打明話を、僕ら母子に向つて、相談とも宣告とも片づかない形式の下に、する気だつたかも知れない。すべてに気がつく癖に、こうなるとかえつて僕よりも迂遠い母はどうだか、僕はその場で叔母の口から、僕と千代子と永久に手を別つべき談判の第一節を予期していたのである。幸か不幸か、叔母がまだ何も云い出さないうちに、姉妹は浜から広い麦藁帽の縁をひらひらさして歸つて来た。僕が僕の占いの的中しなかつたのを、母のために喜こんだのは事実である。同時に同じ出来事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない。

夕方になつて、僕は姉妹と共に東京から来るはずの叔父を停車場に迎えるべく母に命ぜられて家を出た。彼らは揃の浴衣を着て白い足袋を穿いていた。それを後から見送つた彼らの母の眼に彼らがいかなる誇として映じたらう。千代子と並んで歩く僕の姿がまた僕の母には画として普通以上にどんなに価が高かつたらう。僕は母を欺むく材料に自然から使われる自分を心苦しく思つて、門を出る時振り返つて見たら、母も叔母もまだこつちを

見ていた。

途中まで来た頃、千代子は思い出したように突然とまって、「あつ高木さんを誘うのを忘れた」と云った。百代子はすぐ僕の顔を見た。僕は足の運びを止めたが、口は開かなかった。「もう好いじゃないの、ここまで来たんだから」と百代子が云った。「だってあたし先刻誘ってくれて頼まれたのよ」と千代子が云った。百代子はまた僕の顔を見て逡巡した。

「市さんあなた時計持っていらしって。今何時」

僕は時計を出して百代子に見せた。

「まだ間に合わない事はない。誘って来るなら来ると好い。僕は先へ行って待っているから」

「もう遅いわよあなた。高木さん、もしいらっしゃるつもりならきつと一人でもいらしってよ。後から忘れまして詫言ったらそれで好かないの」

姉妹は二三度押問答の末ついに後戻りをしない事にした。高木は百代子の言通りまだ汽車の着かないうちに急ぎ足で構内へ這入って来て、姉妹に、どうも非道い、あれほど頼んでおくのにと云った。それから御母さんとは聞いた。最後に僕の方を向いて、先ほどは

と愛想の好い挨拶をした。

十九

その晩は叔父と従弟を待ち合わせた上に、僕ら母子が新たに食卓に加わったので、食事の時間がいつもより、だいぶ後れたばかりでなく、私に恐れた通りはなはだしい混雑の中に箸と茶碗の動く光景を見せられた。叔父は笑いながら、市さんまるで火事場のようだろう、しかし会にはこんな騒ぎをして飯を食うのも面白いものだよと云って、間接の言訳をした。閑静な膳に慣れた母は、この賑やかさの中に實際叔父の言葉通り愉快らしい顔をしていた。母は内気な癖にこういう陽気な席が好きなのである。彼女はその時偶然口に上った一塩にした小鰯の焼いたのを美味いと云ってしきりに賞めた。

「漁師に頼んどくといくらでも拵えて来てくれますよ。何なら、歸りに持っていращしやいな。姉さんが好きだから上げたいと思つてたんですが、ついついが無かつたもんだから、それにすぐ腐くなるんでね」

「わたしもいつか大磯で詠えてわぎわぎ東京まで持つて歸った事があるが、よっぽど気

をつけないと途中でね」

「腐るの」千代子が聞いた。

「叔母さん興津鯛御嫌。おきつだい おきらひ あたしこれよか興津鯛の方が美味いわ」と百代子が云った。

「興津鯛はまた興津鯛で結構ですよ」と母はおとなしい答をした。

ことなくくだしい会話を、僕がなぜ覚えているか云うと、僕はその時母の顔に表われた、さも満足らしい気持をよく注意して見ていたからであるが、もう一つは僕が母と同じように一塩ひとしおの小鰻こあじを好いていたからでもある。

ついでだからここで云う。僕は自分の嗜好しこうや性質の上において、母に大変よく似たところと、全く違つたところと両方有もっている。これはまだ誰にも話さない秘密だが、実は単に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分とどこがどう違つて、どこがどう似ているかの詳しい研究を人知れず重ねたのである。なぜそんな真似まねをしたかと母に聞かれては云い兼ねる。たとい僕が自分に聞き糺ただして見ても判切はつきり云えなかつたのだから、理由わけは話せない。しかし結果からいうとこうである。——欠点でも母と共に具そなえているなら僕は大変嬉うれしかった。長所でも母になくつて僕だけ有もっているとはなはだ不愉快になった。そのうちで僕の最も気になるのは、僕の顔が父にだけ似て、母とはまるで縁のない眼鼻立

にでき上っている事であつた。僕は今でも鏡を見るたびに、器量が落ちても構わないから、もつと母の人相を多量に受け継いでおいたら、母の子らしくってさぞ心持が好いだらうと思う。

食事の後れた如く、寝る時間も順繰りに延びてだいぶ遅くなった。その上急に人数が増えたので、床の位置やら部屋割をきめるだけが叔母に取つての一骨折であつた。男三人はいつしよに固められて、同じ蚊帳に寝た。叔父は肥った身体を持ち扱かつて、団扇をしきりにばたばた云わした。

「市さんどうだい、暑いじゃないか。これじゃ東京の方がよっぽど楽だね」

僕も僕の隣にいる吾一も東京の方が楽だと云つた。それでは何を苦しんでわざわざ鎌倉下りまで出かけて来て、狭い蚊帳へ押し合うように寝るんだか、叔父にも吾一にも僕にも説明のしようがなかつた。

「これも一興だ」

疑問は叔父の一句でたちまち納りがついたが、暑さの方はなかなか去らないので誰もすぐは寝つかれなかつた。吾一は若いだけに、明日の魚捕の事を叔父に向つてしきりに質問した。叔父はまた真面目だか冗談だか、船に乗りさえすれば、魚の方で風を望ん

で降くだるような旨うまい話をして聞かせた。それがただ自分の伴せがれを相手にするばかりでなく、時々はねえ市さんと、そんな事にまるで冷淡の僕まで聴手ききてにするのだから少し変であった。しかし僕の方はそれに対して相当な挨拶あいさつをする必要があるもので、話の済む前には、僕は当然同行者の一人いちにんとして受答うけこたえをするようになっていた。僕は固もとより行くつもりでも何でもなかったのだから、この変化は僕に取って少し意外の感があった。気楽そうに見える叔父はそのうち大きな鼾声いびきをかき始めた。吾一もすやすや寝入ねいった。ただ僕だけは開あいている眼をわざと閉じて、更ふけるまでいろいろな事を考えた。

二十

翌日あくるひ眼が覚さめると、隣に寝ていた吾一の姿がいつの間にかもう見えなくなっていた。僕は寝足らない頭を枕の上に着けて、夢とも思索とも名のつかない路みちを辿たどりながら、時々別種の人間を偷ぬすみ見るような好奇心をもつて、叔父の寝顔を眺ながめた。そうして僕も寝ている時は、傍はたから見ると、やはりこう苦くがない顔をしているのだろうかと考えなどした。そこへ吾一が這入はいって来て、市さんどうだろう天気はと相談した。ちよつと起きて見ると促うなが

すので、起き上つて縁側へ出ると、海の方には一面に柔かい靄の幕がかかつて、近い岬の木立さえ常の色には見えなかった。降つてるのかねと僕は聞いた。吾一はすぐ庭先へ飛び下りて、空を眺め出したが、少し降つてると答えた。

彼は今日の船遊びの中止を深く氣遣うものごとく、二人の姉まで縁側へ引張出して、しきりにどうだろうどうだろうをくり返した。しまいに最後の審判者たる彼の父の意見を必要と認めたものか、まだ寝ている叔父をとうとう呼び起した。叔父は天気などはどうでも好いと云つたような眠たい眼をして、空と海を一応見渡した上、なにこの模様なら今にきつと晴れるよと云つた。吾一はそれで安心したらしかつたが、千代子は当にならな無責任な天気予報だから心配だと云つて僕の顔を見た。僕は何とも云えなかった。叔父は、なに大丈夫大丈夫と受合つて風呂場の方へ行つた。

食事を済ます頃から霧のような雨が降り出した。それでも風がないので、海の上は平生よりもかえつて穏やかに見えた。あいにくな天気なので人の好い母はみんなに気の毒がつた。叔母は今にきつと本降になるから今日は止したが好かうと注意した。けれども若いものはことごとく行く方を主張した。叔父はじゃ御婆さんだけ残して、若いものが揃つて出かける事にしようと云つた。すると叔母が、では御爺さんはどっちになさるのとわざと

叔父に聞いて、みんなを笑わした。

「今日はこれでも若いものの部だよ」

叔父はこの言葉を証^{しやう}拠^こ立てるためだか何だか、さつそく立つて浴衣^{ゆかた}の尻^{はし}を端折^{しよ}つて下へ降りた。姉^{きやうだい}弟^{だい}三人もそのままの姿で縁から降りた。

「御前達も尻^{まく}を捲^{まく}るが好い」

「厭^{いや}な事」

僕は山賊のような毛脛^{けずね}を露出^{むきだ}にした叔父と、静御前^{しずかごぜん}の笠^{かさ}に似た恰好^{かつこう}の麦藁^{むぎわら}帽^{ぼう}を被^{かぶ}つた女二人と、黒い兵児帯^{へこおび}をこま結びにした弟を、縁の上から見下して、全く都離れのした不思議な団体のごとく眺^{なが}めた。

「市^{いっ}さんがまた何か悪口を云おうと思つて見ている」と百代子が薄笑いをしながら僕の顔を見た。

「早く降りていらつしやい」と千代子が叱るように云つた。

「市さんに悪い下駄^{げた}を貸して上げるが好い」と叔父が注意した。

僕は一も二もなく降りたが、約束のある高木が来ないので、それがまた一つの問題になった。おかたこの天気だから見合わしているのだろうと云うのが、みんなの意見なので、

僕らがそろそろ歩いて行く間に、吾一が馳^{かけ}足^{あし}で迎^{むか}えに行^いつて連れて来る事にした。

叔父は例の調子でしきりに僕に話しかけた。僕も相手になつて歩調を合せた。そのうちに、男の足だものだから、いつの間にか姉^{きょうだい}妹^いを乗り越した。僕は一度振り返つて見たが、二人は後^{おく}れた事にいつこう頓^{とん}着^{じゃく}しない様子で、毫^{ごう}も追いつこうとする努力を示さなかつた。僕にはそれがわざと後^{あと}から来る高木を待ち合わせるためのようになしか取れなかつた。それは誘つた人に対する礼儀として、彼らの取るべき当然の所作^{しよさ}だつたのだろう。しかしその時の僕にはそう思えなかつた。そう思う余地があつても、そうは感ぜられなかつた。早く来いという合図をしようという考で振り向いた僕は、合図を止^やめてまた叔父と歩き出した。そうしてそのまま小坪^{こつぼ}へ這^{はい}入る入口の岬^{みさき}の所まで来た。そこは海へ出^で張^ばつた山の裾^{すそ}を、人の通れるだけの狭い幅^{はば}に削^{けず}つて、ぐるりと向う側へ廻り込まれるようにした坂道であつた。叔父は一番高い坂の角まで来てとまつた。

二十一

彼は突然彼の体格に相応した大きな声を出して姉妹を呼んだ。自白するが、僕はそれま

でに何度も後を振り返つて見ようとしたのである。けれども気が咎めると云うのか、自尊心が許さないと云うのか、振り向こうとするごとに、首が猪のように堅くなつて後へ回らなかつたのである。

見ると二人の姿はまだ一町ほど下にあつた。そうしてそのすぐ後に高木と吾一が続いてゐた。叔父が遠慮のない大きな声を出して、おおいと呼んだ時、姉妹は同時に僕らを見上げたが、千代子はすぐ後にいる高木の方を向いた。すると高木は被つていた麦藁帽を右の手に取つて、僕らを目当にしきりに振つて見せた。けれども四人のうちで声を出して叔父に応じたのはただ吾一だけであつた。彼はまた学校で号令の稽古でもしたものと見えて、海と崖に反響するような答と共に両手を一度に頭の上に差し上げた。

叔父と僕は崖の鼻に立つて彼らの近寄るのを待った。彼らは叔父に呼ばれた後も呼ばれない前と同じ遅い歩調で、何か話しながら上つて来た。僕にはそれが尋常でなくつて、大いにふざけているように見えた。高木は茶色のだぶだぶした外套のようなものを着て時々隠袋へ手を入れた。この暑いのにまさか外套は着られまいと思つて、最初は不思議に眺めていたが、だんだん近くなるに従がつて、それが薄い雨除である事に気がついた。その時叔父が突然、市さんヨットに乗つてそこいらを遊んで歩くのも面白いだろうねと云

つたので、僕は急に気がついたように高木から眼を転じて脚の下を見た。すると磯に近い所に、真白に塗った空船が一艘、静かな波の上に浮いていた。糠雨とまでも行かない細かいものがなお降りやまないもので、海は一面に暈されて、平生なら手に取るように見える向う側の絶壁の樹も岩も、ほとんど一色に眺められた。そのうち四人はようやく僕らの傍まで来た。

「どうも御待たせ申しまして、実は髭を剃っていたものだから、途中でやめる訳にも行かず……」と高木は叔父の顔を見るや否や云訳をした。

「えらい物を着込んで暑ありませんか」と叔父が聞いた。

「暑くつたつて脱ぐ訳に行かないのよ。上はハイカラでも下は蛮殻なんだから」と千代子が笑った。高木は雨外套の下に、直に半袖の薄い襯衣を着て、変な半洋袴から余った脛を丸出しにして、黒足袋に俎下駄を引っかけていた。彼はこの通りと雨外套の下を僕らに示した上、日本へ帰ると服装が自由で貴女の前でも気兼ねがなくって好いと云っていた。

一同がそろそろ揃って道幅の六尺ばかりな汚苦しい漁村に這入ると、一種不快な臭がみんなの鼻を撲った。高木は隠袋から白い手巾を出して短かい髭の上を掩った。叔父は

突然そこに立つて僕らを見ていた子供に、西の者で南の方から養子に來たものの宅はどこだと奇体な質問を掛けた。子供は知らないと言った。僕は千代子に何でそんな妙な聞き方をするのかと尋ねた。昨夕聞き合せに人をやった家の主人が云うには、名前は忘れたからこれこれの男と云つて探して歩けば分ると教えたからだと言代子が話して聞かした時、僕はこの呑氣な教え方と、同じく呑氣な聞き方を、いかにも余裕なくこせついている自分と比べて見て、妙に羨ましく思つた。

「それで分るんでしょうか」と高木が不思議な顔をした。

「分つたらよっぽど奇体だわね」と千代子が笑つた。

「何大丈夫分るよ」と叔父が受合つた。

吾一は面白半分人の顔さえ見れば、西のもので南の方から養子に來たものの宅はどこだと聞いては、そのたびにみんなを笑わした。一番しまいに、編笠を被つて白い手甲と脚絆を着けた月琴弾の若い女の休んでいる汚ない茶店の婆さんに同じ問をかけたなら、婆さんは案外にもすぐそこだと容易く教えてくれたので、みんながまた手を拍つて笑つた。それは往来から山手の方へ三級ばかりに仕切られた石段を登り切つた小高い所にある小さい藁葺の家であつた。

二十二

この細い石段を思い思いの服装なりをした六人が前後してぞろぞろ登る姿は、傍はたで見えていた
ら定めし変なものだつたろうと思う。その上六人のうちで、これから何をするか明瞭はつきりした
者を有もつていたものは誰もないのだからはなはだ氣樂である。肝心かんじんの叔父さえただ船に
乗る事を知っているだけで、後は綱だか釣だか、またどこまで漕こいで出るのかいつこう弁
別きまえないらしかった。百代子の後あとから足の力で擦すり減へらされて凹みの多くなつた石段を踏
んで行く僕はこんな無意味な行動に、己おのれを委ゆたねて悔いないところを、避暑おもむきの趣おもむきでも云
うのかと思いつつ上のぼつた。同時にこの無意味な行動のうちに、意味ある劇の大切な一幕が、
ある男とある女の間に暗あんに演ぜられつつあるのでは無かろうかと疑ぐつた。そうしてその
一幕の中で、自分の務つとめなければならぬ役割がもしあるとすれば、穩おだやかな顔をした運命
に、軽く翻ほんろ弄ろうされる役割よりほかにあるまいと考えた。最後に何事も打算しないでただ
無雑作むぞうさにやって除のける叔父が、人に氣のつかないうちに、この幕を完成するとしたら、彼
こそ比類のない巧妙な手際てぎわを有もつた作者と云わなければなるまいという氣を起した。僕の

頭にこういう影が射した時、すぐ後から跟いて上つて来る高木が、これじゃ暑くつてたまらない、御免蒙つて雨衣を脱ごうと云い出した。

家は下から見たよりもなお小さくて汚なかつた。戸口に杓子が一つ打ちつけてあつて、それに百日風邪吉野平吉一家一同と書いてあるので、主人の名がようやく分つた。それを見つて出して、みんなに聞こえるように読んだのは、目敬い吾一の手柄であつた。中を覗くと天井も壁もことごとく黒く光つていた。人間としては婆さんが一人いたぎりである。その婆さんが、今日は天気がよくないので、おおかたおいでじやあるまいと云つて早く海へ出ましたから、今浜へ下りて呼んできましようと言ひを述べた。舟へ乗つて出たのかねと叔父が聞くと、婆さんは多分あの船だろうと答えて、手で海の上を指した。霧はまだ晴れなかつたけれども、先刻よりは空がだいぶん明るくなったので、沖の方は比較的判切見える中に、指された船は遠くの向うに小さく横わつていた。

「あれじゃ大変だ」

高木は携えて来た双眼鏡を覗きながらこう云つた。

「随分呑気ね、迎いに行くつて、どうしてあんな所へ迎に行けるんでしょう」と千代子は笑いながら、高木の手から双眼鏡を受取つた。

婆さんは何直じきですと答えて、草履ぞうりを穿はいたまま、石段を馳かけ下りて行つた。叔父は田舎者もは氣樂だなど笑つていた。吾一は婆さんの後あとを追かけた。百代子はぼんやりして汚いつぽない縁へ腰をおろした。僕は庭を見廻した。庭という名のもったいなく聞こえる縁先は五坪にも足りなかった。隅すみに無花果いちじくが一本あつて、腥なまぐさい空氣の中に、青い葉を少しばかり茂らしていた。枝にはまだ熟しない実みが云い訳わけほど結なつて、その一本の股またの所に、空からの虫籠むしかごがかかつていた。その下には瘡やせた鶏が二三羽むやみに爪を立てた地面の中を餓うえた嘴くちばしでつついていた。僕はその傍そばに伏せてある鉄網かなあみの鳥籠とりかごらしいものを眺めて、その恰好かつこうがちやうど仏手柑ぶしゅかんのごとく不規則ふきそに歪ゆがんでいるのに一種滑稽こっけいな思ひをした。すると叔父が突然、何分臭くさいねと云い出した。百代子は、あたしもう御魚なんかどうでも好いから、早く歸りたくなつたわと心細そうな声を出した。この時まで双眼鏡で海の方を見ながら、断たえず千代子と話していた高木はすぐ後うしろを振り返つた。

「何をしているだろう。ちよつと行つて様子を見て来ましょう」

彼はそう云いながら、手に持った雨外套レインコートと双眼鏡を置くために後の縁うしろを顧かえりみた。傍そばに立つた千代子は高木の動かない前に手を出した。

「こつちへ御出しなさい。持つてるから」

そうして高木から二つの品を受け取った時、彼女は改めてまた彼の半袖姿を見て笑いながら、「とうとう蛭殻ばんからになったのね」と評した。高木はただ苦笑しただけで、すぐ浜の方へ下りて行つた。僕はさも運動家らしく発達した彼の肩の肉が、急いで石段を下りるために手を振ることに動く様を後から無言のまま注意して眺めた。

二十三

船に乗るためにみんなが揃そろつて浜に下り立ったのはそれから約一時間の後であつた。浜には何の祭の前か過すぎか、深く砂の中に埋められた高い幟のぼりの棒が二本僕の眼を惹ひいた。吾一はどこからか磯いそへ打ち上げた枯枝を拾つて来て、広い砂の上に大きな字と大きな顔をいくつも並べた。

「さあ御乗り」と坊主頭の船頭が云つたので、六人は順序なくごたごたに船縁ふなべりから這は上つた。偶然の結果千代子と僕は後あとのものに押されて、仕切りの付いた舳へさきの方に二人膝ひざを突き合せて坐つた。叔父は一番先に、胴どうの間まというのか、真中の広い所に、家かちよう長らしく胡坐あぐらをかいてしまった。そうして高木をその日の客として取り扱うつもりか、さあどうぞ

と案内したので、彼は否^{いや}応^{おう}なしに叔父の傍^{そば}に座を占めた。百代子と吾一は彼らの次の間^まと云ったような仕切の中に船頭といつしよに這入った。

「どうですこつちが空^すいてますからいらつしやいませんか」と高木はすぐ後^{うしろ}の百代子を顧^{かえり}みた。百代子はあるがとうといったきり席を移さなかった。僕は始めから千代子と一つ薄^う縁^{すべり}の上に坐るのを快く思わなかった。僕の高木に対して嫉妬^{しつと}を起した事はすでに明かに
告白しておいた。その嫉妬は程度において昨日^{きのう}も今日^{きょう}も同じだったかも知れないが、それと共に競争心はいまだかつて微塵^{みじん}も僕の胸に萌^もさなかったのである。僕も男だからこれから先いつどんな女^まを的^{まと}に劇烈な恋^{おちい}に陥^{おち}らないとも限らない。しかし僕は断言する。もしその恋と同じ度合の劇烈な競争をあえてしなければ思う人が手に入らないなら、僕はどんな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を懷^{ふとこ}ろにして恋人を見棄^ひててしまつつもりでいる。男らしくないとも勇氣に乏しいとも、意志が薄弱だとも、他^{ひと}から評^ひしたらどうにでも評されるだろう。けれどもそれほど切ない競争をしなければわがものにできにくいほど、どつちへ動いても好い女なら、それほど切ない競争に価^{あたい}しない女だとして僕には認められないのである。僕には自分^なに靡^{なび}かない女を無理に抱^だく喜^きこびよりは、相手の恋を自由の野に放つてやつた時の男らしい気分^{きぶん}で、わが失恋の瘡^{きず}痕^{あと}を淋^{さみ}しく見つめている方が、どのくらい良

心に対して満足が多いか分らないのである。

僕は千代子にこう云った。――

「千代ちゃん行っちゃどうだ。あっちの方が広くつて楽なようだから」

「なぜ、ここにいちや邪魔なの」

千代子はそう云ったまま動こうとしなかった。僕には高木がいるからあっちへ行けというのだというような説明は、露骨と聞こえるにしろ、厭味と受取られるにしろ、全く口にする勇氣は出なかった。ただ彼女からこう云われた僕の胸に、一種の嬉しさが閃めいたのは、口と腹とどう裏表になつてゐるかを曝露する好い証拠で、自分で自分の薄弱な性情を自覚しない僕には痛い打撃であつた。

昨日会つた時よりは気のせいかな少し控目になつたように見える高木は、千代子と僕の間につつたこの問答を聞きながら知らぬふりをしてゐた。船が磯を離れたとき、彼は「好い案排に空模様が直つて来ました。これじゃ日がかんかん照るよりかえつて結構です。船遊びには持つて来いという御天気で」というような事を叔父と話し合つたりした。叔父は突然大きな声を出して、「船頭、いったい何を捕るんだ」と聞いた。叔父もその他のものも、この時まで何を捕るんだかいつこう知らずにいたのである。坊主頭の船頭は、粗末

な言葉で、蛸たこを捕るんだと答えた。この奇抜な返事には千代子も百代子も驚ろくよりもおかしかったと見えて、たちまち声を出して笑った。

「蛸はどこにいるんだ」と叔父がまた聞いた。

「ここいらにいるんだ」と船頭はまた答えた。

そうして湯屋の留とめ桶おけを少し深くしたような小判形こばんなりの桶の底に、硝子ガラスを張ったものを水に伏せて、その中に顔を突込つっこむように押し込みながら、海の底を覗のぞき出した。船頭はこの妙な道具を鏡かがみと称となえて、二つ三つ余分に持ち合わせたのを、すぐ僕らに貸してくれた。第一にそれを利用したのは船頭の傍そばに座を取った吾一と百代子であつた。

二十四

鏡がそれからそれへと順々に回つた時、叔父はこりや鮮あざやかだね、何でも見えると非道ひどく感心していた。叔父は人間社会の事に大抵通じているせいか、万よろずに高たかを括くくる癖に、こういう自然界の現象に襲おそわれるとじき驚ろく性質たちなのである。自分は千代子から渡された鏡を受け取つて、最後に一枚の硝子越に海の底を眺めたが、かねて想像したと少しも異なる

ところのない極^{きわ}めて平凡な海の底が眼に入^いっただけである。そこには小さい岩が多少の凸^と凹^{つお}を描いて一面に連^{つら}なる間に、蒼黒い藻草^{あおくろ もくさ}が限りなく蔓延^{はびこ}っていた。その藻草があたかも生温^{なまぬ}るい風に颯^{さふ}られるように、波のうねりで静かにまた永久に細長い茎を前後に揺^{うご}かした。

「市^{いっ}さん蛸^{たこ}が見えて」

「見えない」

僕は顔を上げた。千代子はまた首を突^つ込^こんだ。彼女の被^{かぶ}っていたへなへなの麦藁^{むぎわら}帽子^{ぼうし}の縁^{ふち}が水に浸^{つか}つて、船頭に操^{あや}つられる船の勢に逆^{さか}らうたびに、可憐な波をちよろちよろ起した。僕はその後に見える彼女の黒い髪と白い頸^{くび}筋^{すじ}を、その顔よりも美しく眺^{なが}めていた。

「千代ちゃんには、目^め付^つかったかい」

「駄目^{たこ}よ。蛸^{たこ}なんかどこにも泳いでいやしないわ」

「よつぽど慣れないとなかなか目^め付^つける訳に行かないんだそうです」

これは高木が千代子のために説明してくれた言葉であった。彼女は両手^{おけ}で桶^{おき}を抑えたまま、船縁^{ふなべり}から乗り出した身体^{からだ}を高木の方へ捻^ねじ曲^まげて、「道理^{どうれ}で見えないのね」といっ

たが、そのまま水に戯れるように、両手で抑えた桶をぶくぶく動かしていた。百代子が向うの方から御姉さんと呼んだ。吾一は居所も分らない蛸をむやみに突き廻した。突くには二間ばかりの細長い女竹の先に一種の穂先を着けた変なものをを用いるのである。船頭は桶を歯で銜えて、片手に棹を使いながら、船の動いて行くうちに、蛸の居所を探しあててや否や、その長い竹で巧みにぐにやぐにやした怪物を突き刺した。

蛸は船頭一人の手で、何正も船の中にながったが、いずれも同じくらいな大ききで、これはと驚ろくほどのものはなかった。始めのうちこそ皆珍らしがって、捕れるたびに騒いで見たが、しまいにはさすが元氣な叔父も少し飽きて来たと見えて、「こう蛸ばかり捕っても仕方がないね」と云い出した。高木は煙草を吹かしながら、舟底にかたまつた獲物を眺め始めた。

「千代ちゃん、蛸の泳いでるところを見た事がありますか。ちよつと来て御覧なさい、よっぽど妙ですよ」

高木はこう云つて千代子を招いたが、傍に坐っている僕の顔を見た時、「須永さんどうです、蛸が泳いでいますよ」とつけ加えた。僕は「そうですか。面白いでしょう」と答えたり直席を立とうともしなかった。千代子はどれと云いながら高木の傍へ行つて新らし

い座を占めた。僕は故の所から彼女にまだ泳いでるかと尋ねた。

「ええ面白いわ、早く来て御覧なさい」

蛸は八本の足を真直に揃えて、細長い身体を一気にすすつと区切りつつ、水の中を一直線に船板に突き当るまで進んで行くのであった。中には烏賊のように黒い墨を吐くのも交っていた。僕は中腰になつてちよつとその光景を覗いたなり故の席に戻つたが、千代子はそれぎり高木の傍を離れなかつた。

叔父は船頭に向つて蛸はもうたくさんだと云つた。船頭は帰るのかと聞いた。向うの方に大きな竹籃のようなものが二つ三つ浮いていたので、蛸ばかりで淋しいと思つた叔父は、船をその一つの側へ漕ぎ寄せさせた。申し合せたように、舟中立ち上つて籃の内を覗くと、七八寸もあらうと云う魚が、縦横に狭い水の中を駆け廻っていた。その或ものは水の色を離れない蒼い光を鱗に帯びて、自分の勢で前後左右に作る波を肉の裏に透すように輝やいた。

「一つ掬つて御覧なさい」

高木は大きな掬網の柄を千代子に握らした。千代子は面白半分それを受取つて水の中で動かそうとしたが、動きそうにもないので、高木は己れの手を添えて二人いっしょに籃

の中を覺束なく攪き廻した。しかし魚は掬えるところではなかったので、千代子はすぐそれを船頭に返した。船頭は同じ掬網で叔父の命ずるままに何疋でも水から上へ折り出した。僕らは危怪な蛸の単調を破るべく、鶏魚、鱸、黒鯛の変化を喜こんでまた岸に上った。

二十五

僕はその晩一人東京へ歸った。母はみんなに引きとめられて、歸るときには吾一か誰か送って行くという条件の下に、なお二三日鎌倉に留まる事を肯んじた。僕はなぜ母が彼らの勧めるままに、人を好く落ちついているのだらうと、鋭どく磨がれた自分の神経から推して、悠長過ぎる彼女をはがゆく思った。

高木にはそれから以後ついぞ顔を合せた事がなかった。千代子と僕に高木を加えて三つ巴を描いた一種の關係が、それぎり発展しないで、そのうちの劣敗者に当る僕が、あたかも運命の先途を予知したとき態度で、中途から渦巻の外に逃れたのは、この話を聞くものにとって、定めし不本意であらう。僕自身も幾分か火の手のまだ収まらないうちに、

取り急いで纏まといを撤したような心持がする。と云うと、僕に始からある目論見もくろみがあつて、わざわざ鎌倉へ出かけたとも取れるが、嫉妬心しつとしんだけあつて競争心を有もたない僕にも相應の己惚うぬぼれは陰気な暗い胸のどこかで時々ちらちら陽炎かげろつたのである。僕は自分の矛盾をよく研究した。そうして千代子に対する己惚うぬぼれをあくまで積極的に利用し切らせないために、他の思想やら感情やらが、入れ代り立ち替り雑然として吾心を奪いにくる煩わづらわしさに悩んだのである。

彼女は時によると、天下に只一人ただいちにんの僕を愛しているように見えた。僕はそれでも進む訳に行かないのである。しかし未来に眼を塞ふさいで、思い切った態度に出ようかと思案しているうちに、彼女はたちまち僕の手から逃れて、全くの他人と違わぬ顔になつてしまうのが常であつた。僕が鎌倉で暮した二日の間に、こういう潮しほの満干はすでに二三度あつた。或時は自分の意志でこの変化を支配しつつ、わざと近寄つたり、わざと遠退とのおのいたりするのではなからうかという微妙みずかな疑惑をさえ、僕の胸に煙らせた。そればかりではない。僕は彼女の言行を、一の意味いつに解釈し終つたすぐ後あとから、まるで反対の意味に同じものをまた解釈して、その実じつどっちが正しいのか分らないいたずらな忌々いまいましさを感じた例ためしも少なくはなかつた。

僕はこの二日間に娶^{めと}るつもりのない女に釣られそうになった。そうして高木という男がいやしくも眼の前に出没する限りは、厭^{いや}でもしまいまで釣られて行きそうな心持がした。

僕は高木に対して競争心を有たないと先に断つたが、誤解を防ぐために、もう一度同じ言葉をくり返したい。もし千代子と高木と僕と三人が巴になつて恋か愛か人情かの旋風^{つむじかぜ}の中に狂うならば、その時僕を動かす力は高木に勝とうという競争心でない事を僕は断言する。それは高い塔の上から下を見た時、恐ろしくなると共に、飛び下りなければならぬ神経作用と同じ物だと断言する。結果が高木に対して勝つか負けるかに帰着する上部^{うわべ}から云えば、競争と見えるかも知れないが、動力は全く独立した一種の働きである。しかもその動力は高木がいさえしなければつして僕を襲^{おそ}つて来ないのである。僕はその二日間に、この怪しい力の閃^{きらめき}を物凄く感じた。そうして強い決心と共にすぐ鎌倉を去つた。

僕は強い刺戟^{しげき}に充^みちた小説を読むに堪^たえないほど弱い男である。強い刺戟に充ちた小説を実行する事はなおさらできない男である。僕は自分の気分が小説になりかけた刹那^{せつな}に驚ろいて、東京へ引き返したのである。だから汽車の中の僕は、半分は優者で半分は劣者であつた。比較的乗客の少ない中等列車のうちに、僕は自分と書き出して自分と裂^さき棄^すてたようなこの小説の続きをいろいろに想像した。そこには海があり、月があり、磯^{いそ}があつた。

若い男の影と若い女の影があつた。始めは男が激^{げき}して女が泣いた。後^{あと}では女が激^{げき}して男が宥^{なだ}めた。ついには二人手を引き合つて音のしない砂の上を歩いた。あるいは額^{がく}があり、暈^{えん}があり、涼しい風が吹いた。二人の若い男がそこで意味のない口論をした。それがだんだん熱い血を頬に呼び寄せて、ついには二人共自分の人格にかかわるような言葉使いをしなければすまなくなつた。果^{はて}は立ち上つて拳^{こぶし}を揮^{ふる}い合つた。あるいは……。芝居に似た光景は幾幕となく眼の前に描^{えが}かれた。僕はそのいずれをも嘗^なめ試^{あや}ろみる機会を失つてかえつて自分のために喜んだ。人は僕を老人みたようだと云つて嘲^{あざ}けるだろう。もし詩に訴えてのみ世の中を渡らないのが老人なら、僕は嘲^{あざ}けられても満足である。けれどももし詩に涸^かれて乾^{から}びたのが老人なら、僕はこの品評に甘んじたくない。僕は始終詩を求めてもがいてゐるのである。

二十六

僕は東京へ歸つてからの気分を想像して、あるいは刺戟^{しげき}を眼の前に控えた鎌倉にいるよりもかえつて焦躁^{いらいら}つきはしまいかと心配した。そうして相手もなく一人焦躁^{いらいら}つく事のはな

はだしい苦痛をいたずらに胸の中に描いて見た。偶然にも結果は他の一方に外れた。僕は僕の希望した通り、平生に近い落ちつきと冷静と無頓着とを、比較的容易に、淋しいわが二階の上に齎らし帰る事ができた。僕は新しい匂のする蚊帳を座敷いっぱいにつけて、軒に鳴る風鈴の音を楽しんで寝た。宵には町へ出て草花の鉢を抱えながら格子を開ける事もあった。母がいないので、すべての世話は作という小間使がした。鎌倉から帰って、始めてわが家の膳に向った時、給仕のために黒い丸盆を膝の上に置いて、僕の前に畏こまった作の姿を見た僕は今更のように彼女と鎌倉にいる姉妹との相違を感じた。作は固より好い器量の女でも何でもなかった。けれども僕の前に出て畏こまる事よりほかに何も知っていない彼女の姿が、僕にはいかに慎ましやかに控目に、いかに女として憐れ深く見えたらう。彼女は恋の何物であるかを考えるさえ、自分の身分ではすでに生意氣過ぎると思い定めた様子で、おとなしく坐っていたのである。僕は珍らしく彼女に優しい言葉を掛けた。そうして彼女に年はいくつだと聞いた。彼女は十九だと答えた。僕はまた突然嫁に行きたくはないかと尋ねた。彼女は赧い顔をして下を向いたなり、露骨な問をかけた僕を気の毒がらせた。僕と作とはそれまでほとんど用の口よりほかに利いた事なかったのである。僕は鎌倉から新らしい記憶を持って帰った反動として、その時始めて、自

分の家に使っている下婢かひの女らしいところに気がついた。愛とは固もとより彼女と僕の間に云い得べき言葉でない。僕はただ彼女の身の周囲まわりから出る落ちついた、気安い、おとなしやかな空気を愛したのである。

僕が作のために安慰を得たと云つては、自分ながらおかしく聞こえる。けれども今考えて見てもそれよりほかの原因は全く考えつかないようだから、やっぱり作が——作がというより、その時の作が代表して僕に見せてくれた女にょしょう性せいのある方面の性質が、想像の刺し戟げきにすら焦躁いらだ立ちたがつていた僕の頭を静めてくれたのだろうと思う。白状すれば鎌倉の景色は折々眼に浮かんだ。その景色のうちには無論人間が活動していた。ただそれが僕の遠くにいる、僕とはとても利害を一いつにし得ない人間の活動らしく見えたのは幸福であつた。僕は二階のぼに上つて書架の整理を始めた。綺麗きれいな母が始しじゆう終ゆう氣をつけて掃除おこを怠おこらなかつたにかかわらず、一々書物を並べ直すとなると、思わぬ埃ほこりの色を、目の届かない陰に見つけるので、残らず揃そろえるまでには、なかなか手間取つた。僕は暑中に似合わしい閑事業として、なるべく時間のかかるように、気が向けば手にした本をいつまでも読み耽ふけつてみようという気楽な方針で、蝸牛かたつむりのごとく進すす行した。作は時ならない払塵はたきの音を聞きつけて、梯子段はしごだんから銀杏返いちようがえしの頭を出した。僕は彼女に書架の一部を雑巾ぞうきんで拭いて

貰^{もら}った。しかしいつまでかかるか分らない仕事の手伝を、済むまでさせるのも気の毒だと思つて、すぐ階下^{した}へ下げた。僕は一時間ほど書物を伏せたり立てたりして少し草臥^{くたび}れたから煙草^{たばこ}を吹かして休んでいると、作がまた梯子段から顔を出した。そうして、私でよろしければ何ぞ致しましょうかと尋ねた。僕は作に何かさせてやりたかった。不幸にして西洋文字の読めない彼女には手の出せない書物の整理なので、僕は気の毒だけでも、なに好いよと断つてまた下へ追いやつた。

作の事をそう一々云う必要もないが、つい前からの関係で、彼女のその時の行動を覚えていたから話したのである。僕は一本の巻煙草^{まきたばこ}を呑み切つた後^{あと}でまた整理にかかった。今度は作のためにわれ一人^{いちにん}の世界を妨^{さまた}げられる虞^{おそれ}なしに、書架の二段目を一気に片づけた。その時僕は久しく友達に借りて、つい返すのを忘れていた妙な書物を、偶然^{たなうしろ}棚の後から発見した。それはむしろ薄い小形の本だったので、ついほかのものの向^{むこう}側^{がわ}へ落ちたなり埃だらけになつて、今日^{きょう}まで僕の眼を掠^{かす}めていたのである。

僕にこの本を貸してくれたものはある文学好の友達であった。僕はかつてこの男と小説の話をして、思慮の勝ったものは、万事に考え込むだけで、いっこう華やかな行動を仕切る勇気がないから、小説に書いてもつまらないだろうと云った。僕の平生からあまり小説を愛読しないのは、僕に小説中の人物になる資格が乏しいので、資格が乏しいのは、考え考えしてぐずつくせいだろうとかねがね思っていたから、僕はついこういう質問をかけて見たくなつたのである。その時彼は机上にあつたこの本を指して、ここに書いてある主人公は、非常に目覚しい思慮と、恐ろしく凄まじい思い切った行動を具えていると告げた。僕はいったいどんな事が書いてあるのかと聞いた。彼はまあ読んで見ると云つて、その本を取つて僕に渡した。標題にはゲダンケという独乙字ドイツが書いてあつた。彼は露西亞物の翻訳だと教えてくれた。僕は薄い書物を手にしながら、重ねてその梗こうがいを彼に尋ねた。彼は梗などはどうでも好いと答えた。そうして中に書いてある事が嫉妬しつとなのだから、復讐ふくしゅうなのだから、深刻な悪戯いたずらなのだから、酔興すいきような計略なのだから、真面目な所作なのだから、氣狂ききちがいの推理なのだから、常人の打算なのだから、ほとんど分らないが、何しろ華々はなばなしい行動と同じく華々しい思慮が伴っているから、ともかくも読んで見ると云った。僕は書物を借りて歸つた。しかし読む氣はしなかった。僕は読み耽らない癖に、小説家というもの

をいつさい馬鹿にしていた上に、友達のというような事にはちつとも心を動かすべき興味を有^もたなかつたからである。

この出来事をすっかり忘れていた僕は、何の気もつかずにそのゲダンケを今棚^{たなうしろ}の後から引き出して厚い塵^{ちり}を払った。そうして見^み覚^{おぼえ}のある例の独乙字の標題に眼をつけると共に、かの文学好の友達と彼のその時の言葉とを思い出した。すると突然どこから起ったか分らない好奇心に駆^かられて、すぐその一頁^{ページ}を開いて初めから読み始めた。中には恐るべき話が書いてあつた。

ある女に意^いのあつたある男が、その婦人から相手にされないのみか、かえつてわが知り合の人の所へ嫁入られたのを根に、新婚の夫を殺そうと企てた。ただしただ殺すのではない。女房が見ている前で殺さなければ面白くない。しかもその見ている女房が彼を下手人と知っていないながら、いつまでも指を銜^{くわ}えて、彼を見ているだけで、それよりほかにどうにも手のつけようのないという複雑な殺し方をしなければ気がすまない。彼はその手段^{てだて}として一種の方法を案出した。ある晩餐^{ばんさん}の席へ招待された好機を利用して、彼は急に劇^{はげ}しい発作^{ほつさ}に襲^{おそ}われたふりをし始めた。傍^{はた}から見るとまるで狂人としか思えない挙動をその場であえてした彼は、同席の一人残らずから、全くの狂人と信じられたのを見すまして、心の

内で図に当った策略を祝賀した。彼は人目に触れやすい社交場裡で、同じ所作をなお二三度くり返した後、発作のために精神に狂の出る危険な人という評判を一般に博し得た。彼はこの手数のかかった準備の上に、手のつけようのない殺人罪を築き上げるつもりでいたのである。しばしば起る彼の発作が、華やかな交際の色を暗く損ない出してから、今まで懇意に往来していた誰彼の門戸が、彼に対して急に固く鎖されるようになった。けれどもそれは彼の苦にするところではなかった。彼はなお自由に出入りのできる一軒の家を持っていた。それが取りも直さず彼のまさに死の国に蹴落そうとしつつある友とその細君の家だったのである。彼はある日何気ない顔をして友の住居を敲いた。そこで世間話に時を移すと見せて、暗に目の前の人に飛びかかる機を窺った。彼は机の上にあつた重い文鎮を取って、突然これで人が殺せるだろうかと思ねた。友は固より彼の問を真に受けなかった。彼は構わずできるだけの力を文鎮に込めて、細君の見ている前で、最愛の夫を打ち殺した。そうして狂人の名の下に、瘋癲院に送られた。彼は驚ろくべき思慮と分別と推理の力とをもつて、以上の顛末を基礎に、自分のけつして狂人でない訳をひたすら弁解している。かと思うと、その弁解をまた疑っている。のみならず、その疑いをまた弁解しようとしている。彼は必竟正気なのだろうか、狂人なのだろうか、――僕は書物を手にしたまま

慄然^{りっぜん}として恐れた。

二十八

僕の頭^{ヘッド}は僕の胸^{ハート}を抑^{おさ}えるためにできていた。行動の結果から見て、はなはだしい悔^くを遺^{のこ}さない過去^{かえり}を顧みると、これが人間の常体かとも思う。けれども胸が熱しかけるたびに、厳肅な頭の威力を無理に加えられるのは、普通誰でも経験する通り、はなはだしい苦痛である。僕は意地張^{いじばり}という点において、どつちかというとむしろ陰性の癩癩^{かんしゃくもち}持だから、発作^{ほっさ}に心を襲^{おそ}われた人が急に理性のために喰い留められて、劇^{はげ}しい自動車の速力を即時に殺すような苦痛は滅多^{めった}に嘗^なめた事がない。それですらある場合には命の心棒を無理に曲げられるとでも云わなければ形容しようのない活力の燃焼を内に感じた。二つの争いが起るたびに、常に頭の命令に屈従して来た僕は、ある時は僕の頭が強いから屈従させ得るのだと思い、ある時は僕の胸が弱いから屈従するのだとも思ったが、どうしてもこの争いは生活のための争いでありながら、人知れず、わが命を削^{けず}る争いだという畏怖^{いふ}の念から解脱^{げだつ}する事ができなかった。

それだから僕はゲダンケの主人公を見て驚ろいたのである。親友の命を虫の息のように軽く見る彼は、理と情との間に何らの矛盾をも扞格をも認めなかった。彼の有する凡ての知力は、ことごとく復讐の燃料となつて、残忍な兇行を手際よく仕遂げる方便に供せられながら、毫も悔ゆる事を知らなかった。彼は周密なる思慮を率いて、満腔の毒血を相手の頭から浴びせかけ得る偉大なる俳優であつた。もしくは尋常以上の頭脳と情熱を兼ねた狂人であつた。僕は平生の自分と比較して、こう顧慮なく一心にふるまえるゲダンケの主人公が大いに羨ましかつた。同時に汗の滴るほど恐ろしかつた。できたらさぞ痛快だろうと思つた。でかした後は定めし堪えがたい良心の拷問に逢うだろうと思つた。

けれどももし僕の高木に対する嫉妬がある不可思議の径路を取つて、向後今の数十倍に烈しく身を焼くならどうだろうと僕は考えた。しかし僕はその時の自分を自分で想像する事ができなかった。始めは人間の元来からの作りが違ふんだから、とてもこんな真似はしえまいという見地から、すぐこの問題を棄却しようとした。次には、僕でも同じ程度の復讐が充分やつて除けられるに違ひないという気が出した。最後には、僕のように平生は頭と胸の争いに悩んでぐずついているものにして始めてこんな猛烈な兇行を、冷静に打算的に、かつ組織的に、逞ましゅうするのだと思ひ出した。僕は最後になぜこう思つ

たのか自分にも分らない。ただこう思つた時急に變な心持に襲われた。その心持は純然たる恐怖でも不安でも不快でもなく、それらよりは遙かに複雑なものに見えた。が、纏つて心に現われた状態から云えば、ちようどおとなしい人が酒のために大胆になつて、これなら何でもやれるという満足を感じつつ、同時に酔に打ち勝たれた自分は、品性の上において平生の自分より遙に墮落したのだと氣がついて、そうして墮落は酒の影響だからどこへどう避けても人間としてとても逃れる事はできないのだと沈痛に諦めをつけたと同じような變な心持であつた。僕はこの變な心持と共に、千代子の見ている前で、高木の腦天に重い文鎮を骨の底まで打ち込んだ夢を、大きな眼を開きながら見て、驚ろいて立ち上つた。

下へ降りるや否や、いきなり風呂場へ行つて、水をぎあぎあ頭へかけた。茶の間の時計を見ると、もう午過なので、それを好い機会に、そこへ坐わつて飯を片づける事にした。給仕には例の通り作が出た。僕は二た口三口無言で飯の塊りを頬張つたが、突然彼女に、おい作僕の顔色はどうかあるかいと聞いた。作は吃驚した眼を大きくして、いいえと答えた。それで問答が切れると、今度は作の方がどうか遊ばしましたかと尋ねた

「いいや、大してどうもしない」

「急に御暑うございますから」

僕は黙つて二杯の飯を食い終つた。茶を注がして飲みかけた時、僕はまた突然作に、鎌倉などへ行つて混雑するより宅にいる方が静で好いねと云つた。作は、でもあちらの方が御涼しうございまいしょうと云つた。僕はいやかえつて東京より暑いくらいだ、あんな所にいると気ばかりいらしていけないと説明してやった。作は御隠居さまはまだ当分あちらにおいででございますかと尋ねた。僕はもう帰るだろうと答えた。

二十九

僕は僕の前に坐つてゐる作の姿を見て、一筆がきの朝貌のような気がした。ただ貴とい名家の手にならないのが遺憾であるが、心の中はそう云う種類の画と同じく簡略にでき上つてゐるとしか僕には受取れなかつた。作の人柄を画に喩えて何のためになると聞かれるかも知れない。深い意味もなからうが、実は彼女の給仕を受けて飯を食う間に、今しがたゲダンケを読んだ自分と、今黒塗の盆を持つて畏まつてゐる彼女とを比較して、自分の腹はなぜこうしつこい油絵のように複雑なのだろうと呆れたからである。白状すると

僕は高等教育を受けた証^{しようこ}として、今日^{こんにち}まで自分の頭^ひが他より複雑に働らくのを自慢にしていた。ところがいつかその働らきに疲れていた。何の因果^{いんが}でこうまで事を細かに刻まなければ生きて行かれないのかと考えて情^{なさけ}なかつた。僕は茶碗^{ちやわん}を膳^{ぜん}の上に置きながら、作の顔を見て尊^{たつ}とい感じを起した。

「作御前でもいろいろ物を考える事があるかね」

「私なんぞ別に何も考えるほどの事がございませんから」

「考えないかね。それが好いね。考える事がないのが一番だ」

「あつても智慧^{ちえ}がございませんから、筋道が立ちません。全く駄目でございます」

「仕合せだ」

僕は思わずこう云つて作を驚ろかした。作は突然僕から冷かされたとも思つたろう。気の毒な事をした。

その夕暮に思いがけない母が出し抜けに鎌倉から歸つて来た。僕はその時^ひ日の限りかけた二階の縁に籐椅子^{とうす}を持ち出して、作が跣足^{はだし}で庭先へ水を打つ音を聞いていた。下へ降りて玄關へ出た時、僕は母を送つて来るべきはずの吾一の代りに、千代子が彼女の後^{あと}に跟^ついて沓脱^{くつぬぎ}から上^{あが}つたのを見て非常に驚ろいた。僕は籐椅子の上で千代子の事を全く考えず

にいたのである。考えても彼女と高木とを離す事はできなかったのである。そうして二人は当鎌倉の舞台を動き得ないものと信じていたのである。僕は日に焼けて心持色の黒くなつたと思われる母と顔を見合わして挨拶あいさつを取り替かわす前に、まず千代子に向つてどうして来たのだと聞きたかつた。實際僕はその通りの言葉を第一に用いたのである。

「叔母さんを送つて来たのよ。なぜ。驚ろいて」

「そりやありがとう」と僕は答えた。僕の千代子に対する感情は鎌倉へ行く前と、行つてからとでだいぶ違つていた。行つてからと歸つて来てからとでもまただいぶ違つていた。高木といつしよに束つかねられた彼女に対するのと、こう一人に切り離された彼女に対するのとでもまただいぶ違つていた。彼女は年を取つた母を吾一に托するのが不安心だつたから、自分で随ついて来たのだと云つて、作が足を洗つてゐる間まに、母の単衣ひとえを箆たんすから出したり、それを旅行着と着換えさせたりなどして、元の千代子の通り豆まめやかにふるまつた。僕は母にあれから何か面白い事がありましたかと尋ねた。母は満足らしい顔をしながら、別にこれという珍らしい事も無かつたと答えたが、「でもね久しぶりに好いい氣保養きほようをしました。御蔭で」と云つた。僕にはそれが傍そばにいる千代子に対しての礼の言葉と聞こえた。僕は千代子に今日これからまた鎌倉へ歸るのかと尋ねた。

「泊って行くわ」

「どこへ」

「そうね。内幸町へ行つても好いけど、あんまり広過ぎて淋^{さむ}しいから。——久しぶりにここへ泊ろうかしら、ねえ叔母さん」

僕には千代子が始めから僕の家に戻るつもりで出て来たように見えた。自白すれば僕はそこへ坐つて十分と経たないうちに、また眼の前にいる彼女の言語動作を一種の立場から観察したり、評価したり、解釈したりしなければならいようになったのである。僕はそこに気がついた時、非常な不愉快を感じた。またそういう努力には自分の神経が疲れ切っている事も感じた。僕は自分が自分に逆^{さか}らつて余儀なくこう心を働かすのか。あるいは千代子が厭^{いや}がる僕を無理に強いて動くようにするのか。どっちにしても僕は腹立たしかった。

「千代ちゃんが来ないでも吾一さんでたくさんだのに」

「だってあたし責任があるじゃありませんか。叔母さんを招待したのはあたしでしょう」

「じゃ僕も招待を受けたんだから、送って来て貰えば良かった」

「だから他の云う事を聞いて、もつといらつしやれば好いのに」

「いいえあの時にさ。僕の帰った時にさ」

「そうするとまるで看護婦みたようね。好いわ看護婦でも、ついて来て上げるわ。なぜそう云わなかったの」

「云つても断られそうだったから」

「あたしこそ断られそうだったわ、ねえ叔母さん。たまに招待に応じて来ておきながら、厭にむずかしい顔ばかりしているんですもの。本当にあなたは少し病氣よ」

「だから千代子について来て貰いたかったのだろう」と母が笑いながら云った。

僕は母の帰るつい一時間前まで千代子の来る事を予想し得なかった。それは今改めてくり返す必要もないが、それと共に僕は母が高木について齎らす報道をほとんど確実な未来として予期していた。穏やかな母の顔が不安と失望で曇る時の氣の毒さも予想していた。

僕は今この予期と全く反対の結果を眼の前に見た。彼らは二人とも常に変らない親しげな叔母姪であつた。彼らの各自は各自に特有な温か味と清々しさを、いつもの通り互いの上に、また僕の上に、心持よく加えた。

その晩は散歩に出る時間を儉約して、女二人と共に二階に上つて涼みながら話をした。僕は母の命ずるまま軒端のきばに七草ななくさを描いた岐阜提灯ぎふちようちんをかけて、その中に細い蠟燭ろうそくを点けた。熱いから電灯を消そうと発議はつぎした千代子は、遠慮なく畳の上を暗くした。風のない月が高く上つた。柱に凭もたれていた母が鎌倉を思い出すと云つた。電車の音のする所で月を見るのは何だかおかしい気がする、この間から海辺に馴染なじんだ千代子が評した。僕は先刻さきの籐椅子つぎの上に腰をおろして団扇うちわを使つていた。作が下から二度ばかり上つて来た。一度は煙草盆たばこぼんの火を入れ更かえて、僕の足の下に置いて行つた。二回目には近所から取り寄せた氷菓子アイスクリームを盆に載のせて持つて来た。僕はそのたびごと階級制度の嚴重な封建よの代に生れたように、卑しい召使の位置を生涯しょうがいの分と心得ているこの作と、どんな人の前へ出ても貴女レディーとしてふるまって通るべき氣位を具そなへた千代子とを比較しない訳に行かなかつた。千代子は作が出て来ても、作でないほかの女が出て来たと同じように、なんにも氣に留めなかつた。作の方ではいつたん起たつて梯子段はしごだんの傍そばまで行つて、もう降りようとする間際まぎわにきつと振り返つて、千代子の後姿うしろすがたを見た。僕は自分が鎌倉で高木を傍そばに見て暮した二日間を思い出して、材料がないから何も考えないと明言した作に、千代子というハイカラな有毒の材料が与えられたのを憐あわれに眺ながめた。

「高木はどうしたろう」という問が僕の口元までしばしば出た。けれども単なる消息の興味以外に、何かためにする不純なものが自分を前に押し出すので、その都度卑怯だと遠くで罵られるためか、つい聞くのをいさぎよしとしなくなった。それに千代子が帰って母だけになりさえすれば、彼の話は遠慮なくできるのだからとも考えた。しかし実を云うと、僕は千代子の口から直下に高木の事を聞きたかったのである。そうして彼女が彼をどう思っているか、それを判切胸に畳み込んでおきたかったのである。これは嫉妬の作用なのだろうか。もしこの話を聞くものが、嫉妬だというなら、僕には少しも異存がない。今の料簡で考えて見ても、どうもほかの名はつけ悪いようである。それなら僕がそれほど千代子に恋していたのだろうか。問題がそう推移すると、僕も返事に窮するよりほかに仕方がなくなる。僕は實際彼女に対して、そんなに熱烈な愛を脈搏の上に感じていなかったからである。すると僕は人より二倍も三倍も嫉妬深い訳になるが、あるいはそうかも知れない。しかしもつと適当に評したら、おそらく僕本来のわがままが原因なのだろうと思う。ただ僕は一言それにつけ加えておきたい。僕から云わせると、すでに鎌倉を去った後なお高木に対しての嫉妬心がこう燃えるなら、それは僕の性情に欠陥があったばかりでなく、千代子自身に重い責任があつたのである。相手が千代子だから、僕の弱点がこれ

ほどに濃く胸を染めたのだと僕は明言して憚らない。では千代子のどの部分が僕の人格を墮落させるだろうか。それはとても分らない。あるいは彼女の親切じやないかとも考えている。

三十一

千代子の様子はいつもの通り明つ放しなものであった。彼女はどんな問題が出て苦もなく口を利いた。それは必竟腹の中に何も考えていない証拠だとしか取れなかった。彼女は鎌倉へ行つてから水泳を自習し始めて、今では背の立たない所まで行くのが楽みだと云つた。それを用心深い百代子が剣呑がつて、詫まるように悲しい声を出して止めるのが面白いと云つた。その時母は半ば心配で半ば呆れたような顔をして、「何ですぬ女の癖にそんな軽機な真似をして。これからは後生だから叔母さんに免じて、あぶない悪ふざけは止しておくれよ」と頼んでいた。千代子はただ笑いながら、大丈夫よと答えただけであったが、ふと縁側の椅子に腰を掛けている僕を顧みて、市さんもそう云う御転婆は嫌でしょうと聞いた。僕はただ、あんまり好きじやないと云つて、月の光の隈なく落

ちる表を眺^{なが}めていた。もし僕が自分の品格に対して尊敬を払う事を忘れたなら、「しかし高木さんには気に入るんだろう」という言葉をその後^{あと}にきつとつけ加えたに違ない。そこまで引き摺^ずられなかったのは、僕の体面上まだ仕合せであった。

千代子はかくのごとく明けつ放しであった。けれども夜が更^ふけて、母がもう寝ようと云い出すまで、彼女は高木の事をとうとう一口も話頭に上^{のほ}せなかった。そこに僕ははなはだしい故意^{こい}を認めた。白い紙の上に一点の暗い印氣^{インキ}が落ちたような気がした。鎌倉へ行くまで千代子を天下の女^{によし}性^{よう}のうちで、最も純粋な一人^{いちにん}と信じていた僕は、鎌倉で暮したわずか二日の間に、始めて彼女の技巧^{アート}を疑い出したのである。その疑^{うた}が今^{がい}ようやく僕の胸に根をおろそうとした。

「なぜ高木の話をしてしないのだろう」

僕は寝ながらこう考えて苦しんだ。同時にこんな問題に睡眠の時間を奪^{おろ}われる愚^{おろ}さを自分でよく承知していた。だから苦しむのが馬鹿馬鹿しくてなお癩^{かん}が起った。僕は例の通り二階に一人寝ていた。母と千代子は下座敷に蒲団^{ふとん}を並べて、一つ蚊帳^{かや}の中に身を横たえた。僕はすやすや寝ている千代子を自分のすぐ下に想像して、必^{ひつ}竟^{きやう}のつそつ苦しがる僕は負けているのだと考える訳に行かなくなった。僕は寝返りを打つ事さえ厭^{いや}になった。自

分がまだ眠られないという弱味を階下へ響かせるのが、勝利の報知として千代子の胸に伝わるのを恥辱と思つたからである。

僕がこうして同じ問題をいろいろに考えているうちに、同じ問題が僕にはいろいろに見えた。高木の名前を口へ出さないのは、全く彼女の僕に対する好意に過ぎない。僕に気を悪くさせまいと思う親切から彼女はわざとそれだけを遠慮したのである。こう解釈すると鎌倉にいた時の僕は、あれほど単純な彼女をして、僕の前に高木の二字を公けにする勇氣を失わしめたほど、不合理に機嫌を悪くふるまつたのだろう。もしそうだとすれば、自分は人の気を悪くするために、人の中へ出る、不愉快な動物である。宅へ引込んで交際はえしなればそれで宜い。けれどももし親切を冠らない技巧が彼女の本義なら……。僕は技巧という二字を細かに割つて考えた。高木を媒鳥に僕を釣るつもりか。釣るのは、最後の目的もない癖に、ただ僕の彼女に対する愛情を一時的に刺激して楽しむつもりか。あるいは僕にある意味で高木のようになれというつもりか。そうすれば僕を愛しても好いというつもりか。あるいは高木と僕と戦うところを眺めて面白かったというつもりか。または高木を僕の眼の前に出して、こういう人がいるのだから、早く思い切れというつもりか。――僕は技巧の二字をどこまでも割つて考えた。そうして技巧なら戦争だと考えた。戦争

ならどうしても勝負に終るべきだと考えた。

僕は寝つかれないで負けている自分を口惜しく思った。電灯は蚊帳を釣るとき消してしまつたので、室の中に隙間もなく蔓延る暗闇が窒息するほど重苦しく感ぜられた。僕は眼の见えないところに眼を明けて頭だけ働らかす苦痛に堪えなくなつた。寝返りさえ慎んで我慢していた僕は、急に起つて室を明るくした。ついでに縁側へ出て雨戸を一枚細目に開けた。月の傾むいた空の下には動く風もなかつた。僕はただ比較的冷かな空気を肌と咽喉に受けたただけであつた。

三十二

翌日はいつも一人で寝ている時より一時間半も早く眼が覚めた。すぐ起きて下へ降りると、銀杏返しの上へ白地の手拭を被つて、長火鉢の灰を篩つていた作が、おやもう御目覚めでと云いながら、すぐ顔を洗う道具を風呂場へ並べてくれた。僕は歸りに埃だらけの茶の間を爪先で通り抜けて玄關へ出た。その時ついでに二人の寝ている座敷を蚊帳越しに覗いて見たら、目敏い母も昨日の汽車の疲が出たせい、まだ静かな眠を貪ほつてい

た。千代子は固より夢の底に埋まつているように正体なく枕の上に首を落していた。僕は目的もなく表へ出た。朝の散歩の趣を久しく忘れていた僕には、常に変わらない町の色が、暑さと雑沓とに染めつけられない安息日のごとく穏やかに見えた。電車の線路が研ぎ澄まされた光を真直に地面の上に伸ばすのも落ちついた感じであつた。けれども僕は散歩がしたくつて出たのではなかつた。ただ眼が早く覚め過ぎて、中有に延びた命の断片を、運動で埋めるつもりで歩くのだから、それほどの興味は空にも地にも乃至町にも見出す事ができなかつた。

一時間ばかりして僕はむしろ疲れた顔を母からも千代子からも怪しまれに戻つて来た。母はどこへ行つたのと聞いたが、後から、色沢が好くないよ、どうかおしかいと尋ねた。

「昨夕好く寝られなかつたんでしよう」

僕は千代子のこの言葉に対して答うべき術を知らなかつた。実を云うと、昂然としてなに好く寝られたよと云いたかつたのである。不幸にして僕はそれほどの技巧家でなかつた。と云つて、正直に寝られなかつたと自白するには余り自尊心が強過ぎた。僕はついに何も答えなかつた。

三人が同じ食卓で朝飯を済ますや否や、母が昨日涼しいうちにと頼んでおいた髪結が来

た。洗い立の白い胸掛をかけて、敷居越に手を突いた彼女は、御帰りなさいましと親しい挨拶をした。彼女はこの職業に共通なめでたい口ぶりを有っていた。それを得意に使って、内気な母に避暑を誇の種に話させる機会を一句ごとに作った。母は満足らしくも見えたが、そう蝶蝶しくは饒舌り得なかった。髪結はより効目のある相手として、すぐ年の若い千代子を選んだ。千代子は固より誰彼の容赦なく一様に気易く応対のできる女だったので、御嬢様と呼びかけられるたびに相当の受答をして話を勢しました。千代子の泳の噂が出た時、髪結は活澆で宜しゅうございます、近頃の御嬢様方はみんな水泳の稽古をなさいますと誰が聞いても拵えたような御世辞を云った。

妙な事を吹聴するようでおかしいが、実をいうと僕は女の髪を上げるところを見ているのが好きであつた。母が乏しい髪を工面して、どうかこうか髻に結い上げる様子は、いくら上手が纏めるにしても、それほど見栄のある画ではないが、それでも退屈を凌ぐには恰好な慰みであつた。僕は髪結の手の動く間に、自然とでき上って行く小さな母の丸髻を眺めていた。そうして腹の中で、千代子の髪を日本流に櫛を入れたらさぞみごとだろうと思つた。千代子は色の美しい、癖のない、長くて多過ぎる髪的所有者だったからである。この場合いつもの僕なら、千代ちゃんもついでに結って御貰いなときつと勧め

るところであつた。しかし今の僕にはそんな親しげな要求を彼女に向つて投げかける気がでなく出悪かつた。すると偶然にも千代子の方で、何だかあたしも一つ結つて見たくなつたと云い出した。母は御結おひいよ久しぶりにと誘いざなつた。髪結かみひは是非御上げ遊ばせな、私始めて御お髪ぐしを拝見した時から束髪そくはつにしていらつしやるのはもつたいたいと思つとりましたときも結ひいたそんな口ぶりを見せた。千代子はどうとう鏡台の前に坐つた。

「何に結おうかしら」

髪結は島田を勧めた。母も同じ意見であつた。千代子は長い髪を背中に垂れたまま突然市いっさんと呼んだ。

「あなたが好き」

「旦那様だんなさまも島田が好きだときつとおつしやいますよ」

僕はぎくりとした。千代子はまるで平氣のように見えた。わざと僕の方をふり返つて、「じゃ島田に結つて見せたげましようか」と笑つた。「好いだらう」と答えた僕の声はいかにも鈍どんに聞こえた。

僕は千代子の髪のでき上らない先に二階へ上った。僕のような神経質なものが拘わって来ると、無関係の人の眼にはほとんど小供らしいと思われるような所作をあえてする。僕は中途で鏡台の傍を離れて、美しい島田鬘をいただく女が男から強奪する褒賞の租税を免かれたつもりでいた。その時の僕はそれほどこの女の虚栄心に媚びる好意を有たなかったのである。

僕は自分で自分の事をかれこれ取り繕うて好く聞えるように話したくない。しかし僕ごときものでも長火鉢の傍で起るこんな戦術よりはもう少し高尚な問題に頭を使い得るつもりでいる。ただそこまで引き摺り落された時、僕の弱点としてどうしても脱線する気になれないのである。僕は自分でそのつまらなさ加減をよく心得ていただけに、それをあえてする僕を自分で憎み自分で鞭うった。

僕は空威張を卑劣と同じく嫌う人間であるから、低くても小さくても、自分らしい自分を話すのを名誉と信じてなるべく隠さない。けれども、世の中で認めている偉い人とか高い人とかいうものは、ことごとく長火鉢や台所の卑しい人生の葛藤を超越しているのだろうか。僕はまだ学校を卒業したばかりの経験しか有たない青二才に過ぎないが、僕の

知力と想像に訴えて考えたところでは、おそらくそんな偉い人高い人はいつの世にも存在していないのではなからうか。僕は松本の叔父を尊敬している。けれども露骨なことを云えば、あの叔父のようなのは偉く見える人、高く見せる人と評すればそれで足りていると思う。僕は僕の敬愛する叔父に対しては偽物贋物の名を加える非礼と僻見とを憚りたい。が、事実上彼は世俗に拘泥しない顔をして、腹の中で拘泥しているのである。小事に齷齪しない手を拱ぬいで、頭の奥で齷齪しているのである。外へ出さないだけが、普通より品が好いと云つて僕は讃辞を呈したく思っている。そうしてその外へ出さないのは財産の御蔭、年齢の御蔭、学問と見識と修養の御蔭である。が、最後に彼と彼の家庭の調子が程好く取れているからでもあり、彼と社会の關係が逆なようで実は順に行くからでもある。——話がつい横道へ外れた。僕は僕のこせこせしたところを余り長く弁護し過ぎたかも知れない。

僕は今いう通り早く二階へ上つてしまった。二階は日が近いので、階下よりはよほど凌ぎ悪いのだけれども、平生いつけたせいで、僕は一日の大部分をここで暮らす事にしていたのである。僕はいつもの通り机の前に坐つたなりただ頬杖を突いてぼんやりしていた。今朝煙草の灰を棄てたマジヨリカの灰皿が綺麗に掃除されて僕の肱の前に載せてあったの

に気がついて、僕はその中に現わされた二羽の鷺鳥がちょうを眺めながら、その灰を空けた作さくの手を想像に描えがいた。すると下から梯子はしこだん段を踏む音がして誰か上って来た。僕はその足音を聞くや否や、すぐそれが作でない事を知った。僕はこうぼんやり屈托そぼしていると千代子に見られるのを屈辱のように感じた。同時に傍そばにあつた書物を開けて、先刻さつきから読んでいたふりをするほど器用な機転を用いるのを好まなかった。

「結いえたから見てちょうだい」

僕は僕の前にすぐこう云いながら坐る彼女を見た。

「おかしいでしょう。久しく結わないから」

「大変美しくできたよ。これからいつでも島田に結ゆうといい」

「二三度壊こわしちや結び、壊しちや結いしないといけないのよ。毛が馴染なじまなくって」

こんな事を聞いたり答えたり三四返へんしているうちに、僕はいつの間にか昔と同じように美しい素直な邪氣のない千代子を眼の前に見る気がし出した。僕の心持が何かの調子で和やわらげられたのか、千代子の僕に対する態度がどこかで角度を改めたのか、それは判はん然ぜんと云い悪いにくい。こうだと説明のできる捕とらえどころは両方になかったらしく記憶している。

もしこの気易きやすい状態が一二時間も長く続いたなら、あるいは僕の彼女に対して抱いだいた変な

疑惑を、過去に溯^{さかの}ぼつて当初から真直^{まつすぐ}に黒い棒で誤解という名の下に消し去る事ができたかも知れない。ところが僕はつい不味^{まず}い事をしたのである。

三十四

それはほかでもない。しばらく千代子と話しているうちに、彼女が単に頭を見せに上^{あが}つて来たばかりでなく、今日これから鎌倉へ帰るので、そのさようならを云いにちよつと顔を出したのだと云う事を知った時、僕はつい用意の足りない躰^{つま}ずき方をしたのである。

「早いね。もう帰るのかい」と僕が云った。

「早かないわ、もう一晩泊ったんだから。だけどこんな頭をして帰ると何だかおかしいわね、御嫁にでも行くようで」と千代子が云った。

「まだみんな鎌倉にいるのかい」と僕が聞いた。

「ええ。なぜ」と千代子が聞き返した。

「高木さんも」と僕がまた聞いた。

高木という名前は今まで千代子も口にせず、僕も話頭に上^{のほ}すのをわざと憚^{はば}かっていたの

である。が、何かの機会はすみで、平生いつも通りの打ち解けた遠慮のない気分が復活したので、その中に引き込まれた矢先、つい何の気もつかずに使ってしまったのである。僕はふらふらとこの問をかけて彼女の顔を見た時たちまち後悔した。

僕が煮え切らないまた捌さばけない男として彼女から一種の軽蔑けいべつを受けている事は、僕のように話した通りで、実を云えば二人の交際はこの黙許を認め合った上の親しみに過ぎなかった。その代り千代子が常に畏おそれる点を、幸さいわいにして僕はただ一つ有もっていた。それは僕の無口である。彼女のように万事明けっ放しに腹を見せなければ気のすまない者から云うと、いつでも、しんねりむつつりと構えている僕などの態度は、けっして気に入るはずがないのだが、そこにまた妙な見透みすかせない心の存在が仄ほのめくので、彼女は昔から僕を全然知り抜く事のできない、したがって軽蔑しながらもどこかに恐ろしいところを有った男として、ある意味の尊敬を払っていたのである。これは公おおけにこそ明言しないが、向うでも腹の底で正式に認めるし、僕も冥々めいめいのうちに彼女から僕の権利として要求していた事実である。

ところが偶然高木の名前を口にした時、僕はたちまちこの尊敬を永久千代子に奪い返されたような心持がした。と云うのは、「高木さんも」という僕の問を聞いた千代子の表情

が急に變化したのである。僕はそれを強^{あなが}ちに勝利の表情とは認めたくない。けれども彼女の眼のうちに、今まで僕がいまだかつて彼女に見出した試しのない、一種の侮蔑^{ぶべつ}が輝^ひいたのは疑いもない事実であつた。僕は予期しない瞬間に、平手^{ひらて}で横^{よこ}面^{つら}を力任せに打たれた人のごとくにびたりと止^とまつた。

「あなたそれほど高木さんの事が気になるの」

彼女はこう云つて、僕が両手で耳^{みみ}を抑^{おさ}えたいくらいな高笑いをした。僕はその時鋭^とい侮辱を感じた。けれどもとつさの場合何という返事も出し得なかつた。

「あなたは卑怯^{ひきよう}だ」と彼女が次に云つた。この突然な形容詞にも僕は全く驚ろかされた。

僕は、御前こそ卑怯だ、呼ばないでもの所へわざわざ人を呼びつけて、と云つてやりたかつた。けれども年弱な女に対して、向うと同じ程度の激語を使うのはまだ早過ぎると思つて我慢した。千代子もそれなり黙つた。僕はようやくにして「なぜ」というわずか二字の間をかけた。すると千代子の濃^{まゆ}い眉^{まゆ}が動いた。彼女は、僕自身で僕の卑怯な意味を充分自覚^{ひと}していながら、たまたま他の指摘^{しと}を受けると、自分の弱点を相手に隠すために、取^とり繕^{つく}ろつて空^{そら}つとぼけるものとこの問を解釈したらしい。

「なぜって、あなた自分でよく解つてゐるじゃありませんか」

「解らないから聞かしておくれ」と僕が云った。僕は階下^{した}に母を控えているし、感情に訴える若い女の気質もよく呑み込んだつもりでいたから、できるだけ相手の気を抜いて話を落ちつかせるために、その時の僕としては、ほとんど無理なほどの、低いかつ緩い調子を取ったのであるが、それがかえって千代子の気に入らなかったと見える。

「それが解らなければあなた馬鹿よ」

僕はおそらく平生より蒼い顔をしたろうと思う。自分ではただ眼を千代子の上にじつと据えた事だけを記憶している。その時何物も恐れない千代子の眼が、僕の視線と無言のうちに行き合つて、両方共しばらくそこに止まっていた事も記憶している。

三十五

「千代ちゃんのような活潑な人から見たら、僕見たいに引込思案なものは無論卑怯なんだろう。僕は思った事をすぐ口へ出したり、またはそのまま所作にあらわしたりする勇気のない、極めて因循な男なんだから。その点で卑怯だと云うなら云われても仕方がないが……」

「そんな事を誰が卑怯だと云うんですか」

「しかし軽蔑^{けいべつ}はしているだろう。僕はちゃんと知ってる」

「あなたこそあたしを軽蔑しているじゃありませんか。あたしの方がよっぽどよく知ってるわ」

僕はことさらに彼女のこの言葉を肯定する必要を認めなかったから、わざと返事を控えた。

「あなたはあたしを学問のない、理窟^{りくつ}の解らない、取るに足らない女だと思って、腹の中で馬鹿にし切ってるんです」

「それは御前が僕をぐずと見縊^{みくび}つてると同じ事だよ。僕は御前から卑怯と云われても構わないつもりだが、いやしくも徳義上の意味で卑怯というなら、そりや御前の方が間違っている。僕は少なくとも千代ちゃんに關係ある事柄について、道德上卑怯なふるまいをした覚^{おぼえ}はないはずだ。ぐずとか煮え切らないとかいうべきところに、卑怯という言葉を使われては、何だか道義的勇氣を欠いた——というより、徳義を解しない下劣な人物のように聞えてはなはだ心持が悪いから訂正して貰いたい。それとも今いった意味で、僕が何か千代ちゃんに対してすまない事でもしたのなら遠慮なく話して貰おう」

「じや卑怯の意味を話して上げます」と云つて千代子は泣き出した。僕はこれまで千代子を自分より強い女と認めていた。けれども彼女の強さは単に優しい一図から出た女氣の凝り塊かたまりりとのみ解釈していた。ところが今僕の前に現われた彼女は、ただ勝氣に充ちただけの、世間にありふれた、俗っぽい婦人としか見えなかった。僕は心を動かすところなく、彼女の涙の間からいかなる説明が出るだろうと待ち設けた。彼女の唇を洩くちびるれるものは、自己の体面を飾る強弁よりほかに何もあるはずがないと、僕は固く信じていたからである。彼女は濡ぬれた睫毛まつげを二三度繁しばた叩たたいた。

「あなたはあたしを御転婆おてんばの馬鹿だと思つて始終しじゅう冷笑しているんです。あなたはあたしを……愛していないんです。つまりあなたはあたしと結婚なさる氣が……」

「そりや千代ちゃんの方だつて……」

「まあ御聞きなさい。そんな事は御互だと云うんでしよう。そんならそれで宜よろうござんす。何も貰もらつて下さいとは云やしません。ただなぜ愛してもいず、細君にもしようと思つていないあたしに対して……」

彼女はここへ来て急に口籠くちごもつた。不敏な僕はその後へ何が出て来るのか、まだ覺さとれなかつた。「御前に対して」と半ば彼女を促うながすように問をかけた。彼女は突然物を衝つき破

った風に、「なぜ嫉妬しつとなさるんです」と言い切つて、前よりは劇はげしく泣き出した。僕はさつと血が顔に上る時の熱ほてりを両方の頬ほおに感じた。彼女はほとんどそれを注意しないかのごとくに見えた。

「あなたは卑怯ひきようです、徳義的に卑怯です。あたしが叔母さんとあなたを鎌倉へ招待した料簡りようけんさえあなたはすでに疑うたぐつていらつしやる。それがすでに卑怯です。が、それは問題じゃありません。あなたは他の招待に応じておきながら、なぜ平生ふだんのように愉快にしておさる事ができないんです。あたしはあなたを招待したために恥を掻かいたも同じ事です。あなたはあたしの宅うちの客に侮辱を与えた結果、あたしにも侮辱を与えています」

「侮辱を与えた覚はない」

「あります。言葉や仕打はどうでも構わないんです。あなたの態度が侮辱を与えているんです。態度が与えていないでも、あなたの心が与えているんです」

「そんな立ち入った批評を受ける義務は僕にないよ」

「男は卑怯だから、そう云う下らない挨拶あいさつができるんです。高木さんは紳士だからあなたを容ゆるれる雅量がいくらでもあるのに、あなたは高木さんを容れる事がけつしてできない。卑怯だからです」

松本の話

一

それから市蔵と千代子との間がどうなったか僕は知らない。別にどうもならないんだろ
う。少なくとも傍^{はた}で見ていると、二人の關係は昔から今日^{こんにち}に至るまで全く変わらないよう
だ。二人に聞けばいろいろな事を云うだろうが、それはその時限りの氣分に制せられて、
まことしやかに前後に通じない嘘^{うそ}を、永久の価値あるごとく話すのだと思えば間違ない。
僕はそう信じている。

あの事件ならその当時僕も聞かされた。しかも両方から聞かされた。あれは誤解でも何
でもない。両方でそう信じているので、そうしてその信じ方に両方とも無理がないのだから、
極めてもつともな衝突と云わなければならぬ。したがって夫婦になろうが、友達と
して暮らそうが、あの衝突だけはとうてい免^{まぬ}かれる事のできない、まあ二人の持つて生れ

た、因果^{いんが}と見るよりほかに仕方がなからう。ところが不幸にも二人はある意味で密接に引きつけられている。しかもその引きつけられ方がまた傍^{はた}のものにどうする權威もない宿命の力で支配されているんだから恐ろしい。取り澄ました警句を用いると、彼らは離れるために合い、合うために離れると云った風の気の毒な一^{いつ}対^{たい}を形づくっている。こう云つて君に解るかどうかわからないが、彼らが夫婦になると、不幸を醸^{かも}す目的で夫婦になったと同様の結果に陥^{おち}いるし、また夫婦にならないと不幸を続ける精神で夫婦にならないのと忤^{えら}ぶところのない不満足を感じるのである。だから二人の運命はただ成行^{なりゆき}に任せて、自然の手で直接に発展させて貰^{もら}うのが一番上策だと思う。君だの僕だのが何のかのと要^いらぬ世話を焼くのはかえつて当人達のために好くあるまい。僕は知つての通り、市蔵から見ても千代子から見ても他人ではない。ことに須永^{すなが}の姉からは、二人の身分について今まで頼まれたり相談を受けたりした例^{ためし}は何度もある。けれども天の手際^{てぎわ}で旨^{うま}く行かないものを、どうして僕の力で纏^{まと}める事ができよう。つまり姉は無理な夢を自分一人で見ているのである。

須永の姉も田口の姉も、僕と市蔵の性質が余りよく似ているので驚ろいている。僕自身もどうしてこんな変り者が親類に二人揃^{そろ}つてできたのだらうかと考えては不思議に思う。須永の姉の料簡^{りようけん}では、市蔵の今日^{こんにち}は全く僕の感化を受けた結果に過ぎないと見てい

るらしい。僕が姉の氣に入らない点をいくらでも有^もっている内で、最も彼女を不愉快にするものは、不明なる僕のわが甥^{おい}に及ぼしたと認められているこの悪い影響である。僕は僕の市蔵に対する今日までの態度に顧^{かえり}みて、この非難をもつともだと肯^{がえん}ずる。それがために市蔵を田口家から疎隔したという不服もついでに承認して差支^{さしつかえ}ない。ただ彼ら姉二人が僕と市蔵とを、同じ型からでき上った偏窟^{へんくつじん}人のように見倣^{みな}して、同じ眉^{まゆ}を僕らの上に等しく顰^{ひそ}めるのは疑もなく誤っている。

市蔵という男は世の中と接触するたびに内へとぐるを捲^まき込む性質^{たち}である。だから一つ刺戟^{しげき}を受けると、その刺戟がそれからそれへと廻転して、だんだん深く細かく心の奥に喰い込んで行く。そうしてどこまで喰い込んで行っても際限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。しまいにはどうかしてこの内面の活動から逃^{のが}れたいと祈るくらいに氣を悩ますのだけれども、自分の力ではいかんともすべからざる呪^{のろ}いのごとくに引つ張られて行く。そうしていつかこの努力のために斃^{たお}れなければならない、たった一人で斃れなければならないという怖^{おそ}れを抱^{いだ}くようになる。そうして氣^{きちがい}狂のように疲れる。これが市蔵の命^め根^{いこん}に横^{よこた}わる一大不幸である。この不幸を転^さじて幸^{さいわい}とするには、内へ内へと向く彼の命の方向を逆にして、外へとぐるを捲^まき出させるよりほかに仕方がない。外にある物を頭へ運

び込むために眼を使う代りに、頭で外にある物を眺める心持で眼を使うようにしなければならぬ。天下にたった一つで好いから、自分の心を奪い取るような偉いものか、美しくいものか、優しいものか、を見出さなければならぬ。一口に云えば、もつと浮気にならなければならぬ。市蔵は始め浮気を軽蔑してかかった。今はその浮気を渴望している。彼は自己の幸福のために、どうかして翻々たる軽薄才子になりたいと心から神に念じているのである。軽薄に浮かれ得るよりほかに彼を救う途は天下に一つもない事を、彼は、僕が彼に忠告する前に、すでに承知していた。けれども実行はいまだにできないでもがいている。

二

僕はこういう市蔵を仕立て上げた責任者として親類のものから暗に恨まれているが、僕自身もその点については疚ましいところが大きいにあるのだから仕方がない。僕はつまり性格に応じて人を導く術を心得なかつたのである。ただ自分の好尚を移せるだけ市蔵の上に移せばそれで充分だという無分別から、勝手しだいに若いものの柔らかい精神を動かして

来たのが、すべての禍の本になつたらしい。僕がこの過失に気がついたのは今から二三年前である。しかし気がついた時はもう遅かつた。僕はただなす能力のない手を拱こまぬいて、心の中で嘆息うちしただけであつた。

事実を一言いちごんでいうと、僕の今やつているような生活は、僕に最も適當なので、市蔵にはけつして向かないのである。僕は本来から氣の移りやすくでき上つた、極めて安価きわな批評をすれば、生れつゝの浮氣うわきものに過ぎない。僕の心は絶えず外に向つて流れている。だから外部の刺戟しげきしだいでどうにでもなる。と云つただけではよく腑ふに落ちないかも知れないが、市蔵は在來の社會を教育するために生れた男で、僕は通俗な世間から教育されに引た人間なのである。僕がこのくらい好い年をしながら、まだ大變若いところがあるのに引き更かえて、市蔵は高等學校時代からすでに老成していた。彼は社會を考える種に使うけれども、僕は社會の考かえにこつちから乗り移つて行くだけである。そこに彼の長所があり、かねて彼の不幸ひそが潜ひそんでいる。そこに僕の短所があり、また僕の幸福が宿よつてゐる。僕は茶の湯をやれば静かな心持になり、骨董こつとうを捻ひねくれば寂さびた心持になる。そのほか寄席よせ、芝居、相撲すもう、すべてその時々おのれの心持になれる。その結果あまり眼前の事物に心を奪われ過ぎるので、自然に己おのれなき空疎な感に打たれざるを得ない。だからこんな超然生活を営んで

強いて自我を押し立てようとするのである。ところが市蔵は自我よりほかに当初から何物を有^もつていない男である。彼の欠点を補なう——というより、彼の不幸を切りつめる生活の径路は、ただ内に潜^{もぐ}り込まないで外に應ずるよりほかに仕方がないのである。しかるに彼を幸福にし得るその唯一の策を、僕は間接に彼から奪つてしまった。親類が恨^{うら}むのはもつともである。僕は本人から恨まれないのをまだしもの仕合せと思つていくくらいである。

今からたしか一年ぐらい前の話だと思う。何しろ市蔵がまだ学校を出ない時の話だが、ある日偶然やつて来て、ちよつと挨拶^{あいさつ}をしたぎりすぐどこかへ見えなくなった事がある。その時僕はある人に頼まれて、書齋で日本の活^い花^けの歴史を調べていた。僕は調べものの方に氣を取られて、彼の顔を出した時、やあとただふり返つただけであつたが、それでも彼の血色がはなはだ勝^{すぐ}れないのを苦にして、仕事の区切がつくや否や彼を探しに書齋を出た。彼は妻^{さい}とも仲が善^よかつたので、あるいは茶の間で話でもしている事かと思つたら、そこにも姿は見えなかつた。妻に聞くと子供の部屋だろうというので、縁伝^{トアー}いに戸を開けると、彼は咲子の机の前に坐^{すわ}つて、女の雑誌の口絵に出ている、ある美人の写真を眺めていた。その時彼は僕を顧^{かえり}みて、今こういう美人を発見して、先刻^{さつき}から十分ばかり相對していいところだと告げた。彼はその顔が眼の前にある間、頭の中の苦痛を忘れて自^{おの}から愉快に

なるのだそうである。僕はさつそくこの何者の令嬢かと尋ねた。すると不思議にも彼は写真の下に書いてある女の名前をまだ読まずにいた。僕は彼を迂闊だと云った。それほど気に入った顔ならなぜ名前から先に頭に入れないかと尋ねた。時と場合によれば、細君として申し受ける事も不可能でないと僕は思ったからである。しかるに彼はまた何の必要があつて姓名や住所を記憶するかと云った風の眼^{めづかい}使^{つか}をして僕の注意を怪しんだ。

つまり僕は飽くまでも写真を実物の代表として眺め^{なが}、彼は写真をただの写真として眺めていたのである。もし写真の背後に、本当の位置や身分や教育や性情がつけ加わつて、紙の上の肖像を活かしにかかったなら、彼はかえつて気に入ったその顔まで併せて打ち棄ててしまったかも知れない。これが市蔵の僕と根本的に違ふところである。

三

市蔵の卒業する二三カ月前、たしか去年の四月頃だったろうと思う。僕は彼の母から彼の結婚に関して、今までにない長時間の相談を受けた。姉の意思は固より田口の姉娘を彼の嫁として迎えたいという単純にしてかつ頑固なものであつた。僕は女に理窟^{りくつ}を聞かせる

のを、男の恥のように思う癖があるので、むずかしい事はなるべく控えたが、何しろこういう問題について、できるだけ本人の自由を許さないのは親の義務に背くのも同然だという意味を、昔風の彼女の腑に落ちるように碎いて説明した。姉は御承知の通り極めて穏やかな女ではあるが、いざとなると同じ意見を何度でもくり返して憚らない婦人に共通な特性を一人前以上に具えていた。僕は彼女の執拗を悪むよりは、その根気の好過ぎるところにかえって妙な憐れみを催した。それで、今親類中に、市蔵の尊敬しているものは僕よりほかにないのだから、ともかくも一遍呼び寄せてとくと話して見てくれぬかという彼女の請を快よく引受けた。

僕がこの目的を果たすために市蔵とこの座敷で会見を遂げたのは、それから四日目の日曜の朝だと記憶する。彼は卒業試験間近の多忙を目の前に控えながら座に着いて、何試験なんかどうなったって構やしませんかと苦笑した。彼の説明によると、かねてその話は彼の母から何度も聞かされて、何度も決答をくり延ばした陳腐なものであった。もつとも彼のそれに対する態度は、問題の陳腐と反比例にすこぶる切なさそうに見えた。彼は最後に母から口説かれた時、卒業の上、どうとも解決するから、それまで待つて呉れろと母に頼んでおいたのだそうである。それをまだ試験も済まない先から僕に呼びつけられたので、多

少迷惑らしく見えたばかりか、年寄は気が短かくって困ると言葉に出してまで訴えた。僕ももつともだと思つた。

僕の推測では、彼が学校を出るまでとかくの決答を延ばしたのは、そのうちに千代子の縁談が、自分よりは適当な候補者の上に纏まといつくに違ないと勘定かんていして、直接に母を失望させる代りに、周囲の事情が母の意思を翻ひるがえさせるため自然と彼女に圧迫を加えて来るのを待つ一種の逃避手段に過ぎないと思われた。僕は市蔵にそうじゃ無いかと聞いた。市蔵はそうだと答えた。僕は彼にどうしても母を満足させる気はないかと尋ねた。彼は何事によらず母を満足させたいのは山々であると答えた。けれども千代子を貰もらおうとはけつして云わなかつた。意地ずくで貰わないのかと聞いたら、あるいはそうかも知れないと云い切つた。もし田口がやつても好いと云い、千代子が来ても好いと云つたらどうだと念を押したら、市蔵は返事をしらずに黙つて僕の顔を眺ながめていた。僕は彼のこの顔を見ると、けつして話を先へ進める気になれないのである。畏怖いふというと仰ぎようさん山やますぎるし、同情というつまるで憐あわれっぽく聞こえるし、この顔から受ける僕の心持は、何と云つていいかほとんど分らないが、永久に相手を諦あきらめてしまわなければならぬ絶望に、ある凄味すこみと優やさし味みをつけ加えた特殊の表情であつた。

市蔵はしばらくして自分はなぜこう人に嫌きらわれるんだろうと突然意外な述懐をした。僕はその時ならないのと平生の市蔵に似合しからないのとで驚ろかされた。なぜそんな愚痴ぐちを零こぼすのかと窘たじなめるような調子で反問を加えた。

「愚痴じやありません。事実だから云うのです」

「じや誰が御前を嫌っているかい」

「現にそういう叔父さんからして僕を嫌っているじやありませんか」

僕は再び驚ろかされた。あまり不思議だから二三度押問答の末推測して見ると、僕が彼に特有な一種の表情に支配されて話の進行を停止した時の態度を、全然彼に対する嫌悪けんおの念から出たと受けているらしかった。僕は極力彼の誤解を打破しに掛った。

「おれが何で御前を悪にくむ必要があるかね。子供の時から関係でも知れているじやないか。馬鹿を云いなさんな」

市蔵は叱られて激した様子もなくますます蒼あおい顔をして僕を見つめた。僕は熾火りんかの前に坐すわっているような心持がした。

四

「おれは御前の叔父だよ。どこの国に甥おいを憎にくむ叔父があるかい」

市蔵はこの言葉を聞くや否やたちまち薄い唇くちびるを反そらして淋さみしく笑った。僕はその淋しみの裏に、奥深い軽侮の色を透すかし見た。自白するが、彼は理解の上において僕よりも優すぐれた頭の所有者である。僕は百もそれを承知でいた。だから彼と接触するときには、彼から馬鹿にされるような愚ぐをなるべく慎んで外に出さない用心を怠おこたらなかつた。けれども時々、ついで年長者の傲おごる心から、親しみの強い彼を眼下がんかに見下みくだして、浅薄と心こころづき付ながら、その場限りの無意味にもつたをつけた訓戒などを与える折も無いではなかつた。賢かしい彼は僕に恥を搔かかせるために、自分の優越を利用するほど、品位を欠いた所作しよさをあえてし得ないのであるが、僕の方ではその都度つど彼に対するこつちの相場が下落して行くような屈辱を感じるのが例であつた。僕はすぐ自分の言葉を訂正しにかかつた。

「そりや広い世の中だから、敵同志かたきどうしの親子もあるだろうし、命を危あやめ合う夫婦もいないとは限らないさ。しかしまあ一般に云えば、兄弟とか叔父甥とかの名で繋つながつている以上は、繋がつているだけの親しみはどこかにあろうじやないか。御前は相應の教育もあり、相應の頭もある癖ひがに、何だか妙に一種の僻ひがみがあるよ。それが御前の弱点だ。是非直さな

くつちやいけない。傍^{はた}から見ていても不愉快だ」

「だから叔父さんまで嫌^{きら}つていると云うのです」

僕は返事に窮した。自分で気のつかない自分の矛盾を今市蔵から指摘されたような心持もした。

「僻^{ひがみ}みさえさらりと棄^すててしまえば何でもないじゃないか」と僕はさも事もなげに云つて退^のけた。

「僕に僻^{ひがみ}があるでしょうか」と市蔵は落ちついて聞いた。

「あるよ」と僕は考えずに答えた。

「どういふところが僻^{ひがみ}んでいるでしょう。判^{はつきり}然聞かして下さい」

「どういふところがつて、——あるよ。あるからあると云うんだよ」

「じゃそういう弱点があるとして、その弱点はどこから出たんでしょう」

「そりや自分の事だから、少し自分で考えて見たらよかろう」

「あなたは不親切だ」と市蔵が思い切った沈痛な調子で云った。僕はまずその調子に度^ど失った。次に彼の眼の色を見て萎^{いしゆく}縮した。その眼はいかにも恨^{うら}めしように僕の顔を見つめていた。僕は彼の前に一言^{いちごん}の挨拶^{あいさつ}さえする勇気を振り起し得なかった。

「僕はあなたに云われない先から考えていたのです。おつしやるまでもなく自分の事だから考えていたのです。誰も教えてくれ手がないから独り^{ひと}で考えていたのです。僕は毎日毎夜考えました。余り考え過ぎて頭も身体^{からだ}も続かなくなるまで考えたのです。それでも分らないからあなたに聞いたのです。あなたは自分から僕の叔父だと明言していらつしやる。それで叔父だから他人より親切だと云われる。しかし今の御言葉はあなたの口から出たにもかかわらず、他人より冷刻なものとしか僕には聞こえませんでした」

僕は頬^ほを伝わつて流れる彼の涙を見た。幼少の時から馴染^{なじ}んで今日^{こんにち}に及んだ彼と僕との間に、こんな光景^{シーン}はいまだかつて一回も起らなかった事を僕は君に明言しておきたい。したがつてこの昂奮^{こうふん}した青年をどう取り扱つていいかの心得が、僕にまるで無かつた事もついでに断つておきたい。僕はただ茫然^{ぼうぜん}として手を拱^{こま}ぬいていた。市蔵はまた僕の態度などを眼中において、自分の言葉を調節する余裕^もを有たなかつた。

「僕は僻^{ひく}んでいるでしょうか。たしかに僻^{ひく}んでいるでしょう。あなたがおつしやらないでも、よく知っているつもりです。僕は僻^{ひく}んでいます。僕はあなたからそんな注意を受けないでも、よく知っています。僕はただどうしてこうなったかその訳が知りたいのです。いえ母でも、田口の叔母でも、あなたでも、みんなよくその訳を知っているのです。ただ

僕だけが知らないのです。ただ僕だけに知らせないのです。僕は世の中の人間の中であな
たを一番信用しているから聞いたのです。あなたはそれを残酷に拒絶した。僕はこれから
生涯しょうがいの敵としてあなたを呪のろいます」

市蔵は立ち上った。僕はそのとつさの際に決心をした。そうして彼を呼びとめた。

五

僕はかつてある学者の講演を聞いた事がある。その学者は現代の日本の開化を解剖して、
かかる開化の影響を受けるわれらは、上滑うわすべりにならなければ必ず神経衰弱に陥おちいるにき
まつているという理由を、臆面おくめんなく聴衆の前に曝露ばくろした。そうして物の真相は知らぬ内
こそ知りたいものだが、いざ知ったとなると、かえって知らぬが仏ほとけですましていた昔が羨うらや
ましくつて、今の自分を後悔する場合も少なくはない、私の結論などもあるいはそれに似
たものかも知れませんかと苦笑して壇を退しりぞいた。僕はその時市蔵の事を思い出して、こ
う苦にがい真理を承うけたまわらなければならぬ我々日本人も随分気の毒なものだが、彼のよう
にたった一人の秘密を、攫つかもうとしては恐れ、恐れてはまた攫つかもうとする青年は一層見惨みじめに

違あるまいと考えながら、腹の中で暗に同情の涙を彼のために濺いだ。

これは単に僕の一族内の事で、君とは全く利害の交渉を有たない話だから、君が市蔵のためにせっかく心配してくれた親切に対する前からの行がかりさえなければ、打ち明けないはずだったが、実を云うと、市蔵の太陽は彼の生れた日からすでに曇っているのである。

僕は誰にでも明言して憚らない通り、いつさいの秘密はそれを開放した時始めて自然に復る落着を見る事ができるという主義を抱いているので、穏便とか現状維持とかい

う言葉には一般の人ほど重きを置いていない。したがって今日までに自分から進んで、

市蔵の運命を生れた当時に溯つて、逆に照らしてやらなかったのは僕としてはむしろ不思議な手落と云つてもいいくらいである。今考えて見ると、僕が市蔵に呪われる間際まで、

なぜこの事件を秘密にしていたものか、その意味がほとんど分らない。僕はこの秘密に風を入れたところで、彼ら母子の間柄が悪くなるうとは夢にも想像し得なかったからである。

市蔵の太陽は彼の生れた日からすでに曇っていたという僕の言葉の裏に、どんな事実が含まれているかは、彼と交りの深い君の耳で聞いたら、すでに具体的な響となつて解っているかも知れない。一口でいうと、彼らは本当の母子ではないのである。なお誤解のないように一言つけ加えると、本当の母子よりも遥かに仲の好い継母と継子なのである。

彼らは血を分けて始めて成立する通俗な親子關係を輕蔑しても差支ないくらい、情愛の糸で離れられないように、自然からしつかり括りつけられている。どんな魔の振る斧の刃でもこの糸を絶ち切る訳に行かないのだから、どんな秘密を打ち明けても怖がる必要はさらになのである。それなのに姉は非常に恐れていた。市蔵も非常に恐れていた。姉は秘密を手に握ったまま、市蔵は秘密を手に握らせられるだろうと待ち受けたまま、二人して非常に恐れていた。僕はとうとう彼の恐れるものの正体を取り出して、彼の前に他意なく並べてやったのである。

僕はその時の問答を一々くり返して今君に告げる勇氣に乏しい。僕には固よりそれほどの大事件とも始から見えず、またなるべく平氣を装う必要から、つまり何でもない事のように入話したのだが、市蔵はそれを命がけの報知として、必死の緊張の下に受けたからである。ただ前の続きとして、事実だけを一口に約めて云うと、彼は姉の子でなくって、小間使の腹から生れたのである。僕自身の家に起った事でない上に、二十五年以上も経った昔の話だから、僕も詳しい顛末は知ろうはずがないが、何しろその小間使が須永の種を宿した時、姉は相当の金をやって彼女に暇を取らしたのだそうである。それから宿へ下った妊婦が男の子を生んだという報知を待つて、また子供だけ引き取って表向自分の子と

して養育したのだそうである。これは姉が須永に對する義理からでもあろうが、一つは自分の子のできないのを苦にしていた矢先だから、本氣に吾子として愛しむ考も無論手伝つたに違ない。實際彼らは君の見るごとく、また吾々の見るごとく、最も親しい親子として今日まで發展して來たのだから、御互に事情を明し合つたところで毫も差支の起る訳がない。僕に云わせると、世間にありがちな反の合ない本当の親子よりもどのくらい肩身が広いか分りやしない。二人だつて、そうと知つた上で、今までの睦まじさを回顧した時の方が、どんなに愉快が多いだろう。少なくとも僕ならそうだ。それで僕は市藏のために特にこの美しい点を力のあらん限り彩る事を怠らなかつた。

六

「おれはそう思うんだ。だから少しも隠す必要を認めていない。御前だつて健全な精神を持つてゐるなら、おれと同じように思うべきはずじゃないか。もしそう思う事ができないというなら、それがすなわち御前の僻みだ。解つたかな」

「解りました。善く解りました」と市藏が答えた。僕は「解つたらそれで好い、もうその

問題についてかれこれというのは止しにしようよ」と云った。

「もう止します。もうけつしてこの事について、あなたを煩^{わづ}らわす日は来ないでしょう。なるほどあなたのおつしやる通り僕は僻^ひんだ解釈ばかりしていたのです。僕はあなたの御話を聞くまでは非常に怖^{こわ}かったです。胸の肉が縮^{ちぢ}まるほど怖^{こわ}かったです。けれども御話を聞いてすべてが明白になったら、かえって安心して気が楽になりました。もう怖い事も不安な事ありません。その代り何だか急に心細くなりました。淋^{さび}しいです。世の中にたった一人立っているような気がします」

「だって御母さんは元の通りの御母さんなんだよ。おれだって今までのおれだよ。誰も御前に対して変わるものはありやしないんだよ。神経を起しちやいけない」

「神経は起きなくつても淋しいんだから仕方がありません。僕はこれから宅^{うち}へ帰って母の顔を見るときつと泣くにきまっています。今からその時の涙を予想しても淋^{さむ}しくつてたまりません」

「御母さんには黙っている方がよからう」

「無論話しません。話したら母がどんな苦しい顔をするか分りません」

二人は默^{もく}然^{ねん}として相對した。僕は手持無沙汰^{てもちぶさた}に煙草盆^{たばこぼん}の灰吹^{はいふき}を叩いた。市蔵はう

つむいて袴はかまの膝ひざを見つめていた。やがて彼は淋さみしい顔を上げた。

「もう一つ伺っておきたい事がありますが、聞いて下さいますか」

「おれの知っている事なら何でも話して上げる」

「僕を生んだ母は今どこにいます」

彼の実の母は、彼を生むと間もなく死んでしまったのである。それは産後の肥立ひだちが悪かつたせいだとも云い、または別の病やまいだとも聞いているが、これも詳しい話をしてやるほどの材料に欠乏した僕の記憶では、とうてい餓うえた彼の眼を静めるに足りなかった。彼の生せい母いぼの最後の運命に関する僕の話は、わずか二三分で尽きてしまった。彼は遺憾いかんな顔をして彼女の名前を聞いた。幸さいわいにして僕は御弓おゆみという古風な名を忘れずにいた。彼は次に死んだ時の彼女の年齢としを問うた。僕はその点に関して、何という確しかとした知識を有もっていないかった。彼は最後に、彼の宅うちに奉公していた時分の彼女に会った事があるかと尋ねた。僕はあると答えた。彼はどんな女だと聞き返した。気の毒にも僕の記憶はすこぶる朦朧もうろうとしていた。事実僕はその当時十五六の少年に過ぎなかったのである。

「何でも島田に結いつてた事がある」

このくらいよりほかに要領を得た返事は一つもできないので、僕もはなはだ残念に思っ

た。市蔵はようやく諦^{あきら}めたといい眼つきをして、一番しまいに、「じゃせめて寺だけ教えてくれませんか。母がどこへ埋^{うま}つているんだか、それだけでも知っておきたいと思いますから」と云った。けれども御弓の菩提^{ぼだい}所を僕が知ろうはずがなかった。僕は呻^{しん}吟^{ぎん}しながら、已^{やむ}を得なければ姉に聞くよりほかに仕方あるまいと答えた。

「御母さんよりほかに知ってるものは無いでしょうか」

「まああるまいね」

「じゃ分らないでもよござんす」

僕は市蔵に対して気の毒なようなまたすまないような心持がした。彼はしばらく庭の方を向いて、麗^{うら}かな日脚^{ひあし}の中に咲く大きな椿^{つばき}を眺^{なが}めていたが、やがて視線をもとに戻した。

「御母さんが是非千代ちゃんを貰えというのも、やっぱり血統上の考えから、身縁^{みより}のものを僕の嫁にしたいという意味なんでしょうね」

「全くそこだ。ほかに何にもないんだ」

市蔵はそれでは貰おうとも云わなかった。僕もそれなら貰うかとも聞かなかった。

この会見は僕にとって美しい経験の一つであつた。双方で腹藏なくすべてを打ち明け合う事ができたという点において、いまだに僕の貧しい過去を飾っている。相手の市藏から見ても、あるいは生れて始めての慰藉いしやではなかつたかと思う。とにかく彼が歸つたあと、僕の頭には、善い功德くしよくを施こしたという愉快な感じが残つたのである。

「万事おれが引き受けてやるから心配しないがいい」

僕は彼を玄關に送り出しながら、最後にこういう言葉を彼の背に暖かくかけてやつた。その代り姉に会見の結果を報告する時ははなはだまづかつた。已やむを得ないから、卒業して頭に暇さえできれば、はつきりどうにか片をつけると云っているから、それまで待つが好かろう、今かれこれ突つつくのは試験の邪魔になるだけだからと、姉が聞いても無理のないところで、ひとまず宥なだめておいた。

僕は同時に事情を田口に話して、なるべく市藏の卒業前に千代子の縁談が運ぶように工夫ふうした。委細を聞いた田口の口振は平生の通り如才なくかつ無雑作むぞうさであつた。彼は僕の注意がなくなつても、その辺は心得ているつもりだと答えた。

「けれども必竟は本人のために嫁入かたづけるんで、（そう申しちゃ角が立つが、）姉さんや市

蔵の便宜べんぎのために、千代子の結婚を無理にくり上げたり、くり延べたりする訳にも行かないものだから」

「ごもつともだ」と僕は承認せざるを得なかった。僕は元来田口家と親類並の交際つきあいをしているにはいるが、その実彼らの娘の縁談に、進んで口を出したこともなければ、また向うから相談を受けた例ためしも有たないのである。それで今日こんにちまで千代子にどんな候補者があったのか、間接にさえほとんどその噂うわさを耳にしなかった。ただ前の年鎌倉の避暑地とかで市蔵が会つて、気を悪くしたという高木だけは、市蔵からも千代子からも名前を教えられて覚えていた。僕は突然ながら田口にその男はどうなったかと尋ねた。田口は愛嬌あいぎようらしく笑つて、高木は始めから候補者として打つて出たのではないと告げた。けれども相当の身分と教育があつて独身の男なら、誰でも候補者になり得る権利は有つているのだから、候補者でないとはけつして断言できないとも告げた。この曖昧あいまいな男の事を僕はなお委しくわく聞いて見て、彼が今上海シャンハイにいる事を確かめた。上海にいるけれどもいつ帰るか分らないという事も確かめた。彼と千代子との間柄はその後何らの発展も見ないが、信書の往復はいまだに絶えない、そうしてその信書はきつと父母ふぼが眼を通した上で本人の手に落つるという条件つきの往復であるという事まで確めた。僕は一も二もなく、千代子には其男それ

が好いじやないかと云った。田口はまだどこかに慾があるのか、または別に考^{かんがえ}を有つていいのか、そうするつもりだとは明言しなかった。高木のいかなる人物かをまるで解しない僕が、それ以上勧める権利もないから、僕はついそのままにして引き取った。

僕と市蔵はその後久しく会わなかった。久しくと云ったところでわずか一カ月半ばかりの時日に過ぎないのだが、僕には卒業試験を眼の前に控えながら、家庭問題に屈^{くつ}托^{たく}しなければならぬ彼の事が非常に気にかかった。僕はそつと姉を訪^{たず}ねてそれとなく彼の近況を探つて見た。姉は平気で、何でもだいぶ忙がしそうだよ、卒業するんだからそのはずさねと云つて澄ましていた。僕はそれでも不安心だったから、ある日一時間^{ゆうべ}の夕を僕と会食するために割^さかせて、彼の家の近所の洋食店で共に晩^{ばん}餐^{さん}を食いながら、ひそかに彼の様子を窺^{うかが}つた。彼は平生の通り落ちついていて、なに試験なんかどうにかこうにかやつつけまさあと受合^{まんざら}つたところに、満^{まん}更^{ざら}の虚勢も見えなかった。大丈夫かいと念を押した時、彼は急に情^{なさけ}なそうな顔をして、人間の頭は思つたより堅固にできているもんですね、実は僕自身も怖^{こわ}くつてたまらないんですが、不思議にまだ壊れませんが、この様子ならまだ当分は使えるでしょうと云った。冗^{じょうだん}談^{だん}らしくもあり、また真^ま面^め目^めらしくもあるこの言葉が、妙^{あわ}に憐^あれ深い感じを僕に与えた。

八

若葉の時節が過ぎて、湯上りの単衣の胸に、団扇の風を入れたく思うある日、市蔵がまたふらりとやって来た。彼の顔を見るや否や僕が第一にかけた言葉は、試験はどうだったという一語であつた。彼は昨日ようやくすんだと答えた。そうして明日からちよつと旅行して来るつもりだから暇乞に來たと告げた。僕は成績もまだ分らないのに、遠く走る彼の心理状態を疑つてまた多少の不安を感じた。彼は京都附近から須磨明石を経て、ここに因ると、広島まで行きたいという希望を述べた。僕はその旅行の比較的大袈裟なのに驚ろいた。及第とさえきまつていればそれでも好かろうがと間接に不賛成の意を仄めかして見ると、彼は試験の結果などには存外冷淡な挨拶をした。そんな事に氣を遣う叔父さんこそ平生にも似合ひしからんじやありませんかと云つて、ほとんど相手にならなかつた。話しているうちに、僕は彼の思い立が及落の成績に關係のない別方面の動機から萌しているという事を発見した。

「実はあの事件以来妙に頭を使うので、近頃では落ちついて書齋に坐っている事が困難に

なりましてね。どうしても旅行が必要なんですから、まあ試験を途中で已めなかつたのが感心だぐらいに賞^ほめて許して下さい」

「そりや御前の金で御前の行きたい所へ行くのだから少しも差支^{さしつかえ}はないさ。考えて見れば少しは飛び歩いて気を換えるのも好かろう。行つて来るがいい」

「ええ」と云つて市蔵はやや満足らしい顔をしたが、「実は大きな声で話すのも気の毒でもつたいないんですが、叔父さんにあの話を聞いてから以後は、母の顔を見るたんびに、変な心持になつてたまらないんです」とつけ足した。

「不愉快になるのか」と僕はむしろ嚴^{おごそ}かに聞いた。

「いいえ、ただ気の毒なんです。始めは淋^{さび}しくつて仕方がなかつたのが、だんだんだんだん気の毒に変化して來たのです。実はここだけの話ですけれども、近頃では母の顔を朝夕見るのが苦痛なんです。今度の旅行だつて、かねてから卒業したら母に京大阪と宮島を見物させてやりたいと思つていたのだから、昔の僕なら供^{とも}をする気で留守^{るす}を叔父さんにでも頼みに出かけて來るところなんですが、今云つたような訳で、關係がまるで逆になつたものだから、少しでも母の傍^{そば}を離れたらという氣ばかりして」

「困るね、そう變になつちやあ」

「僕は離れたらまたきつと母が恋しくなるだろうと思うんですが、どうでしょう。そう旨くはいかないもんでしうか」

市蔵はさも懸念らしくこういう問をかけた。彼より経験に富んだ年長者をもつて自任する僕にも、この点に関する彼の未来はほとんど想像でしなかつた。僕はただ自分に信念がなくつて、わが心の事を他に尋ねて安心したいと願う彼の胸の裏を憐れに思つた。上部はいかにも優しそうに見えて、實際は極めて意地の強くでき上つた彼が、こんな弱い音を出すのは、ほとんど例のない事だつたからである。僕は僕の力の及ぶ限り彼の心に保証を与えた。

「そんな心配はするだけ損だよ。おれが受合つてやる。大丈夫だから遊んで来るが好い。御前の御母さんはおれの姉だ。しかもおれよりも学問をしないだけに、よほど純良にできている、誰からも敬愛されべき婦人だ。あの姉と君のような情愛のある子がどうして離れつ切りに離れられるものか。大丈夫だから安心するが好い」

市蔵は僕の言葉を聞いて實際安心したらしく見えた。僕もやや安心した。けれども一方では、このくらい根のない慰藉の言葉が、明晰な頭脳を有つた市蔵に、これほどの影響を与えたとすれば、それは彼の神経がどこか調子を失なっているためではなからうかとい

う疑も起った。僕は突然極端の出来事を予想して、一人身の旅行を危ぶみ始めた。

「おれもいっしょに行こうか」

「叔父さんといっしょじゃ」と市蔵が苦笑した。

「いけないかい」

「平生^{ふだん}ならこつちから誘つても行つて貰いたいんだが、何しろいつどこへ立つんだか分らない、云わば気の向きしだい予定の狂う旅行だから御気の毒でね。それに僕の方でもあな
たがいると束縛^よがあつて面白くないから……」

「じゃ止^よそう」と僕はすぐ申し出を撤回した。

九

市蔵が帰つた後^{あと}でも、しばらくは彼の事が変に気にかかった。暗い秘密を彼の頭に判で押した以上、それから出る一切の責任は、当然僕が背負^{しよ}つて立たなければならない気がしたからである。僕は姉に会つて、彼女の様子を見もし、また市蔵の近況を聞きもしたくなつた。茶の間にいた妻^{さい}を呼んで、相談かたがた理由^{わけ}を話すと、存外物に驚ろかない妻は、

あなたがあんまり余計なおしやべりをなさるからですよと云つて、始めはほとんど取り合
わなかつたが、しまいに、なんで市いっさんに間違があるもんですか、市さんは年こそ若いが、
あなたよりよっぽど分別のある人ですものと、独ひとりで受合つていた。

「すると市蔵の方で、かえつておれの事を心配している訳になるんだね」

「そうですとも、誰だつてあなたの懐ふところ手ばかりして、舶来のパイプを銜くわえているところを見れば、心配になりますわ」

そのうち子供が学校から歸つて来て、家うちの中が急に賑にぎやかになつたので、市蔵の事はつい忘れたぎり、夕方までどうとう思い出す暇がなかつた。そこへ姉が自分の方から突然尋ねて来た時は、僕も覚えひやず冷りとした。

姉はいつもの通り、家族の集まつている真中に坐つて、無沙汰ぶさたの託わびやら、時候の挨拶あいさつやらを長々しく妻さいと交換していた。僕もそこに座を占めたまま動く機会を失つた。

「市蔵が明日あすから旅行するつて云うじやありませんか」と僕は好い加減な時分に聞き出した。

「それについてね……」と姉はやや真面目まじめになつて僕の顔を見た。僕は姉の言葉を皆まで聞かずに、「なに行きたいなら行かしておやんなさい。試験で頭をさんざん使つた後あとだも

の。少しは楽もさせないと身体からだの毒になるから」とあたかも市蔵の行動を弁護するように云った。姉は固もとより同じ意見だと答えた。ただ彼の健康状態が旅行に堪たえるかどうかを氣き遣づかうだけだと告げた。最後に僕の見るところでは大丈夫なのかと聞いた。僕は大丈夫だと答えた。妻も大丈夫だと答えた。姉は安心というよりも、むしろ物足りない顔をした。僕は姉の使う健康という言葉が、身体に關係のない精神上の意味を有もっているに違ないと考えて、腹の中で一種の苦痛を感じた。姉は僕の顔つきから直覺的に影響を受けたらしい心細さを額に刻きざんで、「恒つねさん、先刻さつき市蔵がこちらへ上った時、何か様子の変ったところでもありやしませんでしたかい」と聞いた。

「何そんな事があるもんですか。やつぱり普通の市蔵でさあ。ねえ御仙おせん」

「ええちつとも違つておいでじゃありません」

「わたしもそうかと思うけれども、何だかこの間から調子が変わね」

「どんななんです」

「どんなだと云われるとまた話しようもないんだが」

「全く試験のためだよ」と僕はすぐ打ち消した。

「姉さんの神経きでんですよ」と妻も口を出した。

僕は夫婦して姉を慰さめた。姉はしまいにやや納得なつとくしたらしい顔つきをして、みんなと夕食ゆうめしを共にするまで話し込んだ。帰る時には散歩がてら、子供を連れて電車まで見送ったが、それでも気がすまないの、子供を先へ返して、断わる姉の傍そばに席を取ったなり、とうとう彼女の家まで来た。

僕は幸い二階にいた市蔵を姉の前に呼び出した。御母さんが御前の事を大層心配してわざわざ矢来やらいまで来たから、今おれがいろいろに云つてようやく安心させたところだと告げた。したがって旅行に出すのは、つまり僕の責任なんだから、なるべく年寄に心配をかけるないように、着いたら着いた所から、立つなら立つ所から、また逗留とうりゅうするなら逗留する所から、必ず音信たよりを怠おこたらないようにして、いつでも用ができだいこつちから呼び返す事のできる注意をしたら好かろうと云った。市蔵はそのくらいの面倒なら僕に注意されるまでもなくすでに心得ていると答えて、彼の母の顔を見ながら微笑した。

僕はこれで幾分か姉の心を柔らげ得たものと信じて十一時頃また電車で矢来へ帰つて来た。

僕を迎むかえに玄関に出た妻は、待ちかねたように、どうでしたと尋ねた。僕はまあ安心だろうよと答えた。実際僕は安心したような心持だったのである。で、明ある日は新橋へ見送り

にも行かなかった。

十

約束の音信は至る所からあった。勘定すると大抵日に一本ぐらいの割になっている。その代り多くは旅先の画端書に二三行の文句を書き込んだ簡略なものに過ぎなかった。僕はその端書が着くたびに、まず安心したという顔つきをして、妻からよく笑われた。一度僕がこの様子なら大丈夫らしいね、どうも御前の予言の方が適中したらしいと云った時、妻は愛想もなく、当り前ですわ、三面記事や小説見たような事が、滅多にあつてたまるもんですかと答えた。僕の妻は小説と三面記事とを同じ物のごとく見做す女であつた。そうして両方とも嘘と信じて疑わないほど浪漫斯に縁の遠い女であつた。

端書に満足した僕は、彼の封筒入の書翰に接し出した時さらに眉を開いた。というのは、僕の恐れを抱いていた彼の手が、陰鬱な色に巻紙を染めた痕迹が、そのどこにも見出せなかったからである。彼の状袋の中に巻き納めた文句が、彼の端書よりいかに鮮かに、彼の変化した気分を示しているかは、実際それを読んで見ないと分らない。ここに

二三通取つてある。

彼の気分を変化するに与^{あず}かつて効力のあつたものは京都の空氣だの宇治の水だのいろいろある中に、上^{かみがた}方地方の人の使う言葉が、東京に育つた彼に取つては最も興味の多い刺^{げき}戟になつたらしい。何遍もあの辺を通過した経験のあるものから云うと馬鹿げているが、市蔵の当時の神経にはああ云う滑^{なめ}らかで静かな調子が、鎮^{ちんけいさい}経剂以上に優しい影響を与え得たのではなからうかと思う。なに若い女の？ それは知らない。無論若い女の口から出れば効^{ききめ}目が多いだろう。市蔵も若い男の事だから、求めてそう云う所へ近づいたかも知れない。しかしここに書いてあるのは、不思議に御婆さんの例である。――

「僕はこの辺の人の言葉を聞くと微^{かす}かな酔に身を任せたような気分になります。ある人はべたついて厭^{いや}だと云いますが、僕はまるで反対です。厭なのは東京の言葉です。むやみに角度の多い金^{こん}米^{べい}糖^{とう}のような調子を得意になつて出します。そうして聴^{きき}手の心を粗暴にして威張ります。僕は昨^{きのう}日京都から大阪へ来ました。今日朝日新聞にいる友達を尋ねたら、その友人が箕^{みの}面^おという紅^{もみじ}葉の名所へ案内してくれました。時節が時節ですから、紅葉は無論見られませんでしたが、溪^{たに}川^{がわ}があつて、山があつて、山の行き当りに滝があつて、大変好い所でした。友人は僕を休ませるために社の倶^{クラブ}楽部とかいう二階建の建物の中へ案内

しました。そこへ這入^{はい}つて見ると、幅の広い長い土間が、豎^{たて}に家の間口を貫ぬいていました。そうしてそれがごとく敷^{しきがわら}瓦で敷き詰められている模様が、何だか支那の御寺へでも行つたような沈んだ心持を僕に与えました。この家は何でも誰かが始め別荘^{こしら}に拵^{こしら}えたのを、朝日新聞で買い取つて倶楽部用にしたのだとか聞きましたが、よし別荘にせよ、瓦^{かわら}を畳んで出来ている、この広々とした土間は何のためでしょう。僕はあまり妙だから友人に尋ねて見ました。ところが友人は知らんと云いました。もつともこれはどうでも構わない事です。ただ叔父さんがこう云う事に明らかなだから、あるいは知っておいでも知れないと思つて、ちよつと蛇足^{だそく}に書き添えただけです。僕の御報知したいのは実はこの広い土間ではなかつたのです。土間の上に下りていた御婆^{おばあ}さんが問題だつたのです。御婆さんは二人いました。一人は立つて、一人は椅子^{いす}に腰をかけていました。ただし両方ともくり坊主です。その立つている方が、僕らが這入^{はい}るや否^{いな}や、友人の顔を見て挨拶^{あいさつ}をしました。そうして『おや御免^{ごめん}やす。今八十六の御婆さんの頭を剃^そつとるところだすよつて。——御婆さんじつとしていなはれや、もう少しだけ。——よう剃^そつたけれ毛は一本もありやせんよつて、何も恐ろしい事ありやへん』と云いました。椅子に腰をかけた御婆さんは頭を撫^なでて『大きに』と礼を述べました。友人は僕を顧^{かえり}みて野趣があると笑いました。

僕も笑いました。ただ笑っただけではありません。百年も昔の人に生れたような暢氣^{のんびり}した心持がしました。僕はこういう心持を御土産^{おみやげ}に東京へ持って帰りたいと思います」

僕も市蔵がこういう心持を、姉へ御土産として持って来てくれればいいがと思った。

十一

次のは明石^{あかし}から来たもので、前に比べると多少複雑なだけに、市蔵の性格をより鮮やか^{あざ}に現わしている。

「今夜ここに来ました。月が出て庭は明らかですが、僕の部屋は影になってかえって暗い心持がします。飯を食って煙草^{たばこ}を呑んで海の方を眺^{なが}めていると、——海はつい庭先にあるのです。漣^{さざなみ}さえ打たない静かな晩だから、河縁^{かわべり}とも池の端^{はた}とも片のつかない渚^{なぎさ}の景色なんですが、そこへ涼み船^{そう}が一艘流れて来ました。その船の形^{かたち}好^{こう}は夜でよく分らなかつたけれども、幅の広い底の平たい、どうしても海に浮ぶものとは思えない穩^{おだ}やかな形^{かたち}を具^{そな}えていました。屋根は確かあつたように覚えます。その軒^{すわ}から画の具で染めた提灯^{ちようちん}がいくつもぶら下がっていました。薄い光の奥には無論人が坐^{すわ}っているようでした。三味線の

音も聞こえました。けれども惣そうたい体がいかにも落ちついて、滑すべるように楽しんで僕の前を流れて行きました。僕は静かにその影を見送って、御祖父おじいさんの若い時分の話というのを思い出しました。叔父さんは固もとより御存じでしょう、御祖父さんが昔の通人のした月見の舟ふねあそび遊あそびを実際にやった話を。僕は母から二三度聞かされた事があります。屋根船あやせを綾あやせ瀬川がわまで漕こぎ上のぼせて、静かな月と静かな波の映り合う真中に立つて、用意してある銀ぎんせ扇せんを開いたまま、夜の光の遠くへ投げけるのだと云うじゃありませんか。扇かなめの要がぐるぐる廻まわって、地紙じがみに塗ぬった銀泥ぎんでいをきらきらさせながら水に落ちる景色は定めてみごとだろうと思います。それもただの一本なのですが、船のものがそうがかりで、ひらひらする光を投げ競きそう光景は想像しても凄せい艶えんです。御祖父おじいさんは銅壺どうこの中に酒をいっぱい入れて、その酒で徳利とくりの燭かんをした後あとをことごとく棄すてさしたほどの豪奢ごうしゃな人だと云うから、銀扇の百本ぐらい一度に水に流しても平気なのでしょう。そう云えば、遺伝いでんだか何だか、叔父さんにも貧乏な割にはと云つては失礼ですが、どこかに贅ぜいたく沢たくなどところがあるようですし、あんな内気な母にも、妙に陽気な事の好きな方面が昔から見えていました。ただ僕だけは、——こういうとまたあの問題を持ち出したなど早合点はやがてんなさるかも知れませんが、僕はもうあの事について叔父さんの心配なさるほど屈くつ托たくしていないつもりですから安心して下

さい。ただ僕だけはと断るのはけつして苦い意味で云うものではありません。僕はこの点において、叔父さんとも母とも生れつき違っていると申したいのです。僕は比較的樂に育つた、物質的に幸福な子だから、贅沢と知らずに贅沢をして平氣でいました。着物などでも母の注意で、人前へ出て恥かしくないようなものを身に着けながら、これが当然だと澄ましていました。けれどもそれは永く習慣に養われた結果、自分で知らない不明から出るの、一度そこに氣がつくと、急に不安になります。着物や食事はまあどうでもいいとして、僕はこの間ある富豪のむやみに金を使う様子を聞いて恐ろしくなつた事があります。その男は芸者は幫間ほうかんを大勢集めて、鞆かぼんの中から出した札さつの束たばを、その前でずたずたに裂いて、それを御祝儀ごしゅうぎとか称となえて、みんなにやるのだそうです。それから立派な着物を着たまゝ湯に這入はいつて、あとは三助さんすけにくれるのだそうです。彼の乱行はまだたくさんありました。が、いずれも天を恐れない暴慢きわまるもののみでした。僕はその話を聞いた時無論彼を悪にくみました。けれども氣概きがいに乏しい僕は、悪むよりもむしろ恐れしました。僕から彼の所しよぎよ行うを見ると、強盜しらはが白刃の拔身を畳に突き立てて良民を脅迫おびやかしているのと同じような感じになるのです。僕は実に天とか、人道とか、もしくは神仏とかに対して申し訳がないという、真正に宗教的な意味において恐れたのです。僕はこれほど臆病な人間なのです。

驕奢きょうしやに近づかない先から、驕奢の絶頂に達して躍り狂う人の、一転化の後を想像して、怖こわくてたまらないのであります。——僕はこんな事を考えて、静かな波の上を流れて行く涼み船を見送りながら、このくらい程度の慰さみが人間としてちょうど手頃なんだろうと思いました。僕も叔父さんから注意されたように、だんだん浮気うわきになって行きます。賞ほめて下さい。月の差す二階の客は、神戸から遊びに来たとかで、僕の厭いやな東京語ばかり使つて、折々詩吟などをやります。その中に艶めかしい女の声も交まじっていましたが、二三十分前から急におとなしくなりました。下女に聞いたらもう神戸へ帰つたのだそうです。夜もだいぶ更ふけましたから、僕も休みます」

十二

「昨夕ゆうべも手紙を書きましたが、今日もまた今朝こんちょう以来の出来事を御報知します。こう続けて叔父さんにばかり手紙を上げたら、叔父さんはきつと皮肉な薄笑はくせういをして、あいつどこへも文ふみをやる所がないものだから、己やむを得ず姉あねと己おれに對してだけ、時間を費ついやして音信たよりおこたを怠たらないんだと、腹の中で云うでしょう。僕も筆を執とりながら、ちよつとそう云う考えを起

しました。しかし僕にもしそんな愛人ができたら、叔父さんはたとい僕から手紙を貰わなくても、喜んで下さるでしょう。僕も叔父さんに音信を怠つても、その方が幸福だと思ひます。実は今朝起きて二階へ上つて海を見下していると、そういう幸福な二人連が、磯い通そつたいに西の方へ行きました。これはことによると僕と同じ宿に泊っている御客かも知れません。女がクリーム色の洋傘こうもりを翳さして、素足に着物の裾すそを少し捲まくりながら、浅い波の中を、男と並んで行く後姿うしろすがたを、僕は羨うらやましそうに眺ながめたのです。波は非常に澄んでいゝるから高い所から見下すと、陸おかに近いあたりなどは、日の照る空気の中と変りなく何でも透すいて見えます。泳いでいる海月くらげさえ判切はつきり見えます。宿の客が二人出て来て泳ぎ廻めぐつていますが、彼らの水中でやる所作しよさが、一挙一動ことごとく手に取るように見えるので、芸としての水泳の価値が、だいぶ下落するようです。（午前七時半）」

「今度は西洋人が一人水に浸つかつています。あとから若い女が出て来ました。その女が波の中に立つて、二階に残っているもう一人の西洋人を呼びます。『ユー、カム、ヒヤ』と云つて英語を使います。『イット、イズ、ヴェリ、ナイス、イン、ウオーター』と云うような事をしきりに申します。その英語はなかなか達者で流暢りゅうちやうで羨うらやましいくらい旨うまく出ます。僕はとても及ばないと思つて感心して聞いていました。けれども英語の達者なこの女

から呼ばれた西洋人はなかなか下りて来ませんでした。女は泳げないんだか、泳ぎたくないんだか、胸から下を水に浸けたまま波の中に立っていました。すると先へ下りた方の西洋人が女の手を執つて、深い所へ連れて行こうとしました。女は身を竦めるようにして拒みました。西洋人はとうとう海の中で女を横に抱きました。女の跳ねて水を蹴る音と、その笑いながら、きやつきやつ騒ぐ声が、遠方まで響きました。（午前十時）」

「今度は下の座敷に芸者を二人連れて泊っていた客が端艇を漕ぎに出て来ました。この端艇はどこから持つて来たか分りませんが、極めて小さいかつすこぶる危しいものです。客は漕いでやるからと云つて、芸者を乗せようとしますが、芸者の方では怖いからと断つてなかなか乗りません。しかしとうとう客の意の通りになりました。その時年の若い方が、わざわざ喫驚して見せる科が、よほど馬鹿らしゅうございました。端艇がそこいらを漕ぎ廻つて帰つて来ると、年上の芸者が、宿屋のすぐ裏に繋いである和船に向つて、船頭はん、その船空いていまつかと、大きな声で聞きました。今度は和船の中に、御馳走を入れて、また海の上に出る相談らしいのです。見ていると、芸者が宿の下女を使って、麦酒だの水菓子だの三味線だのを船の中へ運び込ましておいて、しまいに自分達も乗りました。ところが肝心の御客はよほど威勢のいい男で、遥か向うの方にまだ端艇を漕ぎ廻してい

ました。誰も乗せ手がなかったと見えて、今度は黒裸くろはだかの浦の子僧を一人生活いけど捕つていました。芸者はあきれた顔をして、しばらくその方を眺めていましたが、やがて根こんかぎりの大きな声で、阿呆あほうと呼びました。すると阿呆と呼ばれた客が端艇をこつちへ漕こぎ戻して来ました。僕は面白い芸者でまた面白い客だと思いました。（午前十一時）

「僕がこんなくだくだしい事を物珍らしそうに報道したら、叔父さんは物数奇ものずきだと云つて定めし苦笑なさるでしょう。しかしこれは旅行の御蔭で僕が改良した証しょうこ拠こなのです。僕は自由な空気と共に往来する事を始めて覚えたのです。こんなつまらない話を一々書く面倒いとを厭いとわなくなったのも、つまりは考えずに観みるからではないでしょうか。考えずに観るのが、今の僕には一番薬だと思えます。わずかの旅行で、僕の神経だか性癖だかが直つたと云つたら、直り方があまり安つぽくって恥はずかしいくらいです。が、僕は今より十層倍も安つぽく母が僕を生んでくれた事を切望して已やまないので。白帆しらほが雲のごとく簇むらつて淡路島あわじしまの前を通ります。反対の側の松山の上に人丸ひとまるの社やしろがあるそうです。人丸という人はよく知りませんが、閑ひまがあつたらついでだから行つて見ようと思います」

結末

敬太郎^{けいたろう}の冒険は物語に始まって物語に終った。彼の知ろうとする世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼はついにその中に這入^{はい}って、何事も演じ得ない門外漢に似ていた。彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聴く一種の探訪^{たんぼう}に過ぎなかった。

彼は森本の口を通して放浪生活の断片を聞いた。けれどもその断片は輪廓^{りんかく}と表面から成る極^{きわ}めて浅いものであった。したがって罪のない面白味を、野性の好奇心に充ち^みた彼の頭に吹き込んだだけである。けれども彼の頭の中の隙間^{すきま}が、瓦斯^{ガス}に似た冒險譚^{だん}で膨脹^{ぼうちよう}した奥に、彼は人間としての森本の面影^{おもかげ}を、夢現^{ゆめうつ}のごとく見る事を得た。そうして同じく人間としての彼に、知識以外の同情と反感を与えた。

彼は田口と云う實際家の口を通して、彼が社会をいかに眺^{なが}めているかを少し知った。同時に高等遊民と自称する松本という男からその人生觀の一部を聞かされた。彼は親しい社会的關係によつて繋^{つな}がれていながら、まるで毛色^{こし}の異なつたこの二人の対照を胸に据^すえて、幾分^{おの}か己れの世間的經驗が広くなつたような心持がした。けれどもその經驗はただ広く面

積の上において延びるだけで、深さはさほど増したとも思えなかった。

彼は千代子という女性によしやうの口を通して幼児の死を聞いた。千代子によって叙せられた

「死」は、彼が世間並に想像したものと違って、美しい画えを見るようなところに、彼の快感を惹ひいた。けれどもその快感のうちに涙が交っていた。苦痛を逃のがれるために己やむを得ず流れるよりも、悲哀をできるだけ長く抱いだいていた意味から出る涙が交まじっていた。彼は独身ものであった。小児に対する同情は極めて乏しかった。それでも美しいものが美しく死んで美しく葬られるのは憐あわれであった。彼は雛祭ひなまつりの宵よいに生れた女の子の運命を、あたかも御雛様のそれのごとく可憐かれんに聞いた。

彼は須永すながの口から一調子ひとちょうし狂つた母子おやこの関係を聞かされて驚ろいた。彼も国元に一人の母を有もつ身であつた。けれども彼と彼の母との関係は、須永ほど親しくない代りに、須永ほどの因果いんがに纏綿てんめんされていなかった。彼は自分が子である以上、親子の間を解し得たものと信じて疑わなかった。同時に親子の間は平凡なものと諦あきらめていた。より込み入った親子は、たとえば想像が出来るにしても、いっこう腹にはこたえなかった。それが須永のために深く掘り下げられたような気がした。

彼はまた須永から彼と千代子との間柄を聞いた。そうして彼らは必ひつきやう竟夫婦として作

られたものか、朋友^{ほうゆう}として存在すべきものか、もしくは敵^{かたき}として睨^{にら}み合うべきものかを疑った。その疑いの結果は、半分の好奇と半分の好意を駆^かつて彼を松本に走らしめた。彼は案外にも、松本をただ舶来のパイプを銜^{くわ}えて世の中を傍観している男でないと発見した。彼は松本が須永に対してどんな考でどういう所置を取ったかを委^{くわ}しく聞いた。そうして松本のそういう所置を取らなければならなかった事情も審^{つまび}らかにした。

顧^{かえり}みると、彼が学校を出て、始めて實際の世の中に接触して見たいと志^{こころ}ざしてから今日^{こんにち}までの経歴は、単に人の話をそこそこ聞き廻^{まわ}つて歩いただけである。耳から知識なり感情なりを伝えられなかった場合は、小川町の停留所^{ステッキ}で洋杖^{ステッキ}を大事そうに突いて、電車から下りる霜降^{しもふり}の外套^{がいとう}を着た男が若い女といつしよに洋食屋に這入^{あこ}る後^{あと}を跟^つけたくらいのものである。それも今になつて記憶の台に載^のせて眺^{なが}めると、ほとんど冒険とも探検とも名づけようのない児戯^{じぎ}であつた。彼はそれがために位地^{いちち}にありつく事はできた。けれども人間の経験としては滑稽^{こっけい}の意味以外に通用しない、ただ自分にだけ真面目^{まじめ}な、行動に過ぎなかつた。

要するに人世に対して彼の有する最近の知識感情はことごとく鼓膜の働^{はたら}きから来^きてゐる。森本に始^{はじ}まつて松本に終^はる幾席^{いくせき}かの長話は、最初^は広く薄く彼を動かしつつ漸^{ぜん}々^{ぜん}深

く狭く彼を動かすに至って突如としてやんだ。けれども彼はついにその中に這入れなかつたのである。そこが彼に物足らないところで、同時に彼の仕合せなところである。彼は物足らない意味で蛇の頭を呪い、仕合せな意味で蛇の頭を祝した。そうして、大きな空を仰いで、彼の前に突如としてやんだように見えるこの劇が、これから先どう永久に流転して行くだろうかを考えた。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年3月29日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集第五巻」筑摩書房

1971（昭和46）年8月1日初版第1刷発行

※訂正注記にあたっては、底本の親本を参照しました。

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年9月18日公開

2011年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

彼岸過迄

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>